

円孔を穿孔している。胴部は縄文を施し、4本1組の沈線文を8単位垂下させ、文様間には蛇行懸垂文を施文している。縄文は単節LRである。推定口径17.2 cm、残存高16 cmである。

2～4は口縁部が開き、胴上部でやや括れ、丸みをもって底部に至る深鉢形土器である。いずれも単節LRの縄文を地文として施文した後、沈線で文様を施文する。2は小突起を貼付する波状口縁で、突起部には円孔を穿孔させている。口縁部に沈線を巡らし胴部と区画している。胴部には、2本の垂下する沈線間に対向するU字状文を施文している。懸垂文間には、縦位鋸歯状の集合沈線文を施文している。推定口径29.8 cm、残存高14.5 cmである。3は2本1組の沈線文を複数垂下させ、沈線文間に蛇行沈線文を施文している。残存高17.2 cmである。4は2と文様構成が同じで、同一個体の可能性がある。残存高17 cmである。5は無文の口縁部が外反し、頸部で括れ、胴部が丸みをもつ深鉢形土器である。肥厚する口縁部に沈線文を2条巡らせている。頸部には楕円区画文を施文し、区画文の区切り部分の上下に円形刺突文を施文している。胴部には沈線文を垂下させる。推定口径43.8 cm、残存高10.7 cmである。

55～101は深鉢形土器の破片資料である。55～76、78～80は縄文を施文する土器である。55～71は胴部に沈線文を施文する口縁部の破片である。55～61は波状口縁で突起部をもつ土器である。55の突起には円文を刺突している。56～59は突起部分に円孔を穿孔させている。地文はいずれも単節LRの縄文である。61は突起頂部に渦巻文を施文している。63～71は平縁の口縁部である。63～69は口縁部に沈線文を巡らしている。63、66は口縁が肥厚するもので、肥厚部に沈線を巡らしている。64・65は2個1組の円形刺突文が施文されている。地文は67が単節RLである以外は、全て単節LRの縄文である。70・71は口縁部に沈線が巡らない口縁部である。

いずれも地文としてLRの縄文を施文している。72～75は縄文のみ施文する口縁部破片である。74は口縁部に列点文を巡らしている。地文はいずれも単節LRの縄文である。75は撚りの緩い原体を使用している。76、78～80は胴部の破片である。76は隆帯を垂下させ、隆帯間に集合沈線で文様を施文している。地文は、単節LRの縄文を施文している。

77、81～101は地文を施文しない深鉢形土器の破片である。81～87は波状口縁部の破片である。81～86の波頂部には円文を刺突する円形貼付文や、円形刺突を施している。88～94は平縁の口縁部である。88は肥厚する口縁部に沈線文を施文し、その下に刻みを施している。口縁部に沈線を巡らす、93は列点文を施文している。95～99は口縁が開き頸部で括れるもので、95～97は波頂部から頸部に向けて隆帯を垂下させている。77、98～101は胴部の破片である。77はバケツ形の器形である。98・99は頸部が括れるもので頸部に列点文などを施文している。第2類（第79図6～8、第80図9～13、第81図14～17、第86図102～142）

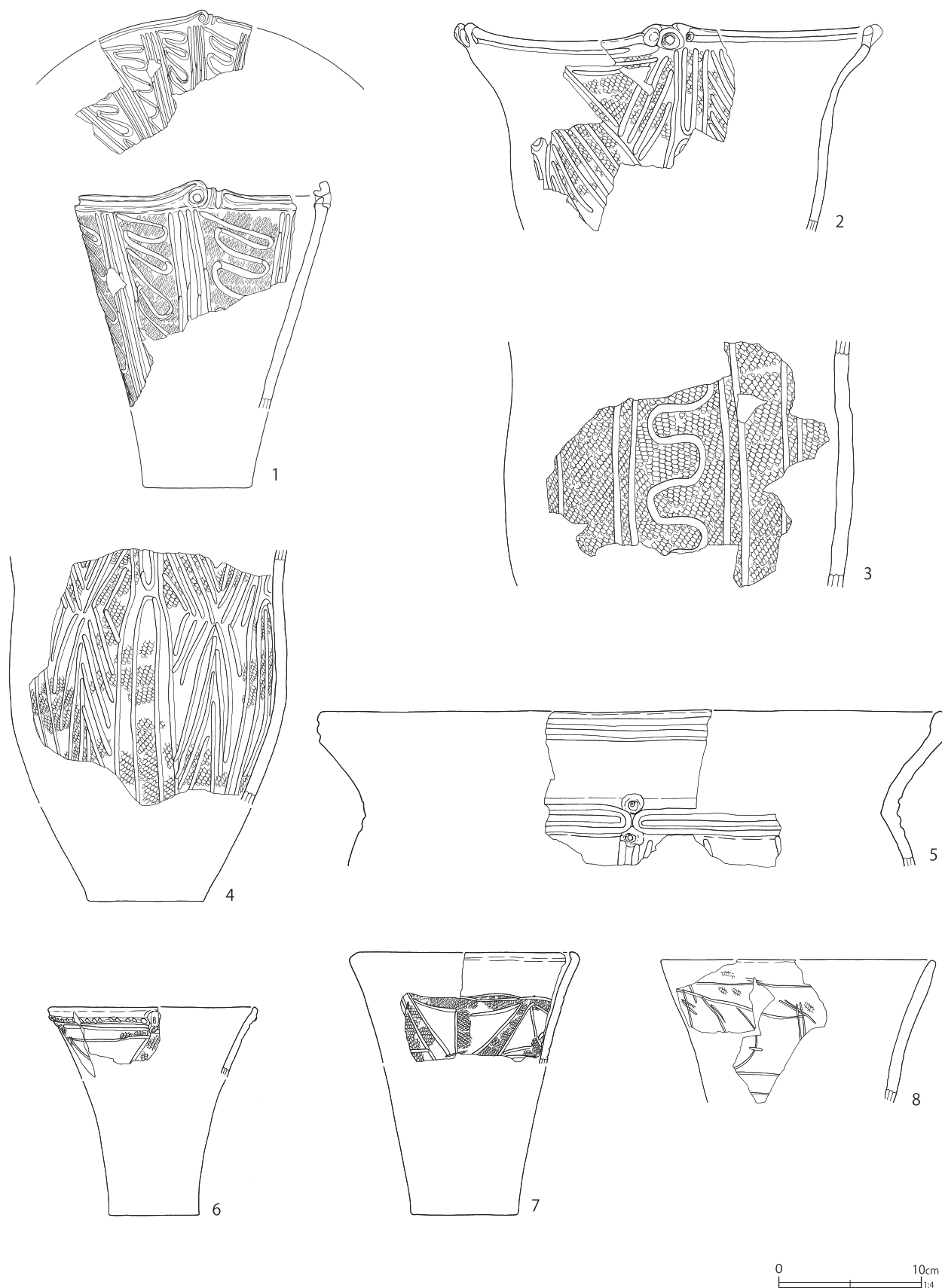
堀之内2式土器を一括する。

6～17は器形復元可能な深鉢形土器である。

6は小型で、朝顔形の器形の口縁部である。平口縁の口唇直下に刻みが入る隆帯を1条巡らす。隆帯には「8」字状貼付文を貼付している。胴部は平行沈線で三角形状に文様を施文している。文様内には単節LRの縄文を充填している。推定口径14.6 cm、残存高4.9 cmである。

7は小型で、朝顔形の器形の口縁部である。口縁部の端部は内屈し、内面に1条の沈線を巡らしている。無文の口縁部をもち、胴上部に文様帯をもつ。三角形状の文様が施文されている。文様内には単節LRの縄文を充填している。推定口径16.0 cm、残存高7.8 cmである。

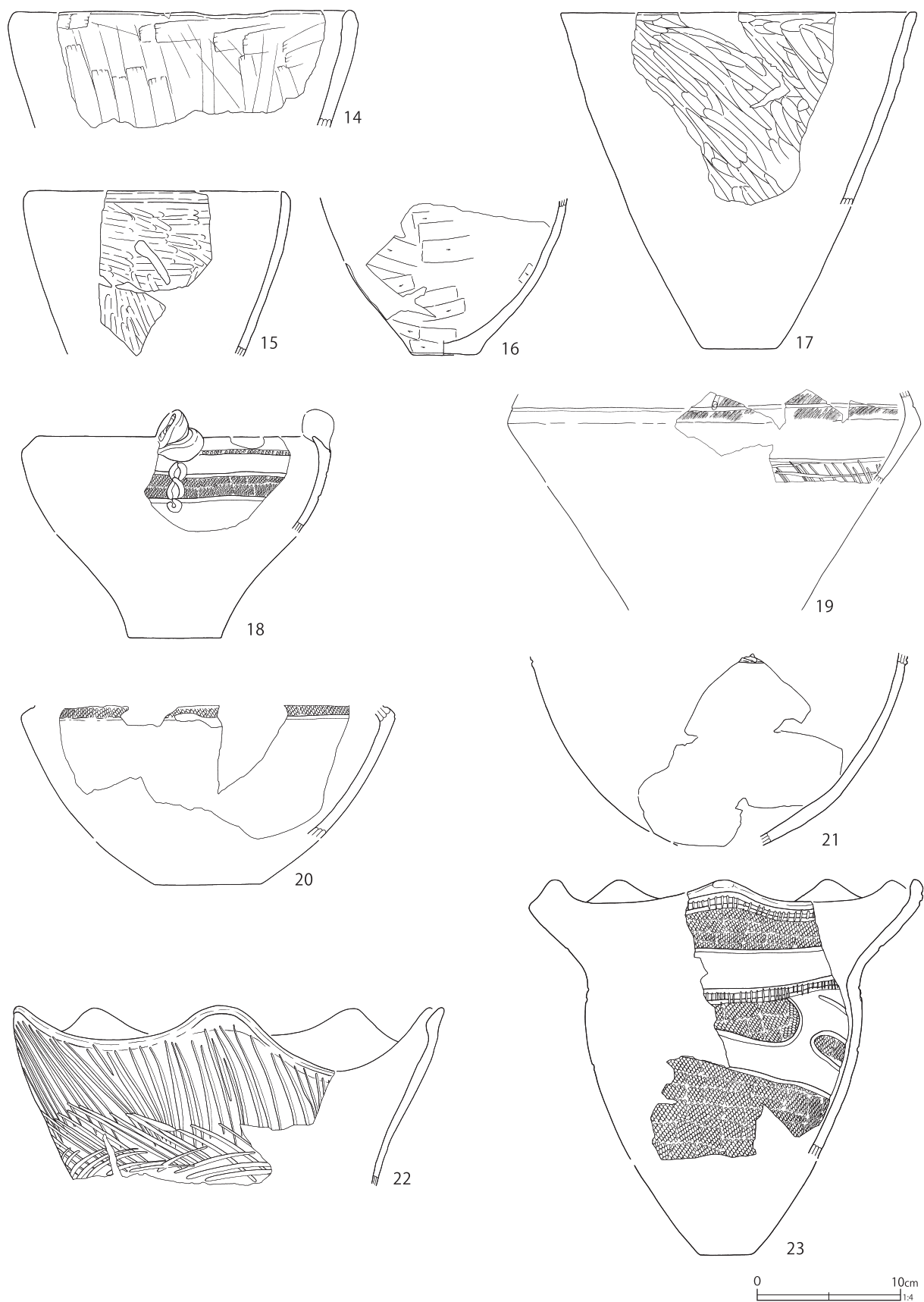
8はバケツ形の器形で、器面には細い条線状の



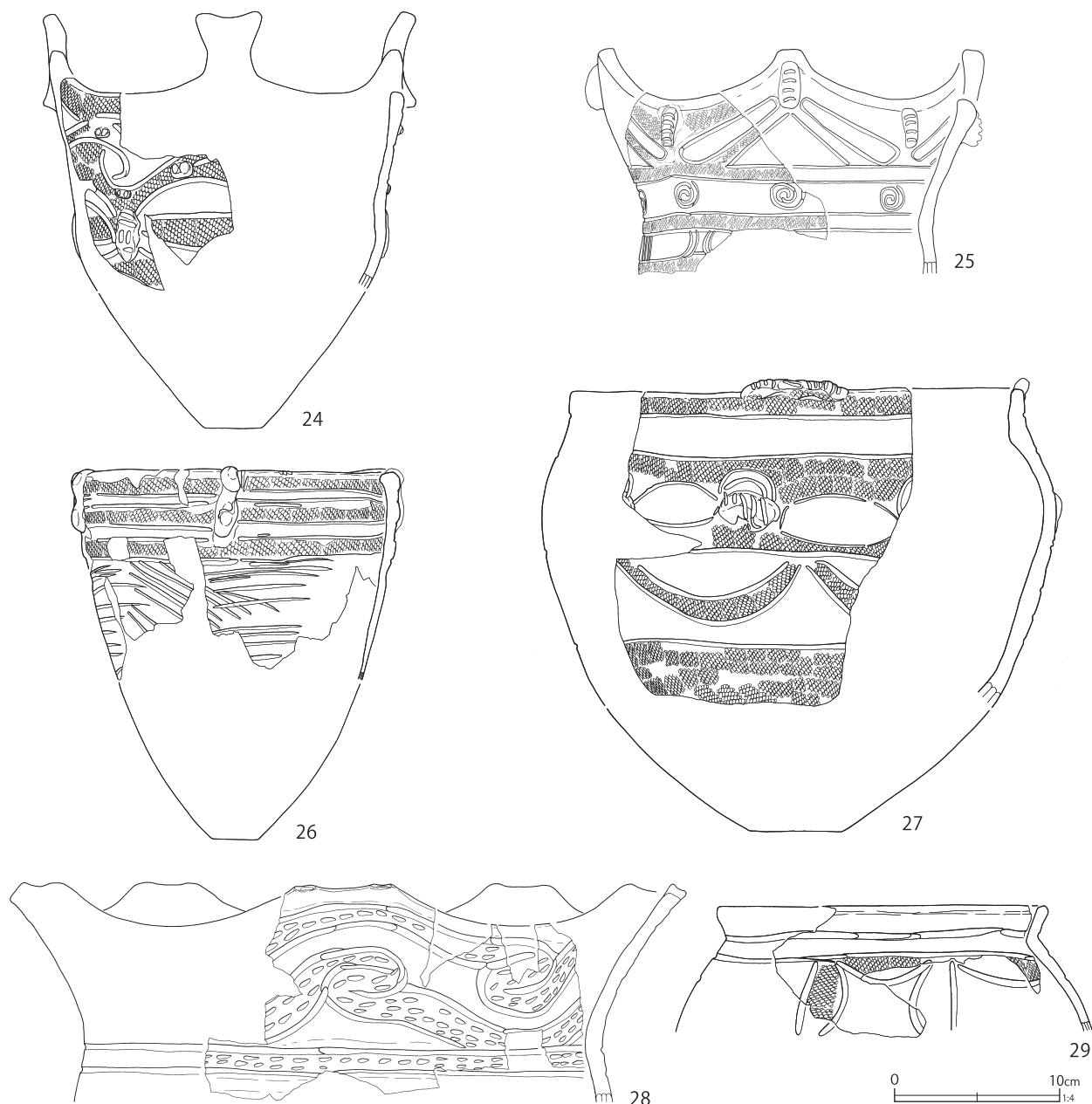
第79図 谷遺物包含層出土遺物(1)



第80図 谷遺物包含層出土遺物（2）



第81図 谷遺物包含層出土遺物（3）



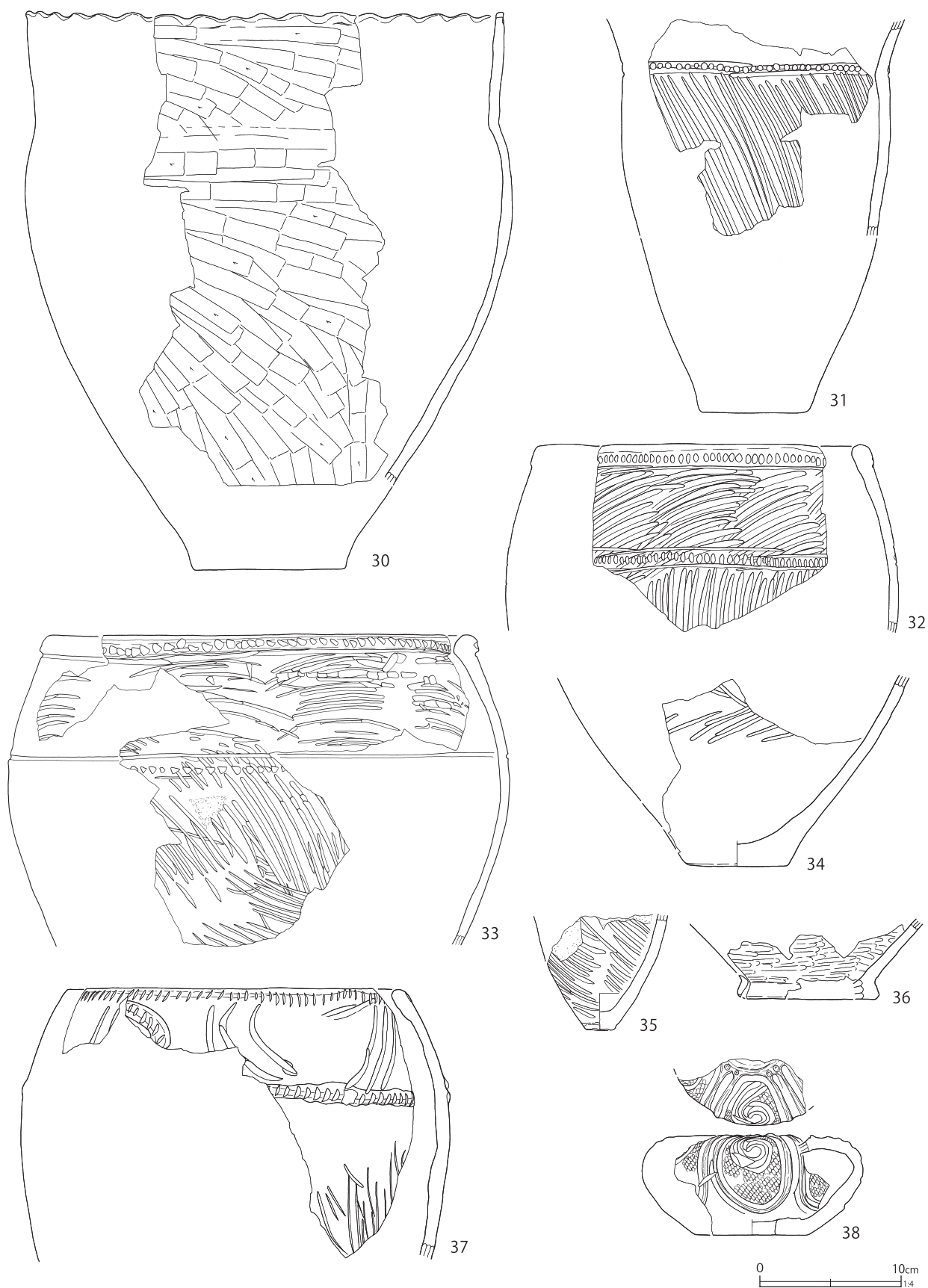
第82図 谷遺物包含層出土遺物（4）

沈線が施文される。単節R Lの縄文を粗雑に施文している。推定口径 19.2 cm、残存高 10 cmである。9は開く口縁部をもち、頸部が括れ胴部中央で膨らみ底部に至る器形を呈する。頸部には刻みが入る隆帯を巡らす、刻みの施文は粗雑に行われている。口唇部から頸部に向けて、刻みが入った隆帯を垂下させている。無文の口縁部には、部分的に横位沈線が施文されている。口縁内面には沈線を巡らしている。胴部は地文のみが施文されるが、胴下部は調整のみが施されている。地文は無節

Lの縄文である。推定口径 21.6 cm、残存高 20.9 cmである。

10は平縁で、口縁直下に刺突が入る隆帯を巡らしている。口縁部内面には沈線文を巡らしている。胴上部に狭い文様帯を帯状に区画し、区画内に三角形文などを施文している。地文は単節R Lの縄文である。推定口径 35 cm、残存高 36.5 cmである。

11は地文である無節Lの縄文のみが施文される。口縁内面に沈線を巡らしている。推定口径



第83図 谷遺物包含層出土遺物（5）

35.7 cm、残存高 31.7 cmである。

12 は胴部から底部で、胴部には地文である単節 R L の縄文のみが施文されている。底径 9.0 cm、残存高 23 cmである。

13 ～ 17 は無文の土器である。13 は口縁の内面に沈線を巡らしている。推定口径 35.2 cm、残存高 7.3 cmである。14 は推定口径 24.4 cm、残存高 8.0 cmである。15 の器面はミガキ状に調整が施されている。推定口径 18.4 cm、残存高 11.4 cmである。16 は胴下部から底部である。底径 4.8 cm、残存高 10.8 cmである。17 は口縁から胴部で、推定口径 24.7 cm、残存高 13.5 cmである。

102 ～ 142 は深鉢形土器の破片資料である。

102 ～ 117 は、胴上部に磨消縄文の文様を施文するもので、朝顔形の器形が多い。102 ～ 106 は口縁部下に刻みが入る隆帯を巡らす。102 は隆帯上に「8」字状貼付文を貼付している。口縁内面に沈線を巡らす、103、106 は複数段の沈線を施文し、103 は内文をもっている。107 ～ 111 は口縁部である。107 は波状口縁である。口唇部が内屈するものが多い。文様内に充填する縄文は、108 は無節 L を、他は単節 L R を施文している。112 ～ 117 は胴上部の文様帯部分の破片である。三角文、渦巻文などが施文される。文様内に充填される地文は、113、115 は無節 L、112、114、116 は単節 L R、117 は無節 R の縄文である。

118 ～ 123 は縄文を施文する土器で、沈線で文様を施文している。施文される地文は、全て単節 L R の縄文であった。118・119 は朝顔形の器形である。118 は口縁内面に沈線を施文している。文様施文順は、口縁下に「8」字状貼付文を貼付し、その後沈線を施文し、最後に縄文を施文している。文様に磨消部分がないため、ここに分類したが、地文は文様の形状に合わせて、横方向や縦方向と文様内に充填するように施文している。119 は口縁端部が内屈している。120 は口縁部がやや開くもので、細い沈線で文様を施文してい

る。121 ～ 123 は、無文の開く口縁部から頸部で括れ、胴部が丸みを帯びて底部に至る器形の土器である。胴部に施文される沈線文は多条になっている。そのため、文様も第1類と比較し密に施文されている。121、123 は半裁竹管で施文し、121 は口縁内面に沈線を巡らしている。

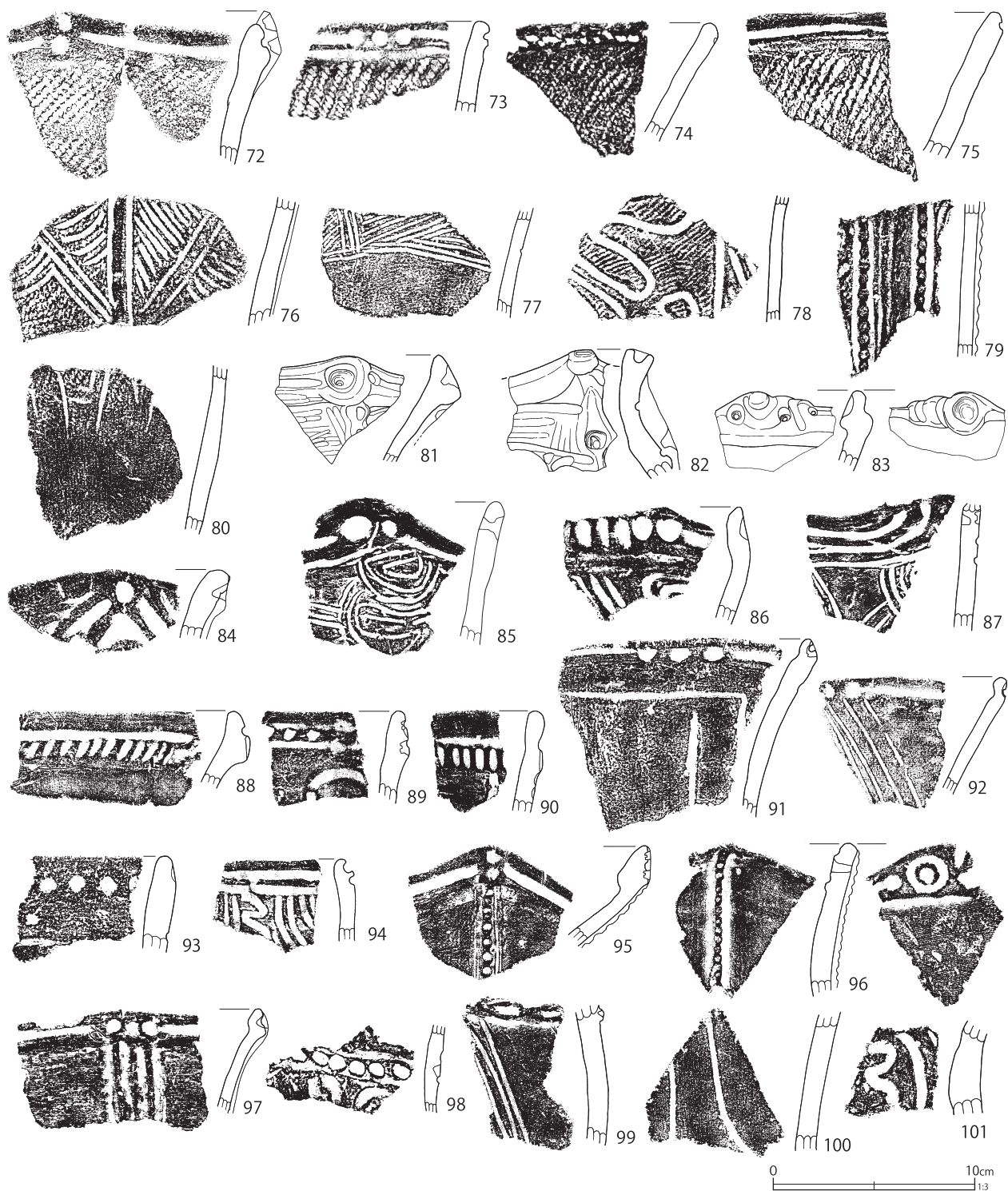
124・125 は胴部に地文のみが施文される土器で、地文は単節 L の縄文を施文している。124 は口縁内面に沈線を施文する土器で、口唇端部から隆帯を貼付している。隆帯上には上端部も含め、刺突を加えている。

126・127、129 ～ 142 は地文が施文されないもので、胴部には沈線文で文様が施文されている。126・127 は口縁下に、刻みが入る隆帯を巡らしている。口縁が大きく開く器形である。126 は口唇部から口縁部の隆帯をまたぐ「8」字状貼付文を貼付している。胴部の文様は貼付文下に弧線文を施文し、それを中心に、多段の横長の楕円文を施文している。127 は朝顔形の器形となるもので、口縁内面に沈線を巡らしている。102 や 110 と同様の沈線文が施文されと考えられる。129 ～ 136 は、口縁部下に沈線文を巡らし、胴部と区画する土器である。135 の器面には円孔が穿孔されている。表面では観察できないが、内面では孔周辺が擦れた痕跡があり、左の割れ口側に多く認められる。135・136 の沈線は条線状で多条となっている。137 ～ 141 は口縁部下に区画する沈線文が施文されない。西関東系の土器である。137 ～ 139、141 の口縁内面には沈線文を巡らしている。沈線は浅く施文され、140 は櫛歯状の条線で文様が施文されている。142 は胴部の破片で、沈線で浅く文様が施文されている。

128 は無文の口縁が大きく開き、頸部で括れる器形の土器で、頸部には刻みが入る隆帯を巡らし胴部と区画している。隆帯上には「8」字状貼付文を施文している。



第84図 谷遺物包含層出土遺物(6)



第85図 谷遺物包含層出土遺物（7）

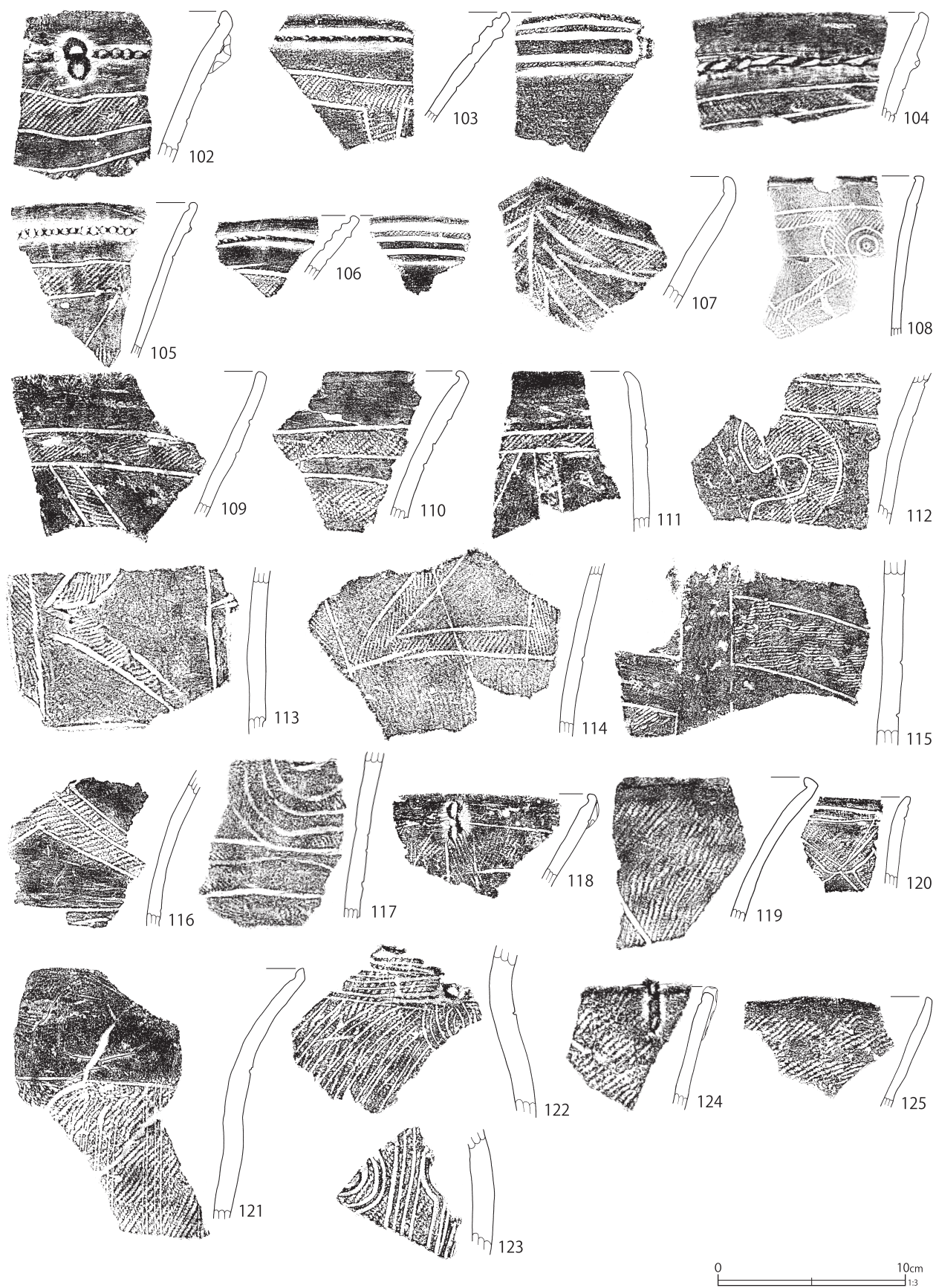
第Ⅵ群土器

後期中葉の土器群を一括する。

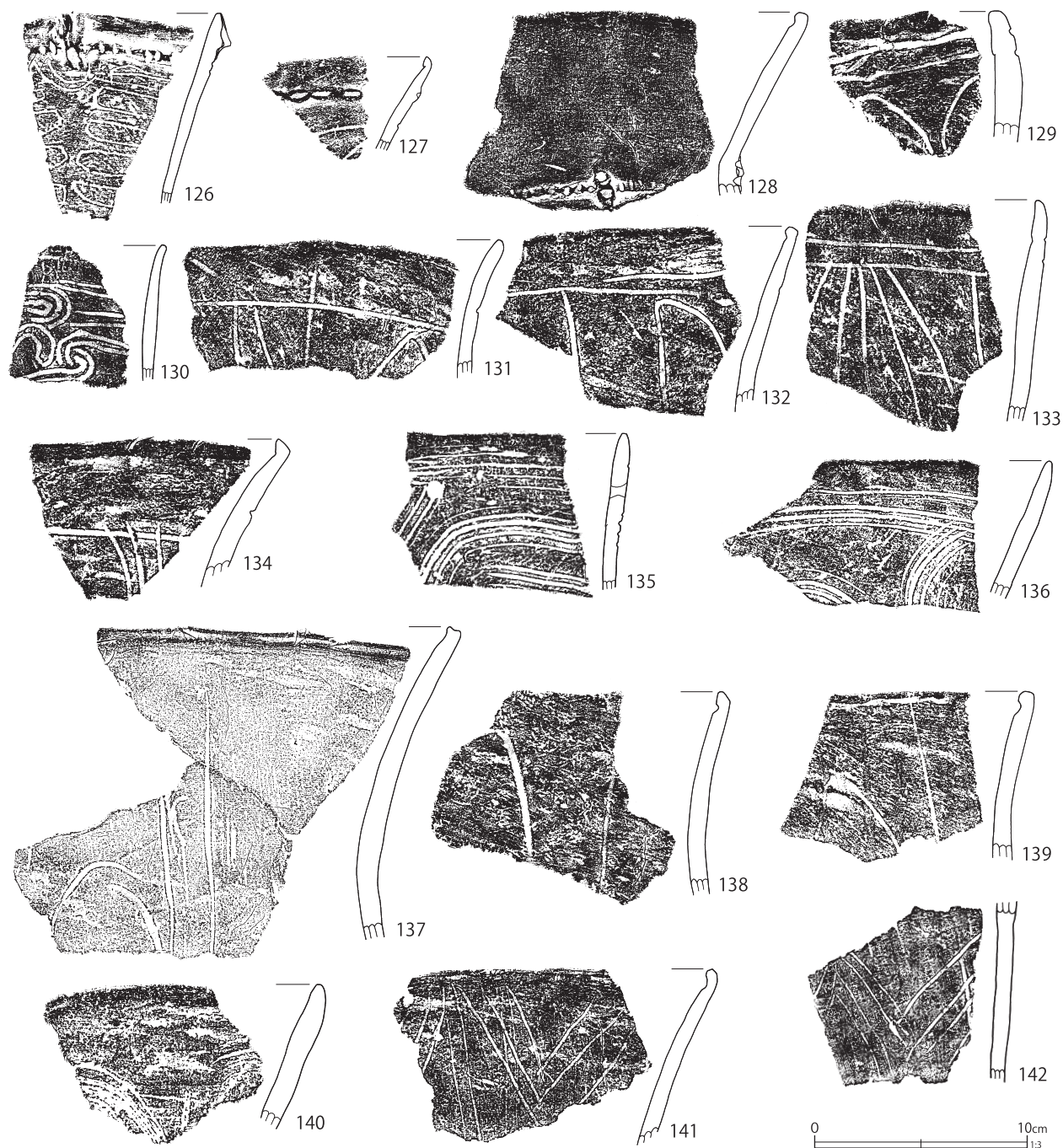
第1類（第81図18～23、第88図143～169）

後期中葉の加曽利B式土器を一括する。ここでは深鉢形土器の他、鉢形土器も含めることとした。

143～153は加曽利B1式土器である。143は深鉢、144～153は鉢形土器である。143は胴部に複数段の平行沈線による横帯文を施文し、文様内に地文を充填する。145・146、154には、横帯文に区切り文や単位文が施文されている。144は



第86図 谷遺物包含層出土遺物（8）



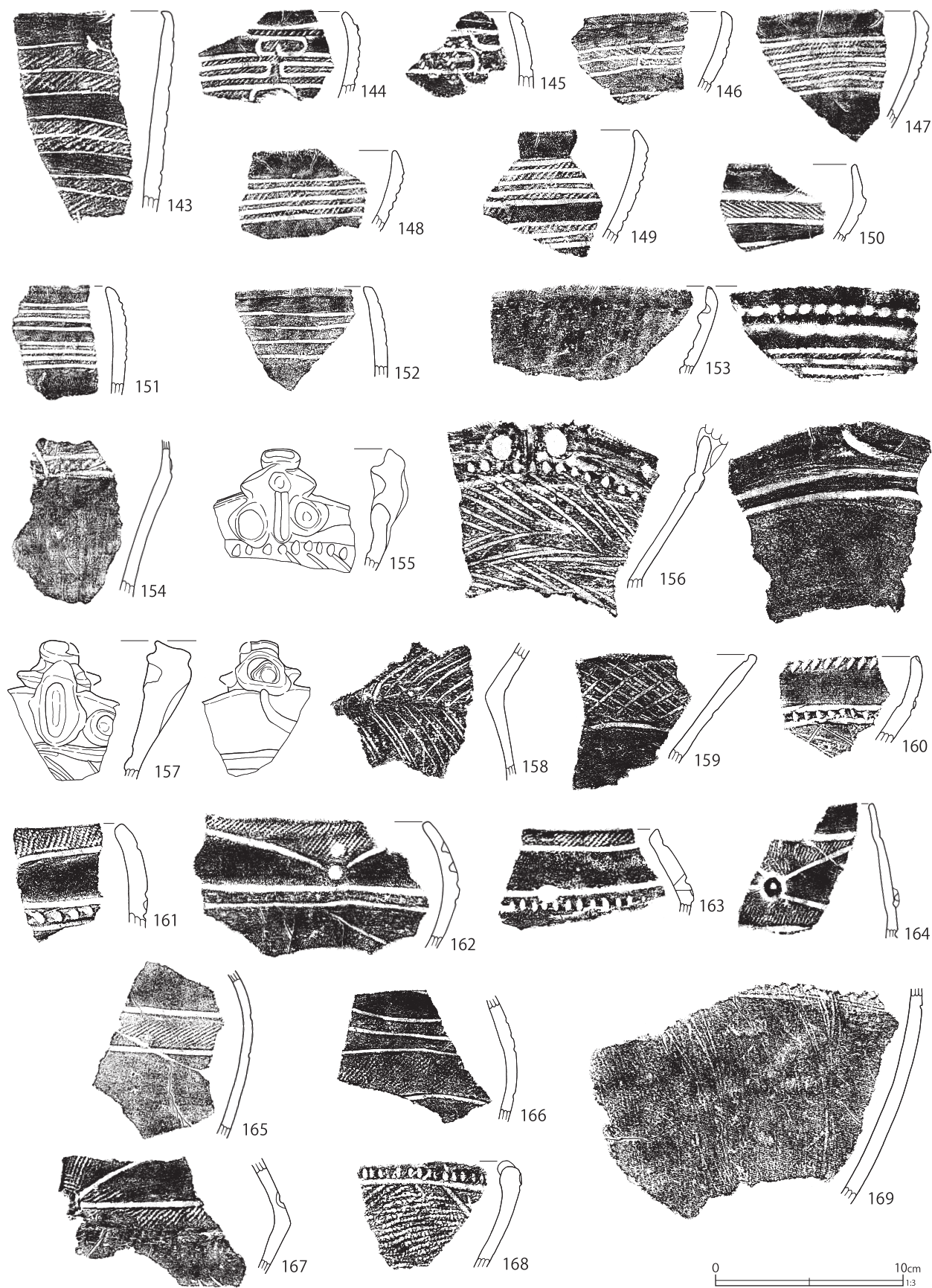
第 87 図 谷遺物包含層出土遺物（9）

横帯文間の無文部分に「の」の字文を施文している。153 は口唇部を小波状に作り出される。内面に微隆起状の隆帯を巡らし、口縁部側に円形刺突列が施文される。隆帯下に複数段の沈線文が施文される。沈線間に施文される地文は、143 ～ 145、148、154 は無節 L、146 は無節 R、147、149、151 は単節 L R、150 は単節 R L の縄文が施文されている。地文施文後に表面を磨いており、

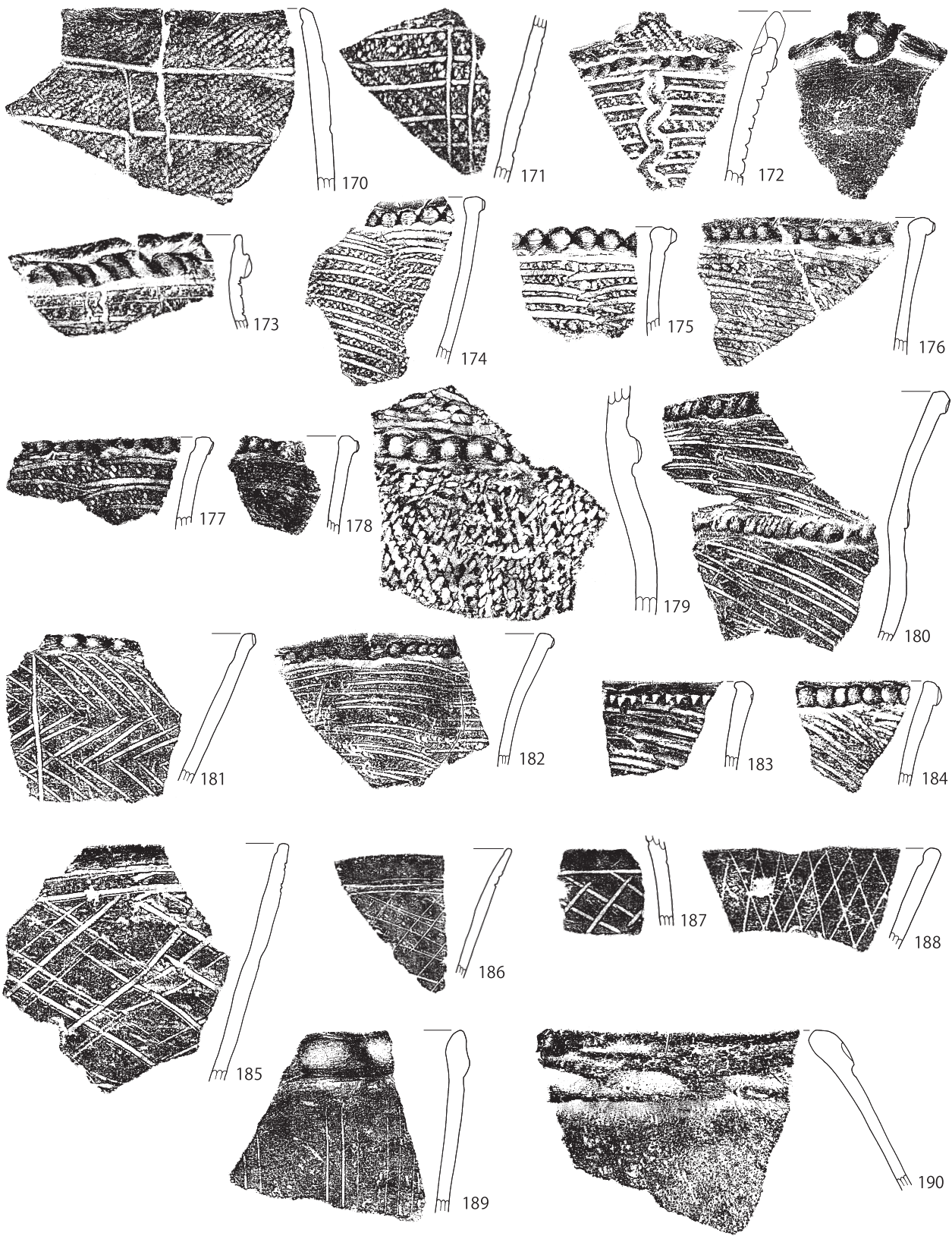
明瞭でないものが多い。152 は横帯文間に地文が施文されない。

22、155 ～ 160 は加曽利 B 2 式から 3 式の斜線文を施文する土器である。

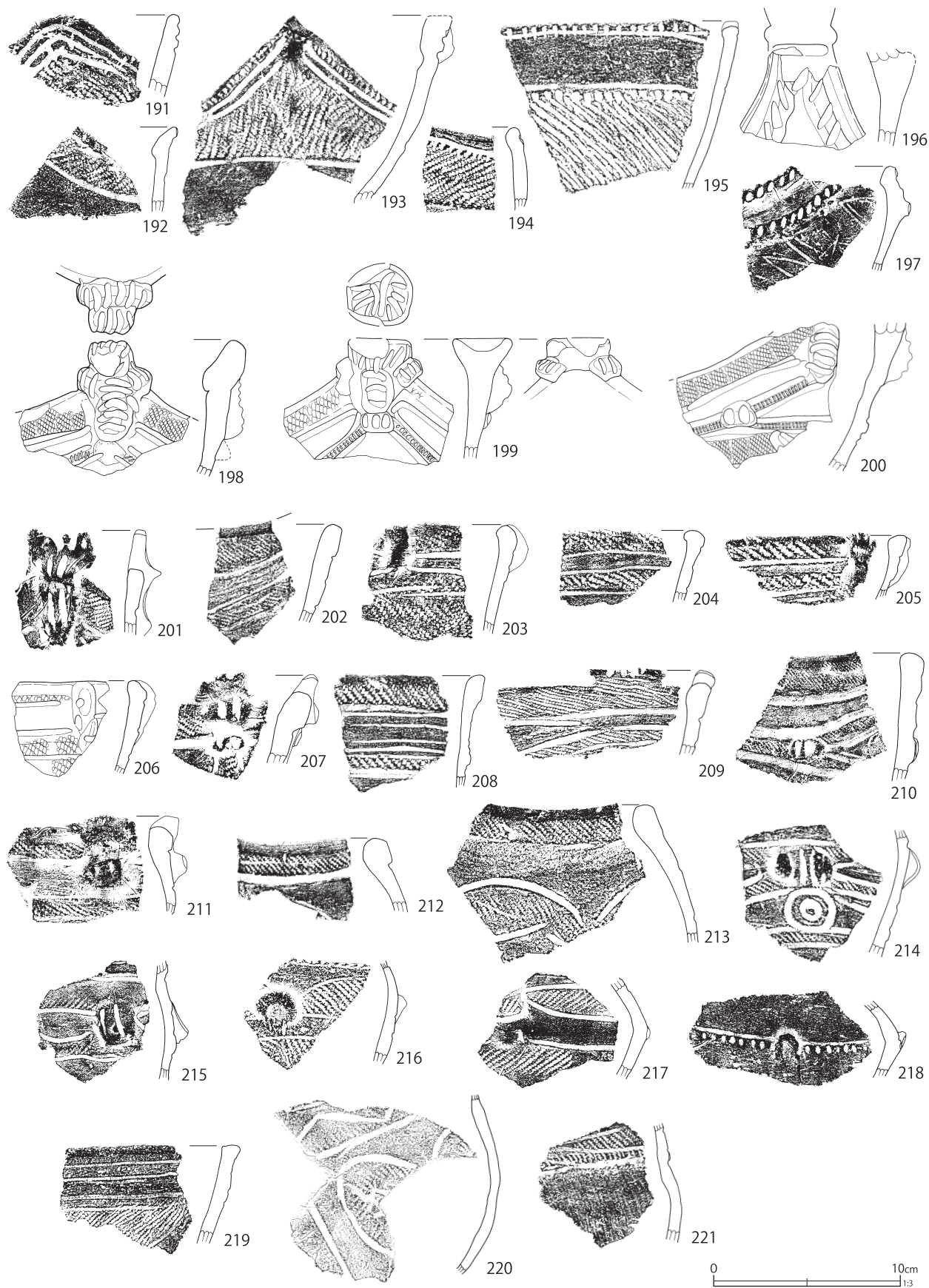
22 は器形復元できた加曽利 B 3 式の、5 単位の波状口縁の深鉢形土器である。口縁部直下は 1 段の斜線文を施文し、括れ部には対向する斜線文を施文している。推定口径 29.9 cm、残存高 12.5



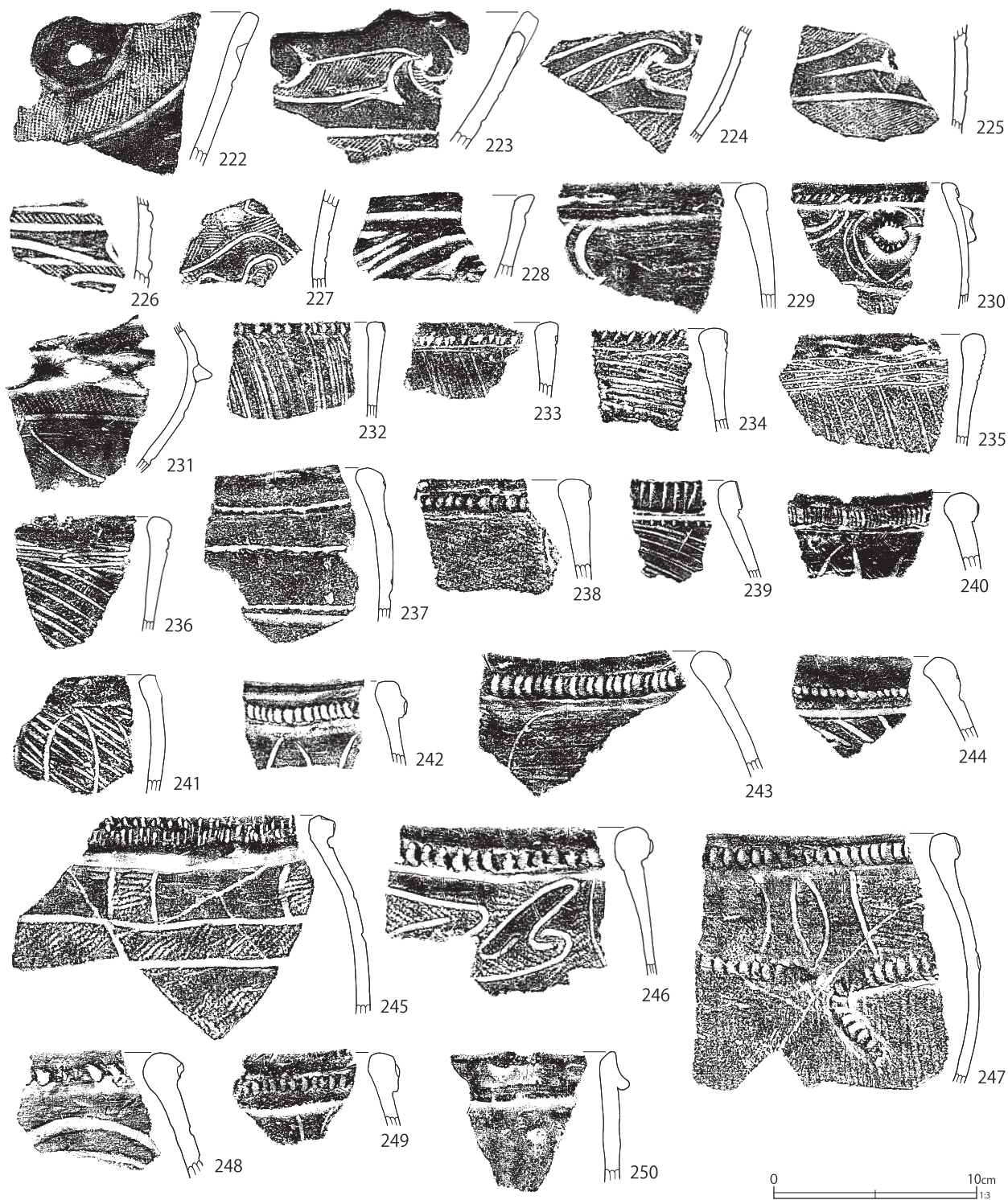
第88図 谷遺物包含層出土遺物 (10)



第 89 図 谷遺物包含層出土遺物 (11)



第90図 谷遺物包含層出土遺物(12)

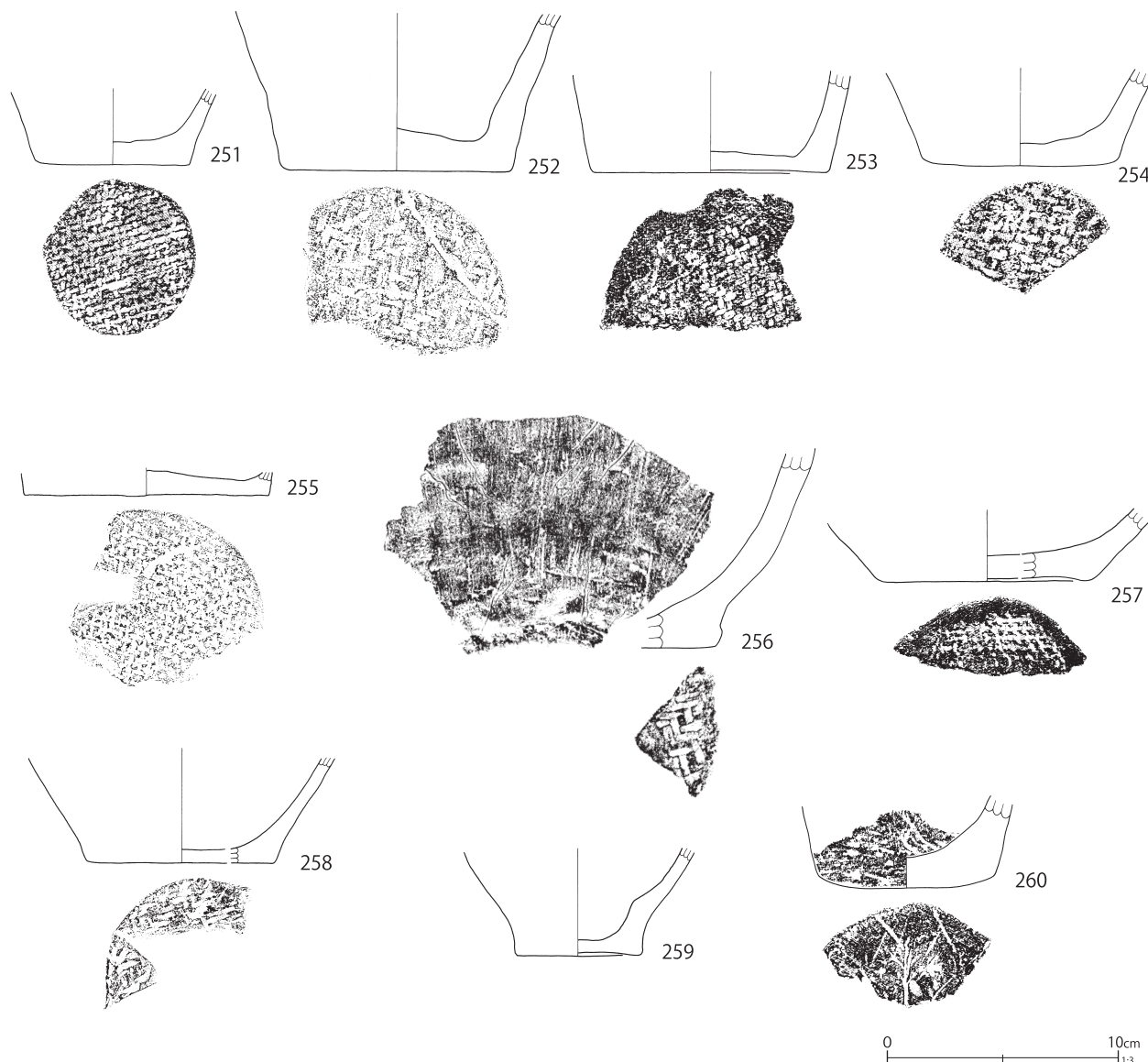


第91図 谷遺物包含層出土遺物 (13)

cmである。

155～160は破片資料である。155・156は3単位把手深鉢の同一個体と考えられ、把手下の稜線部分に刻み状の刺突列が巡る。胴部の斜線文は、向きを1段ずつ変えて施文され矢羽状になってい

る。157は把手部分である。158は胴部の括れ部分で、括れ部を境に斜線文の向きを変えて施文されている。159は大きく開く平口縁で、格子状に斜線文を施文し、その下を沈線で区画して無文部が作り出されている。160は口唇部に刻みが巡ら



第92図 谷遺物包含層出土遺物(14)

されている。無文の狭い口縁と胴部は、平行沈線と間に刻みが入る横線文で区画されている。

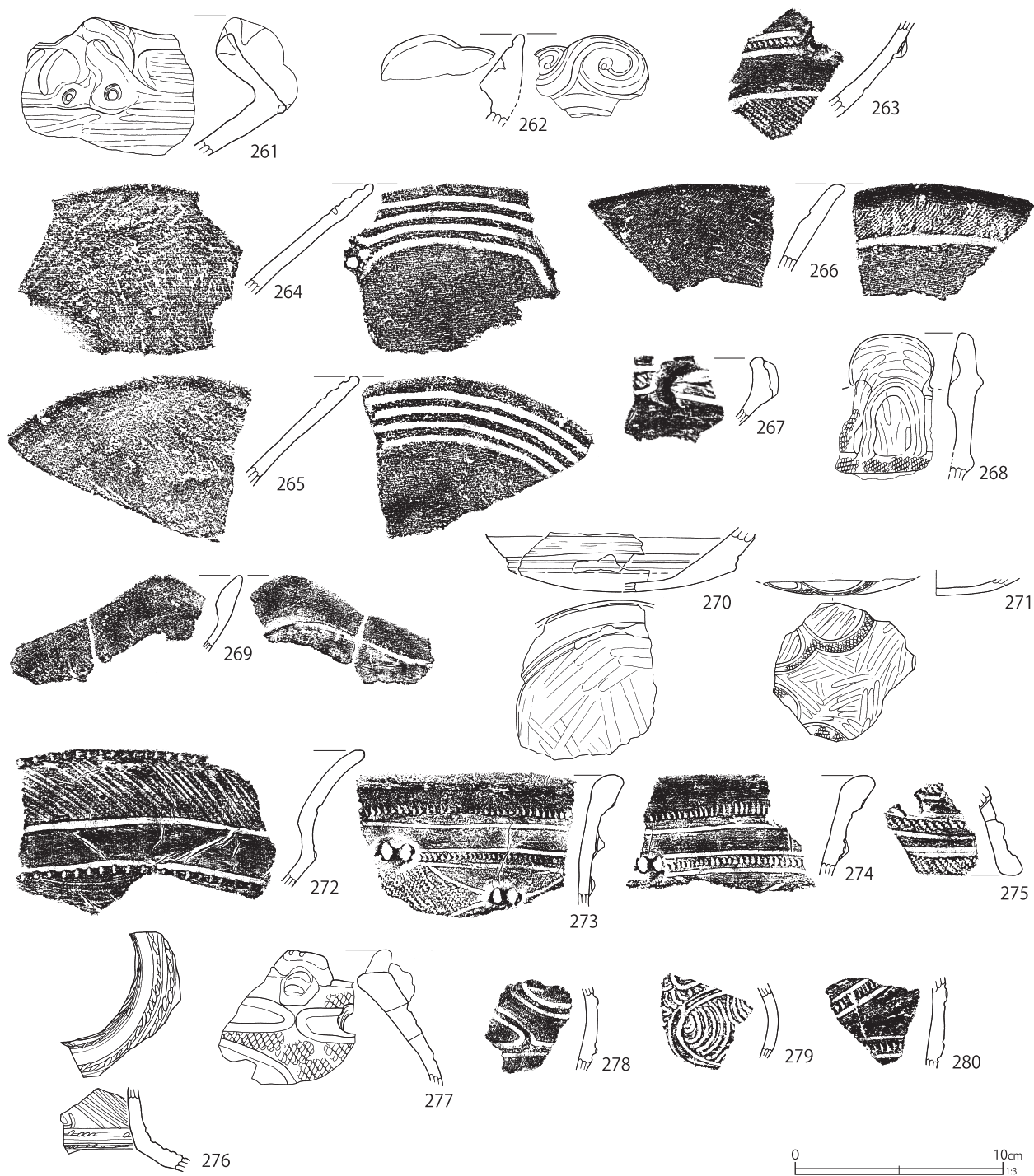
18～21、23、154、161～163、165～168は加曾利B 2式から3式の縄文を施文する土器である。

18～21、23は器形が復元できた土器である。

18、20、21は鉢形土器で、19は胴部が大きく屈曲するソロバン玉状の深鉢形土器である。18は小型の鉢で、口縁部には耳状の突起が貼付されている。外削状に内屈する口縁部の稜線部分に、刻みを巡らしている。胴部には横帯文を施文し、突起下には綾くり状の区切り文が施文されてい

る。単節LRの縄文が充填されている。推定口径21.6 cm、残存高8.6 cmである。19は胴部破片で、胴上半部が無節Lの縄文帯で区画され、胴下半に斜線文が施文される。20は屈曲部の稜線より上に横線文を施文し、内側に単節LRの縄文を充填している。推定最大径26 cm、残存高9.3 cmである。

23は深鉢形土器である。5単位の波状口縁で、頸部に無文帯をもつ。口唇下と頸部の挟り部には、間に刻みが入る平行沈線文が施文される。胴部には磨消縄文の曲線文様が施される。口縁部から頸部の区画文内と、胴部の区画文内には、単節LRの縄文が充填される。推定口径27.4 cm、残存高



第93図 谷遺物包含層出土遺物 (15)

19.4 cmである。加曽利B 3式であろう。

163、167はソロバン玉形の器形で、167は深鉢である。163は胴部最大径の直上に刻みが入る隆帯を巡らせ、その上に沈線が施文される。口縁部は沈線で狭い文様帯が区画されている。胴部の沈線上には、円孔が穿孔されている。内面側の円

孔の縁は、わずかに擦れている。161・162、164は口縁部が内湾する器形の鉢形土器で、162は167と同様に、円形刺突文を起点に弧線文が施文されている。最大径部分に平行沈線文を巡らしている。167は円形刺突文を起点に弧線文が施文されている。165・166、169は胴部が丸みをもつ器

形である。166 は器面の一部に黒い光沢のある範囲が認められる。漆塗りの可能性が考えられる。文様内には、167 が無節Lで、他は単節RLの縄文が施している。

168 は深鉢形土器である。5 単位の波状口縁で、口唇下に刻みが入れられる。沈線で文様が施文され、文様内に単節LRの縄文を充填している。

21、169 は加曽利B 2 式から3 式の鉢形土器である。胴部下半が残存するもので、胴部が丸みを帯びる器形である。21 は丸い器形の胴部で、最大径部分に刻みが入る隆帯が施されている。推定される最大径 26.2 cm、残存高 13.3 cm である。169 は沈線文間に刻みが入っている。

第2類（第90 図 191 ～ 197）

曾谷式土器を一括する。

191 ～ 197 は深鉢形土器の破片である。

191 ～ 194 は波状口縁で、192 ～ 194 は口唇部に刻みが施されている。193 の頂部直下には瘤状の貼付文が施されている。191 ～ 194 は文様帯内に、191 は単節RL、他は単節LRの縄文を施文している。195 は平縁で、文様帯内に条線を施文している。曾谷式と思われる。

196・197 は高井東系の深鉢形土器の口縁部破片である。いずれも波状口縁で、196 は大型の把手部分である。

第3類（第89 図 170 ～ 190）

他の深鉢形土器や紐線文土器を一括する。

170・171 は器面全体に地文である縄文を施文し、その後横帯文や区切り文が施文される。加曽利B 1 式の半精製と考えられる。170 の口縁内面には、沈線文が巡っている。

172 ～ 184 は紐線文土器である。貼付された紐線上には指頭圧痕が施されている。

172 ～ 179 は地文として縄文を施文している。172 は口縁部に突起をもつもので、半裁竹管によって文様が施文される。小突起部の内面には円文が刺突されている。173 は細平行沈線で文様が

施文されている。173 ～ 178 は地文上に条線文を施文している。179 は地文のみで文様は施文されない。

180 ～ 184 に地文縄文はなく、条線文が施文される。180 は頸部にも紐線を巡らしている。181 は斜線文が施文される。185 ～ 188 は格子目文を施文する深鉢形土器の破片である。

189・190 は幅広の紐線を貼付し、紐線上に指頭圧痕が施されている。190 は胴部無文である

第Ⅶ群土器

後期後葉から晩期の土器群を一括する。

第1類土器（第82 図 25・26、第83 図 35、第90 図 198 ～ 200、202 ～ 221）

後期安行式土器を一括する。

25・26、35 は器形復元が可能な土器である。

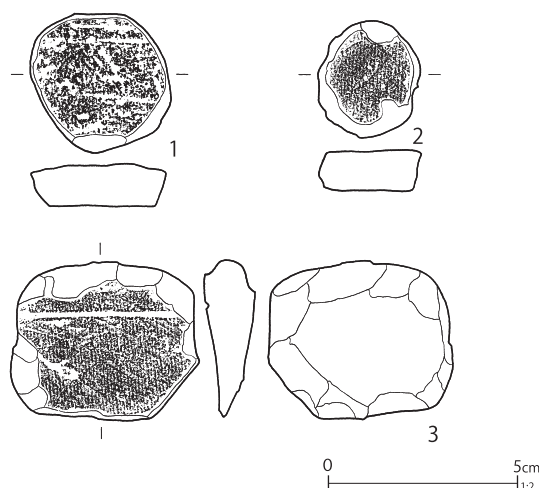
25 は4 単位の波状口縁と推定される深鉢形土器である。波底部に横刻みが入る縦長の貼付文が施文される。三角形区画文が口縁部に施文され、頸部から胴部には平行沈線文で帯状に文様が施文される。文様外の無文部分には沈線で渦巻文などが施文される。文様内には単節LRの縄文が充填される。推定口径 23.2 cm、残存高 12 cm である。安行2 式である。

26 は平縁の深鉢形土器である。口唇部から3 段の沈線を沿わせる隆起状の帯縄文が施文されている。口唇部から2 段の突起をもつ縦長の貼付文を、5 単位施文している。地文は単節RLの縄文である。胴部には綾杉状条線が施文される。推定口径 20.1 cm、残存高 15 cm である。安行1 式である。

35 は胴部下半から底部の深鉢形土器である。器面には条線が斜方向に施文されている。底部は、底面周辺に粘土を貼り付け、上げ底状に作り出されている。底径 2 cm、残存高 8 cm である。

198 ～ 200、202 ～ 221 は破片資料である。

198 ～ 200、202、210 は大波状口縁をもつ深鉢形土器である。安行2 式と考えられる。198・



第94図 谷遺物包含層出土土製品

199 は波頂部に、刻みを有する突起を貼付している。突起下には縦瘤横刻みの貼付文が施され、貼付文下に 199 は豚鼻状貼付文が施されている。198 は剥がれて失われているが、剥離部分から貼付文が沈線や隆帯の施文後に貼付されたことがわかる。三角形区画を施す隆帯上には、刻みが施される。200 は把手部分が失われ、把手下の刻みが入る縦瘤が貼付されている。肥厚する口唇下には、帯状に単節 R L の縄文が施文される。刻みが入る微隆起状の隆帯の合流部分には豚鼻状貼付文が施文されている。202 は波底部に近い破片と考えられる。微隆起状の帯縄文に単節 R L の縄文が施文される。210 は波底部分で、微隆起状の帯縄文に単節 R L の縄文が施文され、帯縄文の合流部分には豚鼻状の貼付文が施されている。

203 ～ 208 は、口縁が平縁で直立または外反する器形の土器である。口唇部はいずれも肥厚し、そこに単節 R L の縄文が施文されている。207 の口唇直下は、縄文が磨り消されている。203、205 は口唇部から縦長瘤状の貼付文が施文される。206 は貼付文上に規則性のない刺突文が認められた。207 は口縁に突起をもつもので、突起の頂部に刻みを入れて突起先端に凹凸を付け、突起下に大小の豚鼻状貼付文を貼付している。207 は安行 2 式で他は安行 1 式土器と考えられる。

209、211 ～ 213 は口縁が内湾する器形の土器である。口唇部や文様内には、単節 R L の縄文が施文されている。211 は口唇部に小突起が貼付され、その下に豚鼻状貼付文が貼付されている。212・213 の胴部には対向する弧線文で文様を施文し、その内側に縄文を施文している。安行 2 式土器と考えられる。

214 ～ 218 は胴部の破片である。217・218 は胴部が屈曲するもので、注口または壺形土器と考えられる。文様内に縄文が充填され、214、216 は単節 R L の縄文、215 は無節 L、217 は単節 L R の縄文が施文される。いずれも安行 2 式土器と考えられる。

219 は台付土器の脚部である可能性がある。220・221 は胴部が丸みを帯び、瓢形の 221 の胴部には細い条線が施文されている。

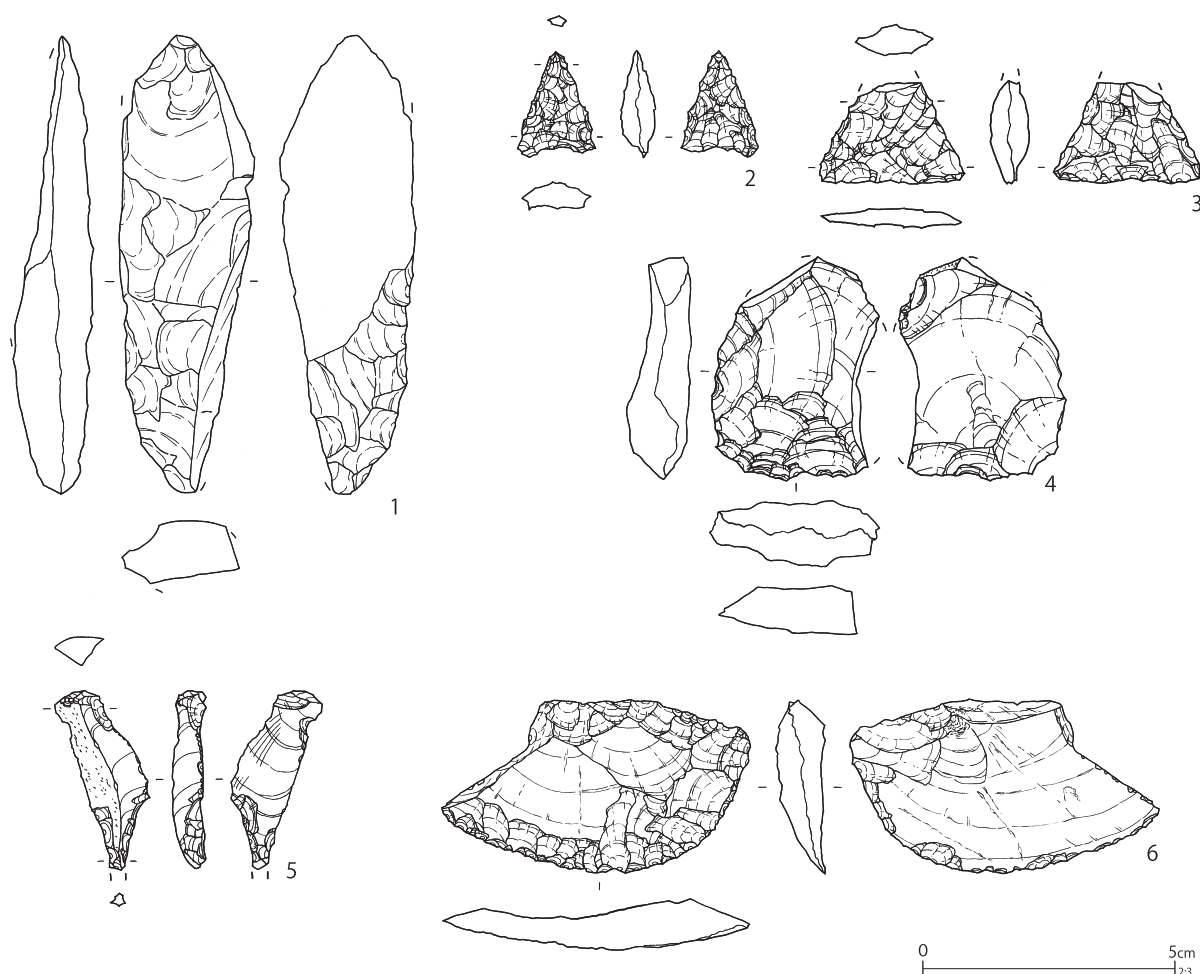
第 2 類土器（第 82 図 27 ～ 29、第 90 図 201、第 91 図 222 ～ 231）

晩期安行式土器を一括する。

24、27 ～ 29 は器形が復元できた深鉢形土器である。

24 は大波状口縁をもつ深鉢形土器で、4 単位の波状が作り出されている。区画文施文され、文様内には単節 R L の縄文が充填されている。豚鼻状の貼付文を施している。推定口径 21.2 cm、残存高 12.8 cm である。安行 2 から 3 a 式である。

27 は平縁で、口唇部に端部に縦刻みを入れる横瘤状突起が貼付されている。口唇下に単節 L R の帯縄文が施文される。胴部には 2 段の帯縄文が施文され、1 段目の内部にはレンズ状の区画で磨消縄文が施文されている。文様間には縦刻みが入る横長の貼付文が施文され、貼付文の上に二重の弧線文が施文されている。胴部の帯縄文間の無文部分には、平行する弧線文が施文される。文様内には単節 L R の縄文が施文される。推定口径 27.4 cm、残存高 19.8 cm である。安行 3 a 式土器と考えられる。



第95図 谷遺物包含層出土石器(1)

28は5単位の山形波状口縁の土器で、口縁が開き頸部が括れる器形である。波頂部は中央がくぼむ。双頭状の2つの突起の頂部は、押圧されやや凹んでいる。口縁には入り組み三叉文が施文され、平行する沈線文間には列点文が施文されている。安行3c式土器と考えられる。推定口径40.4cm、残存高13.3cmである。

29は平縁の土器で、口縁が外反し、頸部で括れ胴部が膨れる器形である。胴部には弧線文などが施文され、文様内に単節LRの縄文が施文される。推定口径19.6cm、残存高7.9cmである。

201、222～231は破片資料である。

201は大波状口縁の把手部分である。

222～227は縄文が施文される文様が施文されるもので、入り組み文などが施文される。口縁がやや開いて外反する器形で、台付鉢の可能性もある。

222・223は山形状の波状口縁である。文様内に施文される縄文は、227が単節LRの縄文で、他は単節RLの縄文を施文している。

228～230は平縁で縄文が施文されない土器で、229・230は口縁が内湾する器形である。230の文様内には列点文が施文されている。231は胴部で、丸く膨らむ最大径部分に、押圧を施す貼付文が施文されている。文様内には単節RLの縄文が施文されている。

201、222～231は安行3aから3b式土器である。

第3類(第83図30～34、37、第91図232～250)

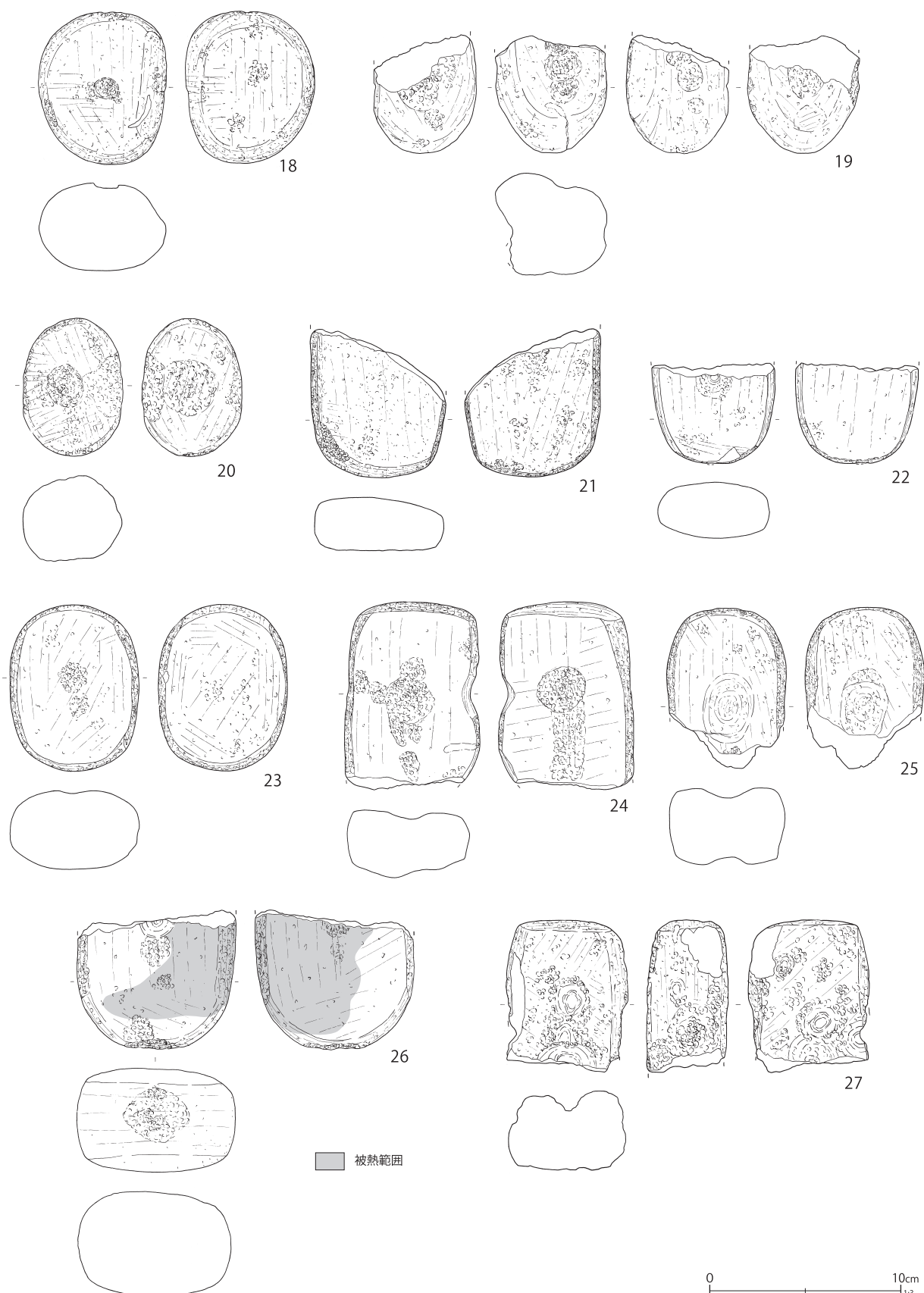
安行式期の紐線文土器・粗製土器を一括する。

30～34、37は器形復元できた深鉢形土器である。31～34、37は紐線文土器である。

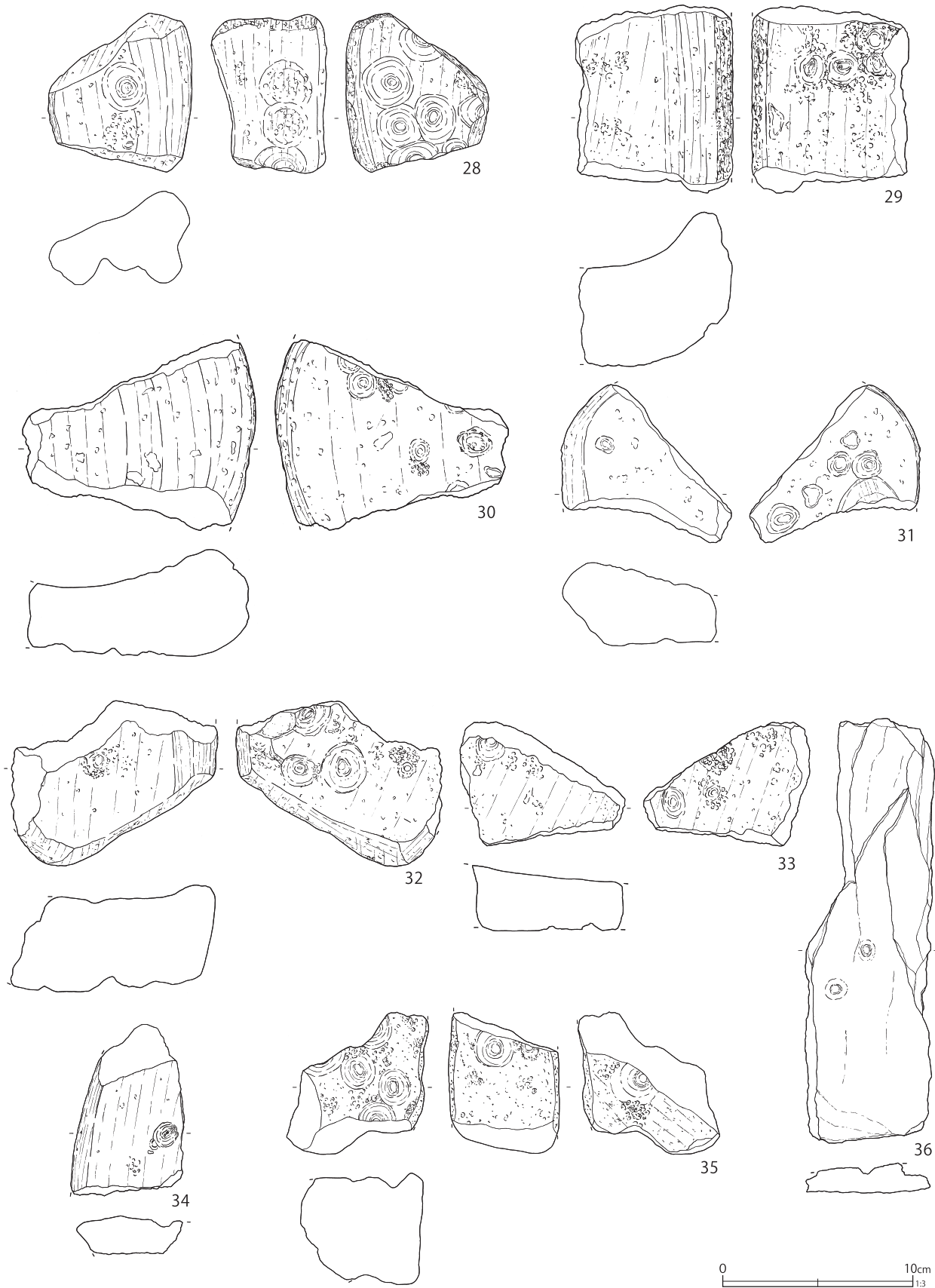
30は無文で、口唇部は小波状となっている。



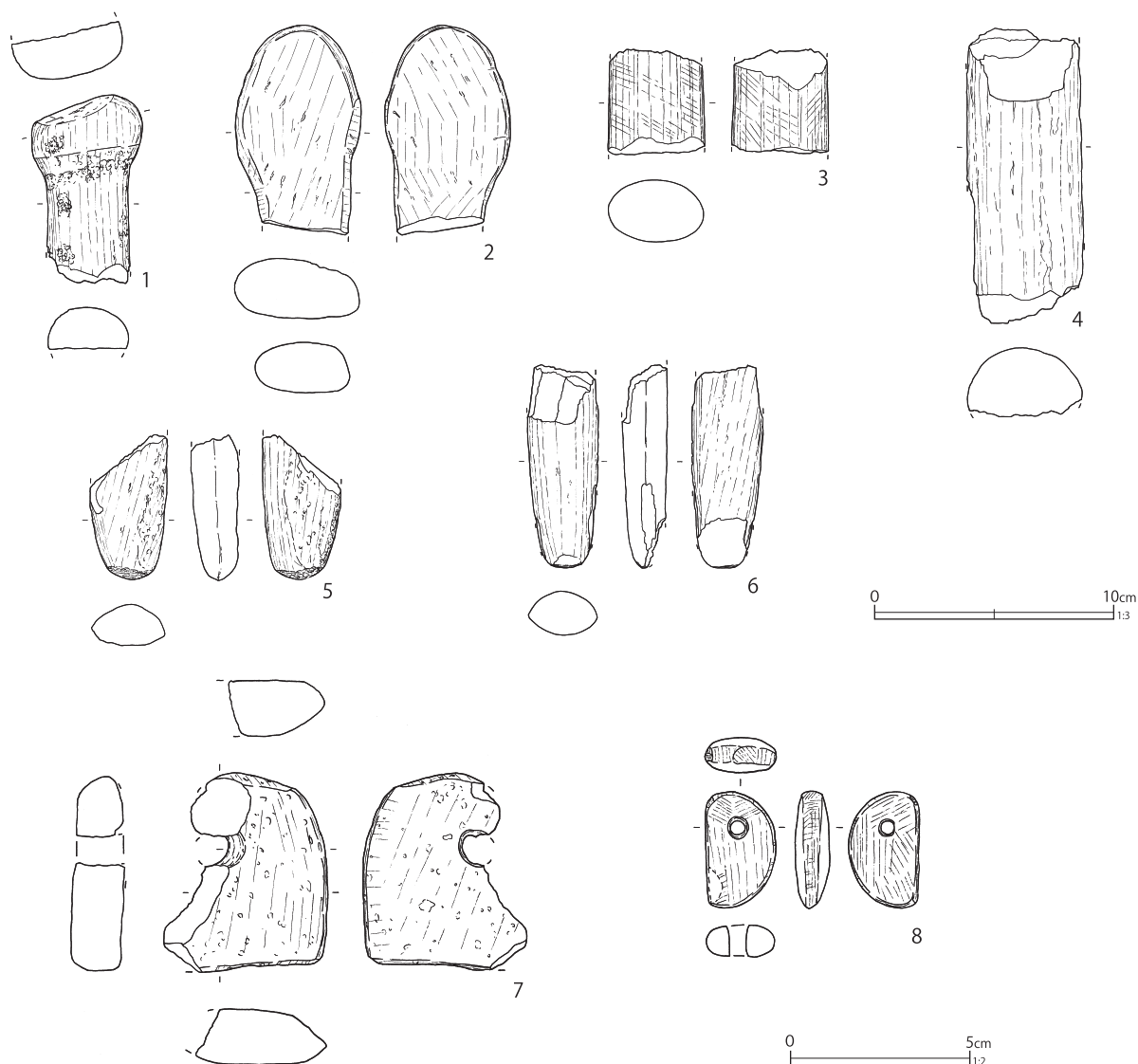
第96図 谷遺物包含層出土石器（2）



第97図 谷遺物包含層出土石器(3)



第98図 谷遺物包含層出土石器（4）



第99図 谷遺物包含層出土石製品

口縁部は垂直に近く立ち上がり、頸部でやや挟れ、胴部が丸みを帯びる。推定口径 33.5 cm、残存高 33.5 cm である。晩期安行式の粗製土器と考えられる。

31 は紐線文土器と考えられるが、口縁部側に条線が施文されず、無文である。開く口縁で、頸部で括れ、胴部は膨らまず底部に至る。頸部に間が狭い平行沈線文を巡らし、沈線間には列点文を巡らす。胴部に施文する条線は、斜め方向で、頸部から胴下半まで段をつけていない。残存高 15.3 cm である。後期後葉安行 1 式期と考えられる。

32・33 は口縁が内湾する器形で、条線のみが施文される。安行 2 から 3 a 式と考えられる。

32 は紐線に列点状の刻みが施文される。胴部には途中で切れる平行沈線文を巡らし、内側に紐線内と同じ刻みを施文している。口辺部の条線は斜め横方向、胴部は縦方向に条線を施文している。推定口径 22.8 cm、残存高 13.3 cm である。

33 は紐線の刻みが粗雑に施文される。胴部の沈線文も、明瞭な平行沈線にはなっていないが、沈線間に列点文は施文されている。条線の施文も粗雑で、口辺部は横方向に弧状に施文するが、部分的に紐線に施文された工具で、結節沈線状の文

様や刻みが施文される。胴部は斜め方向に、向きが変わる条線が数段施文されている。推定口径 29.8 cm、残存高 22 cm である。

34 は胴下半から底部で、胴部に条線文が施文されている。底径 7 cm、残存高 13.5 cm である。安行 2 から 3 a 式と考えられる。

37 は口唇部の紐線がなく、口唇下に刻みが施文される。胴上部の区画には、隆帯を巡らし隆帯上に刻みが施文される。口辺部には条線は施文されず、沈線で弧線文が施文される。刻みの入る隆帯が弧状に貼付される。胴部には条線が施文されるが、細条線がごく部分的に施文される。推定口径 23.0 cm、残存高 19.1 cm である。安行 3 a から 3 b 式と考えられる。

232 ～ 250 は破片資料である。

232 ～ 236 は条線文土器で、口縁がやや外反または直立気味に立ち上がるものである。安行 1 式と考えられる。232・233 は口唇下に刻みを施文するもので、232 は胴部と区画する沈線文が施文されていない。234 は沈線で区画された口唇下に細かい刻みが施されている。235・236 は細い集合沈線が口唇下に施文される。

237 は結節状に沈線が施文される土器である。条線は施文されない。晩期安行式と考えられる。

238 ～ 249 は紐線が施されるもので、紐線上に列点や、刻みが施文される。

238 ～ 244 は器面に条線が施文される土器である。238 は口縁が直立気味に、他は内湾する。239 は条線のみで、他は口辺部に沈線で弧状に文様が施文される。安行 2 から 3 a 式と考えられる。

245・246 は口縁が内湾する器形で、条線は施文されず、沈線文様内に縄文が施文される。245 は単節 LR、246 は RL の縄文が施文される。安行 3 a から 3 b 式である。

247 は口縁が内湾し、胴部に刻みが入る隆帯が巡り、隆帯の先端をクランク状に曲げている。器面には条線が施文され、口辺部に弧状の沈線文を

施文している。晩期安行式と考えられる。

248・249 は条線が施文されないもので、口辺部に沈線文が施文される。安行 3 a から 3 b 式と考えられる。

250 は粗製土器で、口縁が折り返し状となり、折り返し部分に指頭圧痕状の調整痕が認められる。器面の輪積痕上に、横方向に連続する指頭痕が認められる。晩期中葉である。

第Ⅷ群土器（第 83 図 36、第 92 図 251 ～ 260）

底部を一括する。後期から晩期である。

251 ～ 258 は底面に網代痕が認められる。260 の底面には木葉痕が認められる。258・259 は内外面が丁寧に磨き状に調整されている。

第Ⅷ群土器（第 83 図 38、第 93 図 261 ～ 280）

各時期の深鉢形土器以外の器種を一括する。

38 は、無頸扁平の壺形土器である。失われた部分に注口部があったと考えられる。推定される最大径 15.6 cm、残存高 7.1 cm である。後期前葉堀之内 1 式であろうか。

261 ～ 270 は浅鉢形土器である。261・262 は堀之内 1 式、263 ～ 266 は堀之内 2 式、267 ～ 269 は曾谷式、270 は器面黒色で中期中葉であろう。

271 は皿状の土器で、明瞭な底部は作り出されていない。平行沈線が弧状に文様が施文され、文様内に単節 LR の縄文が充填されている。

272 は台付鉢形土器である。272 ～ 274 は口縁で、275 は台部分である。

276 ～ 280 は注口土器の破片である。いずれも後期中葉～末葉である。

土製品（第 94 図 1 ～ 3）

1 ～ 3 は土製円盤である。1・2 は深鉢形土器の胴部片を円形に加工している。3 は口縁部を利用したもので、縁辺部に剥離痕が残されている。

出土石器（第 95 ～ 98 図）

第 95 図 1 ～ 6 は小型石器である。

1 は木葉形の尖頭器で、裏面側が半分以上欠損する。風化が著しい。

2～4は石鏃である。いずれも無茎である。2は基部に浅く抉りが入る。3は先端が欠損する。基部に抉りが入らない。4は未製品である。

5は石錐である。先端を欠損する。

6はスクレイパーである。裏面に大きく1次剥離面が残る。

第96図7・8は磨製石斧である。いずれも小型で、7は底角式で、丁寧に作られている。8は刃部に刃こぼれが認められる。

第96図9～12は打製石斧である。9は分銅形で、側縁の抉り中央に擦痕が認められる。10・11は基部と刃部の一部を欠損するもので、刃部に最大幅をもつものである。12は刃部側を欠損後に、再調整を行っている。

第96図13～17、第97図18～27は磨石類である。破損するものがほとんどで、完形のものはごく少ない。器面には、複数の使用痕が残されている。様々な用途に同じ石器を使用していたと考えられる。13～17は磨り面と、縁辺部に敲打痕が認められる。18～27は磨り面の他、表裏面や側縁部に敲打痕、器面中央に敲打による凹部が残されている。26・27の凹部は、漏斗状に作り出されている。21～27は縁辺部に敲打や磨りが加えられ、その結果平坦に作り出されている。

第98図28～36は石皿である。いずれも石皿のごく一部で、完形のものは出土しなかった。28は破損後に、再利用されたもので破損面に磨面や敲打痕が認められる。器面に凹部が複数残され、凹部は漏斗状に作り出されるものが多い。

出土石製品（第99図）

第99図1～6は小型の石棒・石剣類である。いずれも小破片で、器面に文様は残されていない。1、4は石棒である。2・3、5・6は扁平で、両側縁に稜線を作り出す。石剣と考えられる。

7・8は、垂飾である。7は軽石製である。破損のため、全体の形状は不明である。8は丁寧に調整が施され、半円状に加工される。

（7）グリッド出土遺物

土器の分類

第3次調査区からは、縄文時代後期前葉の土器群を主体として、早期から晩期までの土器群が出土した。

ここでは、時期別に土器群を以下のように分類することとした。また、水場遺構関連遺物と谷部出土遺物についても、グリッド出土土器の分類に沿って報告することとした。

第I群土器

早期後半の土器群を一括する。

第II群土器

前期後葉の土器群を一括する。

第III群土器

中期の土器群を一括する。

第1類 中期中葉の土器を一括する。

第2類 中期後葉の土器を一括する。

第IV群土器

後期初頭の土器群を一括する。

第V群土器

後期前葉の土器群を一括する。

第1類 堀之内1式土器を一括する。

第2類 堀之内2式土器を一括する。

第VI群土器

後期中葉の土器群を一括する。

第1類 加曽利B式土器を一括する。

第2類 曾谷式土器を一括する。

第3類 紐線文土器・粗製土器を一括する。

第VII群土器

後期後葉から晩期の土器群を一括する。

第1類 後期安行式土器を一括する。

第2類 晩期安行式土器を一括する。

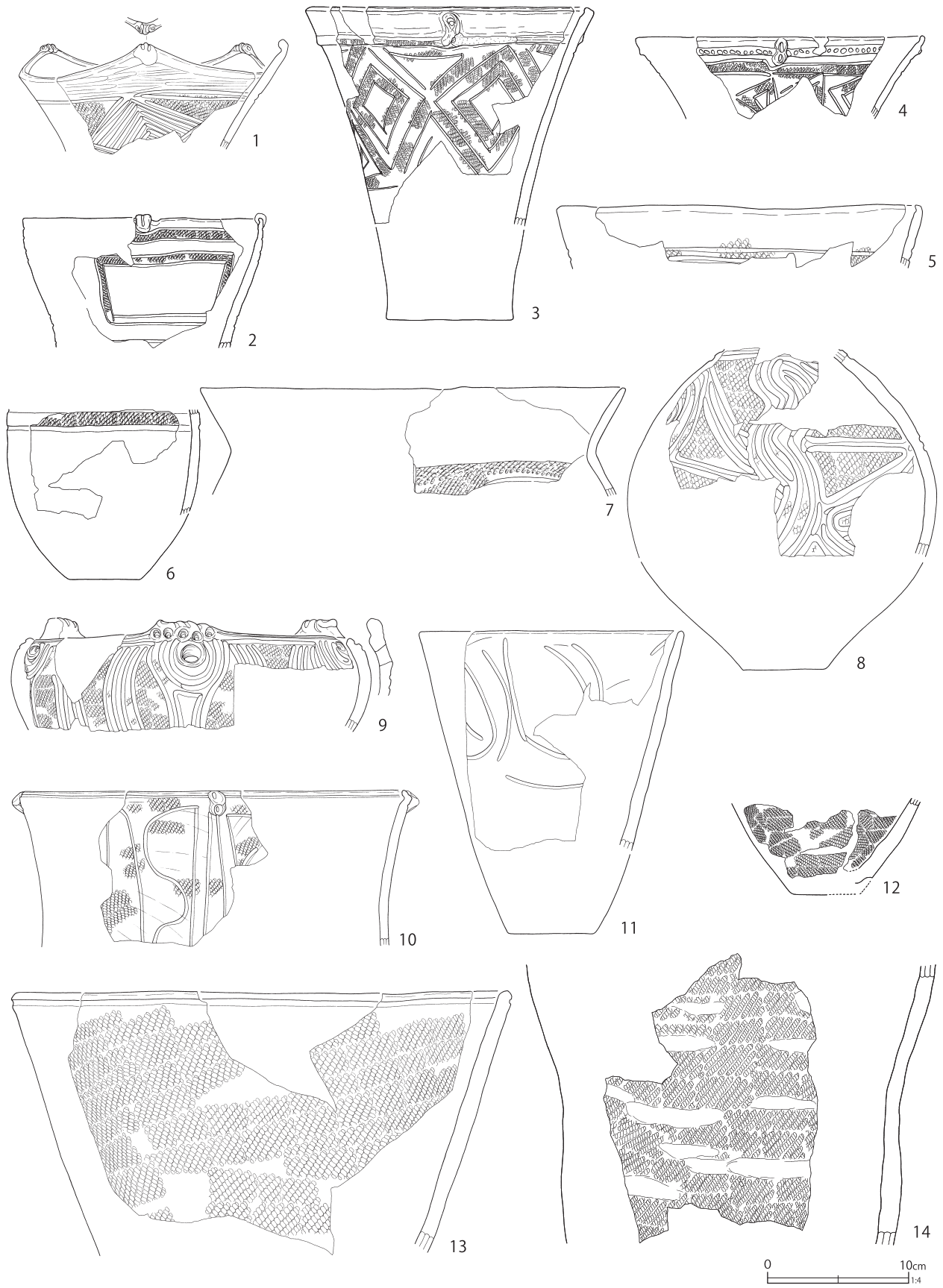
第3類 紐線文土器・粗製土器を一括する。

第VIII群土器

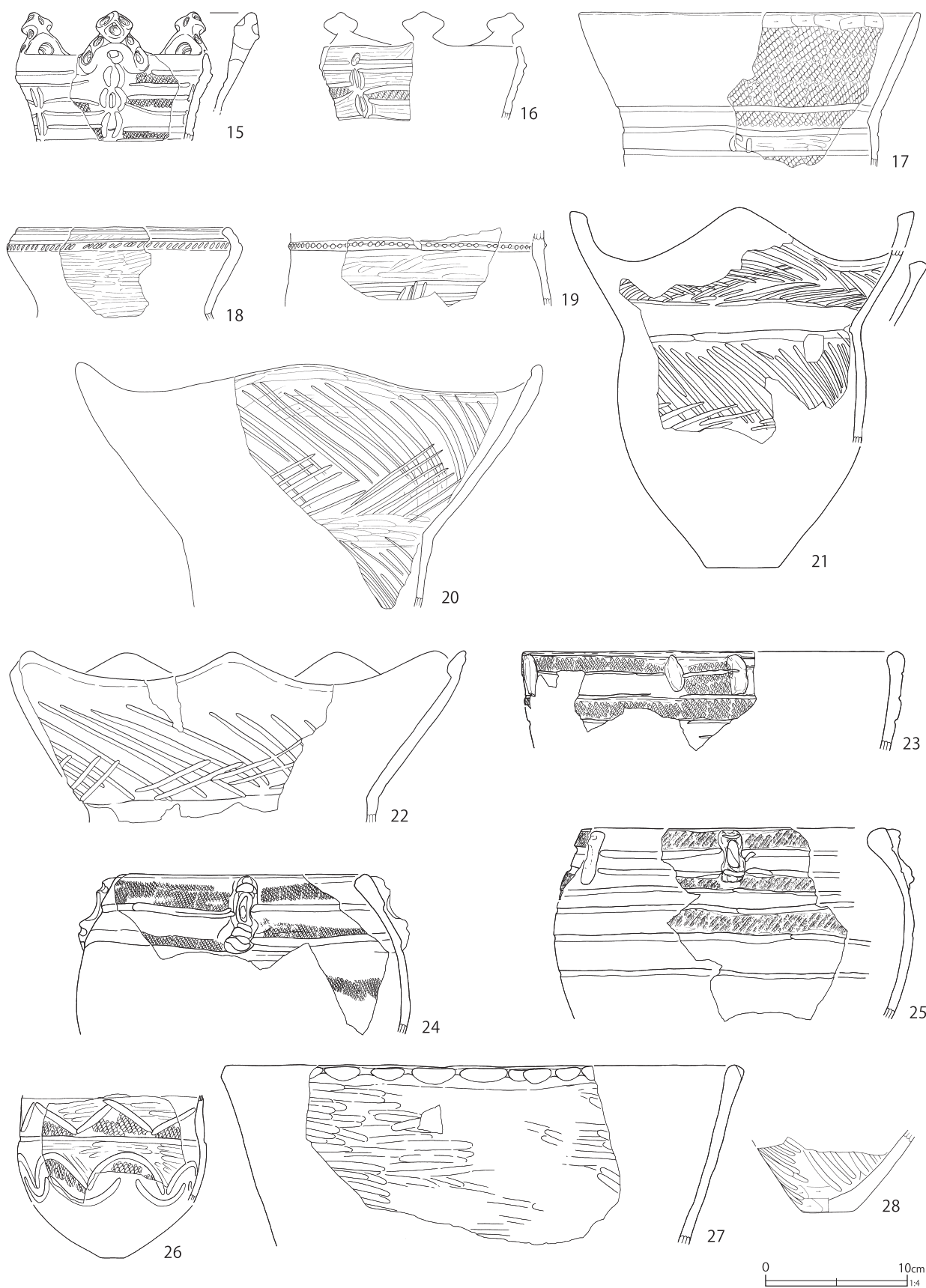
底部を一括する。

第IX群土器

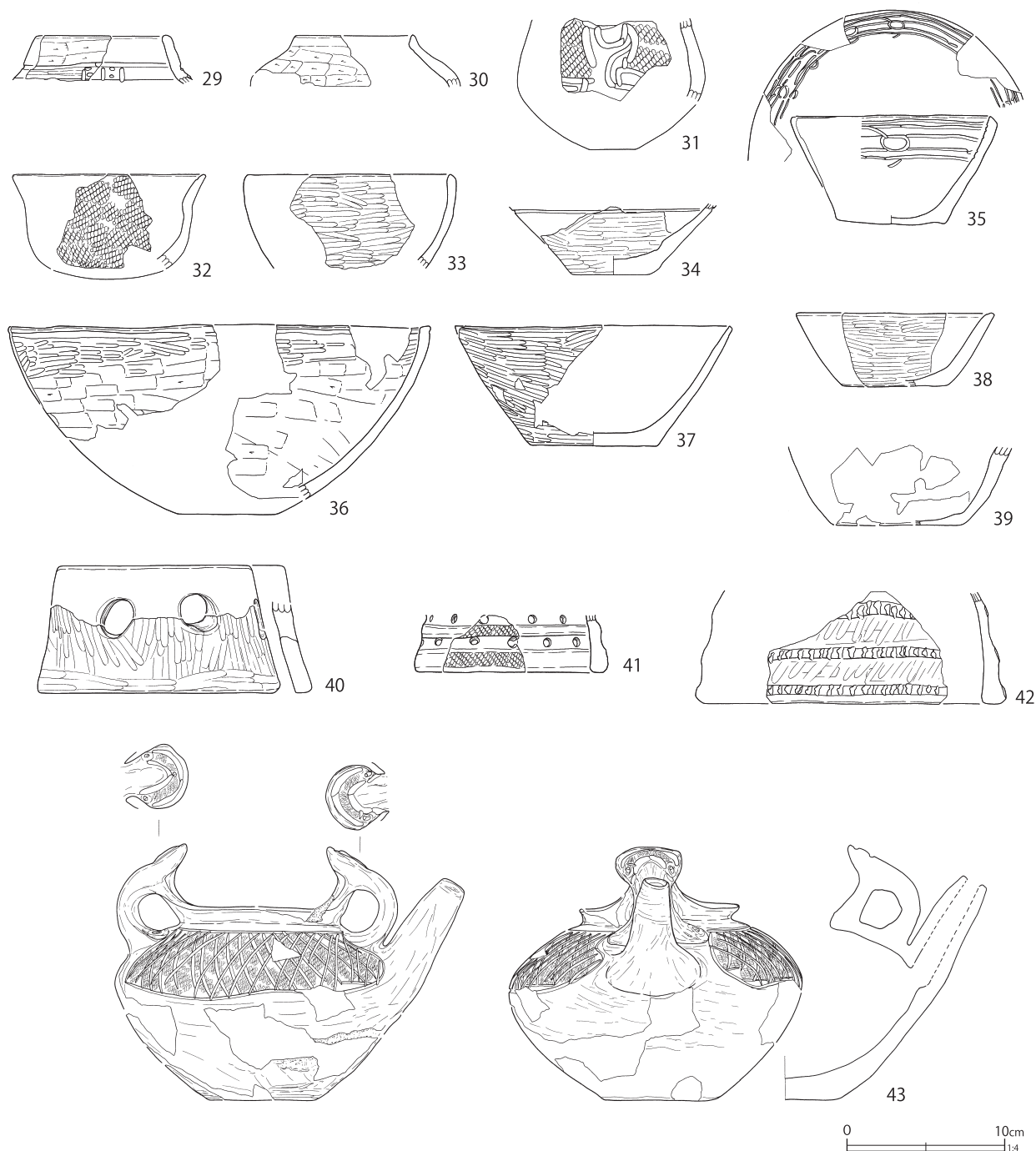
深鉢形土器以外の器種の土器群を一括する。



第100図 グリッド出土遺物(1)



第101図 グリッド出土遺物(2)



第102図 グリッド出土遺物（3）

グリッド出土土器

第Ⅰ群土器（第103図44～60）

早期後半の土器群を一括する。条痕文系土器群で、内外面に条痕や擦痕状の整形を行っている。

44～60は出土した条痕文系土器で、野島式と考えられる。44は口縁下に微隆起線文が巡らせ、その幅狭の口縁部に貝殻腹縁文が施文される。そ

の下に、2本1組の微隆起線文が垂下している。

45・46の口唇部には、押圧状の刻みが入れている。47は口唇部に刻みが入れている。

第Ⅱ群土器（第103図61・62）

前期後葉の土器群を一括する。諸磯式期の土器が出土した。61は浮線文が施文される。地文は単節LRの縄文である。62は集合沈線と貼付文

が施文される。61は諸磯b式、62は諸磯c式である。

第Ⅲ群土器

中期の土器群を一括する。

第1類（第104図63～65）

中期中葉の土器を一括する。

63～65は阿玉台式系の深鉢形土器で、63・64は把手部分である。65は胎土に多量の金雲母が含まれている。いずれも角押文を施文する。阿玉台Ⅱ式に相当すると考えられる。

第2類（第104図66～81）

中期後葉の土器を一括する。加曽利E式土器を一括した。

66は口縁部文様帯部分で、隆帯で渦巻文が施文される。加曽利EⅡ式である。67～76は加曽利EⅢ式で、磨消縄文で文様が施文される。72～76は胴部の破片で、72は隆帯で渦巻文が施文される。73～75は2本1組の沈線で懸垂文を垂下させ、その間を磨り消している。76は沈線で渦巻文を施文している。77～81は微隆起状の隆帯が施文されるもので、加曽利EⅣ式である。79～81は後期初頭の加曽利E系土器と考えられる。

第Ⅳ群土器（第104図82～93）

後期初頭の土器群を一括する。82～87は平行沈線で施文される文様内に縄文を充填するものである。86は無節L、他は単節LRの縄文が施されている。82は波状口縁で、垂下する沈線文内に列点文が施文される。88～93は平行沈線文で施文される文様内に列点文が施文される。82～87は称名寺Ⅰc式、88～93は称名寺Ⅱ式期に相当する。

第Ⅴ群土器

後期前葉の土器群を一括する。

第1類（第100図13、第104図94～97、第105図98～122、第106図123～132、134）

堀之内1式土器を一括する。

13は口唇直下に沈線を1条巡らしている。胴

部には単節LRの縄文のみが施文される。推定口径35.6cm、残存高18.6cmである。

94～116は縄文が施文される深鉢形土器の破片である。94～108は口縁部である。94～100は波状口縁である。94は把手部分で、上端面に弧線文を施文し、その両側に円文刺突が施されている。把手の表面には円文の刺突文の他、円孔を穿孔させている。95は波頂部左側の口唇部に沈線を、右側に2列の円形刺突列が施文される。96は口唇縁部に沈線を施文する。把手部表面には、円形刺突文の他、円孔が穿孔されている。97は把手下に、表裏面ともに円形刺突文が施文されている。98は波頂部下に「8」の字状貼付文が施文される。胴部には沈線で文様が施文されている。99は口縁部に平行沈線文を巡らし、その間に刺突文を施文する。100は波頂部に粘土紐を貼付し、貼付文の頭頂面と、両側に円形刺突文が施文される。貼付文下からは、胴部に円形刺突文列を垂下させている。101～108は平縁の口縁部である。101～106は口縁部が肥厚するもので、肥厚部には沈線を1条巡らしている。胴部には沈線で文様が施文される。107は口縁下に沈線が巡らされ、胴部には櫛歯状の集合沈線で文様を施文する。108は口縁部に沈線が施文されない。胴部には平行沈線文を垂下させている。110～112は胴部の破片で、110は弧線文を、111・112は懸垂文を垂下させる。109は称名寺系の文様が施文される。地文は94、96・97、99～106、108、110～112に単節LR、95、98、107に単節RL、109に無節Rの縄文を施文している。113～116は口縁が外反し、頸部で括れ胴部が丸く膨らむ器形の土器である。113は口縁が無文で、波状口縁の波頂部直下に円形刺突文、頸部直下に円形刺突文を施文し、刺突文間を沈線で結ぶ。胴部には円文を中心に囲いのある蛇行沈線文が垂下される。114は口縁側に縄文が施文され、胴部に沈線文が施文される。115は胴部文様が半裁竹管で施文さ

れる。116は微隆起状の隆帯で曲線文様が施文され、文様の変化部分に、円形刺突文が施文される。綱取系の土器である。113～116は単節LRの縄文が施文される。

117、120～132は地文が施文されず、胴部に沈線で文様を施文する深鉢形土器の破片である。117、120～123は波状口縁の波頂部に把手が施される。117は把手頭頂部に面をもつもので、面の中央を窪ませている。124～126はゆるやかな波状口縁で、124・125は波頂部に文様を施文するもので、124は重円文、125は単沈線が施文される。波頂部下には、複列の沈線文を垂下させている。126の口縁は肥厚し、上部が連結する沈線を垂下している。127～130は口縁が肥厚し、肥厚部分には127・128は列点文を、129・130は沈線文を巡らしている。131・132は頸部で括れ、胴部が丸く膨らむ器形である。131は頸部に刻みが入る隆帯が巡らされている。

133・134は無文の深鉢形土器の破片で、134の波状口縁の波頂部には円孔が穿孔されている。第2類（第100図1～7、10・11、14、第106図135・136、139～143、第107図144～165、第108図166～179、181・182）

堀之内2式土器を一括する。

135・136は把手部分である。135は橋状で、表裏面に楕円形状の凹みが施されている。136は把手頂部に渦巻文を施文し、把手下や把手の両側に「8」字状の貼付文が施文され、刻みを施す隆帯で連結されている。胴部に施文される沈線文間に単節LRの縄文を充填している。

1～5、139～162は口縁が外反する朝顔形の器形のものが多い。そのうち1～4、139～156は文様内に縄文が充填されるものである。

3・4、139～144は口縁下に隆帯を巡らし、隆帯上に「8」字状貼付文が施文される。

3は隆帯上に縄文を施すもので、口縁内面は浅い凹みが巡っている。「8」字状貼付文は口縁直

下から貼付し、貼付文の下端が隆帯と重なっている。胴部は菱形文を施文し、文様内に単節LRの縄文を充填している。推定口径20.4cm、残存高15.3cmである。

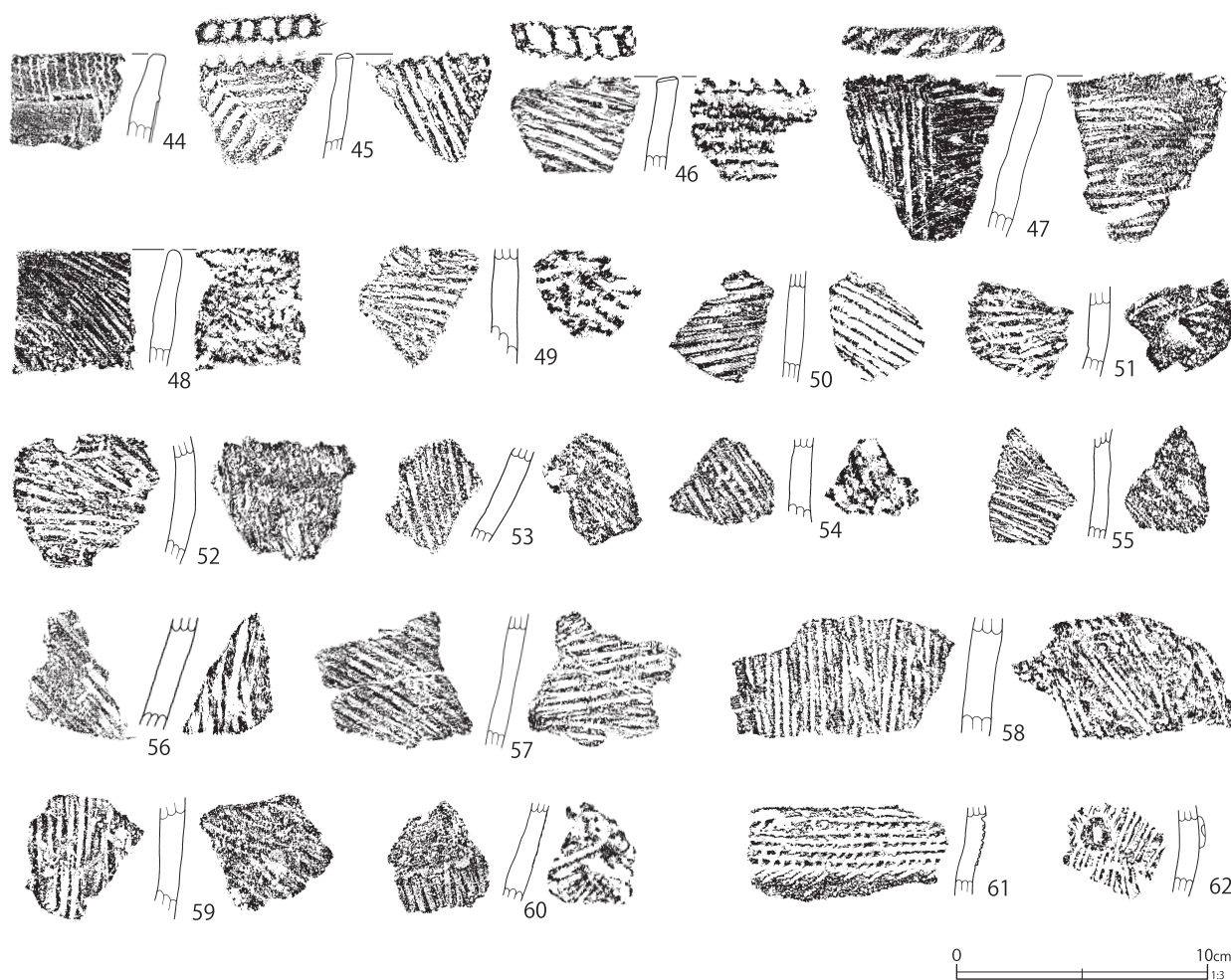
4は口縁下に刻みが入った隆帯が巡らされ、隆帯上に「8」字状貼付文が貼付されている。胴部文様内に単節LRの縄文が充填されている。推定口径20.4cm、残存高5.8cmである。

139～144は深鉢形土器の破片である。139は「8」字状貼付文の上の口縁部に「V」字状の押圧が施され、140は貼付文上に山形突起が付けられており、141～144は平縁の口縁部である。いずれも口縁部下に刻みが入る隆帯を巡らし、隆帯上に「8」字状貼付文が施文されている。139は胴部に三角形状文が施文される。139は楕円沈線文の、140は2条沈線の内文をもつ。142以外の口縁下内面には、沈線が1条巡る。胴部には平行沈線で文様が施文されている。141、144は三角形状に施文されている。文様内には139・140、142～144は単節LRの縄文が、141は無節Lの縄文を施文している。

145～147は刻みの入った隆帯が口縁部下に巡らされるが、「8」字状貼付文が認められない。145、147は口縁内面に沈線が施文される。146は内面に文様が施文されるもので、間延びした「8」字状貼付文を貼付し、それを境界に沈線で文様帯を区画し、中央部に列点文が施文されている。147は楕円区画文が施文される。145、147が無節L、146は単節LRの縄文が施文される。

148・149は口縁下に2条の刻みが入る隆帯が巡らされる深鉢形土器である。隆帯に「8」字状貼付文を施文し、貼付文間を微隆起状の隆帯で連結させる。148の垂下する隆帯上に刻みを施している。149は胴部に沈線で三角形状文が施文され、文様内に単節LRの縄文が施される。

150は口縁下を巡る鎖状刻みの入る隆帯から、同種の隆帯を垂下させる深鉢形土器の口縁部であ



第103図 グリッド出土遺物(4)

る。文様内には単節LRの縄文を施文している。

1・2、5、151～156は口縁部下に隆帯を巡らさない深鉢形土器である。

1は3単位の波状口縁で、波頂部には貼付文が施されている。貼付文には刻みや円形刺突文が施文されている。口縁部は無文で、胴部に集合沈線の菱形文が施文されている。文様の外側に単節LRの縄文を充填している。口縁下の内面には沈線が巡る。推定口径19 cm、残存高7.9 cmである。

2は口縁下がやや膨らみ、頸部でゆるやかに括れる器形と考えられる。口唇部に貼付文が施されるもので、貼付文の中央に沈線を施文している。口縁下に巡る平行沈線文は、貼付文を避けるように貼付文下は凹ませている。また、貼付文横の口

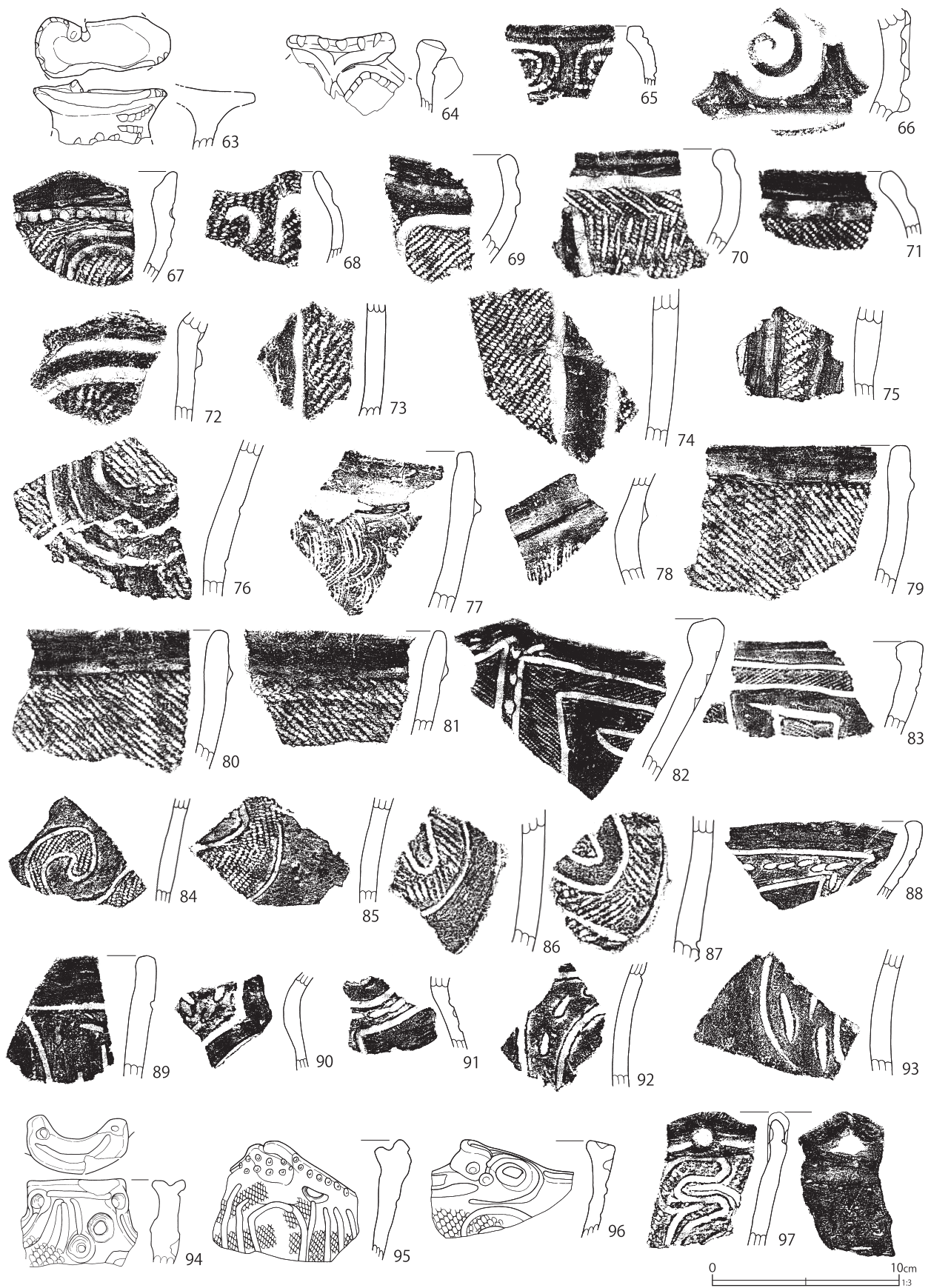
唇部も凹ませている。胴部には長方形の区画文を磨消縄文で施文し、無節Lの縄文を充填している。推定口径17 cm、残存高9.4 cmである。

5は無文の口縁部を平行沈線文で区画している。文様内には単節LRの縄文を施文している。推定口径26 cm、残存高4.4 cmである。

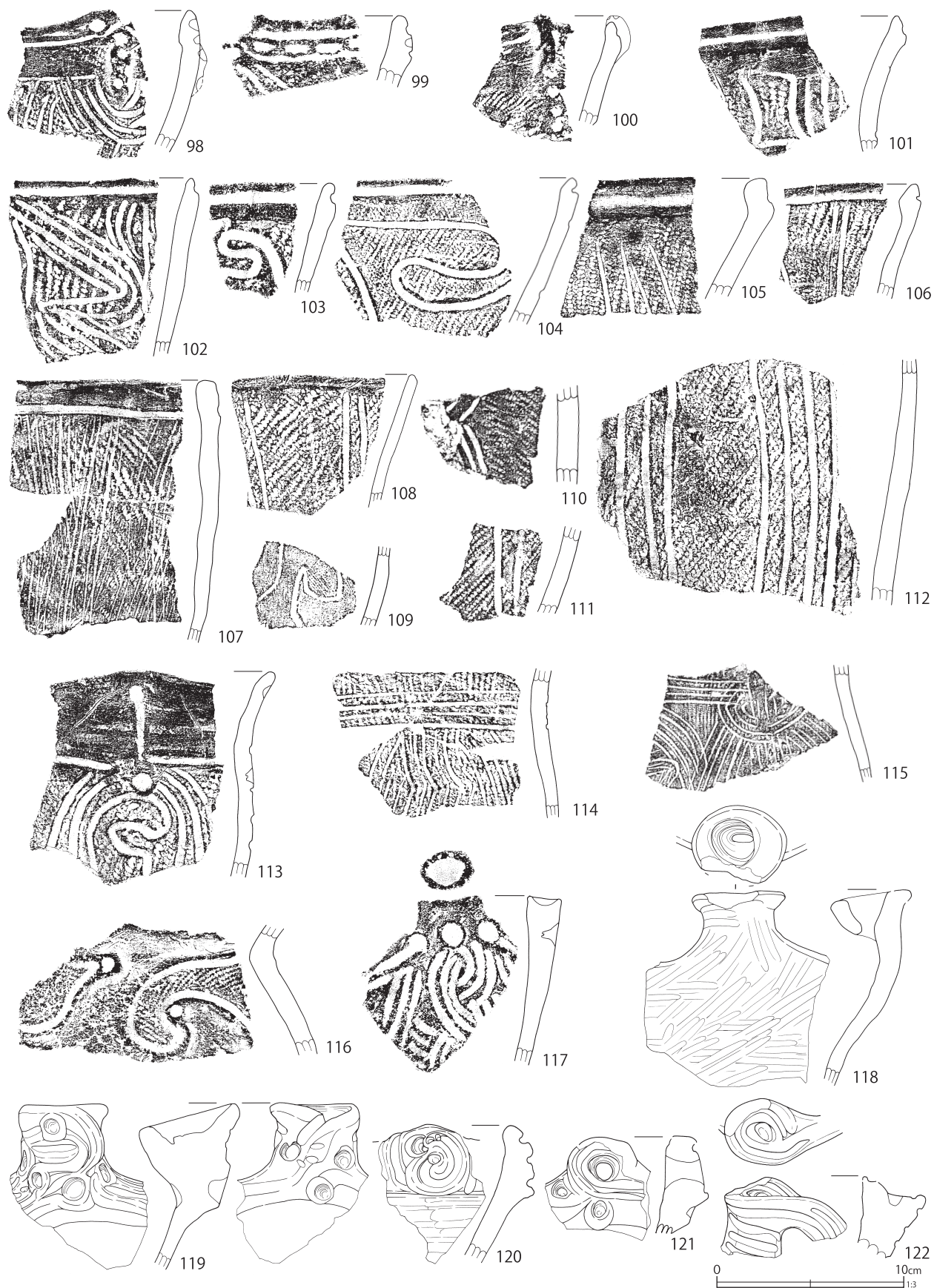
151～156は深鉢形土器の破片である。

151・152は波状口縁で、波頂部下に「8」字状貼付文が施文されている。151は波頂部の頭頂部に面を成すものである。152は口縁部の端部を内側に押し込む。貼付文の頂部には円形刺突文を施している。内面には沈線を3条巡らしている。

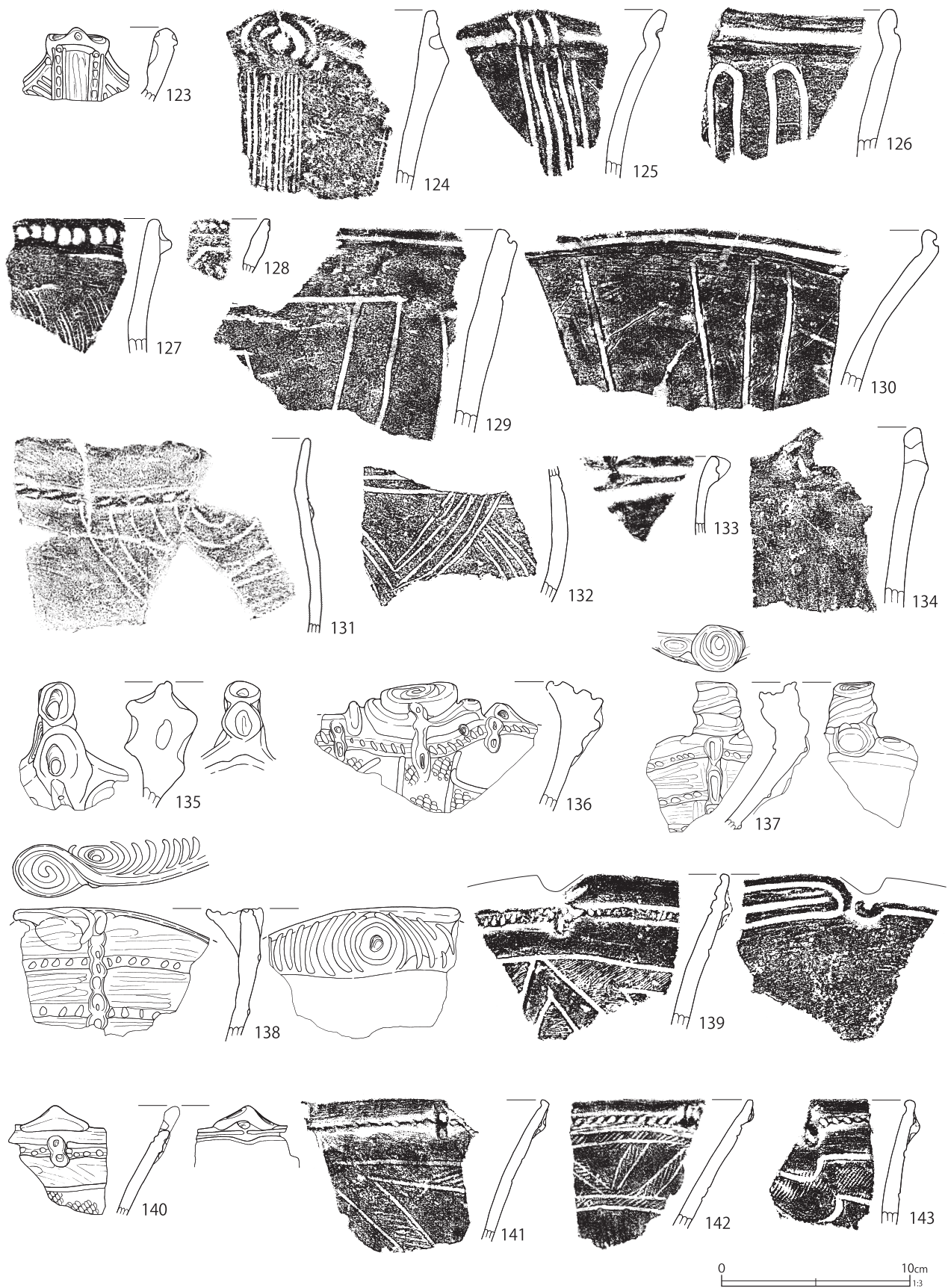
153～156は胴上部に平行沈線文で文様が施文される。口縁下の内面には、153・154は沈線が



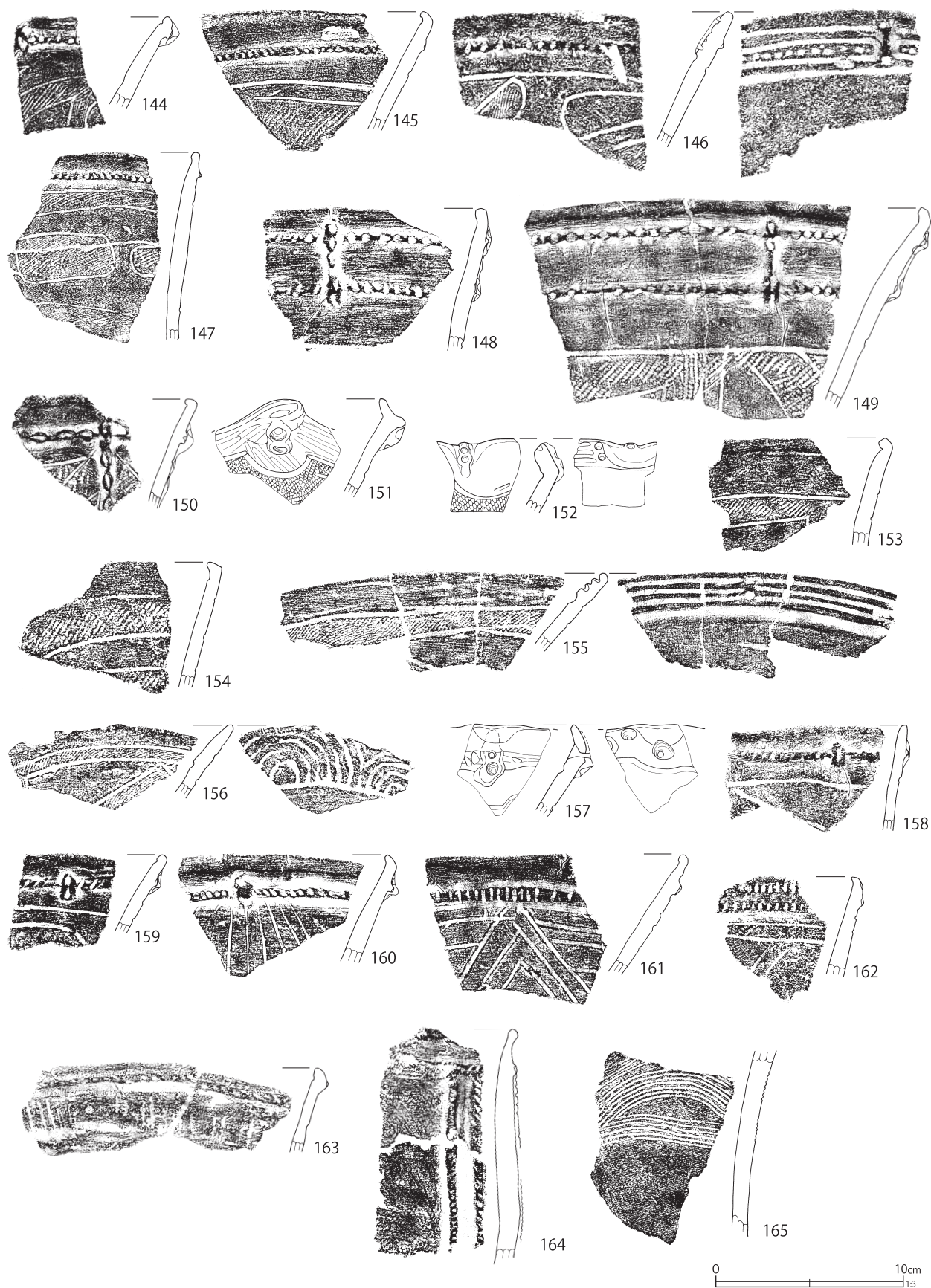
第104図 グリッド出土遺物(5)



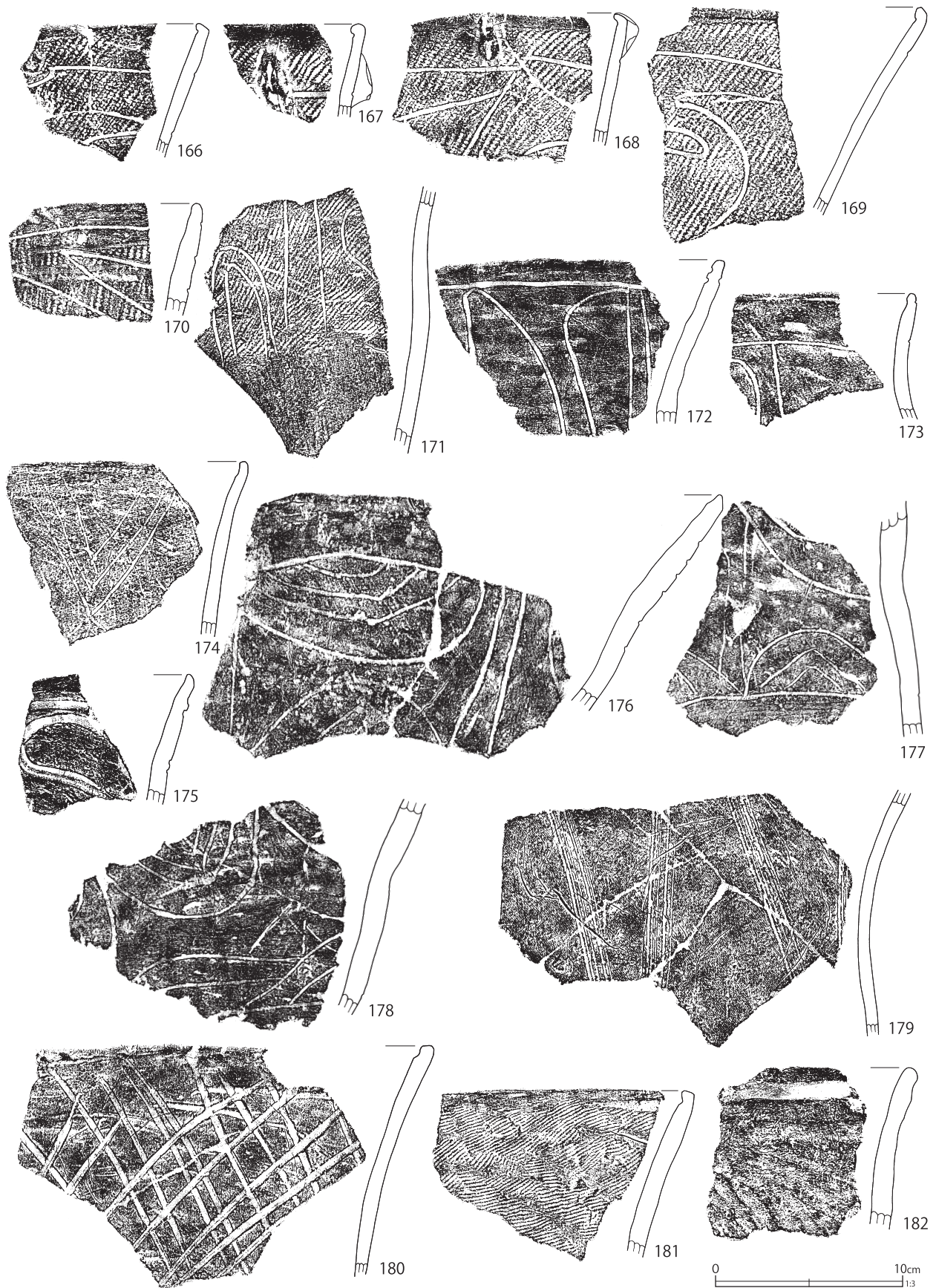
第105図 グリッド出土遺物(6)



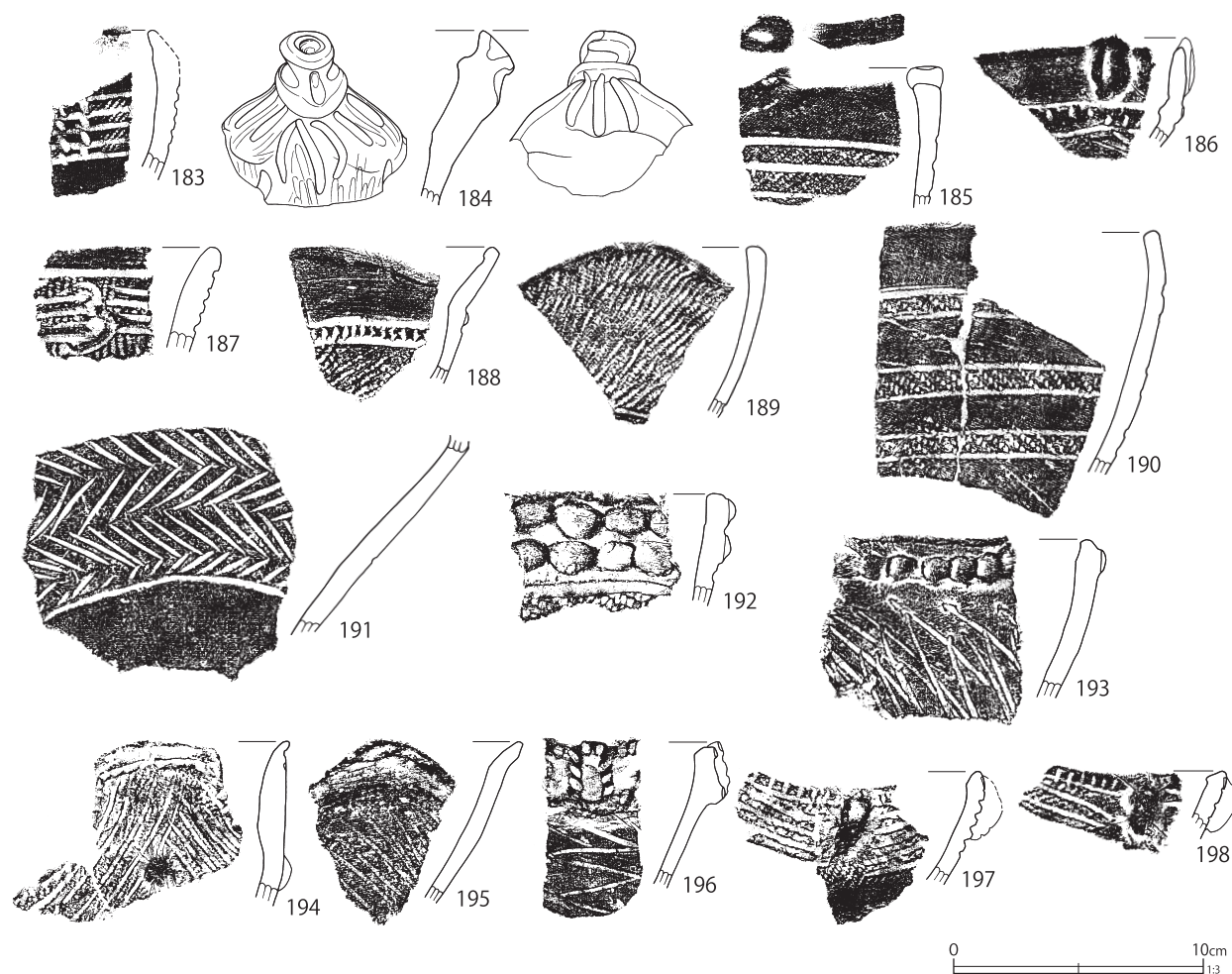
第106図 グリッド出土遺物（7）



第107図 グリッド出土遺物(8)



第108図 グリッド出土遺物(9)



第109図 グリッド出土遺物 (10)

1条巡らされ、155・156は内文が施文されている。155の内面には、口縁直下に面を作り出し、沈線文を巡らし、その間に列点文が施文されている。156の内面には、沈線で区画しその内側に重弧文が施文されている。文様内の縄文は、151～153、155・156は単節LR、154は無節Lが充填されている。

6は胴部の破片である。胴部文様帯下端部の区画帯縄文が残されている。平行沈線文間には、無節Lの縄文が充填されている。胴下半は無文である。残存高7.4cmである。

157～162は文様内に地文が施文されない深鉢形土器の破片である。

157～160は、刻みが入る隆帯を巡らし、その上をまたぐように「8」字状貼付文が貼付される土器である。157は波状口縁で、152と同様に口

唇部を内側に押して形状を作り出している。「8」字状貼付文を中央に貼付し、円孔を裏面まで穿孔させている。158・160は斜線文が施文される。159は弧状に文様が施文される。

161・162は縦位刻みに入る隆帯が口縁部下に巡らされる。162は2条巡らされている胴部には三角形状に文様が施文されている。

163は口縁下に刻みが入る隆帯を巡らす深鉢形土器の破片で、口縁内面に沈線文が巡らされている。外面には縦位の条線文が施文されている。

7、164は口縁が外反し、頸部が括れる器形である。7は頸部に区画文は施文されていない。胴部には沈線文と無節Lの縄文を施文している。推定口径29.8cm、残存高7.7cmである。164は樽形の器形で口縁の外反は短く、頸部に刻みが入る隆帯を巡らし、頸部の隆帯から2本の刻みが入る



第110図 グリッド出土遺物(11)

隆帯を垂下させている。器面は無文である。

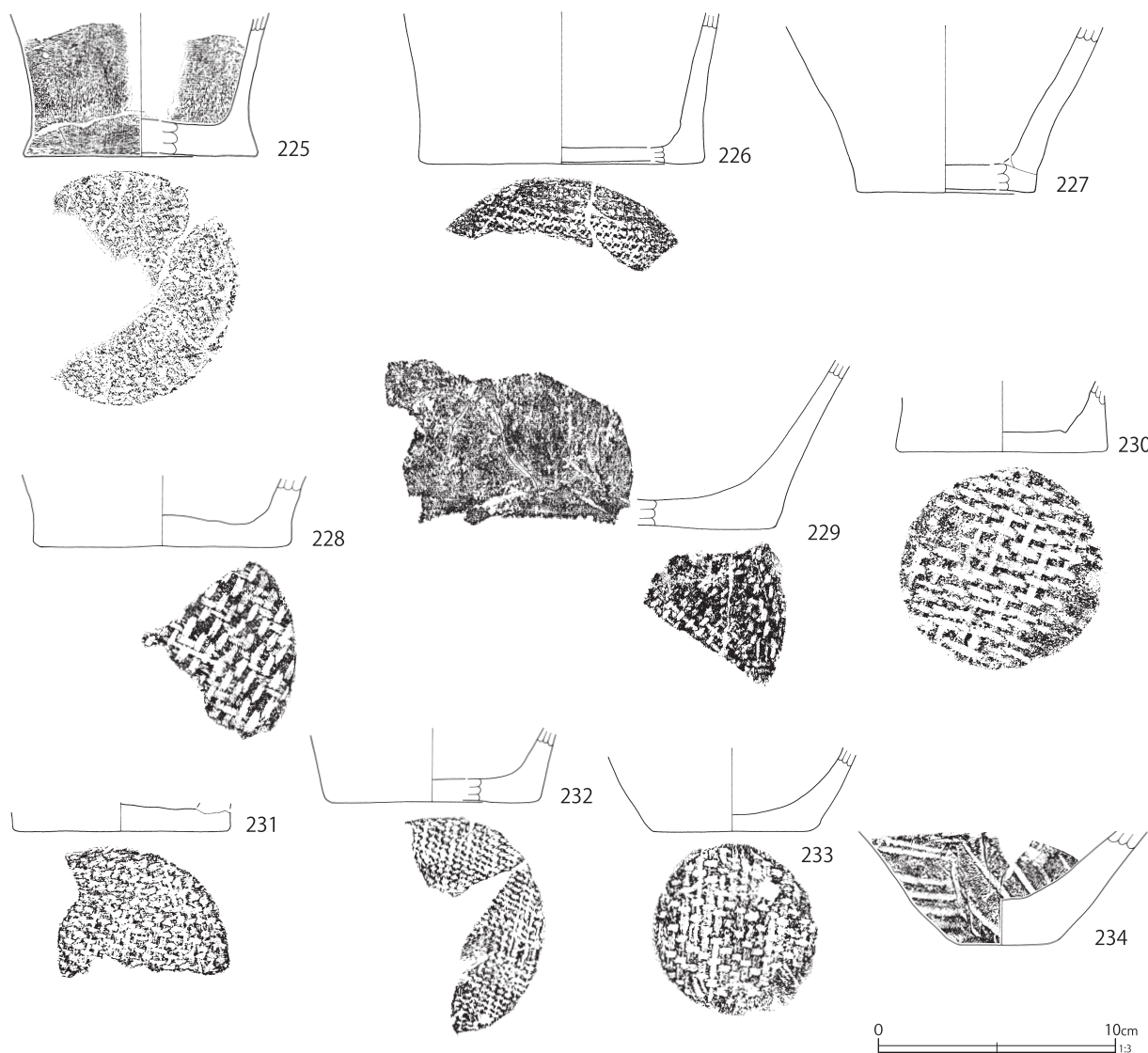
165は櫛歯状の集合沈線で文様が施文されている。

10、166～171は縄文の上に沈線文を施文する深鉢形土器である。

10は内傾する口縁部の口唇直下に、沈線が巡らされて胴部と区画されている。口唇部に「8」字状貼付文が貼付される。沈線や蛇行沈線を垂下し、単節LRの縄文を粗雑に施文する。口縁下内

面に、沈線を巡らす。推定口径27cm、残存高11cmである。

166～171は深鉢形土器の破片である。166～170は口縁部である。170以外は口縁端部が内傾している。167は口縁部下に、168は口唇部から「8」字状貼付文が貼付されている。166は器面に貼付文が剥落した痕跡が認められる。171は胴部に斜線文や弧線文、対向「U」字文などが施文されている。地文は全て単節LRの縄文である。



第111図 グリッド出土遺物(12)

11、172～179は地文が施文されない深鉢形土器の破片で、沈線文のみが施文されている。

11はバケツ形の深鉢形土器である。文様は胴上半に曲線の沈線文のみが粗雑に施文される。推定口径18.8cm、残存高15.6cmである。

172～179は口縁が開き、胴上部でゆるやかに括れる器形である。内面に沈線文を巡らすものが多い。172・173、175・176は口縁部下に沈線が巡らされ、無文の口縁部と胴部を区画している。172の内面には、口縁直下に2条の沈線文を巡らしている。174は胴部にV字状の文様が施文されている。176は半円形の沈線文が対向するように

施文されている。器面には条線状の調整が残されている。177～179は胴部である。177は176と同一個体であると考えられる。177には文様帯の下側の沈線区画が認められる。179は櫛歯状の集合沈線で斜線文を施文している。

14、181は地文のみが施文される。

14は胴部分である。ゆるやかに括れる部分が残されている。器面には単節LRの縄文のみが全て横方向に施文されている。縄文はところどころナデ状に消されている。残存高19.7cmである。

181は口縁部の破片で内面に沈線を巡らしている。器面には単節LRの縄文のみが施文される。



第112図 グリッド出土土器 (13)

口唇直下には狭い無文部分が残されている。

第Ⅵ群土器

後期中葉の土器群を一括する。

第1類 (第101図15～22、第109図183～186、188～191)

加曽利B式土器を一括する。深鉢形土器の他、

鉢形土器もここに含めた。15～22は器形復元可能な土器で、183～191は破片資料である。

183は加曽利B1式の鉢形土器である。口唇部が外削状となる。口縁下には横帯文が施文され、上下対応する区切り文が施されている。

15～22、184～191は加曽利B2から3式土

器である。

15は3単位突起の深鉢形土器である。突起には円形の刺突文を施文し、口縁部との接点部分には円孔を穿孔させている。口縁下には横帯文を3条施文し、単節LRの縄文を充填している。推定口径13cm、残存高9.1cmである。

16は3単位突起の深鉢形土器と考えられる。突起間に円形刺突文を施文し、刺突文から下に区切り文を施文している。横帯文内には、単節LRの縄文を充填している。推定口径13.6cm、残存高5.2cmである。

17は深鉢形土器である。口縁が外反し、頸部で括れる器形である。口唇直下には狭い無文部分を作り出している。口縁から頸部の間には単節LRの縄文を施文している。頸部の横帯文間の無文部分には区切り文を施文している。推定口径24.2cm、残存高10.9cmである。

18は内傾する口縁部に2本の沈線文が施文され、沈線文下の屈曲部の稜線上に刻みを巡らしている。頸部で括れる器形で、器面は無文である。第V群1類の可能性もある。推定口径15.7cm、残存高6.6cmである。

19は括れる頸部に刻みが入る微隆起状の隆帯を巡らしている。胴部には沈線で横帯文状に文様を施文している。残存高5.5cmである。

20～22は口縁部が波状口縁で、斜線文を施文する深鉢形土器である。やや膨らむ口縁部は大きく開き、頸部で括れ胴部は丸みを帯びる。

20は口縁に斜線文が矢羽状に施文される。推定口径32.4cm、残存高17.3cmである。

21は口縁部に斜線文を矢羽状に施文している。胴部にも同様の斜線文が施文されている。推定口径24.2cm、残存高14.7cmである。

22は5単位の波状口縁であると推定される。頸部には無文帯が認められる。第2類となる可能性もある。推定口径32.5cm、残存高12.0cmである。

184～186、188～191は破片資料である。

184～189は深鉢形土器である。184は波状口縁の把手部分である。185～187は口縁部である。185は口縁の突起部分で、器面には横帯文が施文されている。単節LRの縄文を充填している。186は口唇部から貼付文が垂下され、その下に微隆起状の刻みが入る隆帯が巡らされている。胴部に斜線文が施文される。188は無文の口縁部が開く波状口縁の深鉢形土器である。刻みが入る微隆起状の隆帯を頸部に巡らす。胴部には単節LRの縄文を施文している。189は波状口縁の口縁部で、単節LRの縄文が施文されている。

190は鉢形土器である。190は3帯の横帯文が施文され、文様内に単節RLの縄文が施文される。191はソロバン玉状深鉢の胴部と思われる。

第2類（第109図194～198）

曾谷式の深鉢形土器を一括する。

194、197・198は瘤状の貼付文が施文される。196～198は高井東系の土器である。

第3類（第108図180、第109図187、192・193）

紐線文土器・粗製土器を一括する。

180は器面に格子目文が施文される。187は地文縄文上に半裁竹管で文様を施文している。192・193は紐線が施文されている。

第Ⅶ群土器

後期後葉から晩期の土器群を一括する。

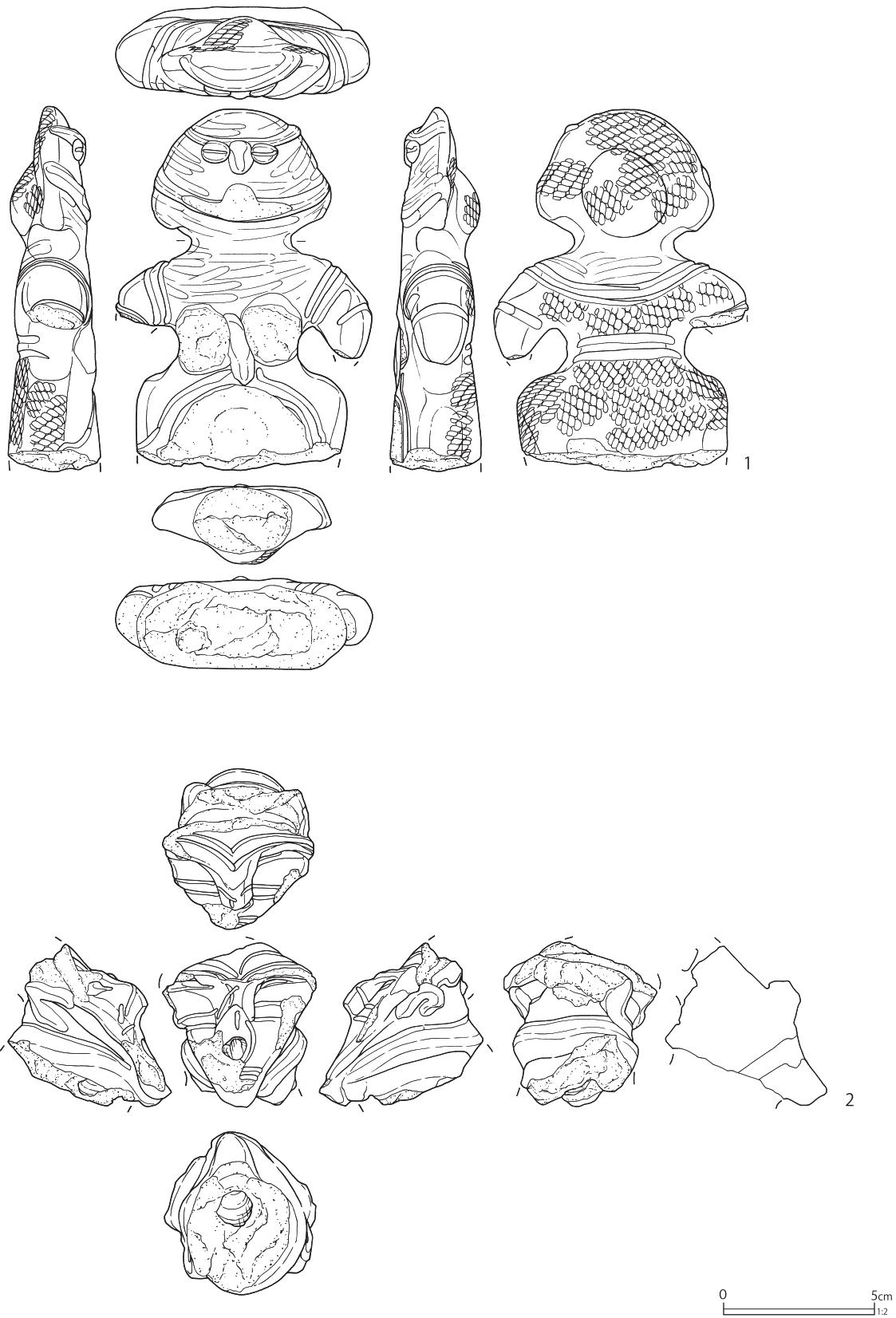
第1類（第101図23～26、第110図199～212）

後期安行式土器を一括する。

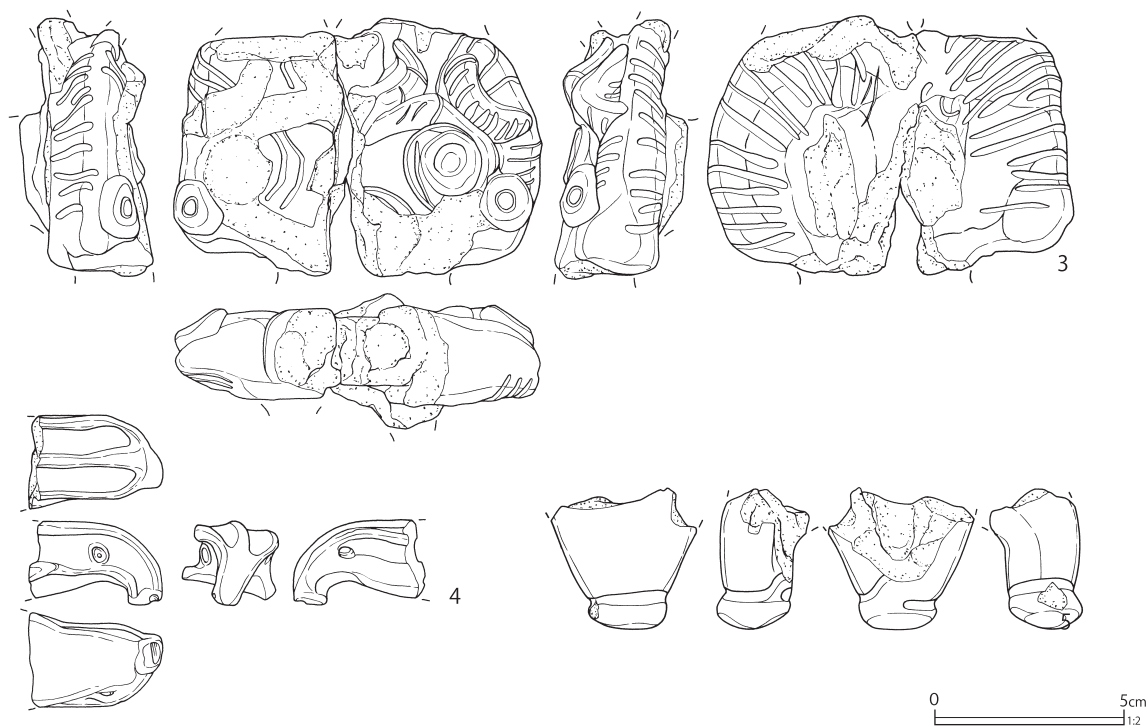
23～26は器形復元可能な土器である。

23は平縁の深鉢形土器で、口唇直下に2個対の縦瘤が貼付される。単節RLの縄文が施文される隆起状の帯縄文が施文される。推定口径27cm、残存高6.9cmである。安行1式である。

24は口縁が内傾する土器で、口縁部の縦瘤上には横刻みが施されている。単節RLの縄文が施文される隆起状の帯縄文が施文される。推定口径17cm、残存高11.3cmである。安行2式である。



第113図 グリッド出土土偶（1）



第114図 グリッド出土土偶（2）

25 は口縁が内傾する土器で、太細の撚り合わせの無節L縄文が施文される隆起状の帯縄文が施文される。推定口径 21.2 cm、残存高 13.6 cm である。安行2式である。

26 は胴部である。残存高 7.7 cm である。後期安行式と考えられる。

199 ～ 202 は大波状口縁深鉢形土器の口縁である。199 は安行1式、200 ～ 202 は安行2式である。203 ～ 209 は隆起状の帯縄文が施文される。平口縁の深鉢形土器である。210・211 は鉢形土器、212 は胴部片である。

第2類（第110図213～215）

晩期安行式土器を一括する。213～215 は口縁の突起部分である。

第3類（第101図27、第110図216～224）

紐線文土器・粗製土器を一括する。

27 は器形復元可能な深鉢形土器で、口唇部に押圧状の凹みを付けている。器面は無文である。推定口径 35 cm、残存高 12.6 cm である。

216・217 は条線文、218～224 は紐線文土器である。216・217 は沈線で区画された口縁部に

連続刻みを施す。安行2式と考えられる。218～224 は紐線が施され、いずれも内湾する。218～223 は条線が施文され、安行2から3a式と考えられる。224 は条線を施文しないもので、安行3aから3b式と考えられる。

第Ⅷ群土器（第100図12、第101図28、第111図225～234）

底部を一括する。後期前葉から晩期の底部である。28、234 は安行式期の底部である。

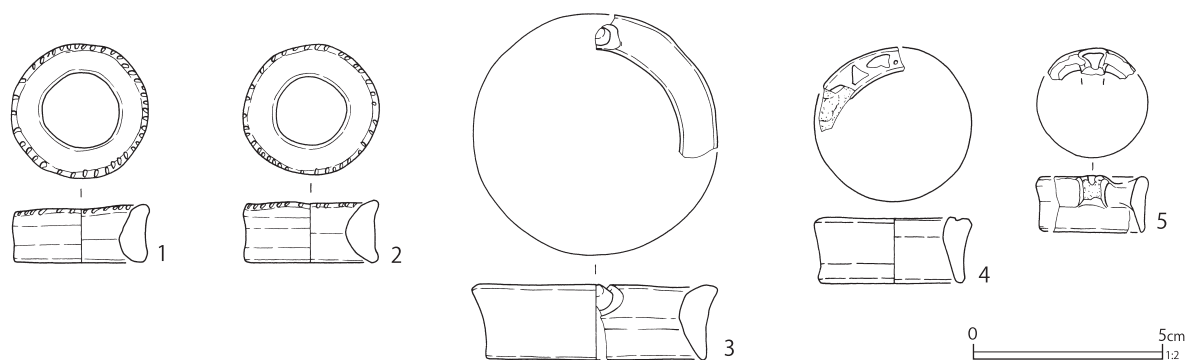
第Ⅸ群土器（第100図8・9、第102図29～43、第106図133、137・138、第112図235～256）

深鉢形土器以外の器種の土器群を一括する。

40、235 は中期のもので、40 は器台である。上部は失われている。下辺の径は 15.2 cm である。235 は中期末の鐳付き土器である。

9、32～39、236～238 は鉢形または浅鉢形土器である。堀之内1式を中心とした後期のものと考えられる。9 は鉢形土器である。口縁には突起が3単位施文され、その下に円孔が穿孔されている。推定口径 22.4 cm、残存高 8 cm である。堀之内1式である。32 は小型の鉢形土器で、推

第3次調査



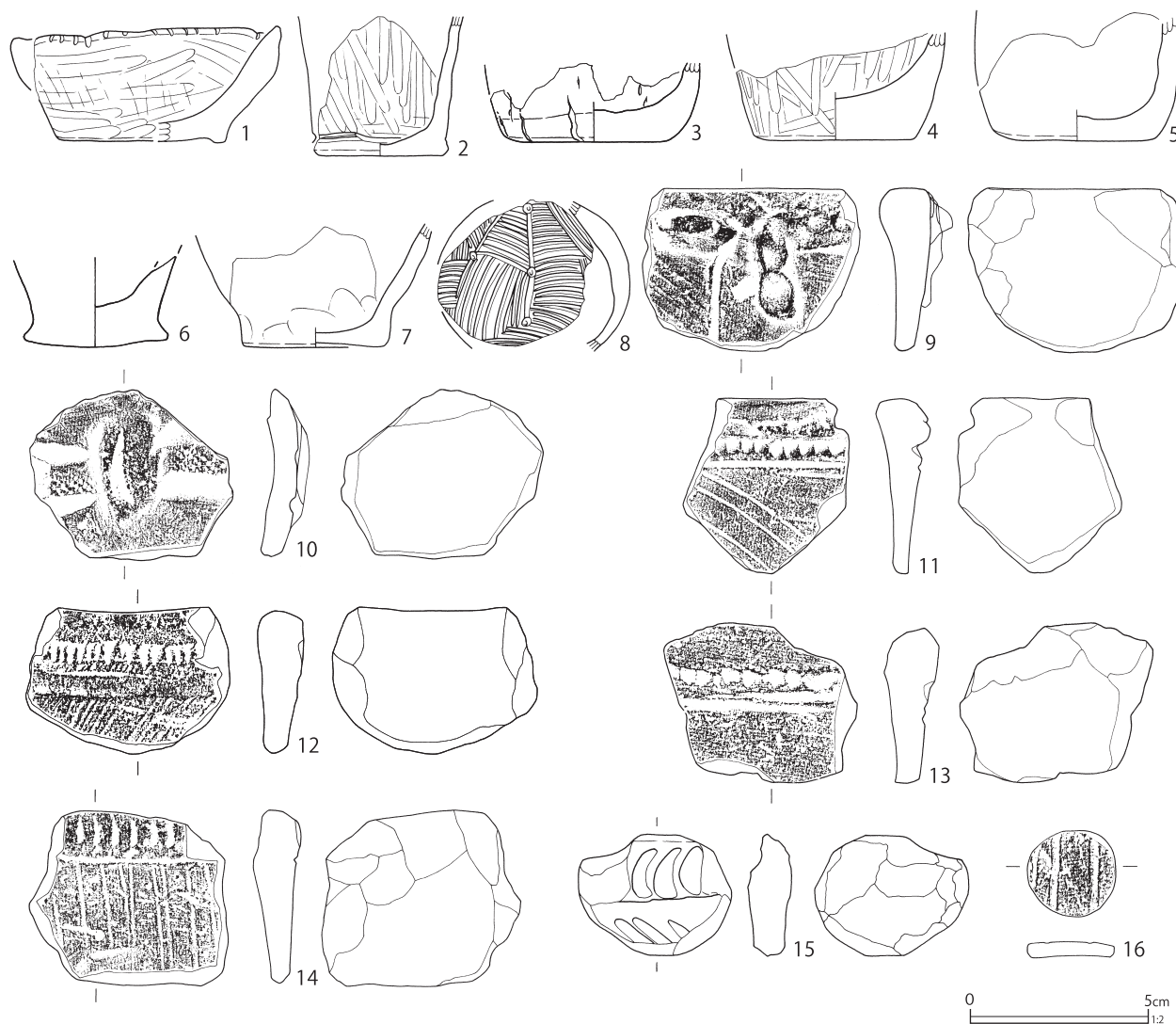
第115図 グリッド出土土製耳飾り

第11表 土偶・耳飾り・土製品観察表

挿図	番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
94	1	C-12	土製円盤	1.3	1.8	0.5	16.9 g	
	2	C-12	土製円盤	0.8	1.5	0.5	9.7 g	
	3	C-13	土製円盤	2.5	2.0	0.7	27.1 g	
部位				計測値				山形土偶 両腕欠損
113	1	C-12	頭部・胴部	高さ [12.0]	幅 8.5	厚さ 3.1		
	2	I-23	頭部	高さ [5.4]	幅 5.1	厚さ 5.4		
114	3	I-23	頭部	高さ [6.8]	幅 9.8	厚さ 3.5		ミスク土偶 遮光器系土偶
	4	L-23	左腕部	高さ 2.3	幅 3.5	厚さ 2.5		
	5	L-24	右脚部	高さ [3.7]	幅 2.4	厚さ 3.9		
器種				上径	下径	高さ	重さ	谷遺物包含層
115	1	J-24	耳飾り	3.7	3.4	1.5	14.5 g	
	2	J-24	耳飾り	3.6	3.5	1.6	14.5 g	
	3	J-21	耳飾り	(6.4)	(5.8)	2.0	9.7 g	
	4	C-13	耳飾り	(4.2)	(3.6)	1.8	3.5 g	
	5	E-16	耳飾り	(2.0)	(2.0)	1.5	2.0 g	
116	1	J-24	ミチュア土器	口径 (7.6)	底径 (4.7)	器高 3.1		谷遺物包含層
	2	谷	ミチュア土器	底径 3.7	器高 [3.9]			
	3	K-22	ミチュア土器	底径 4.4	器高 [2.2]			谷遺物包含層
	4	谷	ミチュア土器	底径 4.5	器高 [3.0]			
	5	E-16	ミチュア土器	底径 4.5	器高 [3.6]			谷遺物包含層
	6	J-21	ミチュア土器	底径 [3.8]				
	7	谷	ミチュア土器	底径 4.1	器高 [3.4]			谷遺物包含層
	8	谷	土鈴	器高 [5.5]				
				長さ	幅	厚さ	重さ	
	9	J-21	土製円盤	6.1	4.5	1.5	47.5g	
	10	J-21	土製円盤	5.5	4.7	0.7	24.9g	
	11	I-23	土製円盤	4.6	5.0	1.4	25.5g	
	12	I-23	土製円盤	5.6	4.0	1.3	38.6g	
	13	E-17	土製円盤	4.5	4.3	1.5	30.2g	
	14	J-21	土製円盤	5.5	4.7	1.2	36.1g	
	15	I-17	土製円盤	4.2	3.4	1.2	18.1g	
	16	C-12	土製円盤	2.4	2.4	0.4	3.9g	

定口径 12.2 cm、残存高 5.9 cmである。33 は鉢形土器で推定口径 12.6 cm、残存高 5.9 cmである。34 は浅鉢形土器の底部で底径 4.7 cm、残存高 4.5 cmである。35 は浅鉢形土器で、内面に文様が施文される。推定口径 12.2 cm、残存高 7 cmである。36 は浅鉢形土器で、推定口径 26.5 cm、残存高

11 cmである。37 は浅鉢形土器で推定口径 17.3 cm、推定底径 8.2 cm、残存高 7.6 cmである。38 は浅鉢形土器で、推定口径 12.6 cm、推定底径 6.8 cmである。39 は鉢形土器の底部である。推定底径 7.8 cm、残存高 5 cmである。236・237 は浅鉢形土器、238 は鉢形土器である。



第116図 グリッド出土土製品

243は釣り手土器の把手部分と考えられる。

8、29～31は壺形土器と考えられる。時期は後期と考えられる。8は胴部が球形に近い。残存高14.7 cmである。堀之内1式である。29は口縁部で、推定口径8 cm、残存高3.1 cmである。30は口縁部で、推定口径12.4 cm、残存高3.2 cmである。31は胴部である。残存高5.7 cmである。

41・42、244は台付鉢形土器の台部分である。41の推定底径12 cm、残存高3.6 cm、42の推定底径20 cm、残存高7.1 cmである。後期安行式である。

43、239～242、245～256は注口土器である。後期前葉を中心とする。

出土土偶（第113図・第114図）

第113図1・2、第114図3～5は出土した土偶である。

1は中実の山形土偶で、両腕の先端と脚部を欠損する。口唇、乳房は剥落している。目と鼻は粘土を貼付している。鼻に穴の表現はない。目は沈線を中央横方向に施文している。頸部の中央で破損していたが、接合した。顔の額と顎部分には断面三角形に粘土紐を貼付している。後頭部の中央は円形に盛り上がり、髪型を表現していると考えられる。肩と腕の境目部分には、沈線文を施文している。背面には沈線文の他、単節RLの縄文が施文されている。現存高12.0 cmである。時期

は後期加曽利B3式期と考えられる。

2は中実の土偶の頭部分である。頭部先端と首から下の体部は欠損する。眉から鼻を同じ粘土紐で表現している。鼻には1つ穴を刺突して表現している。目は細長く刻みを入れている。口は丸く開き、口から首にかけて円孔が穿孔されている。口のまわりにはほうれい線のように沈線が施文される。額や頬には入れ墨状の沈線が施文されている。現存高5.4cmである。時期は晩期である。

3は中実のミニズク土偶の顔部分である。残りは悪く、頭部の先端は欠損している。目は右目が剥落している。両耳が残る耳には、耳飾りの表現が施されている。鼻と口は欠損している。後頭部には放射状に沈線が施文され、頭髮の表現がされている。後側の頭部中央の表現は剥落している。現存高6.8cmである。時期は晩期である。

4は中実の土偶の左腕である。腕の先端面には刻みが入っている。肩には両面とも円形刺突を施している。肩の中央は細い隆帯状に盛り上げている。時期は、晩期安行3d式期と考えられる。

5は中実の遮光器系土偶の右脚部である。足首部分に沈線を1条巡らしている。現存高3.7cmである。時期は晩期である。

出土土製耳飾り（第115図）

1～5は出土した土製の耳飾りである。いずれも環状である。

1～3、5は断面形が内面中央に張り出す。1・2は完形で、正面側の端部に細かく刻みが巡るものである。2点ともに古墳時代前期の第5号方形周溝墓内から検出されたもので、対をなすものであった可能性が高い。内面にごくわずかに赤彩の痕跡が認められる。3、5は破片でごく一部のみが残されている。3は正面側の端部直下に円形貼付文が施されている。貼付文の周囲には、沈線が施文されている。5は正面側の端部から内面に隆帯を貼付し、隆帯上に文様を施文している。

4は破片で、ごく一部のみが残されている。正

面側の端部に面を有するもので、端部面に印刻状の文様が施文される。

出土土製品

ミニチュア土器（第116図1～7）

1～7はミニチュア土器である。1は浅鉢形土器、2～6は深鉢形土器、7は鉢形土器のミニチュアと考えられる。1以外は無文である。1、3、7は手づくね状に作られ、器面には凹凸が残る。1の口縁端部には、刻みが入れている。2、4、6は器面が丁寧に調整されている。特に2は丁寧にミガキ状に調整が施されている。

土鈴（第116図8）

8は土鈴と考えられる。器肉は薄く、器面には細密な沈線で文様が密に施文されている。沈線文上には、部分的に円形刺突文が施文されている。文様から、後期前葉堀之内式期と考えられる。

土製円盤（第116図9～16）

9～16は土製円盤である。深鉢形土器の破片を使用している。

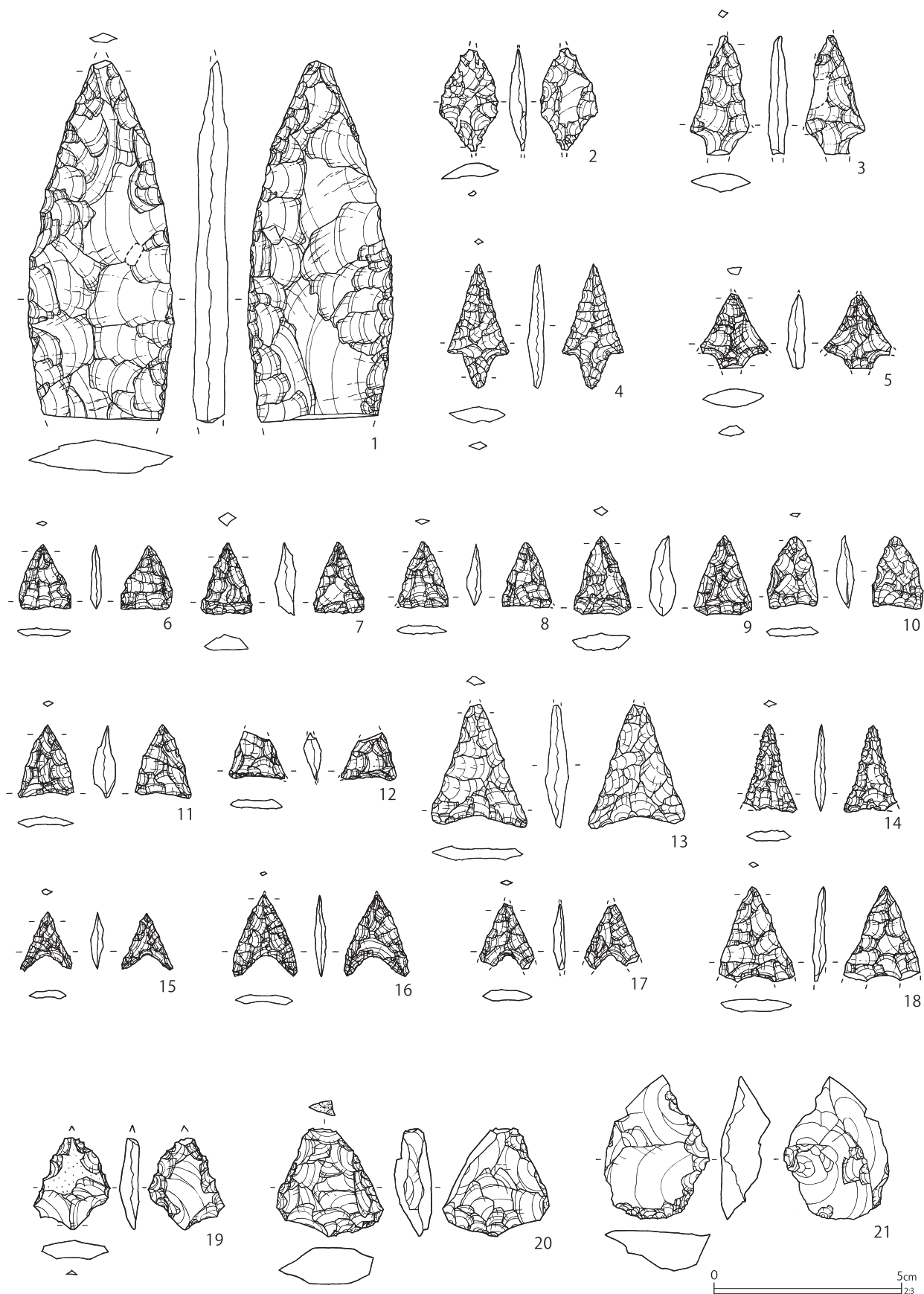
9～15は安行式期の土器の口縁破片を利用しているものである。周縁を打ち欠いて加工している。形状は、15以外は円形ではなく、方形や楕円形である。10は安行1式の深鉢形土器片を使用している。表面側には、貼付文が残されている。帯縄文が施文され、単節RLの縄文が施文されている。9、11～14は紐線文土器片を使用している。12、14は紐線が施文されないもので、安行1式である。9、11、13、15は紐線が施文されるもので、安行2から3a式と考えられる。

16は深鉢形土器の胴部片を、丁寧に円形に加工している。器面には平行する沈線文が認められる。後期前葉堀之内式期と考えられる。

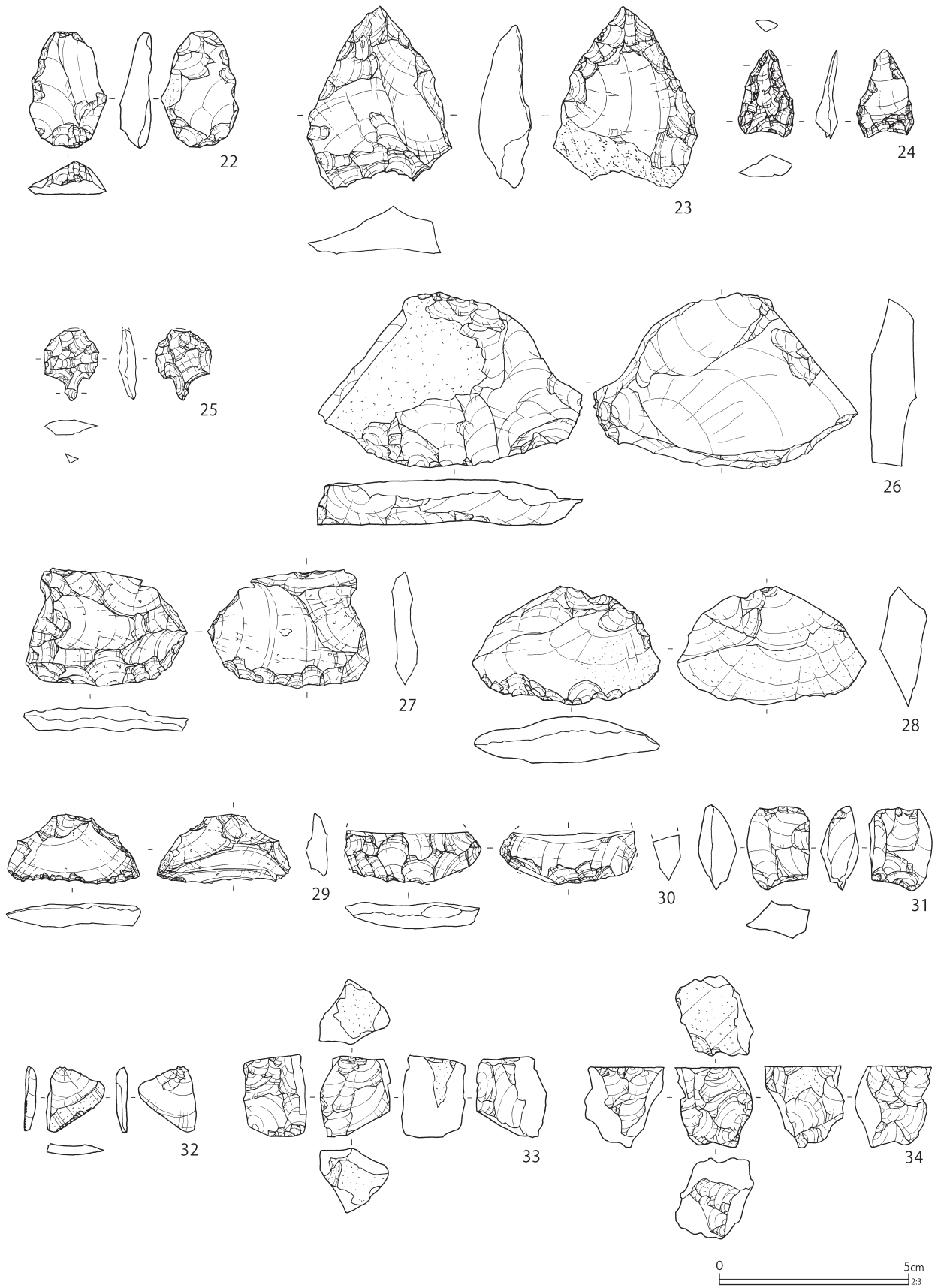
出土石器（第117～125図）

尖頭器（第117図1）

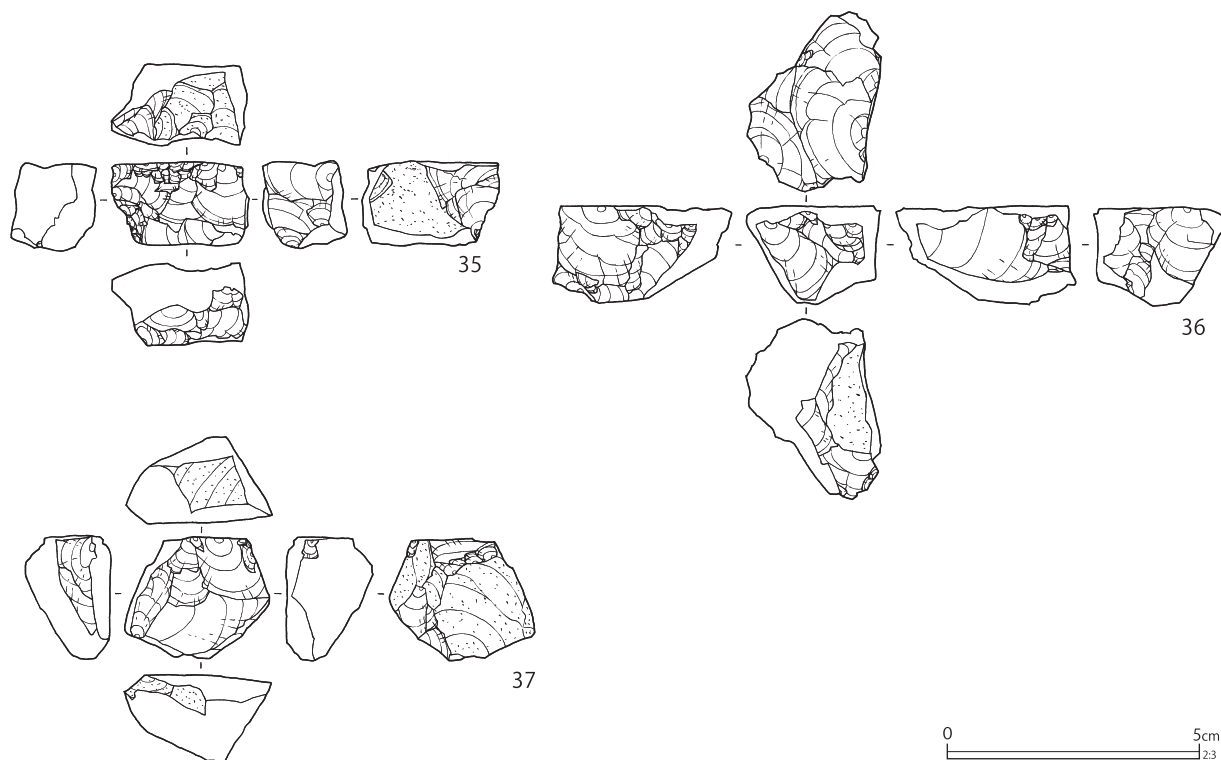
第117図1は柳葉状の尖頭器である。薄手で丁寧に作られている。先端はわずかに欠損している。基部は欠損している。側縁から丁寧に剥離調



第117図 グリッド出土石器（1）



第118図 グリッド出土石器(2)



第119図 グリッド出土石器（3）

整が加えられている。

石鏃（第117図2～21、第118図22～24）

2～24は出土した石鏃である。

2～5は有茎石鏃である。2は平面形が菱形状で、基部に抉りは入っていない。基部先端と上端部が欠損している。3～5は有茎部分の両側の基部に抉りが入っている。3、5は先端、基部、脚部の先端が欠損している。4は完形で、基部は幅広で先端は丸みを帯びている。側縁は直線的に作り出されている。5は側縁の中央がやや内湾している。

6～18は無茎石鏃である。6～8は基部に抉りが入らない平基の石鏃である。6は正三角形に近い形状である。7・8は二等辺三角形の形状である。9～12は基部にごくわずかに抉りが入る石鏃である。10・11の側縁はわずかに外湾している。12は先端が欠損している。13・14は浅い逆V字状に基部に抉りが施されている。14は側縁がやや内湾している。丁寧な作りで、側縁は鋸

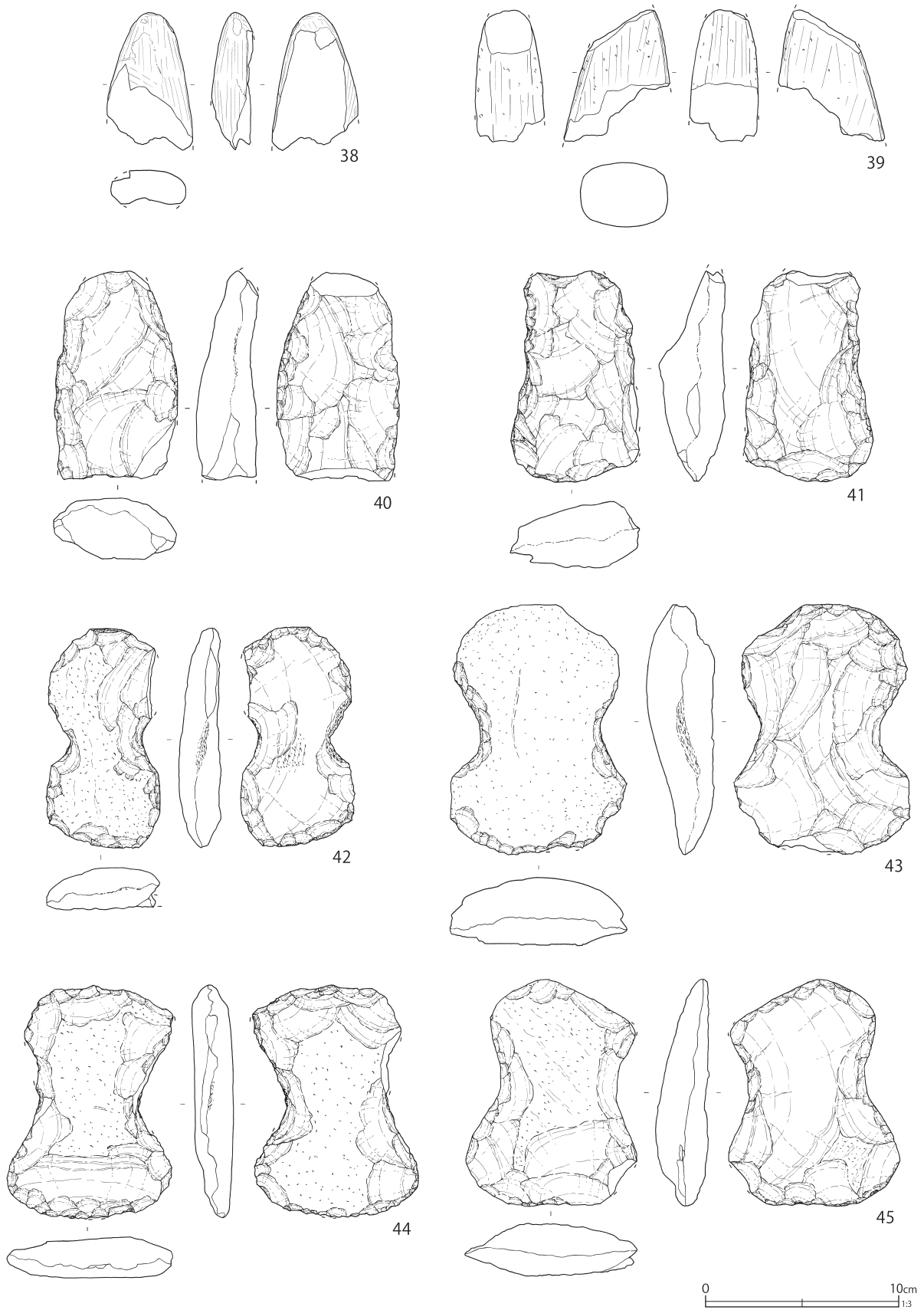
歯状に作り出されている。15～17は基部の抉りが逆U字状に深く入るものである。15・16は完形で、17は先端と脚部先端が欠損している。16は側縁が外湾している。18は脚部が欠損しているため、抉りの形状は不明である。19～24は未製品と考えられる。19～22は基部に抉りがまだ入っていない。21・22の基部は丸みを帯びている。21は基部表側に剥離調整がみとめられる。23・24は基部に浅い抉りが入れている。23は裏面の基部に原礫面が残されている。24は裏面に大きく1次剥離面が残存している。

石錐（第118図25）

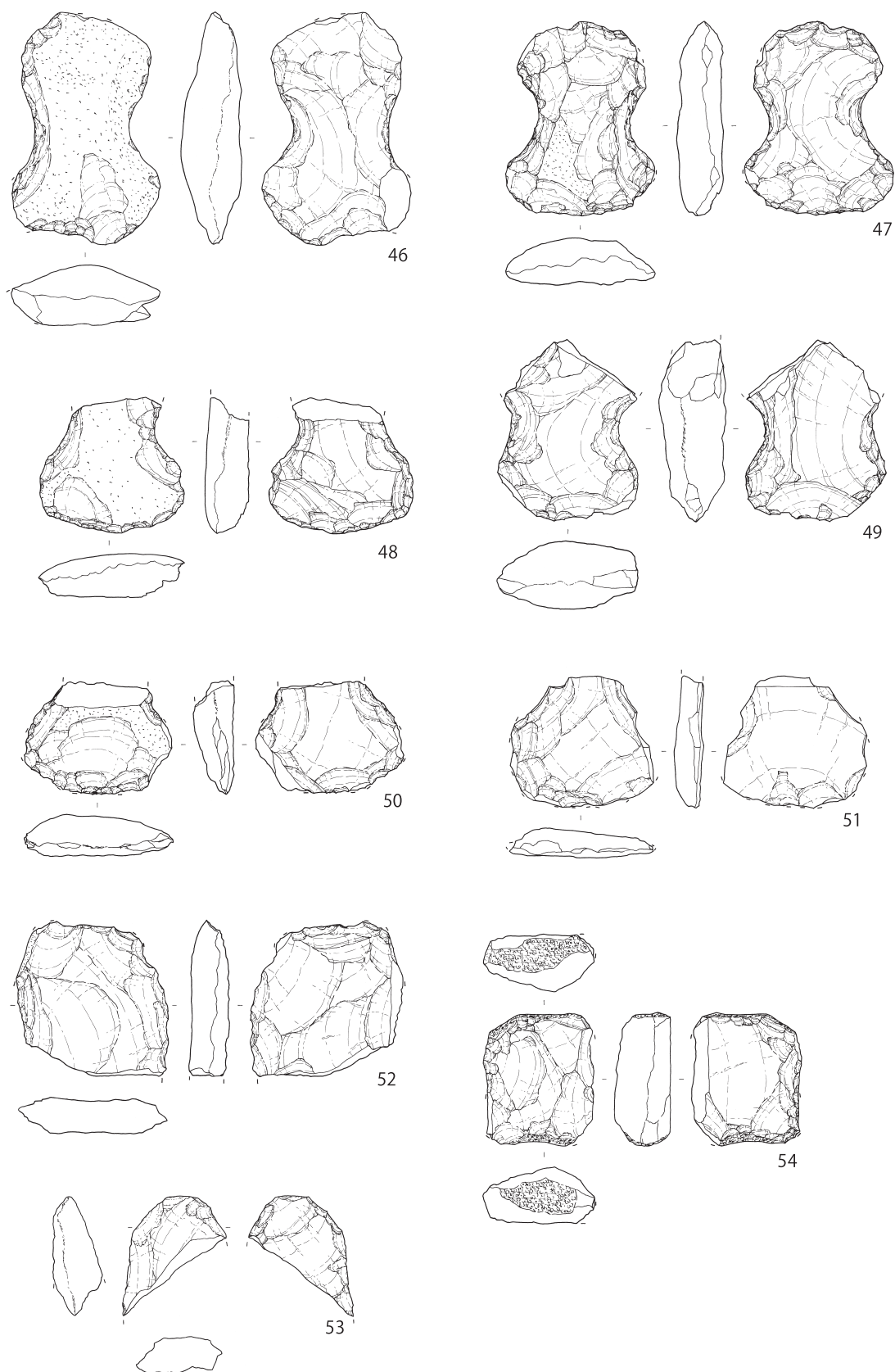
25は石錐である。つまみ部を有するもので、つまみ部は扁平に作られている。先端は、断面三角形形状に作り出されている。錐部の付け根には抉りが入れている。

スクレイパー（第118図26～30）

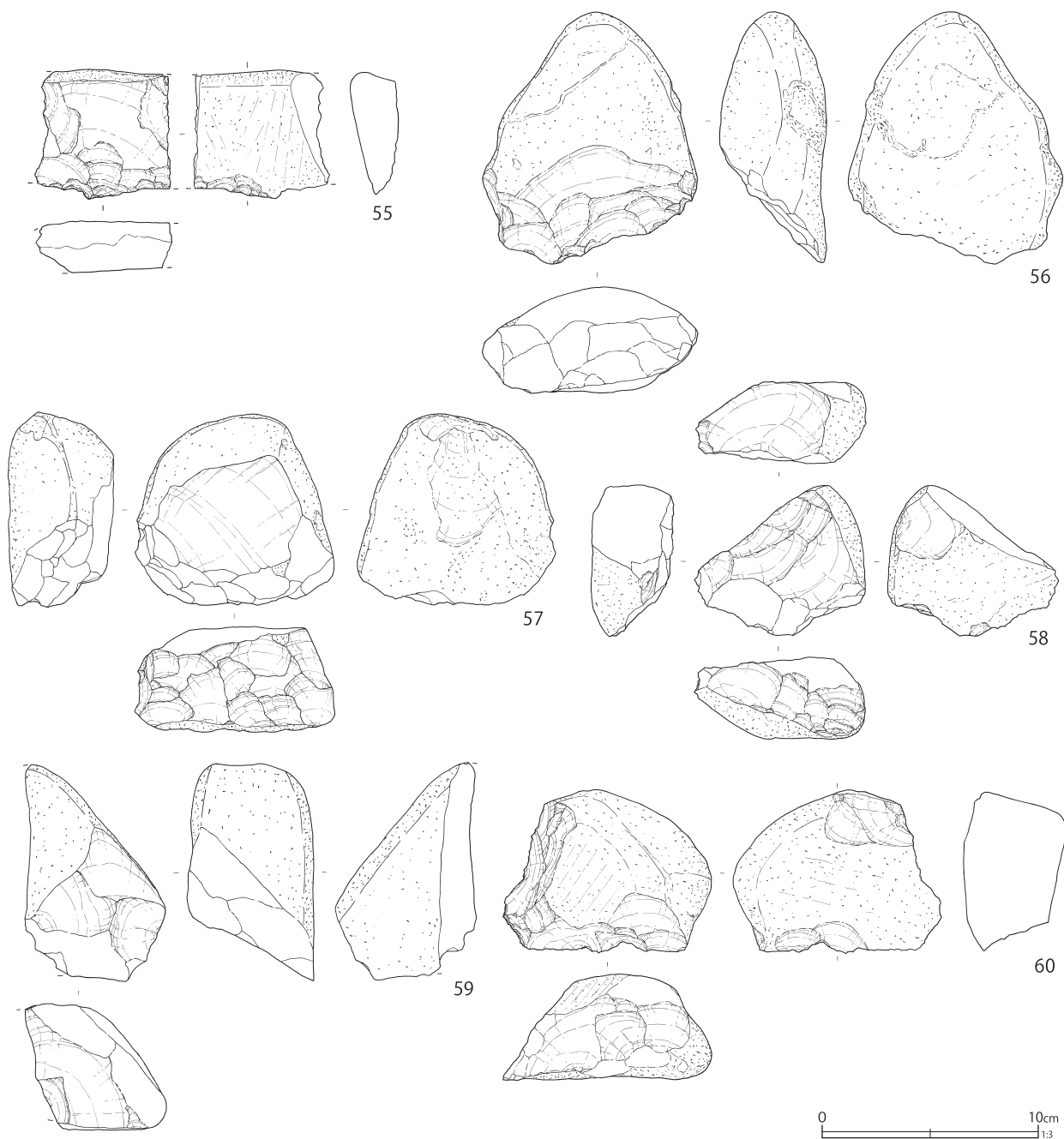
26～30は横長のスクレイパーである。横長や縦長の剥片を利用して加工されている。



第120図 グリッド出土石器(4)



第121図 グリッド出土石器(5)



第122図 グリッド出土石器(6)

26は刃部に面が残存しているもので、未製品であった可能性がある。表面に原礫面が残されている。27は裏面に大きく1次剥離面が残されている。28は裏面に大きく風化面が残されている。刃部の調整剥離は、表面側のみで、裏面には認められない。29は基部がつまみ状に作り出されている。刃部は細かい調整剥離が認められる。30

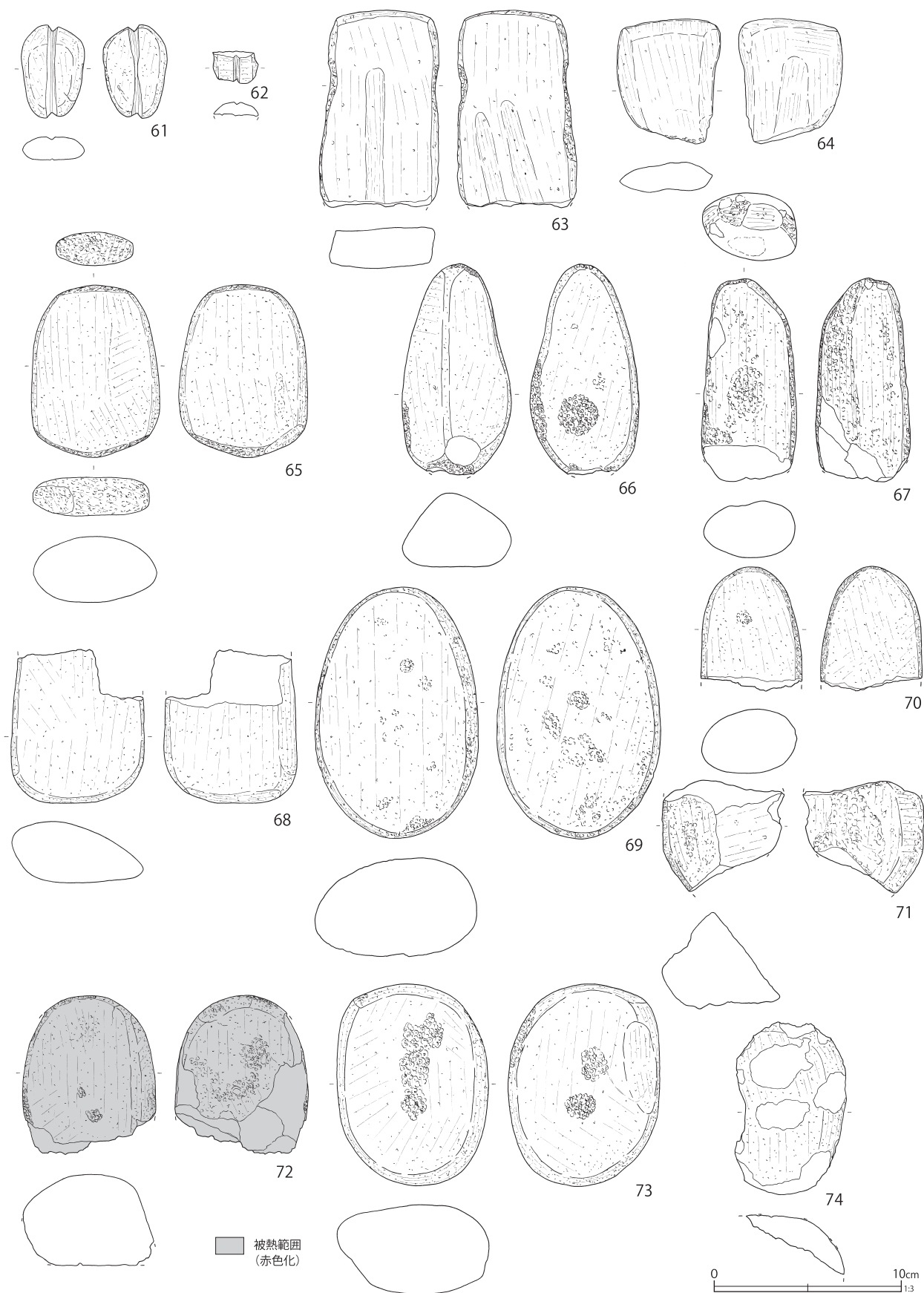
は刃部のみが、残存している。

楔形石器(第118図31)

31は楔形石器である。上端部側と下端部側から調整剥離が施されている。両端部には使用による微細な剥離が認められる。

使用痕のある剥片(第118図32)

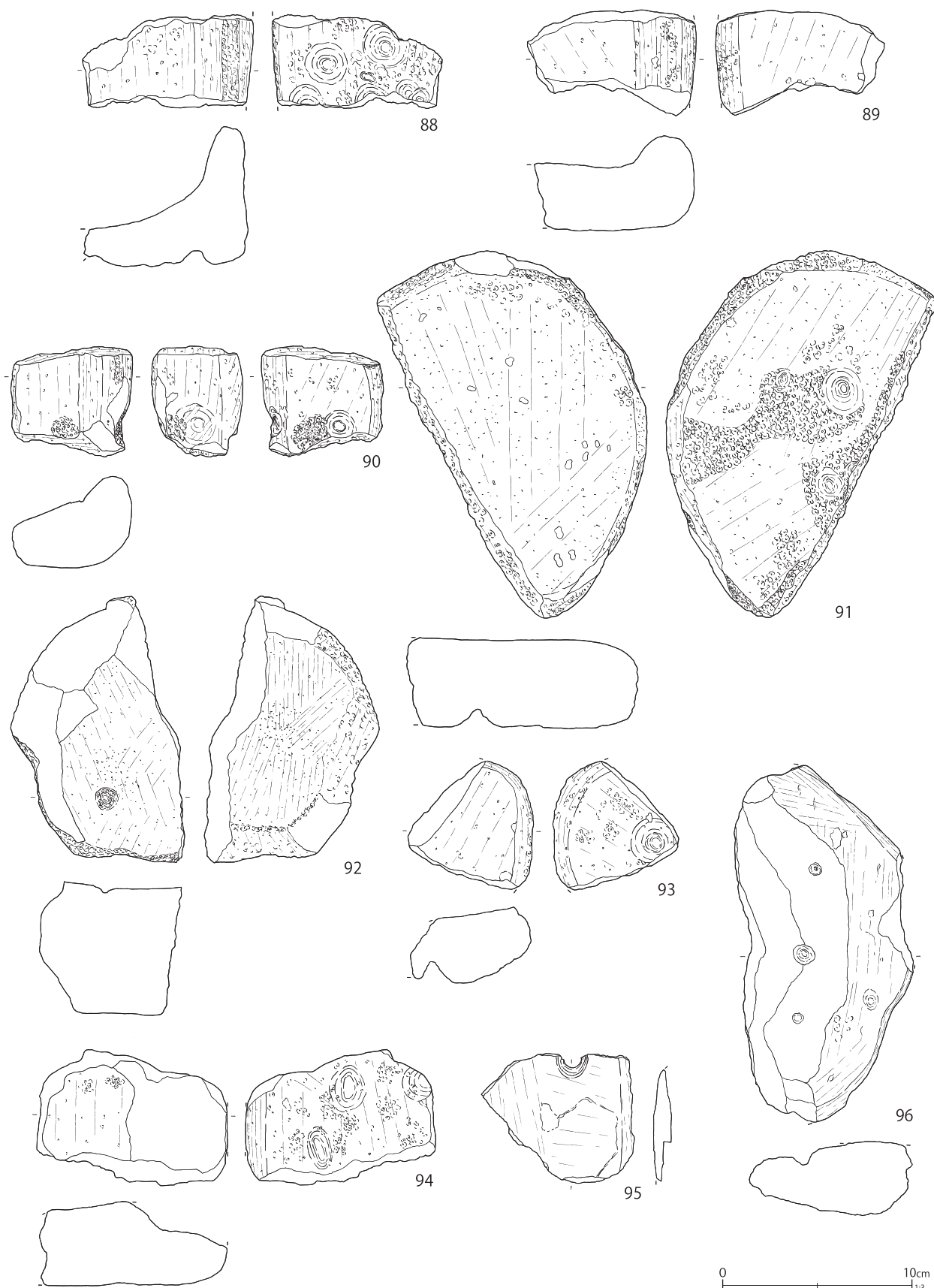
32は鋭い縁辺に微細な刃こぼれ状の使用痕が



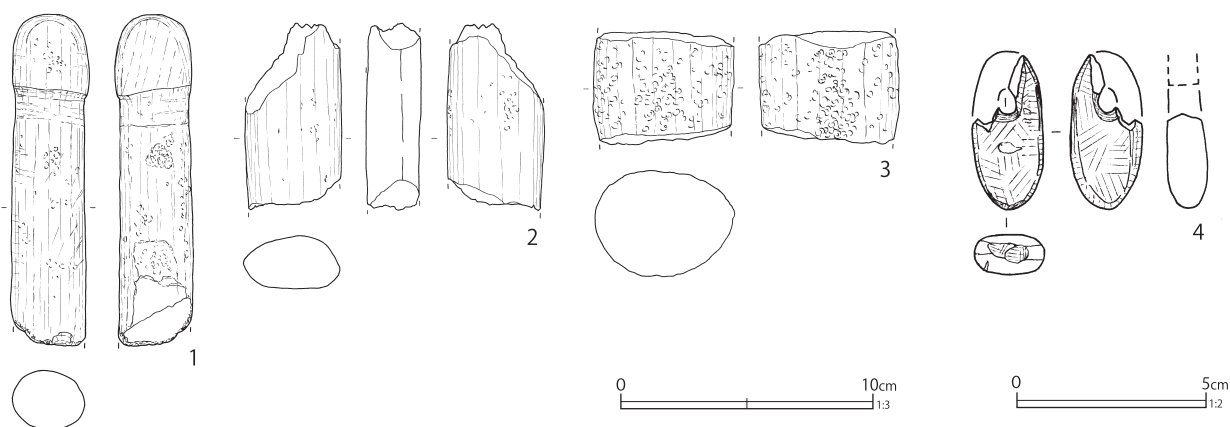
第123図 グリッド出土石器(7)



第124図 グリッド出土石器(8)



第125図 グリッド出土石器(9)



第126図 グリッド出土石製品

認められる剥片である。表面に、風化面が残されている。

石核（第118図33・34、第119図35～37）

33～37は石核である。全てチャート製である。33～35はサイコロ状のもので、それぞれ器面の一部に原礫面が残されている。36は部分的に原礫面が残されている。37は正面以外に風化面が大きく残っている。

磨製石斧（第120図38・39）

38・39は磨製石斧である。ともに基部の一部が残存している。残された断面形状から38は乳棒状、39は底角式の形状と推定される。

打製石斧（第120図40～45、第121図46～53）

40～53は出土した打製石斧である。扁平な素材や、剥離された素材を使用している。いずれも風化している。

40は側縁が平行に近い、短冊形の打製石斧である。基部と刃部を欠損している。右側縁が外湾している。

41は刃部に最大幅がある撥形の打製石斧である。基部先端を欠損する。風化が著しい。

42～49は側縁中央が大きく抉られ、基部と刃部の幅があまり変わらない分銅形の打製石斧である。側縁の抉り部分は擦れて、丸みを帯びているものが多い。42は裏面の中央にも擦痕が認められた。43～46は表面に大きく原礫面が残されて

いる。43は表面側の調整はごく最小限である。

44・45は表裏面に原礫面が残されているもので、扁平な素材を使用していると考えられる。48・49は基部の一部を欠損している。

50・51は刃部のみが残存している。側縁の形状から、分銅形と推定される。

52・53は基部のみが残存する。52は左側縁も欠損しており、全体の形状は不明である。53は開く側縁の形状から、撥形と推定される。

スクレイパー（第122図55）

55はスクレイパーである。基部から裏面には素材の原礫面が大きく残されている。横長で、剥片の鋭い縁辺を刃部として利用している。

礫器（第122図56～60）

56～60は礫器である。厚手の礫の縁辺を打ち割って加工されている。そのため、原礫面が表裏面に大きく残るものが多い。打ち割られた縁辺は鋭くなく、鈍角である。

石錘（第123図61・62）

第123図61・62は石錘である。土錘・石錘ともに出土量はごく少ない。小型の素材を利用している。ともに中央に溝を抉っている。62は表面が剥落したものである。

砥石（第123図63・64）

63・64は砥石である。平面形状は方形に作り出されている。63は側縁に面をもつもので、敲

打痕が認められる。表面に1条、裏面に2条の浅い溝状の凹みが認められる。64は側縁が鋭角のもので、裏面中央にごく浅い溝状の凹みが認められる。64は下半部が欠損するが、欠損面にも使用痕が認められ、欠損後も砥石として使用していたと考えられる。

敲石（第121図54）

54は打製石斧の破片を利用して、上下端部を使用面としている敲石と考えられる。

磨石類（第123図65～74、第124図75～87）

65～87は磨石類である。同じ石器に、磨り面、敲打、凹部が加えられているため、ここではそれらを磨石類として大きく分類し、それぞれの使用痕でさらに小分類を行った。

65は上下両端面に敲打痕が認められる。表裏面や側縁は磨石として使用されている。

66・67は棒状のもので、縁辺や表裏面に敲打痕が認められる。66は下端部に敲打痕が残り、敲打のため先端が欠損している。67は下端部を欠損している。66は裏面に、67は表面に敲打による円形の凹部が1箇所残されている。

68、74は磨り面のみが残されている。74は表面のごく一部が剥落したものである。

69～73は使用された磨り面の他、縁辺部や表裏面に敲打痕が認められる。72・73の表裏面には複数の敲打による凹部が残されている。72は被熱のため破砕したもので、全面が被熱のため赤色化している。

75～85、87は側縁が敲打により面取り状に加工されている。75～77は平面形が円形に近いものである。75は裏面に1箇所、76・77は表裏面に1箇所ずつ敲打による凹部が認められる。78～83は楕円形に近い形状である。78は裏面に敲打による凹部が認められる。79～83は両面に敲

打による凹部が認められる。84～87は器面に残された凹部が漏斗状に作り出されるものである。

86は形状が不定形のもので、側縁は面取り状に加工されていない。全体に敲打痕が認められる。表裏面の他、側縁にも敲打による凹部が作り出されている。

石皿（第125図88～96）

88～96は石皿である。完形のものではなく、小破片のことが多い。破損後に、破損面を使用しているものもある。

88～90は、加工して縁辺が作り出されるものである。88は縁辺が高く作り出されている。器面中央部は、使用のため薄くなっている。裏面には漏斗状の凹部が複数認められる。90は全ての破損面を摩面として再利用している。

91～93、96は縁辺が作り出されないものである。素材をそのまま使用している。91は破損面に敲打が加えられている。92は破損面の一部に敲打が加えられている。93は裏面に漏斗状の凹部が認められる。96は表面の剥落が著しい。

94・95は全体の形状が不明のものである。94は裏面に複数の漏斗状の凹部が認められる。95は剥落した表面の一部で、漏斗状の凹部が一箇所認められる。

石製品（第126図1～4）

1～3は小型の石棒・石剣類である。1は石棒の上半部が残存するもので、頭部下には袂りを入れて段差を作り出している。頭部に文様は施されていない。2は断面形から石剣と考えられる。体部のごく一部が残されている。3は石棒で、体部のごく一部が残されている。両面の中央に敲打が残されている。

4は垂飾である。両面から穿孔が施されている。

第3次調査

第12表 石器：石製品観察表

挿図	番号	出土位置	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
33	112	SJ31	磨製石斧	ヒスイ輝石岩	8.4	4.2	2.0	134.9	
	113	SJ31	石錘	結晶片岩	11.9	6.3	1.8	201.3	
	114	SJ31	石棒	緑泥片岩	[18.9]	3.3	[2.9]	323.6	
	115	SJ31	石核	チャート	3.2	3.9	1.8	24.0	
36	3	3号埋甕	石皿	安山岩	[12.8]	[7.5]	[4.3]	343.1	
62	15	SK673	石皿	安山岩	[8.0]	[10.1]	[6.5]	406.2	
69	1	D-3P4	打製石斧	ホルンフェルス	10.0	7.0	2.1	169.8	
76	1	F-18	尖頭器	ガラス質黒色凝灰岩	[4.6]	1.6	0.6	3.4	水場遺構
	2	F-18	石鏃	チャート	3.0	2.2	0.4	2.0	水場遺構
	3	F-18	石鏃	ガラス安山岩	[2.8]	2.8	0.9	5.8	水場遺構
	4	F-18	磨製石斧	安山岩	[14.9]	[9.3]	[3.8]	659.3	水場遺構
	5	F-18	打製石斧	ホルンフェルス	[8.3]	8.2	1.6	147.0	水場遺構
	6	F-18	礫器	ホルンフェルス	10.2	9.5	6.0	667.1	水場遺構
	7	F-18	磨石類	砂岩	11.6	7.5	5.2	678.5	水場遺構
77	8	F-18	磨石類	安山岩	8.6	6.0	3.5	263.0	水場遺構
	9	F-18	磨石類	安山岩	10.1	9.6	6.4	929.9	水場遺構
	10	F-18	磨石類	安山岩	9.4	8.8	4.8	439.2	水場遺構
	11	F-18	石皿	安山岩	[9.5]	[7.1]	6.9	429.8	水場遺構
	12	F-18	石皿	閃緑岩	[6.9]	[6.9]	5.2	231.0	水場遺構
	13	F-18	石皿	安山岩	[9.9]	[5.9]	[5.8]	320.3	水場遺構
	14	F-18	砥石	砂岩	6.0	4.4	1.2	41.5	水場遺構
	15	F-18	石棒	緑泥片岩	[15.4]	2.6	2.1	169.0	水場遺構
95	1	F-17	尖頭器	ホルンフェルス	9.1	2.7	[1.6]	33.9	谷遺物包含層
	2	C-13	石鏃	黒曜石	2.1	1.5	0.7	1.5	谷遺物包含層
	3	D-14	石鏃	チャート	[2.0]	2.9	0.8	3.6	谷遺物包含層
	4	谷	石鏃	頁岩	4.4	3.3	1.3	19.9	谷遺物包含層 未製品
	5	表採	石錐	黒曜石	[3.5]	1.3	0.7	2.2	谷遺物包含層
	6	C-13	スクレイパー	チャート	3.4	6.1	1.0	16.1	谷遺物包含層
96	7	C-12	磨製石斧	閃緑岩	11.3	5.3	2.5	222.3	谷遺物包含層
	8	E-16	磨製石斧	緑色岩	7.7	4.2	2.5	131.3	谷遺物包含層
	9	C-13	打製石斧	ホルンフェルス	8.8	[7.3]	2.0	151.5	谷遺物包含層
	10	D-15	打製石斧	ホルンフェルス	[10.6]	[6.7]	2.3	204.1	谷遺物包含層
	11	E-16	打製石斧	ホルンフェルス	[9.8]	[5.1]	2.1	109.1	谷遺物包含層
	12	D-15	打製石斧	ホルンフェルス	[6.0]	5.6	1.8	70.6	谷遺物包含層
	13	C-13	磨石類	砂岩	[5.6]	10.7	3.8	303.5	谷遺物包含層
	14	D-14	磨石類	安山岩	[8.2]	[3.3]	[2.6]	90.0	谷遺物包含層
	15	E-16	磨石類	閃緑岩	11.1	7.0	6.1	752.1	谷遺物包含層
	16	F-17	磨石類	閃緑岩	[10.0]	[6.5]	[5.3]	479.5	谷遺物包含層
	17	E-16	磨石類	閃緑片岩	6.9	6.0	5.1	289.6	谷遺物包含層
97	18	D-15	磨石類	閃緑岩	7.9	6.7	4.6	332.7	谷遺物包含層
	19	D-16	磨石類	安山岩	[6.2]	5.7	5.3	210.6	谷遺物包含層
	20	C-13	磨石類	安山岩	7.2	5.2	4.7	168.1	谷遺物包含層
	21	F-17	磨石類	安山岩	[7.6]	7.0	[2.9]	214.4	谷遺物包含層
	22	D-15	磨石類	安山岩	[5.2]	[6.4]	3.3	159.0	谷遺物包含層
	23	E-16	磨石類	閃緑片岩	8.7	6.7	4.1	397.8	谷遺物包含層
	24	D-12	磨石類	安山岩	[9.8]	7.0	3.6	258.4	谷遺物包含層
	25	C-12	磨石類	安山岩	[8.4]	[6.2]	[4.0]	293.7	谷遺物包含層
	26	C-12	磨石類	安山岩	[7.2]	[8.3]	5.4	460.0	谷遺物包含層
	27	D-15	磨石類	安山岩	[7.9]	6.4	4.2	260.0	谷遺物包含層
98	28	F-17	石皿	安山岩	8.3	7.5	6.0	283.7	谷遺物包含層 欠損後再利用
	29	D-15	石皿	安山岩	[9.8]	[8.2]	8.2	793.7	谷遺物包含層
	30	F-17	石皿	多孔質安山岩	[10.0]	[12.1]	6.0	594.5	谷遺物包含層
	31	C-12	石皿	安山岩	[8.2]	[8.9]	[4.8]	191.3	谷遺物包含層
	32	D-15	石皿	安山岩	[8.7]	[10.7]	6.2	463.9	谷遺物包含層
	33	E-17	石皿	安山岩	[6.5]	[8.6]	3.7	207.4	谷遺物包含層

挿図	番号	出土位置	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
98	34	C-12	石皿	緑泥片岩	[9.0]	[5.9]	2.1	154.4	谷遺物包含層
	35	D-15	石皿	安山岩	[7.4]	[7.4]	5.8	242.4	谷遺物包含層
	36	E-17	石皿	緑泥片岩	[22.2]	[6.8]	[2.0]	368.3	谷遺物包含層
99	1	D-15	石棒	緑泥片岩	[7.8]	4.6	2.2	104.3	谷遺物包含層
	2	F-17	石剣	砂岩	[8.7]	[5.2]	2.5	159.5	谷遺物包含層
	3	D-14	石剣	結晶片岩	[4.4]	[4.1]	[2.7]	70.5	谷遺物包含層
	4	C-13	石棒	雲母片岩	[12.2]	4.8	[3.5]	274.8	谷遺物包含層
	5	E-16	石剣	緑泥片岩	[6.0]	[3.2]	[2.0]	49.1	谷遺物包含層
	6	E-16	石剣	緑泥片岩	[8.4]	[2.9]	1.9	69.5	谷遺物包含層
	7	C-13	垂飾	軽石	5.5	[4.6]	1.7	9.8	谷遺物包含層
	8	谷	垂飾	玉ずい	3.2	2.0	1.0	9.5	谷遺物包含層
117	1	H-22	尖頭器	頁岩	[9.6]	3.9	1.0	38.5	
	2	F-18	石鏃	チャート	[2.7]	1.5	0.4	1.5	
	3	表採	石鏃	黒色安山岩	[3.1]	1.6	0.5	1.9	
	4	L-23	石鏃	チャート	3.3	1.6	0.5	1.3	
	5	K-25	石鏃	チャート	[2.0]	[1.8]	0.5	1.2	
	6	K-23	石鏃	チャート	1.7	1.4	0.3	0.6	
	7	L-24	石鏃	チャート	1.9	1.4	0.6	1.0	
	8	K-23	石鏃	チャート	1.7	[1.4]	0.4	0.7	
	9	K-23	石鏃	チャート	2.1	1.5	0.7	1.7	
	10	J-14	石鏃	黒曜石	1.9	1.3	0.5	0.9	
	11	K-24	石鏃	チャート	1.9	1.5	0.7	1.1	
	12	I-23	石鏃	ガラス質黒色安山岩	[1.2]	[1.5]	0.5	0.6	
	13	J-14	石鏃	玉髄	[3.3]	2.6	0.6	3.3	
	14	D-14	石鏃	玉髄	2.3	[1.4]	0.3	0.5	
	15	L-22	石鏃	チャート	1.5	1.3	0.3	0.4	
	16	I-23	石鏃	チャート	2.2	1.7	0.3	0.6	
	17	K-21	石鏃	チャート	[1.7]	[1.4]	0.3	0.6	
	18	J-21	石鏃	頁岩	[2.5]	[2.0]	0.3	1.4	
	19	L-24	石鏃	チャート	2.4	2.0	0.5	2.1	未製品
	20	I-23	石鏃	チャート	2.9	2.9	1.0	7.0	未製品
	21	表採	石鏃	チャート	3.8	2.8	1.3	8.6	未製品
118	22	K-24	石鏃	チャート	3.0	2.0	0.9	4.8	未製品
	23	K-23	石鏃	チャート	4.8	3.8	1.4	17.2	未製品
	24	J-21	石鏃	チャート	2.3	1.6	0.6	1.4	未製品
	25	J-14	石錐	チャート	[1.8]	1.5	0.5	0.9	
	26	J-21	スクレイパー	チャート	4.6	6.9	1.2	44.3	
	27	K-23	スクレイパー	ガラス質黒色安山岩	3.2	4.4	0.7	9.7	
	28	J-21	スクレイパー	頁岩	3.1	5.0	1.2	15.3	
	29	L-24	スクレイパー	ガラス質黒色安山岩	1.8	3.5	0.6	3.9	
	30	F-18	スクレイパー	チャート	[1.4]	3.6	0.7	4.3	
	31	L-23	楔形石器	チャート	2.2	1.6	1.0	3.4	
	32	F-16	使用痕のある剥片	黒曜石	1.7	1.5	0.3	0.7	
	33	J-21	石核	チャート	2.1	1.7	1.7	8.0	
	34	K-25	石核	チャート	2.1	2.0	2.1	10.2	
	35	K-25	石核	チャート	1.7	2.7	1.6	10.4	
	36	K-27	石核	チャート	2.0	2.7	3.6	16.4	
	37	K-25	石核	チャート	2.4	2.9	1.7	11.0	
	38	K-22	磨製石斧	緑色岩	[7.0]	[4.4]	[2.1]	63.4	
120	39	H-21	磨製石斧	砂岩	[6.7]	[5.4]	[3.5]	137.1	
	40	E-16	打製石斧	ホルンフェルス	[10.7]	6.3	3.1	258.6	
	41	G-18	打製石斧	ホルンフェルス	[10.8]	6.6	3.4	243.5	
	42	J-20	打製石斧	ホルンフェルス	11.2	[5.8]	2.1	167.0	
	43	K-12	打製石斧	ホルンフェルス	12.8	9.0	3.5	441.0	
	44	L-24	打製石斧	砂岩	11.9	8.5	2.1	266.6	
	45	D-15	打製石斧	ホルンフェルス	11.6	8.8	2.7	290.3	

第3次調査

挿図	番号	出土位置	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
121	46	G-21	打製石斧	ホルンフェルス	11.1	[7.1]	2.9	228.2	打製石斧を再利用
	47	M-19	打製石斧	ホルンフェルス	9.3	7.2	2.3	168.7	
	48	L-24	打製石斧	ホルンフェルス	[6.5]	[6.9]	2.1	111.7	
	49	J-24	打製石斧	ホルンフェルス	[8.7]	[6.7]	3.2	210.7	
	50	L-24	打製石斧	黒色安山岩	[5.4]	[7.1]	2.0	85.8	
	51	K-22	打製石斧	ホルンフェルス	[6.3]	[6.9]	1.4	70.2	
	52	J-21	打製石斧	ホルンフェルス	[7.4]	[7.3]	1.9	146.4	
	53	L-24	打製石斧	ホルンフェルス	[5.7]	[5.1]	[2.4]	42.0	
122	54	J-21	敲石	頁岩	6.4	5.3	2.7	132.9	打製石斧を再利用
	55	D-14	スクレイパー	砂岩	[6.3]	[5.9]	[2.4]	116.2	
	56	L-25	礫器	ホルンフェルス	11.5	9.9	4.9	552.1	
	57	H-23	礫器	ホルンフェルス	8.8	9.2	4.8	518.6	
	58	表採	礫器	ホルンフェルス	6.9	7.8	3.7	217.9	
	59	I-23	礫器	ホルンフェルス	10.0	[6.5]	5.8	354.6	
	60	K-24	礫器	ホルンフェルス	7.4	9.6	4.8	435.0	
123	61	J-21	石錘	砂岩	4.9	3.3	1.6	40.0	被熱のため赤化
	62	J-21	石錘	閃緑岩	[1.7]	2.3	[0.8]	3.3	
	63	G-21	砥石	砂岩	[10.5]	6.4	2.3	192.1	
	64	E-16	砥石	砂岩	[6.6]	5.5	1.7	55.8	
	65	J-21	磨石類	砂岩	9.1	6.8	3.6	344.5	
	66	L-23	磨石類	安山岩	[11.1]	5.8	4.2	329.2	
	67	L-25	磨石類	砂岩	[10.8]	5.0	3.6	241.7	
	68	L-22	磨石類	閃緑岩	[8.1]	7.1	3.6	255.4	
124	69	L-24	磨石類	安山岩	13.3	8.7	5.4	774.8	被熱のため赤化
	70	J-22	磨石類	安山岩	[6.6]	5.4	3.6	1808.0	
	71	L-23	磨石類	安山岩	[5.9]	[6.5]	[5.3]	174.4	
	72	J-21	磨石類	緑泥片岩	[8.4]	7.1	5.3	389.0	
	73	Q-18	磨石類	緑泥片岩	10.7	8.1	4.8	653.7	
	74	J-24	磨石類	砂岩	[9.2]	[5.9]	[3.3]	127.7	
	75	J-21	磨石類	閃緑岩	7.0	6.7	4.4	306.7	
	76	E-16	磨石類	閃緑岩	7.7	7.0	4.3	348.9	
125	77	K-22	磨石類	安山岩	5.8	5.5	3.8	179.0	欠損面再利用
	78	D-15	磨石類	安山岩	[4.5]	[5.8]	[2.8]	76.0	
	79	K-24	磨石類	安山岩	[9.6]	[5.1]	3.3	234.7	
	80	F-17	磨石類	安山岩	[9.0]	[7.3]	4.5	371.0	
	81	M-24	磨石類	閃緑岩	9.0	5.6	3.8	280.9	
	82	L-22	磨石類	安山岩	[6.2]	5.2	3.5	134.1	
	83	J-21	磨石類	安山岩	[10.3]	4.7	2.8	208.8	
	84	I-23	磨石類	砂岩	[7.8]	5.2	[2.5]	103.4	
126	85	I-23	磨石類	安山岩	[7.0]	7.4	4.2	321.0	欠損面再利用
	86	J-24	磨石類	安山岩	[8.9]	6.8	4.8	253.3	
	87	I-23	磨石類	安山岩	[6.2]	7.0	[3.6]	180.9	
	88	G-18	石皿	安山岩	[4.9]	[8.9]	7.2	207.3	
	89	表採	石皿	安山岩	[5.5]	[8.9]	5.0	207.0	
	90	D-14	石皿	安山岩	[5.8]	[6.4]	4.8	147.6	
	91	L-23	石皿	閃緑岩	19.2	[14.2]	4.8	1836.1	
	92	K-22	石皿	砂岩	[13.9]	[9.1]	7.4	1200.1	
127	93	L-24	石皿	安山岩	[6.7]	[6.6]	4.3	154.8	旧 SJ32
	94	L-24	石皿	安山岩	[7.2]	[9.9]	4.5	274.4	
	95	G-20	石皿	緑泥片岩	[8.0]	[6.8]	1.1	60.4	
	96	K-22	石皿	緑泥片岩	[18.7]	[9.4]	[4.0]	870.8	
	1	F-19 G-19	石棒	緑泥片岩	[13.1]	[3.0]	[2.5]	177.5	
	2	K-25	石剣	結晶片岩	[7.3]	3.8	2.2	94.2	
	3	K-23	石棒	安山岩	[4.4]	5.6	4.2	143.1	
	4	K-24	垂飾	玉髄	[3.0]	1.4	0.8	4.3	

3 古墳時代の遺構と遺物

(1) 住居跡

第3次調査区では45軒の住居跡が検出された(第127図)。

調査区東部の台地上に集中して分布する。住居跡は互いに重複する箇所も多く、さらにほとんどが第3号～第8号方形周溝墓に壊されていた点が大きな特徴である。一部の住居跡は北側と東側の調査区域外に広がるものもみられ、台地が続く両方向に分布は広がると考えられる。その一方で、調査区の西側には分布していない。住居跡群の西側には、水場遺構・木組遺構があり、谷へと下る傾斜面にあたることが、その要因と考えられる。住居跡の中では、第73号住居跡とそれを壊す第80号住居跡が、この水場遺構・木組遺構に近い箇所に位置する。

主軸方位は南北軸をもつ住居跡はほとんどみられず、北東から南西方向に主軸をもつ住居跡が多い。次いで北西から南東方向に主軸をもつ住居跡が続く。

規模は第53号住居跡が約7.00m四方と比較的大型だった。平面形は方形プランが大半を占める。第80号住居跡も同様の規模だが、方形プランではなく、円形プランの掘り方で、円形の周溝をもち、いわゆる「周溝状遺構」や「周溝持建物」と呼ばれる住居跡である(埼玉県埋蔵文化財調査事業団2011、福田2016)。

覆土はローム粒子やロームブロックを含む黒・暗褐色土を中心とする自然堆積がみられた一方で、方形周溝墓の構築に際し埋め戻されたと考えられる堆積も確認された。

床面で検出された施設のうち、炉穴は多くの住居跡から検出された。

貯蔵穴は、単純な掘り込みのみの事例以外に、掘り込みの周辺が土手状に盛り上がる例が、第40・46・53・76-A・89・91号住居跡の6軒で確認された。

主柱穴については、4本柱穴は、第43・53・57・60・65・73・82・84・96号住居跡の9軒で確認された。このうち第84・96号住居跡は推定である。

床面上から炭化材を検出した住居跡は、第40・93号住居跡の2軒のみであった。どちらの住居跡も、覆土に炭化物や焼土は確認されず、失火による焼失とは判断できなかった。

これらの住居跡からは、土器、土玉、土錘、土製紡錘車、砥具(砥石・転用砥具)、勾玉、貝巢穴痕泥岩といった種類の遺物が出土した。

完形・半完形の遺物が最も多く出土した住居跡は、第40号住居跡であった。遺物の出土量は住居間で多寡がみられ、遺物が少ない住居跡も認められた。

土器の構成は、台付甕をはじめ、壺、平底甕、甗、高坏、小形器台といった器種を中心とする。土器の胎土に、シャモットと推定される白色粒子を含む個体が多く認められた点が一つの特徴である。各器種の中には外来系土器も認められる。主に東海西部系、東海東部系、北陸系、信州系といった地方の土器である。

以下に個々の遺構の詳細を示す。住居跡の計測値に関しては第13表に示した。

第3号住居跡(第128図)

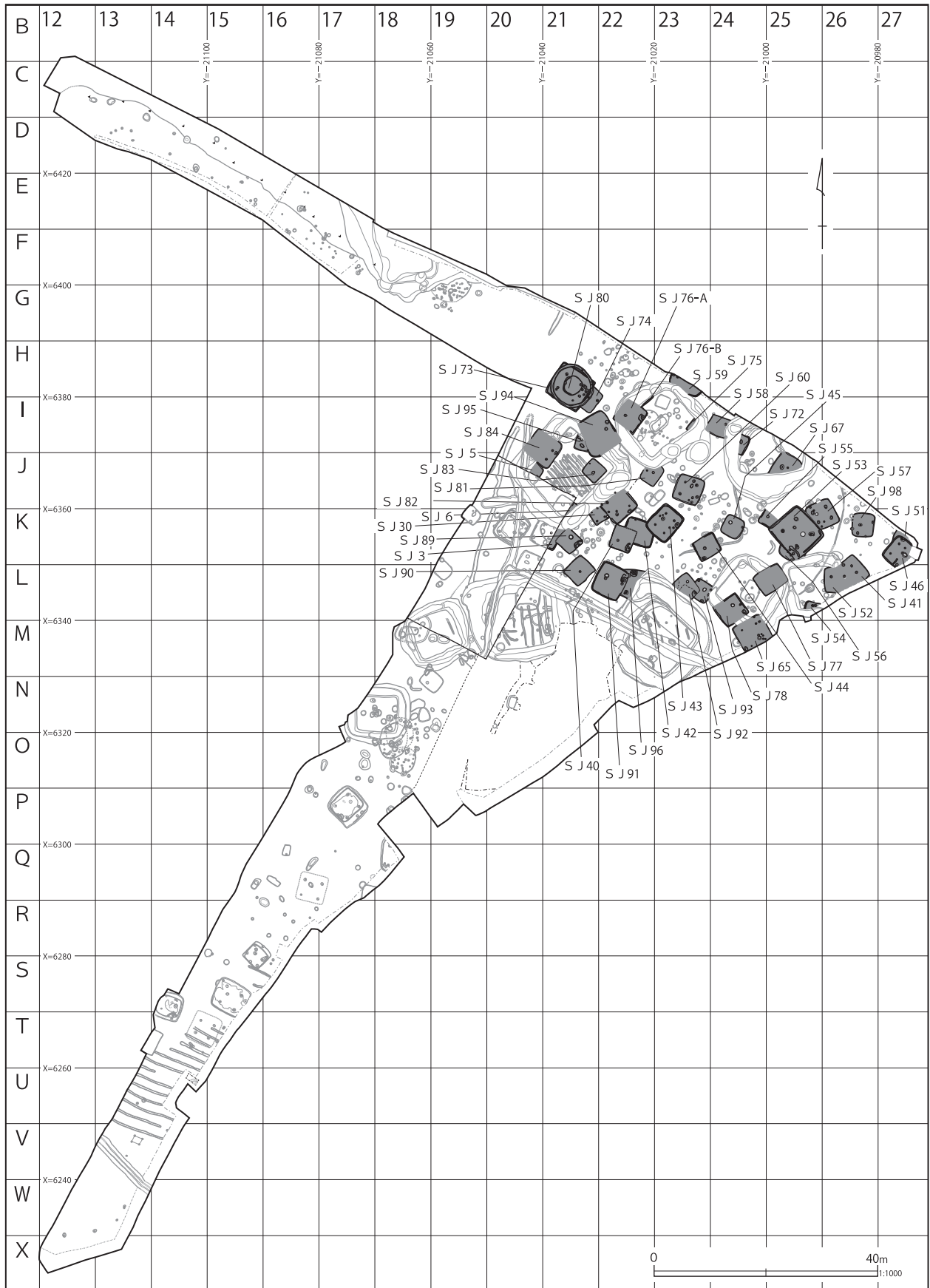
K-20・21グリッドに位置する。西側は第1次調査区に含まれる。

他の遺構との重複関係は、第610号土壇を壊し、第89号住居跡と第3号方形周溝墓に壊される。

全体の規模は、長軸残存長3.98m、短軸4.56m、深さ0.20m、主軸方位がN-25°-Eである。平面形は方形である。

覆土はわずかに1層が残るのみであった。ローム粒子・ロームブロックを多量に含むことから、埋め戻し土の可能性もあるが、残りが悪く判然と

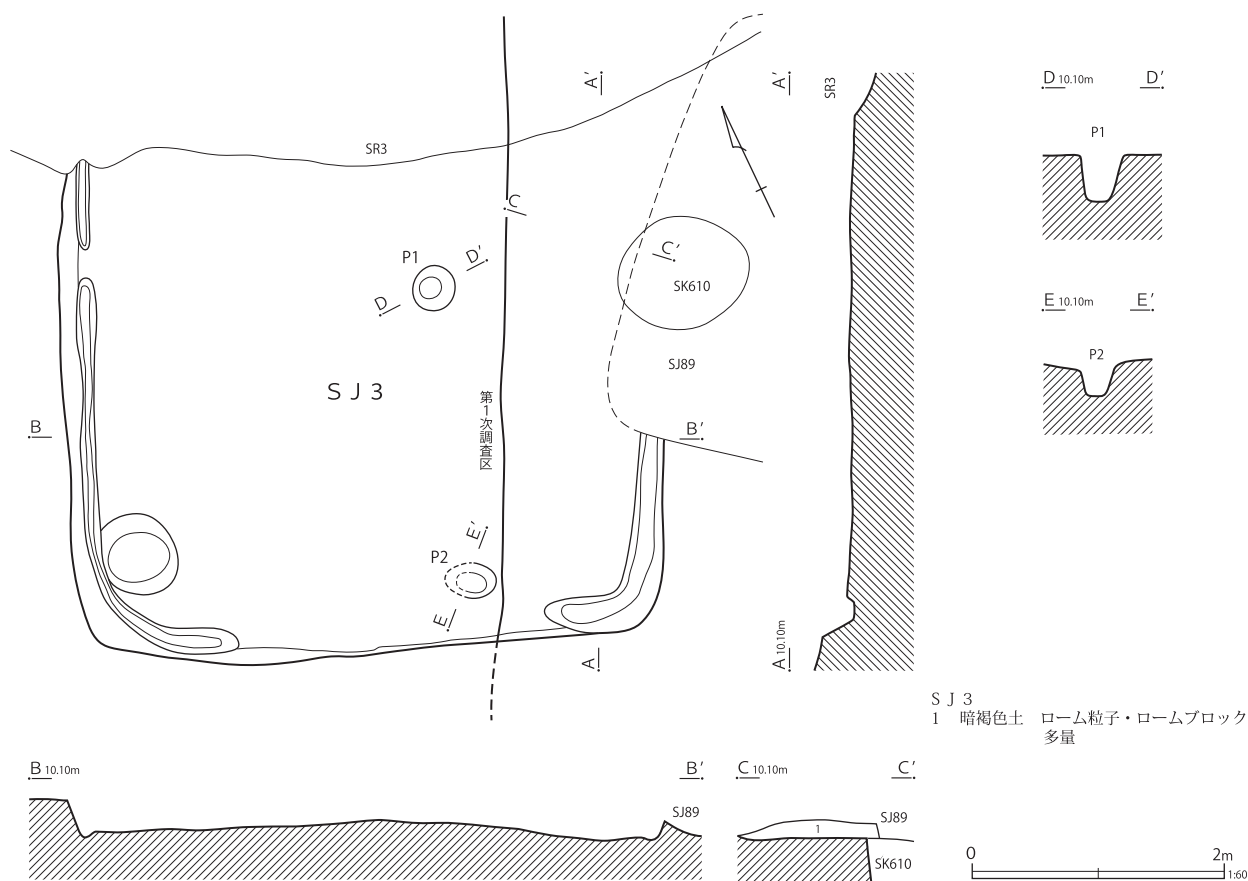
第3次調査



第127図 第3次調査区の古墳時代の住居跡

第13表 第3次調査区古墳時代住居跡計測表

遺構名	グリッド	長軸（主軸）	短軸（副軸）	深さ	方位	形態	備考
SJ3	K-20(1次分)、K-21(3次分)	[3.98]	4.56	0.20	N-25° -E	方形	新 SJ89 SR3 旧 SK610
SJ5	J-20 J-21	[3.17]	[2.05]	0.37	N-40° -E	方形	新 SR3
SJ6	J-21 K-21	[3.14]	[3.32]	0.30	N-32° -E	方形	新 SR3
SJ30	J-21・22 K-21・22	5.30	[2.72]	0.16	N-53° -E	方形か	新 SR3 SJ82 旧 SK669
SJ40	K-22	4.23	3.97	0.15	N-23° -E	方形	旧 SJ42 SD43 SK611 K-22P1
SJ41	K-26 L-26	4.98	[4.35]	0.35	N-40° -W	方形か	新 SR8
SJ42	K-22	5.53	4.55	0.26	N-72° -W	長方形	新 SJ40・43 旧 K-22P1
SJ43	J-23 K-22・23	4.96	5.85	0.47	N-49° -W	長方形	旧 SJ42
SJ44	K-23・24	4.25	3.82	0.30	N-60° -E	長方形	旧 SD33 SK612・632・649
SJ45	K-24	3.77	3.72	0.39	N-26° -E	隅丸方形	旧 SD33 SK607・629
SJ46	K-27 L-27	[4.31]	5.17	0.45	N-52° -W	方形	旧 SJ51
SJ51	K-27	[2.57]	[1.80]	0.28	不明	不明	新 SJ46
SJ52	L-26	4.58	[2.10]	0.22	N-0°	方形か	新 SR8 旧 SK505
SJ53	J-25 K-25・26	7.06	7.61	0.38	N-48° -E	方形	新 SR8 旧 SJ55 ～ 57
SJ54	L-25	[1.65]	[2.33]	0.20	N-15° -E	隅丸方形か	新 SR8 旧 SK521 L-25P1
SJ55	K-24・25（J-25 では未検出）	[2.70]	[2.70]	0.05	N-33° -E	方形	新 SJ53
SJ56	K-25	[1.05]	4.67	0.36	N-13° -E	隅丸方形	新 SJ53 SR8
SJ57	J-25・26 K-25・26	4.90	4.62	0.45	N-26° -W	方形	新 SJ53 SK516 旧 SK596
SJ58	I-23・24	3.52	[3.03]	0.24	N-20° -E	方形	新 SR4・5 旧 I-24P1 ～ 3
SJ59	H-23	6.36	[1.83]	0.33	N-60° -W	隅丸方形か	新 SR4
SJ60	J-23	4.80	4.90	0.47	N-19° -E	方形	旧 SD32 SK529・640・642
SJ65	L-24 M-24・25	5.78	[5.00]	0.55	N-59° -E	方形	新 SR6 旧 SK643-A・B
SJ67	I-25 J-25	[4.30]	[3.60]	0.37	N-34° -E	方形か	新 SR5
SJ72	I-24 J-24	3.53	[1.89]	0.35	N-27° -E	方形か	新 SR5
SJ73	H-21 I-21	6.15	6.40	0.25	N-34° -E	方形	新 SJ80 旧 SJ74
SJ74	H-21・22 I-21・22	4.22	[2.03]	0.05	N-35° -E	方形か	新 SJ73・80
SJ75	I-23	[2.45]	[0.40]	0.30	N-40° -E	方形か	新 SR4
SJ76-A	I-22	4.62	4.70	0.35	N-55° -W	方形	新 SJ76-B SR4 旧 SJ99
SJ76-B	H-22 I-22	[3.80]	[0.70]	0.46	N-52° -E	隅丸方形か	新 SR4 旧 SJ76-A
SJ77	K-25 L-24・25	5.20	4.22	0.11	N-55° -E	長方形	新 SR6・8
SJ78	L-24 M-24	4.81	4.46	0.17	N-37° -W	方形	新 SR6
SJ80	H-21 I-21	7.44	7.56	0.32	N-35° -E	円形	周溝持建物か、旧 SJ73・74
SJ81	J-22・23	3.83	[3.22]	0.09	N-35° -E	長方形	新 SR4
SJ82	J-22 K-22	[4.66]	5.38	0.25	N-41° -W	方形か	新 SR3 旧 SJ30 SD43
SJ83	J-21・22	3.41	3.33	0.18	N-49° -W	方形	新 SR3 旧 SL1
SJ84	I-20・21 J-20・21	5.38	5.60	0.53	N-37° -E	方形	新 SR3 SD1
SJ89	K-21	(3.77)	3.46	0.15	N-47° -W	長方形	新 SR3 旧 SJ3 SK610・ 656・670
SJ90	K-21 L-21	4.48	4.07	0.35	N-47° -E	長方形	旧 SK653・674
SJ91	K-22 L-21・22	5.96	5.44	0.20	N-62° -W	方形	旧 SJ96 SK661・662
SJ92	L-23	4.36	[3.01]	0.25	N-38° -W	方形	新 SR7 旧 SJ93
SJ93	L-23・24	3.56	[3.32]	0.20	N-30° -E	方形	新 SJ92 SR6 旧 L-23P2
SJ94	I-21・22 J-21・22	7.00	(6.00)	0.28	N-60° -E	長方形	新 SR3・4 旧 SJ95
SJ95	I-21	[2.30]	[2.68]	0.25	N-17° -E	方形か	新 SJ94 SR3
SJ96	L-22	5.28	[3.93]	0.23	N-6° -E	方形か	新 SJ91 SR7
SJ98	K-26	4.31	4.00	0.20	N-5° -E	隅丸方形	新 SK488・489 K-26P1



第 128 図 第 3 号住居跡

しない。

床面から炉跡や貯蔵穴は確認されず、柱穴と推定されるP1・P2を第1次調査区との境界部分で検出したのみである。ピットの規模は、P1が長軸0.36 m、短軸0.34 m、深さ0.37 m、P2が長軸残存長0.20 m、短軸0.28 m、深さ0.14 mである。

本遺構から遺物は出土しなかった。

第5号住居跡 (第129図)

J-20・21 グリッドに位置する。

他の遺構との重複関係は、第3号方形周溝墓に壊される。

全体の規模は長軸残存長 3.17 m、短軸残存長 2.05 m、深さ 0.37 m、主軸方位はN-40°-Eである。平面形は方形である。

覆土は確認されなかった。

床面からは第1次調査区との境界部分で、柱穴

と推定される P 1 を検出した。P 1 の規模は長軸 0.52 m、短軸 0.47 m、深さ 0.55 m である。そのほか、炉跡や貯蔵穴は確認されなかった。

掲載可能な遺物はなかった。

非掲載遺物は古墳時代の土器 585 g である。

第6号住居跡 (第130・131 図)

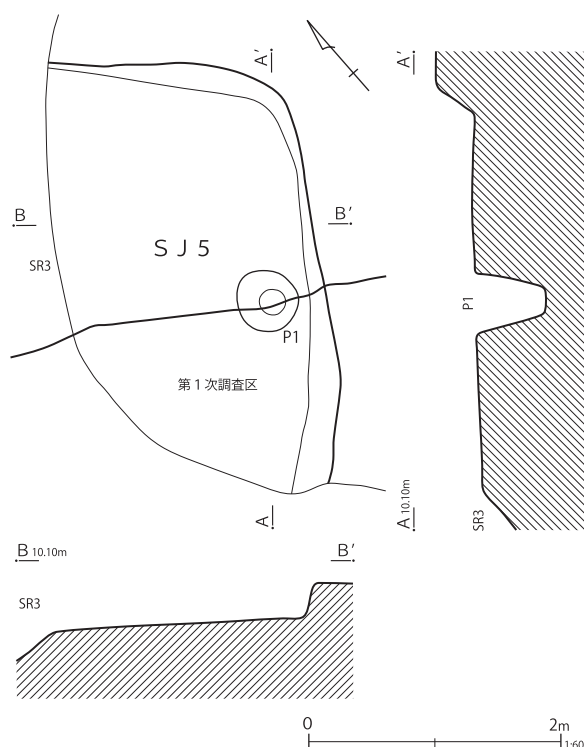
J-21、K-21 グリッドに位置する。西側は第1次調査区に含まれる。

他の遺構との重複関係は、第3号方形周溝墓に壊される。

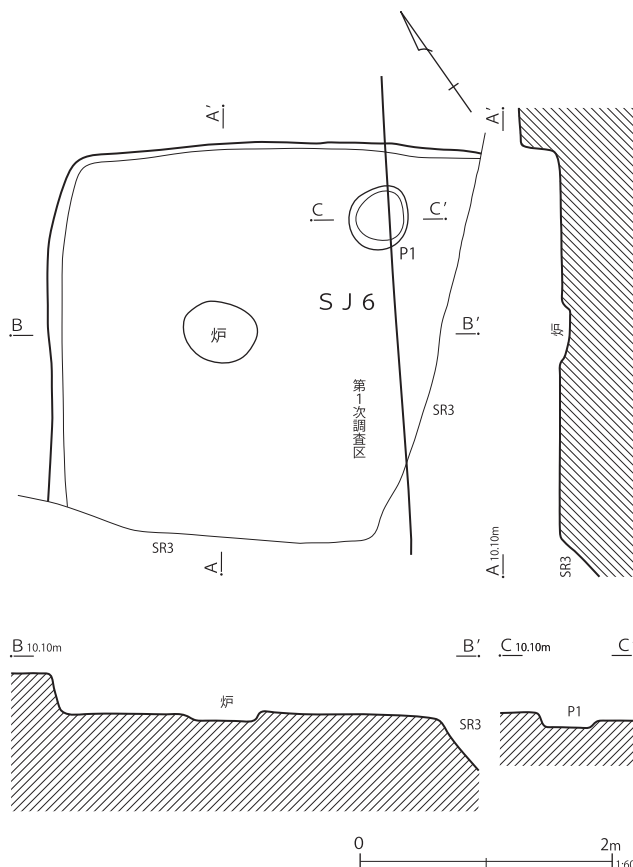
全体の規模は長軸残存長 3.14 m、短軸残存長 3.32 m、深さ 0.30 m、主軸方位はN-32°-Eである。平面形は方形である。

覆土は確認されなかった。

床面からは第1次調査で炉跡とP1（柱穴か）が確認されており、今回の調査でP1の全体像が明らかになった。規模は長軸0.53 m、短軸



第129図 第5号住居跡



第130図 第6号住居跡

0.47 m、深さ 0.16 m である。

出土遺物は第131図に示した。

1は台付甕である。本例は第1次調査の出土遺物と接合したため、再接合、再実測を行った。口縁部は直立気味に立ち上がる。口縁部外面に輪積み痕が2段残り、間にユビオサエが施される。外面はハケメ後、ヘラナデを、内面にヘラミガキが密に施される。2・3は台付甕の脚部で、2は内外面にハケメが施される。3はホゾ接合である。

第30・82号住居跡（第132～136図）

第30号住居跡と第82号住居跡は、第82号住居跡が第30号住居跡を壊す形で検出された。

他の遺構との重複関係は、第30号住居跡が第669号土壇を、第82号住居跡が第43号溝跡を壊す。両住居跡は攪乱と第3号方形周溝墓に壊されている。

まず、第30号住居跡について述べる。

J-21・22、K-21・22グリッドに位置する。

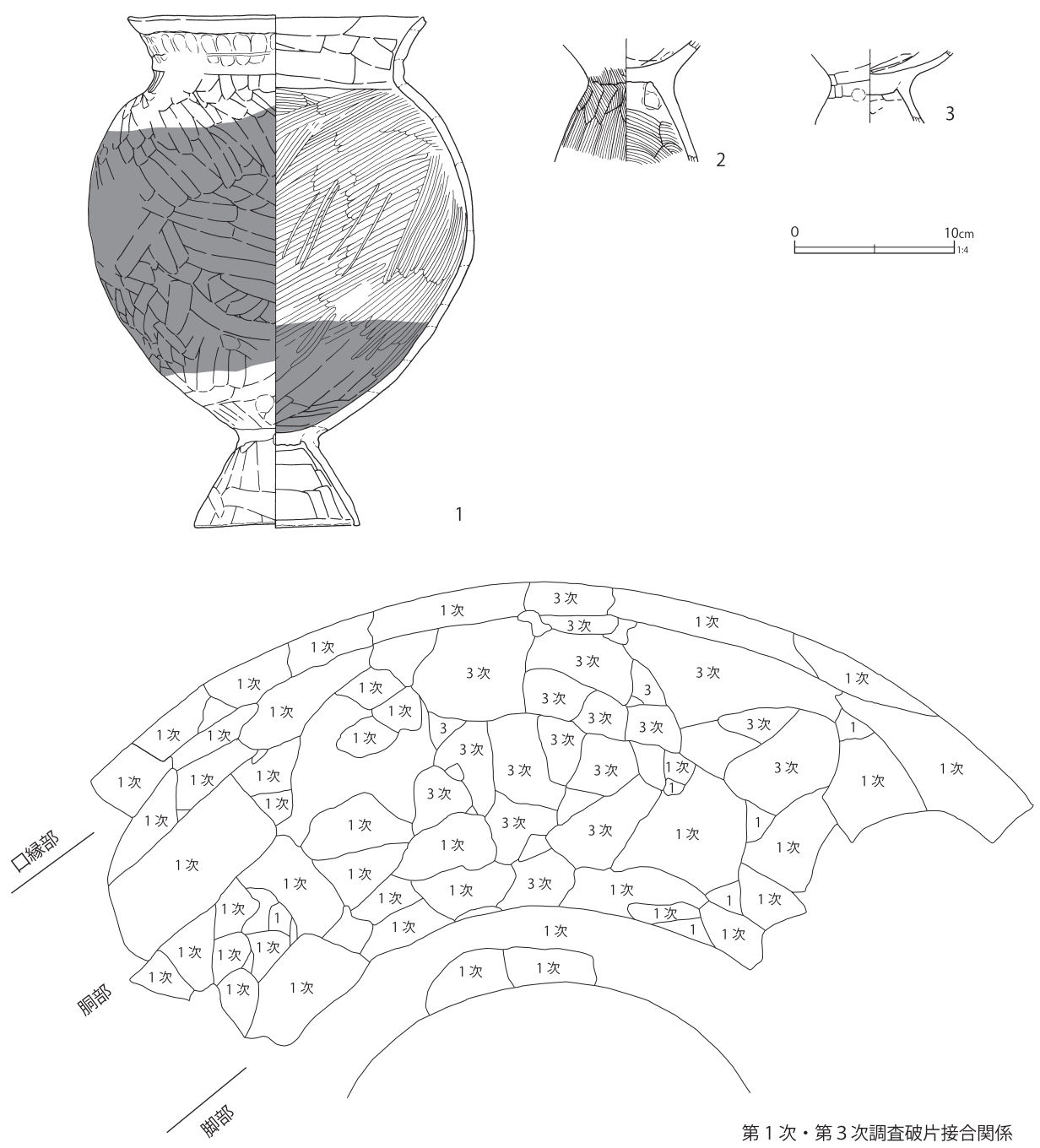
規模は、長軸 5.30 m、短軸残存長 2.72 m、深さ 0.16 m で、主軸方位は N-53°-E である。平面形は方形と推定される。

覆土はローム粒子やロームブロックを含む暗褐色土と黒褐色土からなる。第3層は貼床である。

床面からは炉跡とピットが4基検出された。

炉跡は住居の西寄りに位置する。規模は長軸 0.35 m、短軸 0.30 m、深さ 0.04 m で、平面形は円形である。非常に浅く、覆土には焼土ブロックが堆積していた。

4基のピットのうち、P4は覆土から支柱穴と推定されるが、その他の性格は判然としない。ピットの規模は、P1が長軸 0.43 m、短軸 0.43 m、深さ 0.10 m、P2が長軸 0.21 m、短軸 0.20 m、深さ 0.06 m、P3が長軸 0.36 m、短軸 0.32 m、深さ 0.09 m、P4が長軸 0.34 m、短軸 0.30 m、

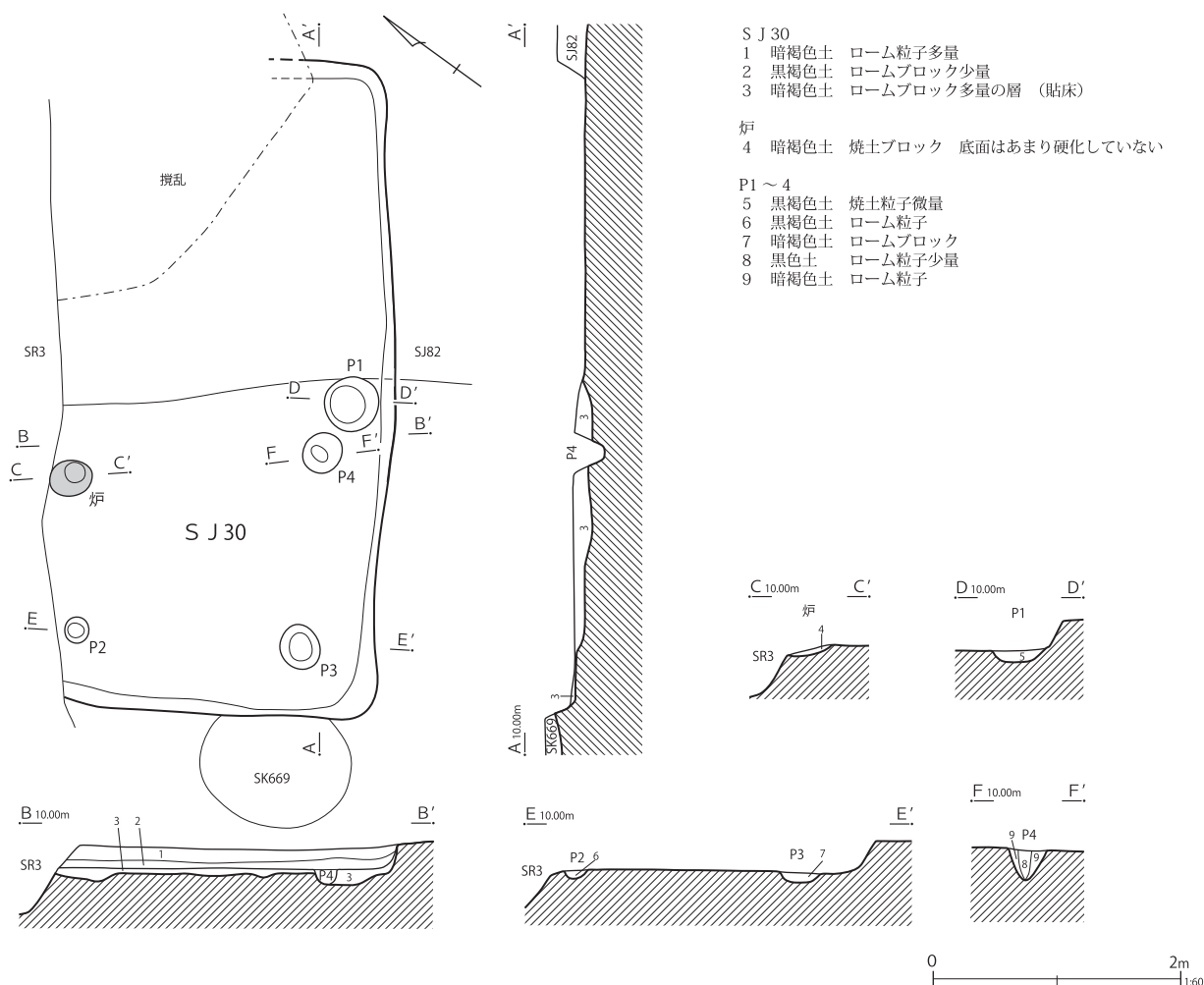


第1次・第3次調査破片接合関係

第131図 第6号住居跡出土遺物

第14表 第6号住居跡出土遺物観察表 (第131図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	台付甕	18.4	32.0	9.7	E K L	90	普通	にぶい黄褐	1次:Pit 一括 (第356集第33図-1) 3次:一括 煤付着 白色シャモット	191-1
2	土師器	台付甕	—	[7.6]	—	G H I K	35	普通	にぶい黄褐		191-2
3	土師器	台付甕	—	[4.6]	—	C E G I K L	45	普通	にぶい褐	白色シャモット	191-3



第132図 第30号住居跡(1)

深さ 0.24 m である。

掘り方は壁面に沿って溝状の掘り込みが検出された。また、それに伴ってピットが4基検出された(P5~P8)。規模はP5が長軸0.30 m、短軸0.18 m、深さ0.10 m、P6が長軸0.22 m、短軸0.13 m、深さ0.04 m、P7が長軸0.29 m、短軸0.18 m、深さ0.06 m、P8が長軸0.16 m、短軸0.10 m、深さ0.11 mである。

掲載可能な遺物はなかった。

非掲載遺物は、古墳時代の土器 240 g である。

次に第82号住居跡について述べる。

J-22、K-22 グリッドに位置する。

全体の規模は、長軸残存長 4.66 m、短軸 5.38 m、深さ 0.25 m で、主軸方位は N-41°

-W である。平面形は方形と推定される。

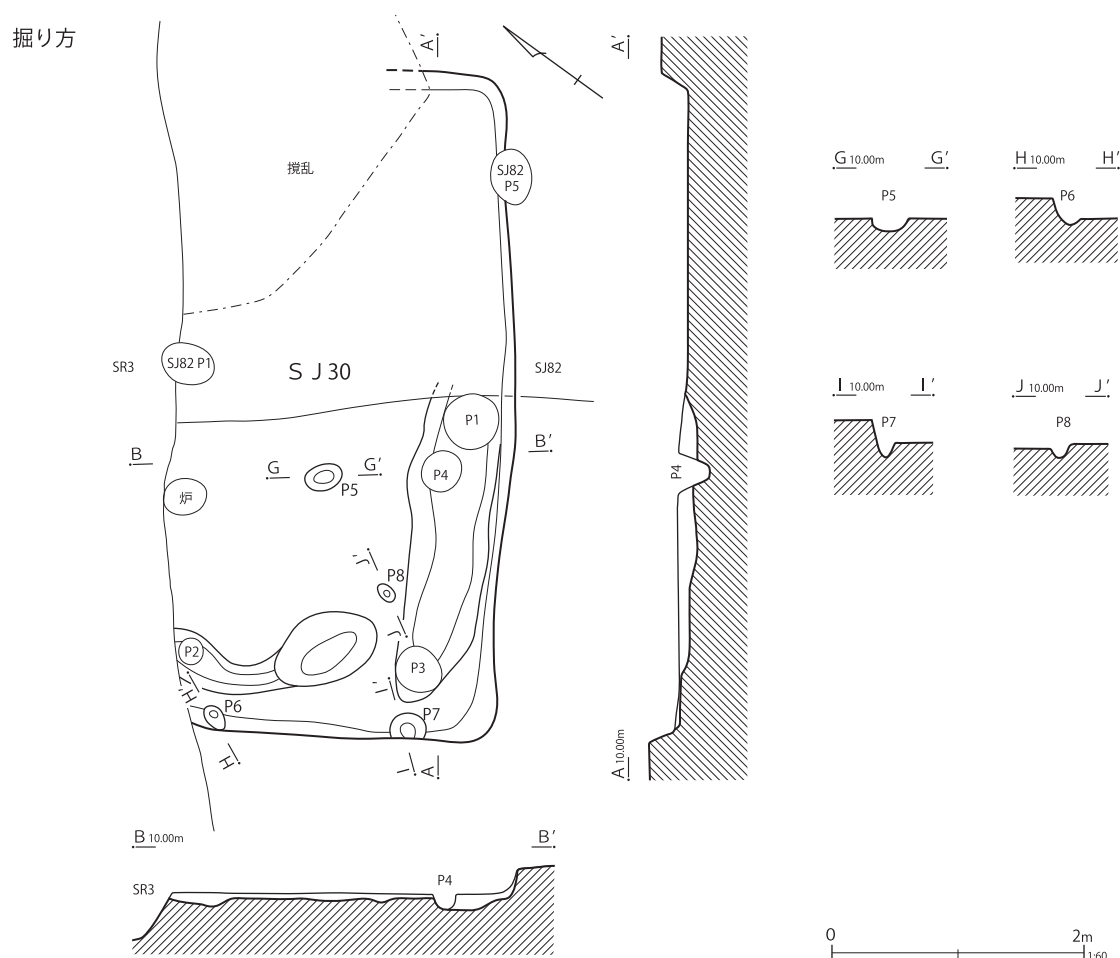
覆土は、白色粘土粒子を含む暗褐色土や黒褐色土などからなる。自然堆積と考えられる。

床面から貯蔵穴1基とピット7基、壁溝が検出された。

貯蔵穴は南側の壁溝が途切れた箇所に位置する。規模は長軸0.83 m、短軸0.53 m、深さ0.28 m で、平面形は楕円形である。覆土はローム粒子やロームブロックを含む暗褐色土が堆積していた。

遺物は出土しなかった。

7基のピットのうち、P3・4・7は、位置と掘り込みの深さから支柱穴と考えられる。ピットの規模は、P1が長軸0.45 m、短軸0.30 m、深さ0.07 m、P2が長軸0.40 m、短軸0.32 m、



第133図 第30号住居跡(2)

深さ0.09m、P3が長軸0.52m、短軸0.36m、深さ0.52m、P4が長軸0.55m、短軸0.50m、深さ0.50m、P5が長軸0.32m、短軸0.32m、深さ0.10m、P6が長軸0.29m、短軸0.27m、深さ0.17m、P7が長軸0.29m、短軸0.27m、深さ0.60mである。

壁溝は壁沿いをめぐり、住居の南側と西側の中央付近は途切れる。規模は幅0.08m～0.34m、深さ0.01m～0.10mである。覆土はロームブロックを含む褐色土が堆積していた。

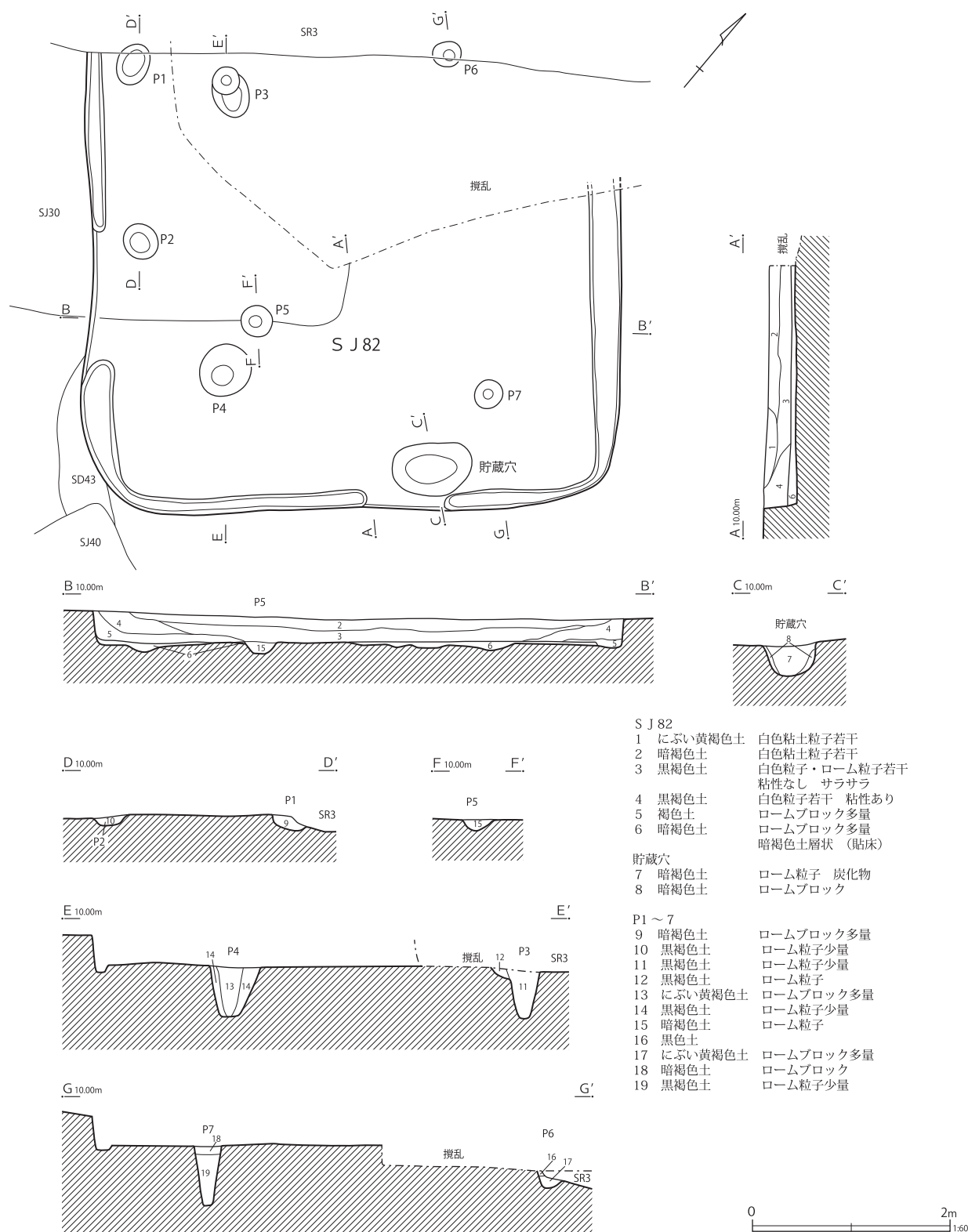
掘り方は壁溝に沿うように、溝状に掘り込まれ、それに伴いP8が検出された。規模は長軸0.25m、短軸0.19m、深さ0.11mである。

遺物は住居の南東部に集中して出土した。

掲載遺物のうち、1・9・17は床面直上から出土した。9は2箇所に分かれて出土し、もう一方はB-B'の第3層相当の高さから出土した。5・10・13・18はB-B'の第3層相当の高さから出土した。16はB-B'の第5層相当のほぼ床面に近い地点から出土した。20はB-B'の第2層相当の高さから出土した。

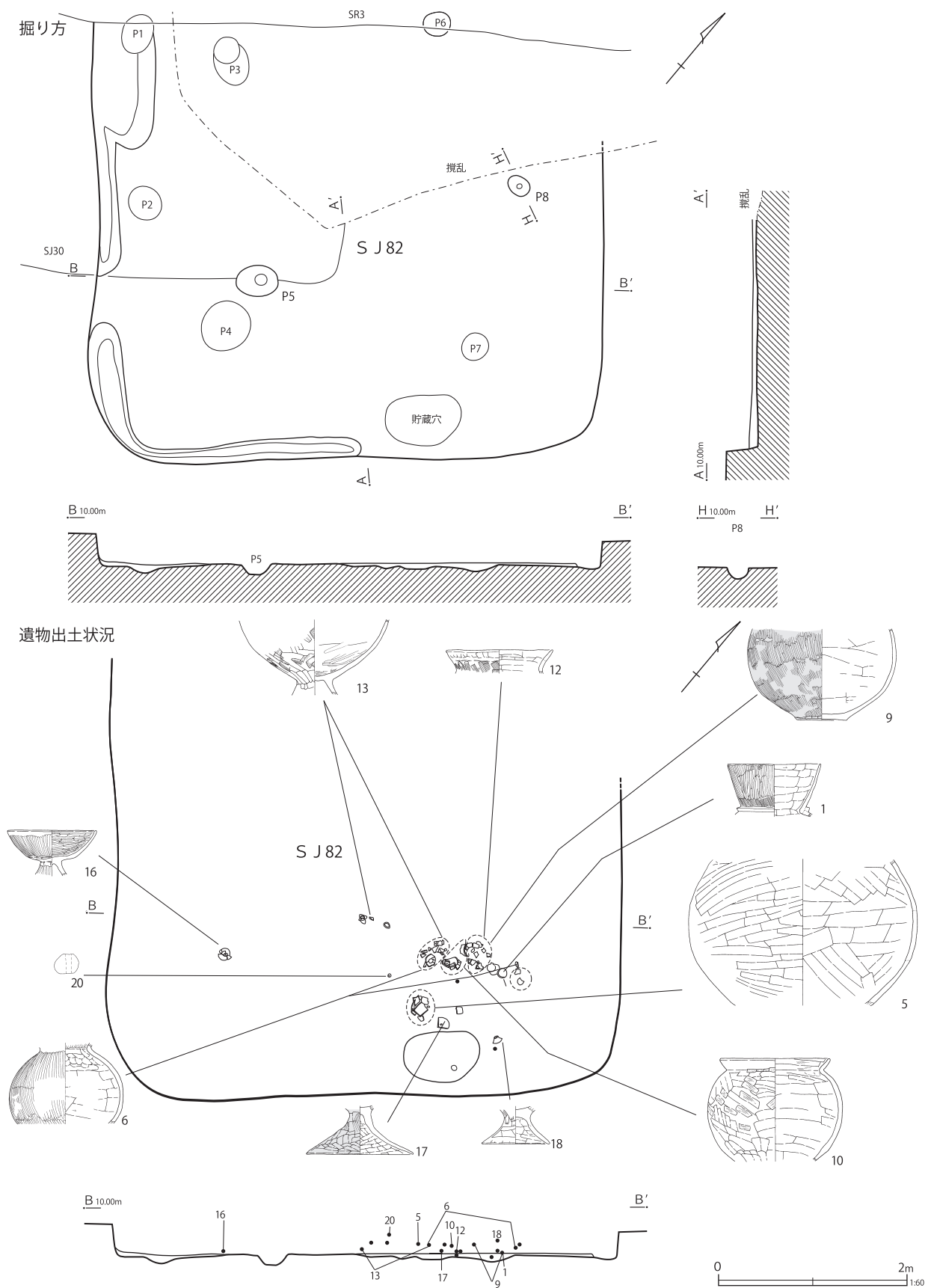
出土遺物は第136図に示した。

1～9は壺である。1は単口縁壺の口縁部で、口縁部は逆八の字形というよりも直立気味に立ち上がる。頸部に突帯がつく。外面はヘラミガキ、内面はヘラナデが施される。2は複合口縁壺の口縁部で、複合部は薄い。内外面にヘラミガキが施される。3と4は胴部片で、3は上下に単節LR・

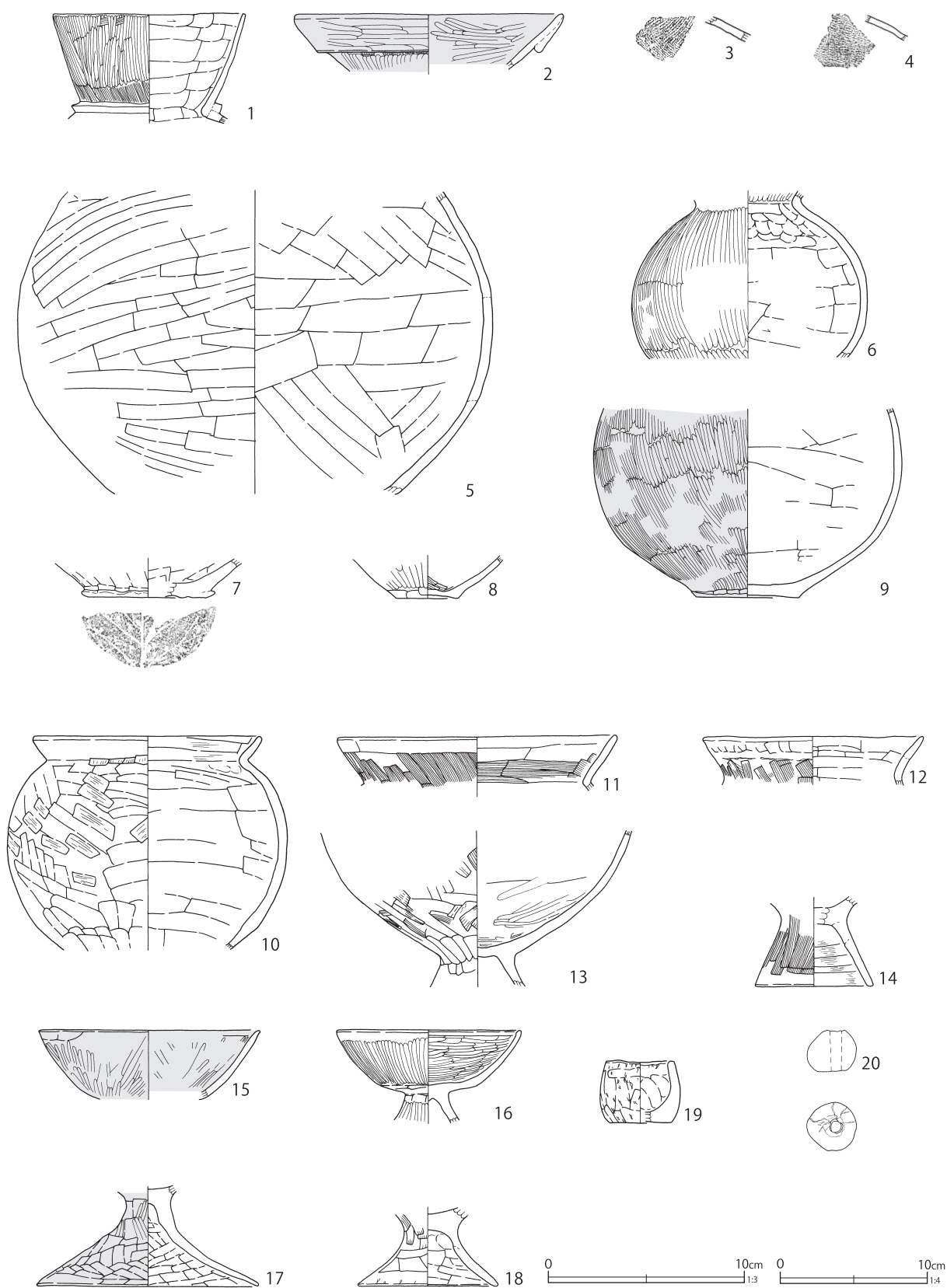


第 134 図 第 82 号住居跡 (1)

第3次調査



第135図 第82号住居跡(2)



第136図 第82号住居跡出土遺物

第3次調査

第15表 第82号住居跡出土遺物観察表（第136図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	12.8	[7.4]	—	G H I K	75	普通	浅黄橙	No.3 B 突帯めぐる	191-4
2	土師器	壺	(18.0)	[3.7]	—	E K	15	普通	にぶい赤褐	B 複合口縁壺 内外面赤彩	191-5
3	土師器	壺	—	[1.4]	—	I L	5	普通	にぶい黄橙	B LR RL 羽状縄文 白色シャモット	191-6
4	土師器	壺	—	[1.8]	—	E I	5	普通	にぶい黄橙	C 網目状捺糸文 外面赤彩	191-7
5	土師器	壺	—	[20.5]	—	E I K	25	普通	にぶい赤褐	No.13	191-8
6	土師器	壺	—	[11.4]	—	C G H I K	65	普通	にぶい橙	No.8・20 B	192-1
7	土師器	壺	—	[2.6]	(9.0)	E I K L	30	普通	にぶい橙	A SR3 盛土2区 底部木葉痕 白色シャモット	192-2
8	土師器	壺	—	[2.9]	4.2	K	55	普通	にぶい黄橙	貯穴	192-3
9	土師器	壺	—	[12.8]	6.9	G I K	40	普通	橙	No.3・5 B 外面赤彩	192-4
10	土師器	甕	(15.2)	[14.5]	—	A C K	30	普通	にぶい黄橙	No.6 煤付着	192-5
11	土師器	甕	(18.8)	[3.8]	—	E H I K	25	普通	にぶい黄橙	A・B	192-6
12	土師器	甕	(14.8)	[3.2]	—	I K L	30	普通	浅黄橙	No.5 B 白色シャモット	192-7
13	土師器	台付甕	—	[10.6]	—	I K	40	普通	にぶい橙	No.8・11 A・B	193-1
14	土師器	台付甕	—	[6.0]	8.0	E H I K L	30	普通	にぶい橙	B・C 白色シャモット	193-2
15	土師器	高坏	(14.9)	[4.6]	—	I L	25	不良	赤	A 内外面赤彩 白色シャモット	193-3
16	土師器	高坏	12.3	[6.3]	—	A C I K	80	普通	灰褐	No.18	193-4
17	土師器	高坏	—	[6.8]	14.8	I K	60	普通	にぶい橙	No.15 外面赤彩	193-5
18	土師器	高坏	—	[5.3]	9.3	E I K	65	普通	灰白	No.16	193-6
19	土師器	手捏ね土器	(4.6)	4.2	(4.2)	E H I K	35	普通	灰白	器面にひび割れ	193-7
20	土製品	土玉	最大高 2.1 径 2.4～2.5 孔径 0.5～0.7 重さ 10.9 g			I L	85	普通	明赤褐	No.12 白色シャモット	230-1

R Lの羽状縄文が施される。4は網目状捺糸文が施される。5は大型壺の胴部である。器形は球形胴で、内外面にヘラナデが施される。6の胴部はやや小型で、器面にヘラミガキが施される。7・8は底部片である。7は大型壺の底部で木葉痕が残る。8の底部は、底径が小さく器肉も薄い。9は胴部から底部にかけての破片である。外面はヘラミガキ、内面はヘラナデが施される。

10～14は甕である。10は口縁部が短く、口唇部は面取りをする。外面はナデ主体である。11は口縁部で、口径が大きい。12の口縁部はやや小型で、輪積み痕を残す。13は胴部と脚部の接合部で、胴部径が大きく、大型の台付甕である。14は台付甕の脚部で、外面はハケメ、内面はヘラナデが施される。

15～18は高坏である。15は坏部で、内外面にヘラミガキが雑に施される。16は坏部の下端が屈曲するタイプで、内外面にヘラミガキが密に

施される。17の脚部は裾が広がるものの、外反の度合いが均一ではない。外面にヘラナデが施される。18の脚部は裾が短く、器肉は厚い。外面はハケメ後ヘラナデが施される。

19は手捏ね土器である。鉢形で、口縁部は内湾する。器面に無数のひび割れが入る。

20は土玉である。

非掲載遺物は古墳時代の土器 136 g である。主に単口縁壺や複合口縁壺、台付甕、高坏などの細片である。台付甕にはヨコナデが施される一般的な口縁部のほかに、刻みをもつ口縁部、輪積み痕を残す口縁部が認められた。

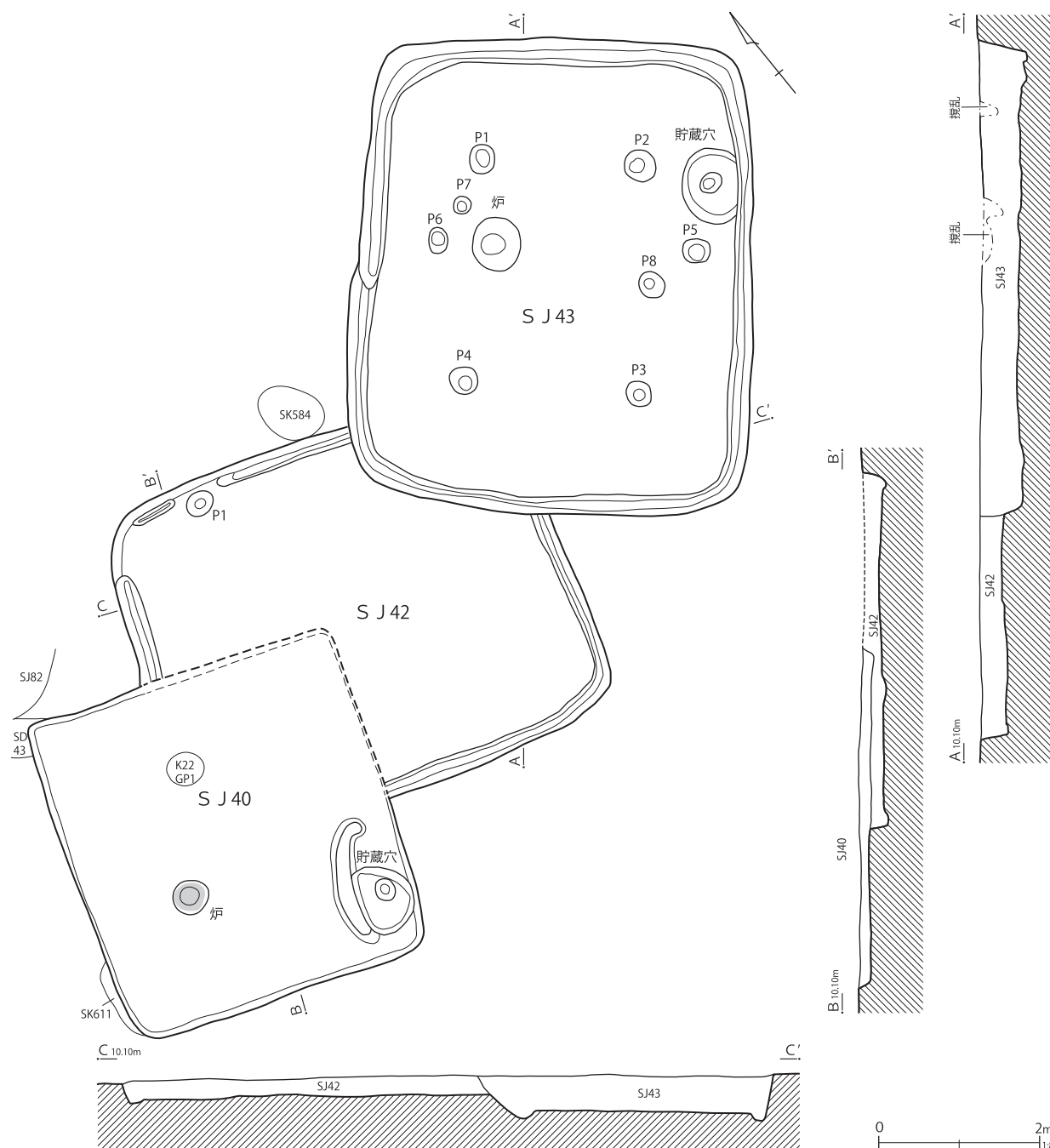
第40・42・43号住居跡（第137～150図）

これら3軒の住居跡は互いに重複していた。

まず、第40号住居跡について述べる。

K-22 グリッドに位置する。

他の遺構との重複関係は、第42号住居跡、第43号溝跡、第611号土壌、K-22 グリッドP1



第137図 第40・42・43号住居跡全体図

を壊す。

全体の規模は長軸 4.23 m、短軸 3.97 m、深さ 0.15 m、主軸方位はN-23°-Eである。平面形は方形である。

覆土は、ローム粒子を含む灰黄褐色土、黄褐色土などからなる。

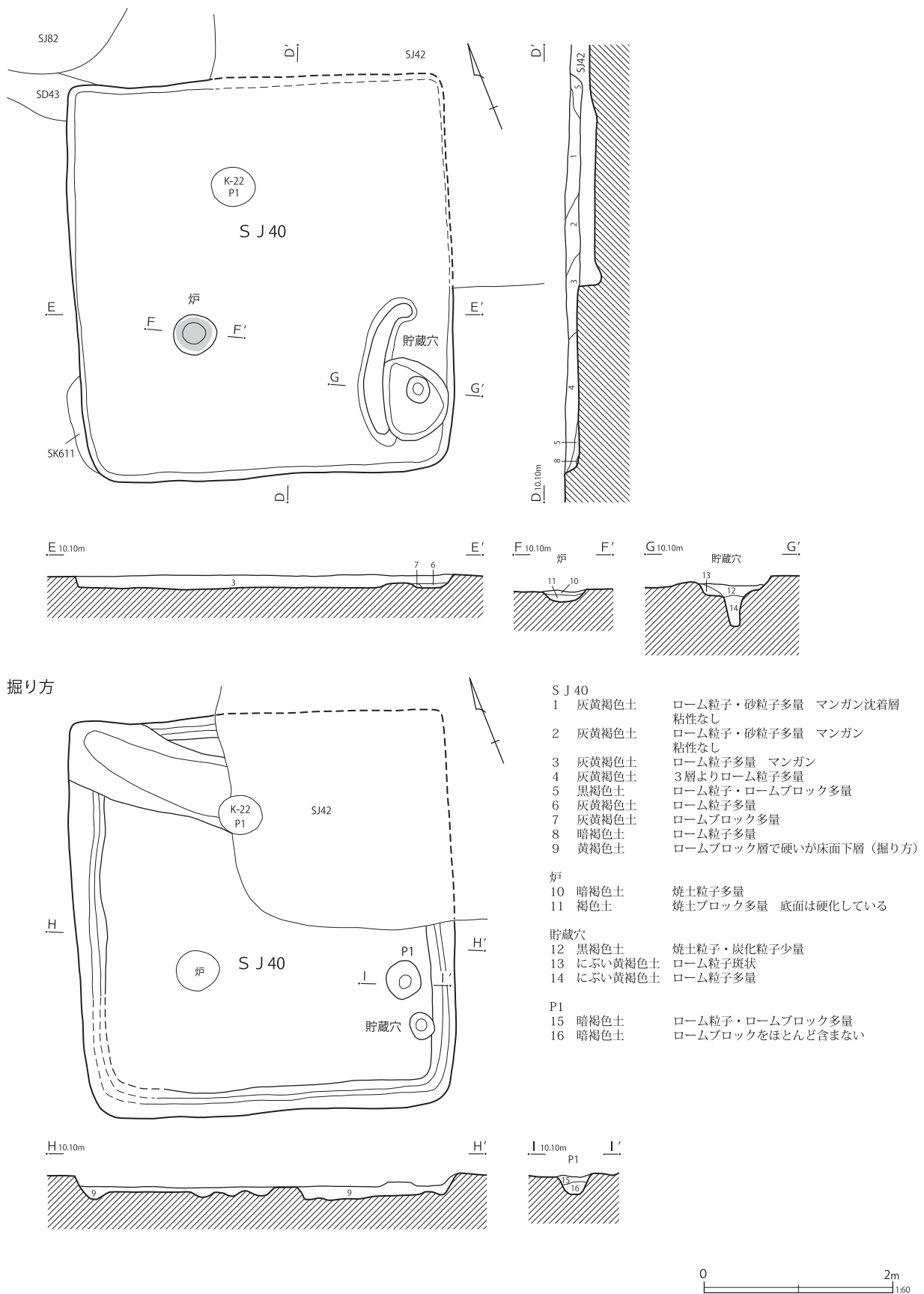
床面からは、炉跡と貯蔵穴が1基ずつ検出され

た。

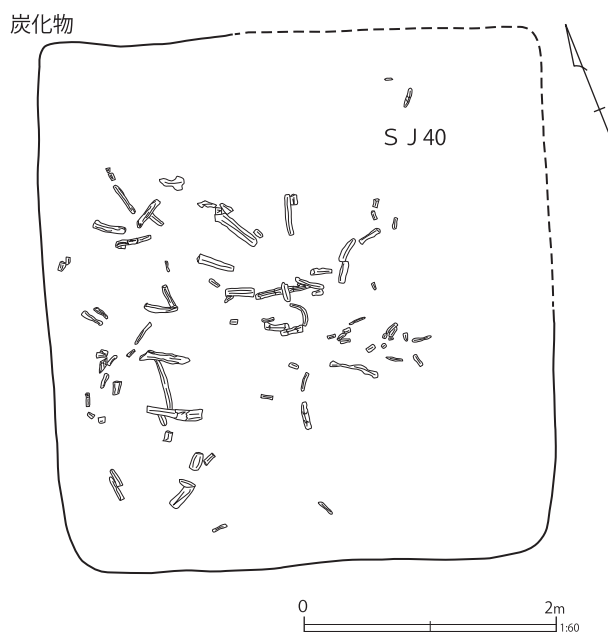
炉跡は中央からやや南西に位置する。規模は長軸 0.46 m、短軸 0.44 m、深さ 0.15 mで、平面形は円形である。内部には焼土ブロックや焼土粒子が堆積していた。

貯蔵穴は南東部に位置する。貯蔵穴の掘り方は漏斗状に中央が深くなり、西側は床面を掘り残し

第3次調査



第138図 第40号住居跡（1）



第139図 第40号住居跡(2)

て周堤状に盛り上がる。規模は長軸0.90 m、短軸0.65 m、深さ0.43 mで、平面形は不整形である。内部から壺(第141図4)が1点出土した。なお、柱穴は検出されなかった。

これらに加えて、床面上からは炭化材が検出された。床面の中央から南西側にかけて集中する。そのうち比較的長い炭化材は、長軸方向が中央から放射状に並んでいるようにも見受けられる。これらが垂木材などの屋根を構成する材だった可能性は十分あり得るが、全体の遺存状態も良くないため判然としない。ただし、覆土に炭化物や焼土が堆積していないため、これらが失火による焼失で形成されたとは考え難い。

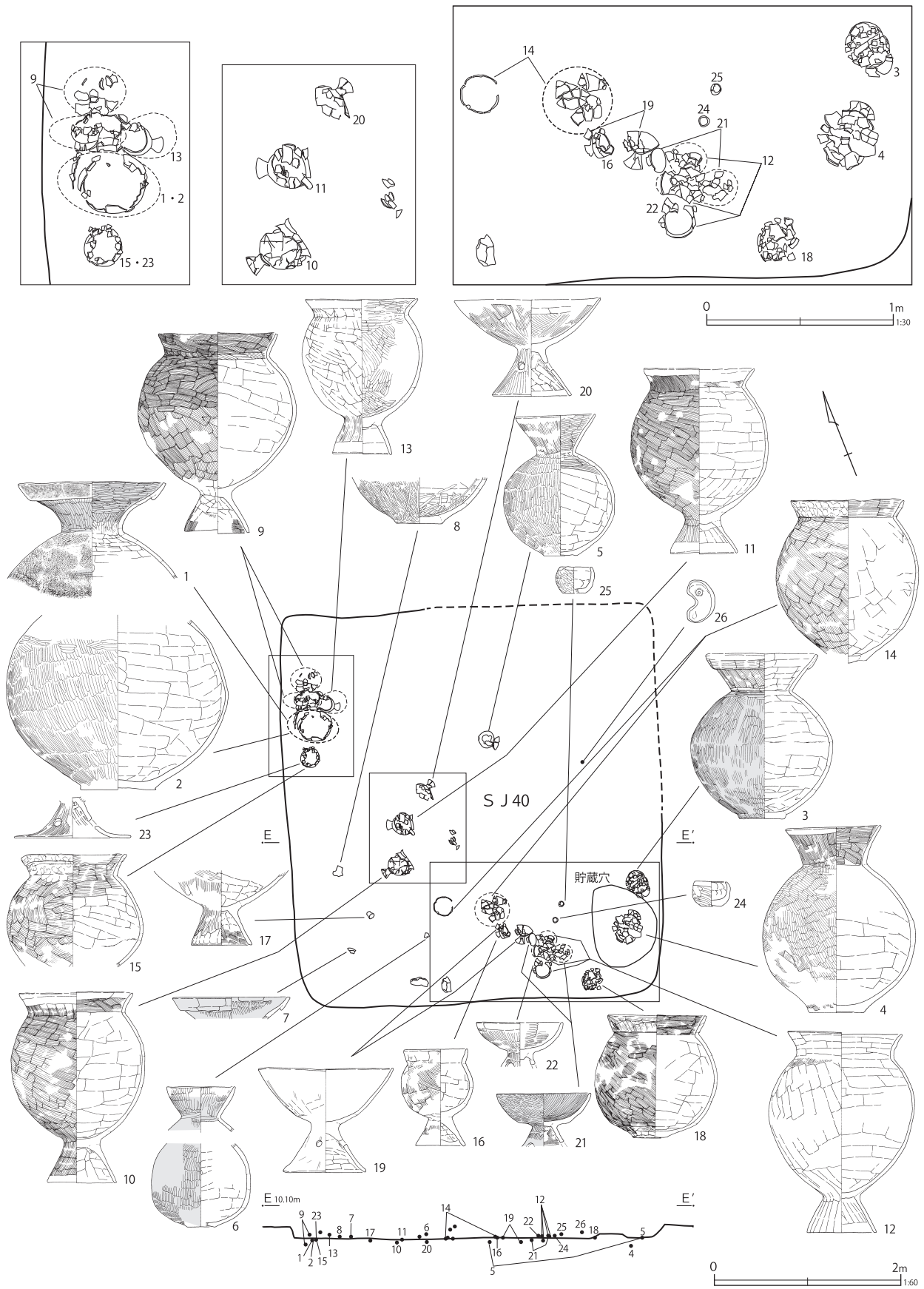
遺物は、西側から南側にかけて、完形・半完形の土器が数多く出土した。本住居跡の出土点数は、第3次・第4次調査の住居跡のうち最も多い。その多くは床面からの出土である。

掲載遺物のうち、5は北部の床面上から出土した。1・2・9・13・15・23は北西部の床面上から、互いに接するように出土した。20は北西部中央

寄りの床面から、横位の状態で出土した。7・8・10・11・17は南西部の床面上から出土した。10と11はともに横位の状態であった。6は南西部の床面の0.05 m上位の高さから出土した。3・12・14・16・18・19・21・22・24・25は南東部の床面から出土した。4は貯蔵穴内から出土した。26は北東部の床面の0.05 m上位の高さから出土した。いずれも復元可能な状態で、一個体ずつまとまって出土した。

第40号住居跡の出土遺物は第141図～143図に示した。

1～8は壺である。1は複合口縁壺である。複合部は薄く、頸部から口縁部にかけて外反する。口縁部に単節RL、胴部上半に4段にわたり単節LRと単節RL縄文が施文され、最下段がS字状結節文で区画される。頸部外面と口縁部内面にはヘラミガキ、胴部内面はヘラナデが施される。2は複合口縁壺の胴部と考えられる。球形胴で底部は木葉痕が残る。胴部上半には羽状縄文とS字状結節文が二段にわたり施される。胴部全体にヘラ



第140図 第40号住居跡遺物出土状況

ミガキを、内面にヘラナデが施される。3の複合口縁壺は小型で、頸部が短い。複合部は薄く、口縁部にハケメが施される。頸部にハケメを、胴部にヘラミガキが施される。内面はヘラナデが主体である。器面に赤彩が施される。4～6は単口縁壺である。4は口縁部が短く外反し、頸部が太い。胴部は肩が張らず、最大径は下位にある。底部は平底で底径が大きい。口縁部内外にハケメ、胴部外面にヘラミガキ、内面にヘラナデが施される。5の単口縁壺は口縁部が八の字形に広がり、頸部は細い。胴部は球形胴で、底部は平底である。外面全体と口縁部内面にヘラミガキを、胴部内面にヘラナデが施される。6の単口縁壺は、口縁部と胴部の接合点がないが、同一個体と考えられる。口縁部は短く、やや厚手である。胴部は球形胴で、底部は平底である。外面全体と口縁部内面にヘラミガキを、胴部内面にヘラナデが施される。7は複合口縁壺の口縁部の破片で、複合部は薄い。8は胴部下半から底部の破片で、全体にヘラミガキが施される。底部にもヘラミガキが施される点特徴的である。

9～17は台付甕である。9はこれらの中でも大型で、口縁部は直立気味で、口唇部は面取りをする。胴部は肩が張り、球形胴である。外面はハケメを中心に、脚部との接合部にはヘラナデも施される。内面は口縁部にハケメ、胴部はヘラナデが施される。10と11は器形・調整・胎土・焼成ともに共通し、セットの可能性がある。口縁部は短く外傾し、胴部は倒卵形で、脚部は口縁部に対してずれた位置に接合されている。ともにホゾ接合である。調整は外面と口縁部内面にハケメ、口唇部はヨコナデ、胴部と脚部内面はヘラナデが施される。12と13はヘラナデを主体とする。12は口縁部が長く外反し、胴部は倒卵形である。13は小型で、内面にヘラミガキが施される点特徴である。脚部はホゾ接合である。14と15は口縁部に輪積み痕を残し、ユビオサエが施されるタイ

プである。14の胴部は倒卵形で外面と口縁部内面にハケメ、胴部内面にヘラナデが施される。脚部はホゾ接合である。15は胴部が球形胴だがやや歪む。16は小型の台付甕で、被熱により劣化が著しい。口縁部は直立気味で、胴部は球形胴、脚部は八の字形に広がる。器肉が厚い。外面はハケメ、内面はヘラナデが施される。17は胴部下半の破片である。胴部が大きく、9よりも大型である。外面にハケメ、内面にヘラナデが施される。

18は平底甕である。口縁部は短く直線的に開き、胴部は肩が張らず下半が膨らむ。外面と口縁部内面にハケメ、内面にヘラナデが施される。

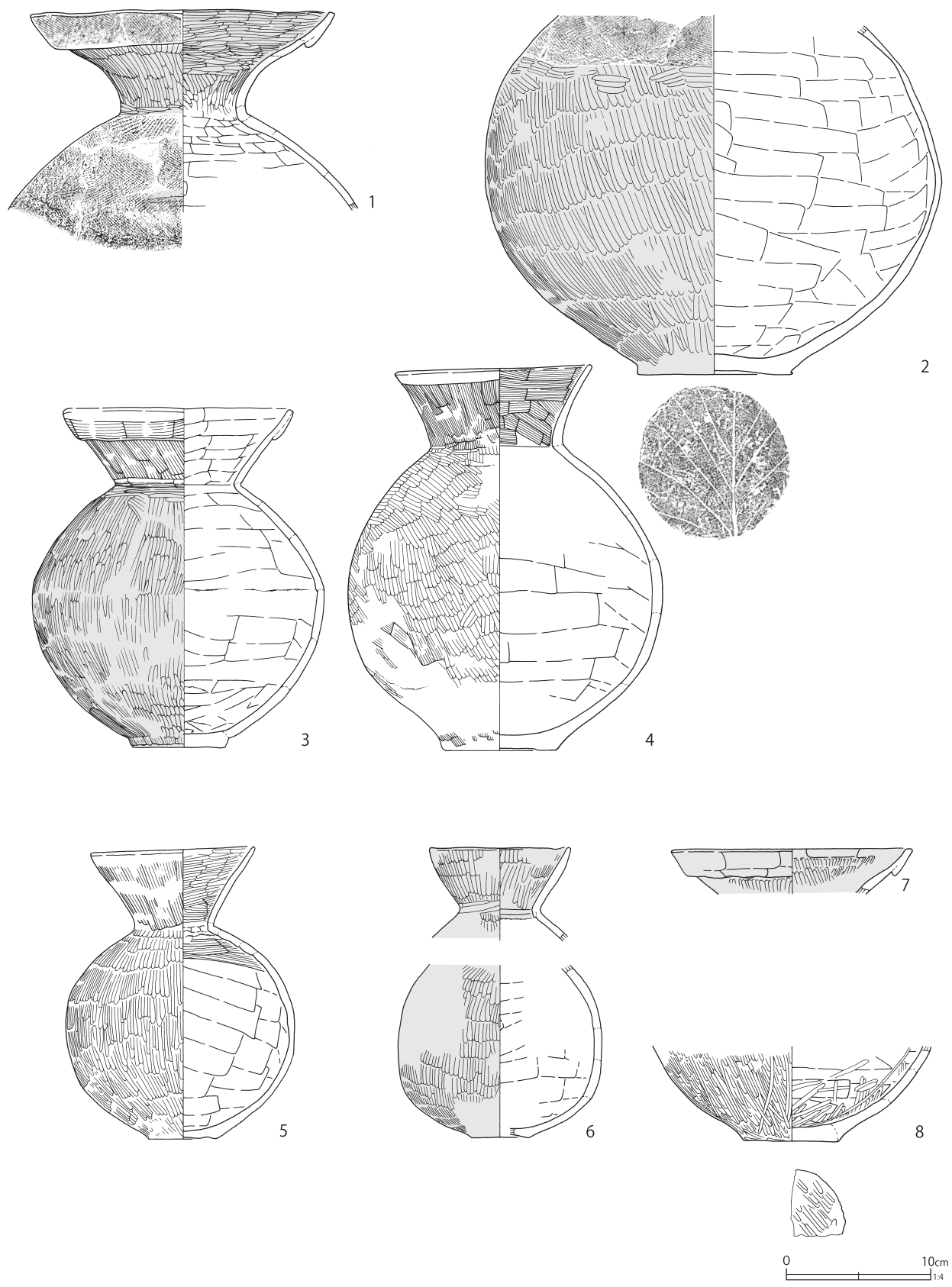
19～23は高坏である。19は坏部が比較的深く、坏部下端がわずかに段をもつ。脚部は円形の三孔透孔が施される。裾はわずかに外反するが広がらない。器面は風化しており、調整は不明瞭である。脚部内面にヘラナデが施される。20は坏部が浅く、口径が大きい。脚部は円形の三孔透孔が施される。裾は短く、端部を面取りする。外面と坏部内面にヘラミガキを、脚部内面にヘラナデが施される。21は坏部下端に段をもつタイプである。器肉は厚く、脚部に円形の三孔透孔が施される。外面と坏部内面にヘラミガキが密に施される。22は小型で、坏部は壙形である。器肉は厚く、脚部に円形の三孔透孔が施される。脚部はホゾ接合である。外面と坏部内面にヘラミガキが密に施される。23は脚部の破片で、裾が大きく外反する。円形の三孔透孔が施される。外面にヘラミガキが密に施される。

24・25はミニチュア土器である。鉢形で口縁部は内湾する。外面にヘラミガキ、内面にユビナデが施される。

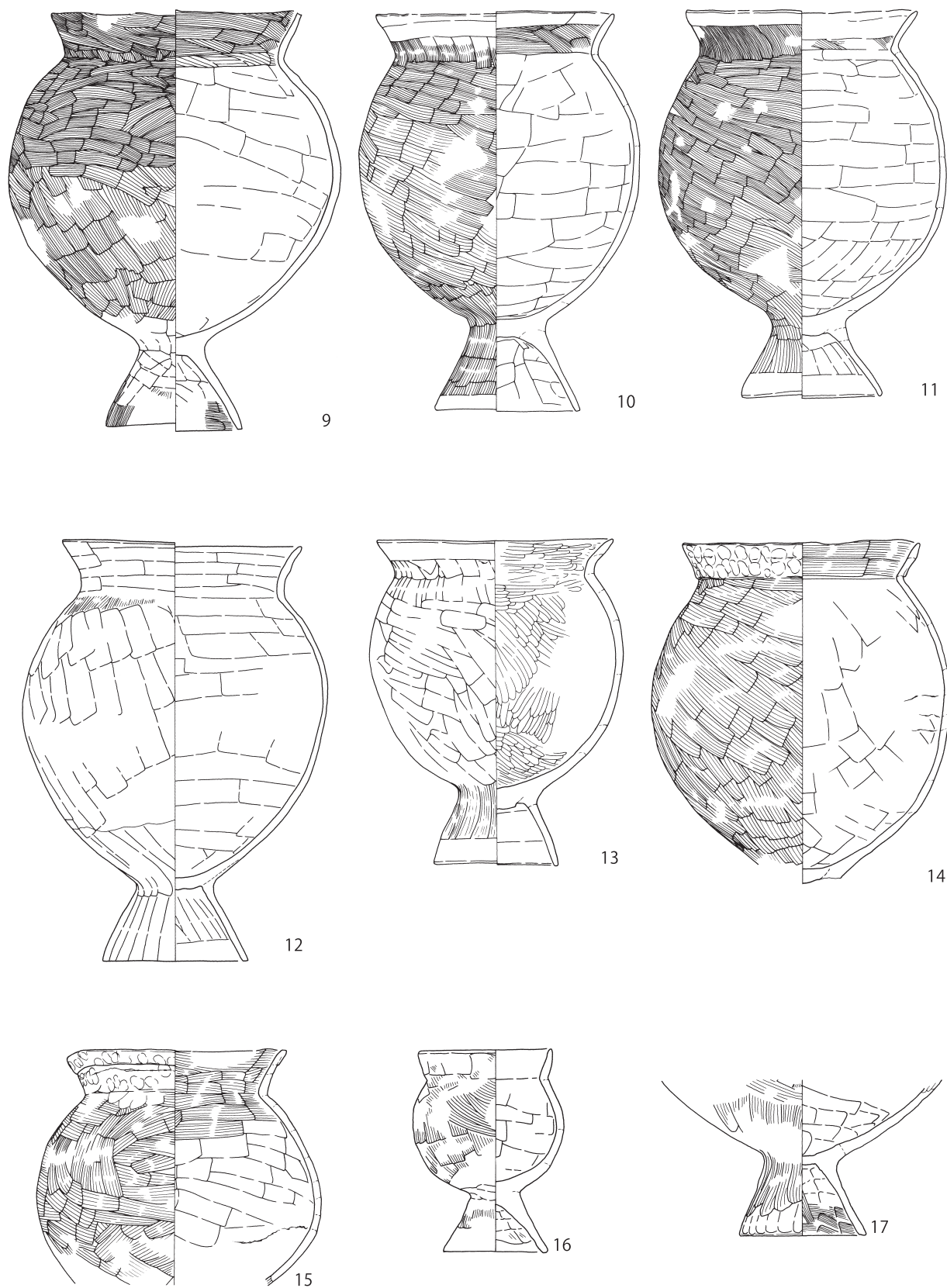
26は勾玉である。暗緑灰色を呈するが、滑石製と推定される。小型で、孔は両側から穿孔している。

27は貝巢穴痕泥岩である。

第40号住居跡の非掲載遺物は、古墳時代の土



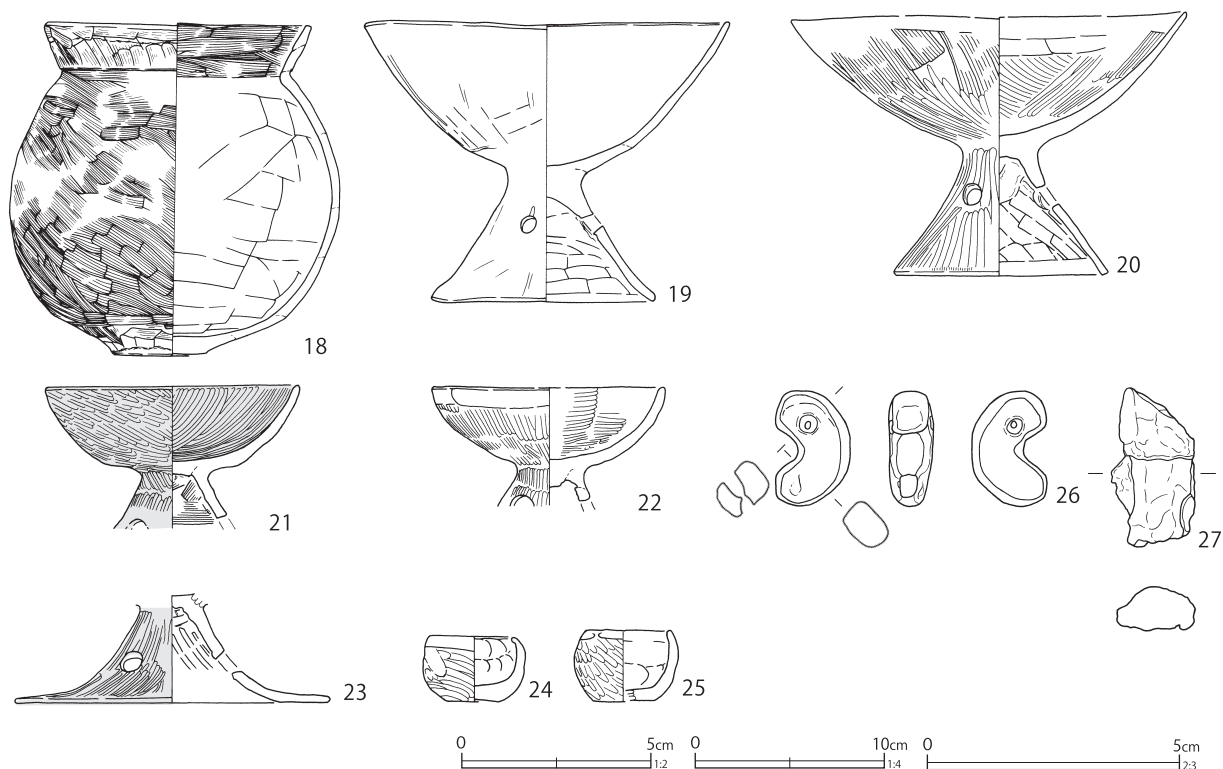
第141図 第40号住居跡出土遺物（1）



0 10cm
1:4

第142図 第40号住居跡出土遺物(2)

第3次調査

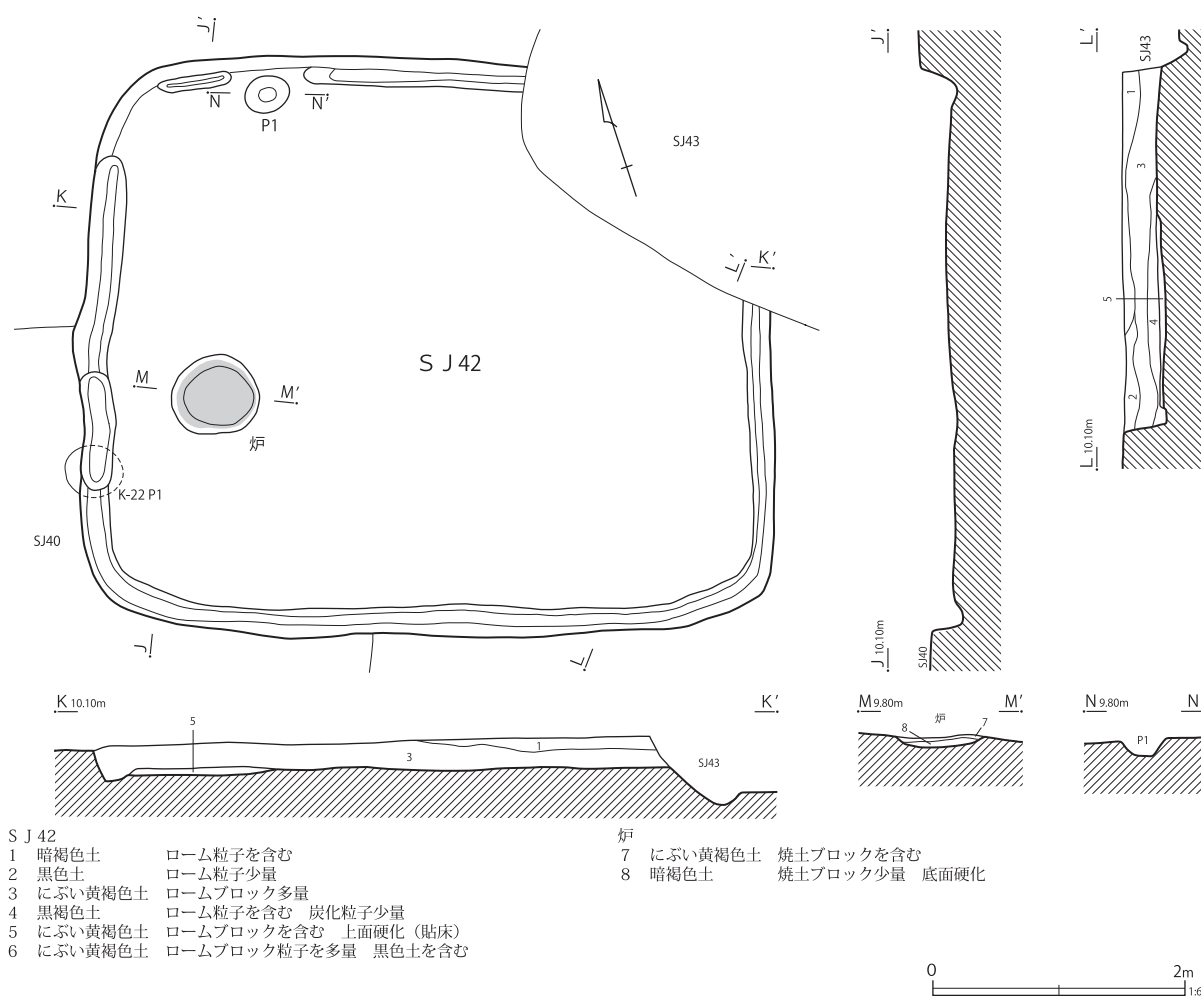


第143図 第40号住居跡出土遺物(3)

第16表 第40号住居跡出土遺物観察表(第141～143図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	20.2	[13.9]	—	C I K	75	普通	にぶい黄橙	No. 25 内外面赤彩 RL 縄文 S 字状結節文	193-8
2	土師器	壺	—	[25.0]	10.7	E H I	90	良好	浅黄橙	No. 25 肩部横羽状縄文 S 字状結節 2 段 外面赤彩 底部木葉痕	194-1
3	土師器	壺	15.3	23.5	6.4	C I K L	85	普通	にぶい褐	No. 2 複合口縁壺 胴部外面赤彩 白色シヤモット	194-2
4	土師器	壺	13.2	26.6	7.6	H K L	90	普通	橙	No. 1 C 白色シヤモット	194-3
5	土師器	壺	11.0	20.1	4.7	C E H I	70	普通	橙	No. 23	194-4
6	土師器	壺	(9.6)	[18.2]	(4.0)	E K L	20	普通	にぶい橙	No. 13 B・C 内外面赤彩 白色シヤモット	194-5
7	土師器	壺	(16.6)	[3.1]	—	C E H I K	25	普通	にぶい黄橙	No. 15 内外面赤彩	194-6
8	土師器	壺	—	[6.6]	(6.5)	D E I L	30	普通	灰黄褐	No. 16 A 白色シヤモット	194-7
9	土師器	台付甕	16.9	28.8	9.0	C I K	90	普通	にぶい黄橙	No. 25・27・28 掘り方	195-1
10	土師器	台付甕	15.8	27.2	9.4	C E I K L	95	普通	褐灰	No. 8 白色シヤモット	195-2
11	土師器	台付甕	15.6	26.3	9.2	C I K L	95	普通	黄褐	No. 9 B 白色シヤモット	195-3
12	土師器	台付甕	16.3	28.5	9.9	E H I	95	不良	にぶい黄橙	No. 30・33 ～ 35 C	195-4
13	土師器	台付甕	16.0	22.3	8.5	C E I K	70	普通	灰褐色	No. 26	195-5
14	土師器	台付甕	15.8	[23.2]	—	E I K L	85	普通	褐灰	No. 6・7 シヤモット	195-6
15	土師器	台付甕	14.3	[16.1]	—	E I K	65	普通	灰黄褐	No. 24 一括	196-1
16	土師器	台付甕	9.0	13.8	(7.0)	D E G H I K	65	普通	にぶい橙	No. 22 C 外面煤付着 胎土粗い(砂礫含む)	196-2
17	土師器	台付甕	—	[10.6]	8.6	C E I K	60	普通	橙	No. 14・33	196-3
18	土師器	甕	13.6	17.5	4.9	C E H I	80	普通	灰黄褐	No. 3	196-4
19	土師器	高坏	18.5	14.9	11.5	C E I K	95	普通	にぶい黄橙	No. 4・5 3 孔	196-5
20	土師器	高坏	20.8	13.6	10.8	C E I K	85	普通	淡赤橙	No. 10・24 A 3 孔	196-6
21	土師器	高坏	13.2	[7.6]	—	E H I L	80	普通	橙	No. 32・33 C 3 孔 内外面赤彩 白色シヤモット	197-1

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
22	土師器	高坏	(12.2)	[6.5]	—	E I	20	良好	黄灰	No.31 3孔 内外面黒色 ホゾ接合	197-2
23	土師器	高坏	—	[5.6]	(16.5)	E H I	30	普通	にぶい橙	No.20・24 3孔 坏部内外面赤彩 高台脚部外面赤彩	197-3
24	土師器	ミチア土器	4.5	3.4	2.6	E I K	95	普通	橙	No.12	197-4
25	土師器	ミチア土器	4.5	3.6	(3.0)	E I K	50	普通	暗灰黄	No.11 煤付着	197-5
26	玉	勾玉	長軸 2.3 最大径 1.0 穿孔径最大 0.3 最小 0.1 重さ 3.6 g				100	—	暗緑灰	No.36 滑石か	230-3
27	泥岩	貝巢穴痕泥岩	長さ 4.2 幅 2.2 厚さ 1.2 重さ 6.3 g							C	266-2



第144図 第42号住居跡（1）

器1, 185 gである。壺類や甕類の細片が中心である。

次に第42号住居跡について述べる。

K-22グリッドに位置する。

他の遺構との重複関係は、K-22グリッドP1を壊し、第40・43号住居跡に南西部と北東部

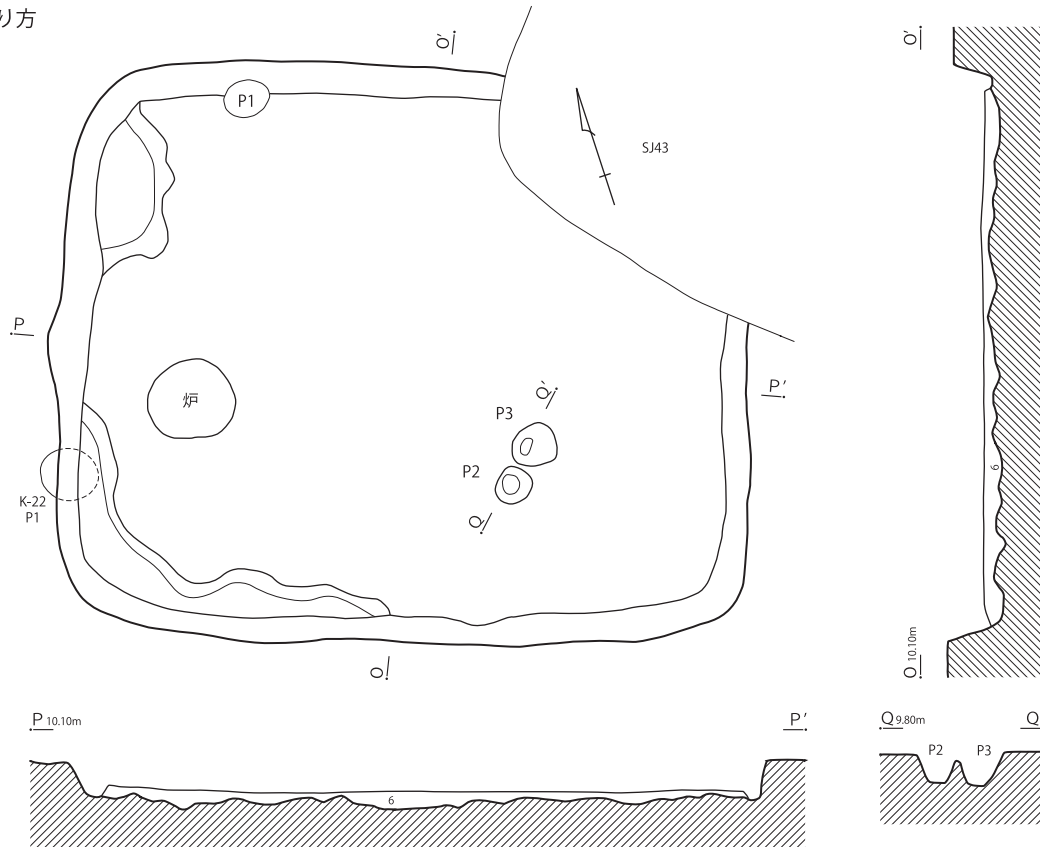
を壊される。

全体の規模は長軸 5.53 m、短軸 4.55 m、深さ 0.26 m、主軸方位はN-72°-Wである。平面形は東西に長い長方形である。

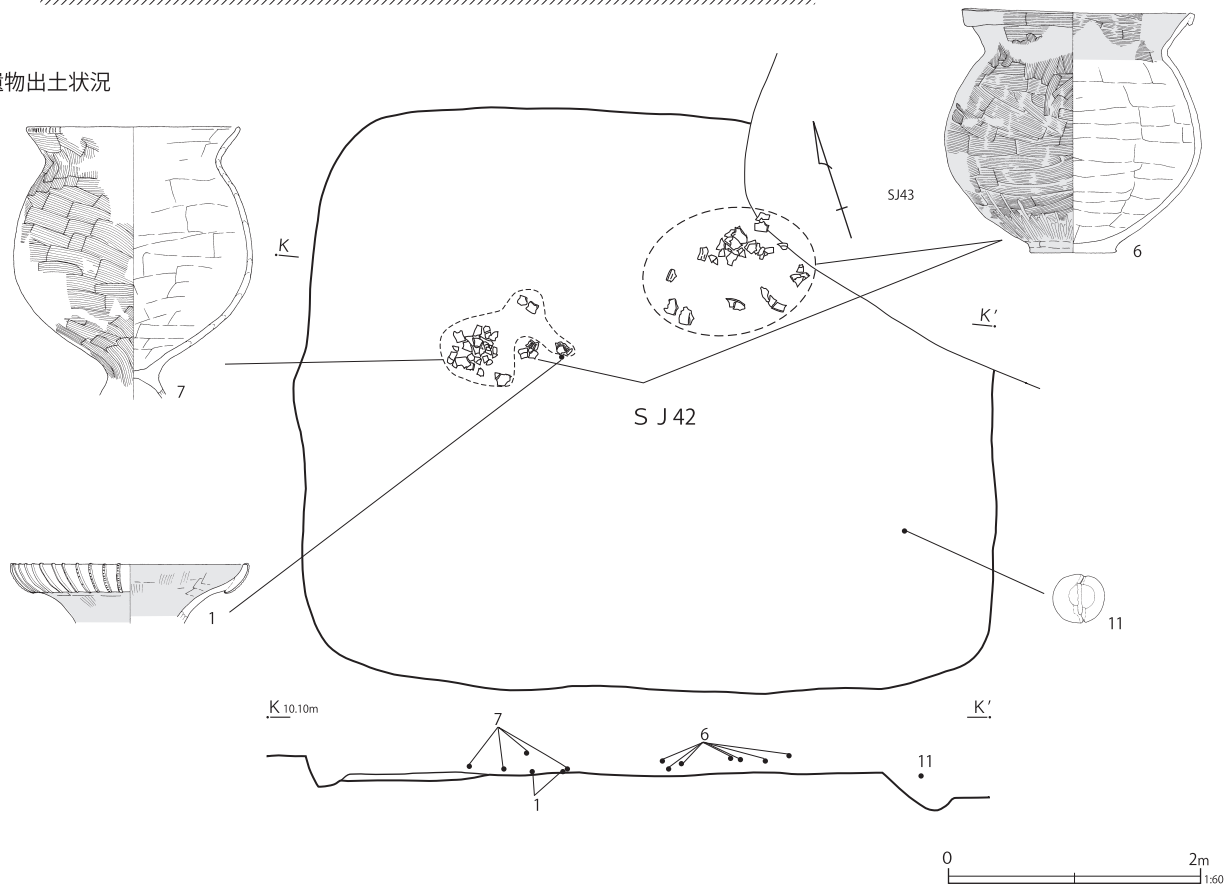
覆土はロームブロックを多く含むにぶい黄褐色土（第3層）を中心としており、第3層は住居全

第3次調査

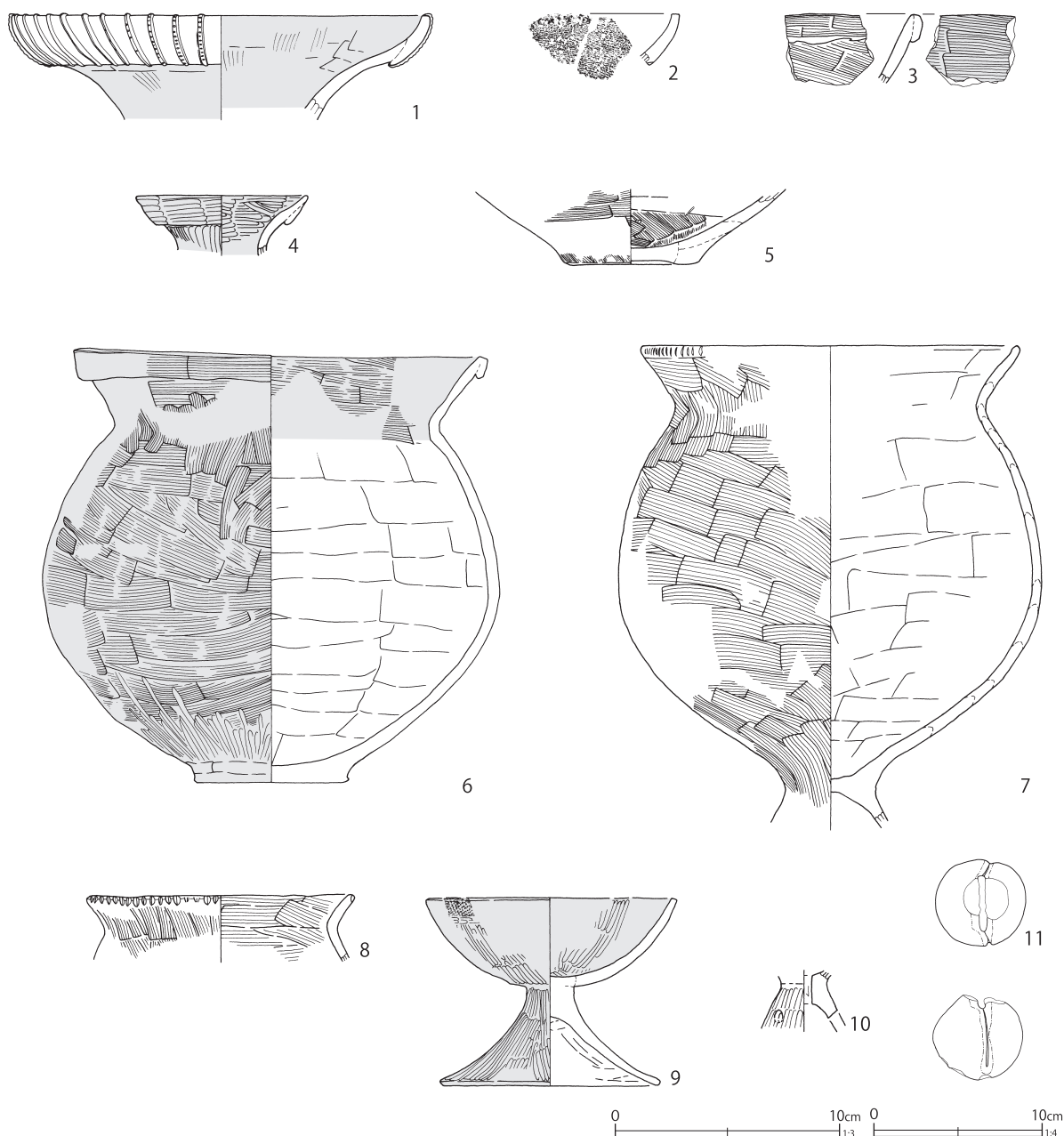
掘り方



遺物出土状況



第145図 第42号住居跡(2)



第146図 第42号住居跡出土遺物

体に堆積することから埋め戻しの可能性がある。

床面からは、炉跡とピットが1基ずつ、そして壁溝が検出された。

炉跡は西側に位置し、規模は長軸0.69 m、短軸0.62 m、深さ0.08 mで、平面形は円形に近い。覆土には、焼土ブロックが堆積していた。

ピットは北西部の壁際からP1が検出された。規模は長軸0.37 m、短軸0.30 m、深さ0.12 m

で、平面形は楕円形である。柱穴と推定される。

壁溝は、北西隅とP1を除いて全周する。幅0.10 m～0.30 m、深さ0.03 m～0.10 mである。

床面下には、貼床（第5・6層）が面的に認められた。掘り方は全体的に0.15 m前後の凹凸がみられ、特に北西部と南西部は溝状に掘り込まれる。また、掘り方の南東側からはP2とP3が検出された。規模はP2が長軸0.29 m、短軸

第3次調査

第17表 第42号住居跡出土遺物観察表（第146図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(24.8)	[6.2]	—	A H I	45	普通	淡黄	No. 10・14 器面劣化著しい 内外面赤彩 E・D 網目状捺糸文	197-6
2	土師器	壺	—	[3.0]	—	E H I K	5	不良	にぶい黄橙	糸幅 0.3 ～ 0.4mm 溝部捺糸文 口縁下端刻み 内面赤彩	197-7
3	土師器	壺	—	[4.3]	—	G H K	5	普通	浅黄橙	B 内面赤彩	197-8
4	土師器	壺	(10.0)	[3.5]	—	E I K L	20	普通	にぶい黄橙	A 内外面赤彩 白色シャモット	198-1
5	土師器	壺	—	[4.3]	(7.2)	C D E H I L	25	普通	にぶい赤褐	C 輪台成形 チャート小礫含む	198-2
6	土師器	壺	23.8	25.4	9.0	A H I K L	75	普通	にぶい橙	No. 1 ～ 7 内外面赤彩 シャモット	198-3
7	土師器	台付甕	(22.1)	[28.7]	—	E I	25	普通	黒褐	No. 8・9・11・12 E・F	198-4
8	土師器	甕	(15.2)	[3.9]	—	C E H K L	20	良好	にぶい黄橙	E 白色シャモット	198-5
9	土師器	高坏	(14.2)	11.1	(12.8)	C E H I K L	15	普通	浅黄橙	B・D ～ F 口唇端部単節 LR 縄文 内外面赤彩 白色シャモット	198-6
10	土師器	器台	—	[3.6]	—	E H I K	85	普通	淡橙	B 3 孔	198-7
11	土製品	土錘	最大高 3.7 径 3.9 ～ 4.0 重さ 40.4 g			C E	95	普通	灰白	No. 13 孔のないタイプ の大型土錘	230-1

0.26 m、深さ 0.20 m、P 3 が長軸 0.36 m、短軸 0.33 m、深さ 0.22 m である。

遺物は住居の北側に集中して出土した。

掲載遺物のうち、1 は北西部の床面から出土した。6 は北西部の床面から約 0.10 m 上位の高さで、7 箇所に分かれて出土した。7 は北東部の床面上、および床面から約 0.15 m 上位の高さまで、4 箇所に分かれて出土した。11 は南東部の床面上から出土した。

第42号住居跡の出土遺物は第146図に示した。

1 ～ 6 は壺である。1 は複合口縁壺で、頸部から口縁部にかけて大きく外反し、口縁部は内湾する。口縁部に棒状浮文を貼り付け、それぞれに刻みが施される。内外面の調整は不明瞭である。2 ～ 4 は複合口縁壺の口縁部である。2 は網目状捺糸文が施される。口縁部下端には刻みが施される。3 は複合部が短く、全体にハケメが施される。4 は小型で全体にヘラミガキが施される。5 は大型壺の底部で、内外面の一部にハケメが施される。6 は平底の壺である。口縁部の短い複合口縁で、頸部はくの字形である。胴部は中央に最大径をもつ球形胴である。外面はハケメとヘラミガキ、内面は口縁部にハケメ、胴部にヘラナデが施

される。

7 は台付甕である。口縁部はくの字に立ち上がり、胴部は球形胴である。口唇部に刻みが施される。外面はハケメ、内面はヘラナデが施される。

8 は甕の口縁部で、口唇部に刻みが施される。

9 は高坏である。やや小型で坏部は碗形である。口唇部と口縁部に単節 LR の縄文が施される。脚部に透孔はなく、裾部はやや外反する。全体にヘラミガキが施される。

10 は小型器台の破片である。器受け部と脚部の接合部で、脚部に円形の三孔透孔が施される。

11 は土錘である。球形で中央に溝がめぐる。

第42号住居跡の非掲載遺物は、古墳時代の土器 2,411 g である。壺類や甕類の細片が中心である。

最後に第43号住居跡について述べる。

J-23、K-22・23 グリッドに位置する。

他の遺構との重複関係は、第42号住居跡を壊す。

全体の規模は長軸 4.96 m、短軸 5.85 m、深さ 0.47 m、主軸方位は N-49° -W である。平面形は北東から南西方向に長い長方形である。

覆土は、ローム粒子を含む暗褐色土（第1・2

層)、ロームブロックを含む黒褐色土(第3層)を中心とする自然堆積である。

床面から炉跡1基、貯蔵穴1基、ピット8基、壁溝が検出された。

炉跡は、床面の中央からやや北東に位置する。規模は長軸0.67 m、短軸0.60 m、深さ0.12 mで、平面形は円形である。覆土は焼土粒子や焼土ブロックが堆積していた。

貯蔵穴は南東側の壁際に位置する。規模は長軸0.95 m、短軸0.70 m、深さ0.68 mで、平面形は楕円形である。断面形は漏斗形で、中央が深い。覆土は黒褐色土が堆積していた。

ピットは、P1～P4の4基が、位置と規模から支柱穴と考えられる。P5とP8も支柱穴と同様の覆土の状況だが、その位置から支柱穴か入口施設と考えられる。P6とP7は小型で浅く、性格は判然としない。それぞれの規模は、P1が長軸0.37 m、短軸0.33 m、深さ0.64 m、P2が長軸0.42 m、短軸0.37 m、深さ0.60 m、P3が長軸0.35 m、短軸0.31 m、深さ0.60 m、P4が長軸0.37 m、短軸0.34 m、深さ0.67 m、P5が長軸0.35 m、短軸0.30 m、深さ0.42 m、P6が長軸0.33 m、短軸0.23 m、深さ0.15 m、P7が長軸0.22 m、短軸0.22 m、深さ0.08 m、P8が長軸0.35 m、短軸0.30 m、深さ0.70 mである。

壁溝は全周する。幅0.20 m～0.35 mで、深さ0.03 m～0.09 mである。

床面下には、貼床(第6・7層)が面的に認められた。掘り方は壁際に溝状の掘り込みが検出された。また、北西側にP9、南側にP10を確認した。規模はP9が長軸0.40 m、短軸0.28 m、深さ0.05 m、P10が長軸0.26 m、短軸0.20 m、深さ0.10 mである。

遺物は散在して出土したが、中央と南東部からは出土しなかった。

掲載遺物のうち、7は南部の床面の0.04 m上

位の高さから出土した。8は北部の床面上から出土した。23は東部の床面上から出土した。24は西部隅の床面の0.08 m上位の高さから出土した。25は南部の床面の0.16 m上位の高さから出土した。26は北西部壁際の床面上から出土した。27は東隅の床面上から出土した。28は北西部の床面上から出土した。31は北西部の床面上から出土した。

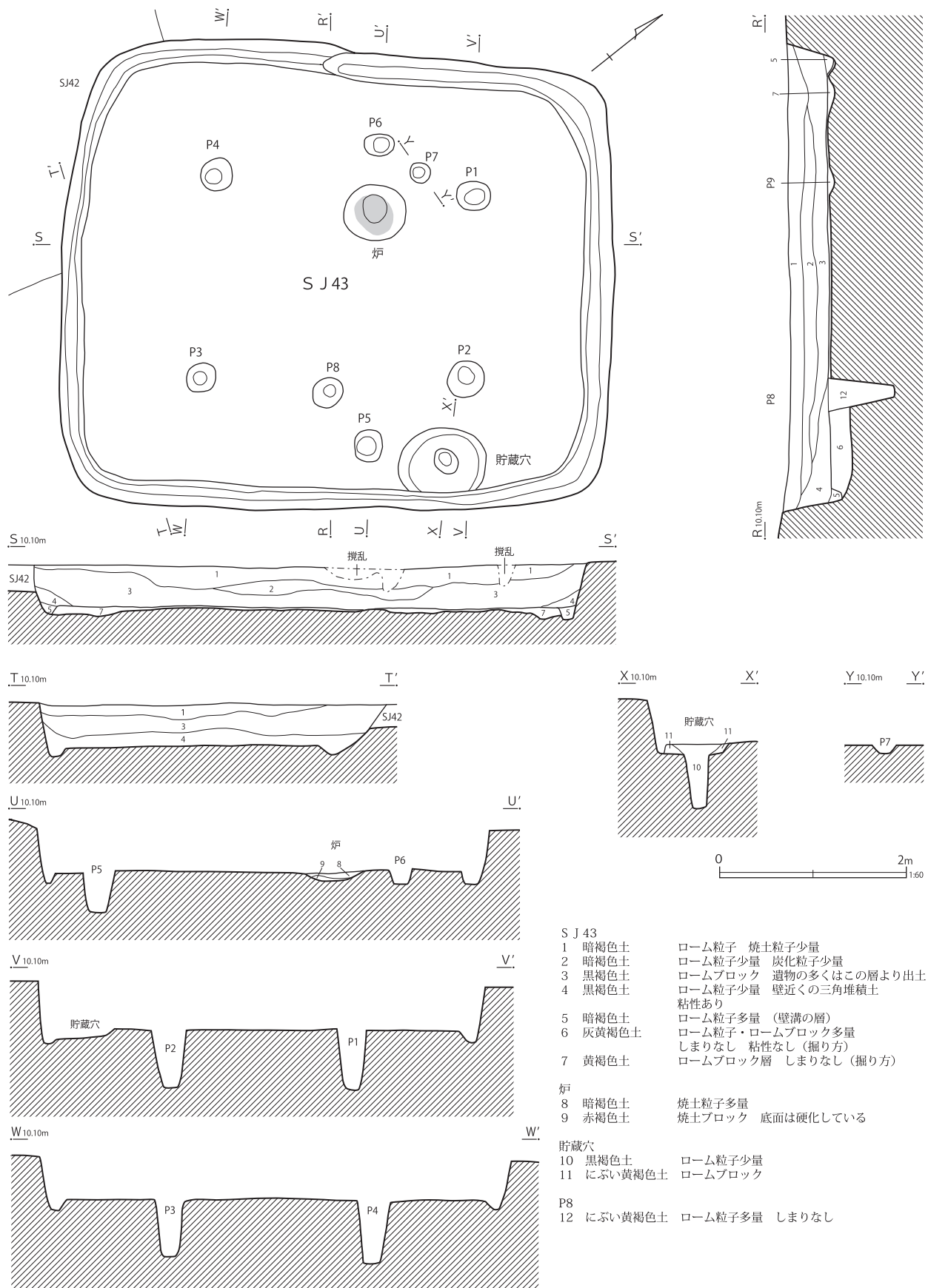
第43号住居跡の出土遺物は、第149・150図に示した。

1～6は壺である。1は単口縁壺で口縁部は外反し、頸部は太い。口縁部から頸部にかけてハケメ後ヘラミガキを、胴部はヘラミガキが施される。内面は胴部にヘラナデが施されるが、輪積み痕を明瞭に残す。2～4は複合口縁壺の破片である。いずれも複合部は薄い。2は口縁部にハケメ、頸部にヘラミガキが施される。3は口縁部に棒状浮文が施され、4は単節のLR縄文が施される。5は胴部片で、S字状結節文と単節LR、RLの縄文が施される。6は小型壺の底部である。

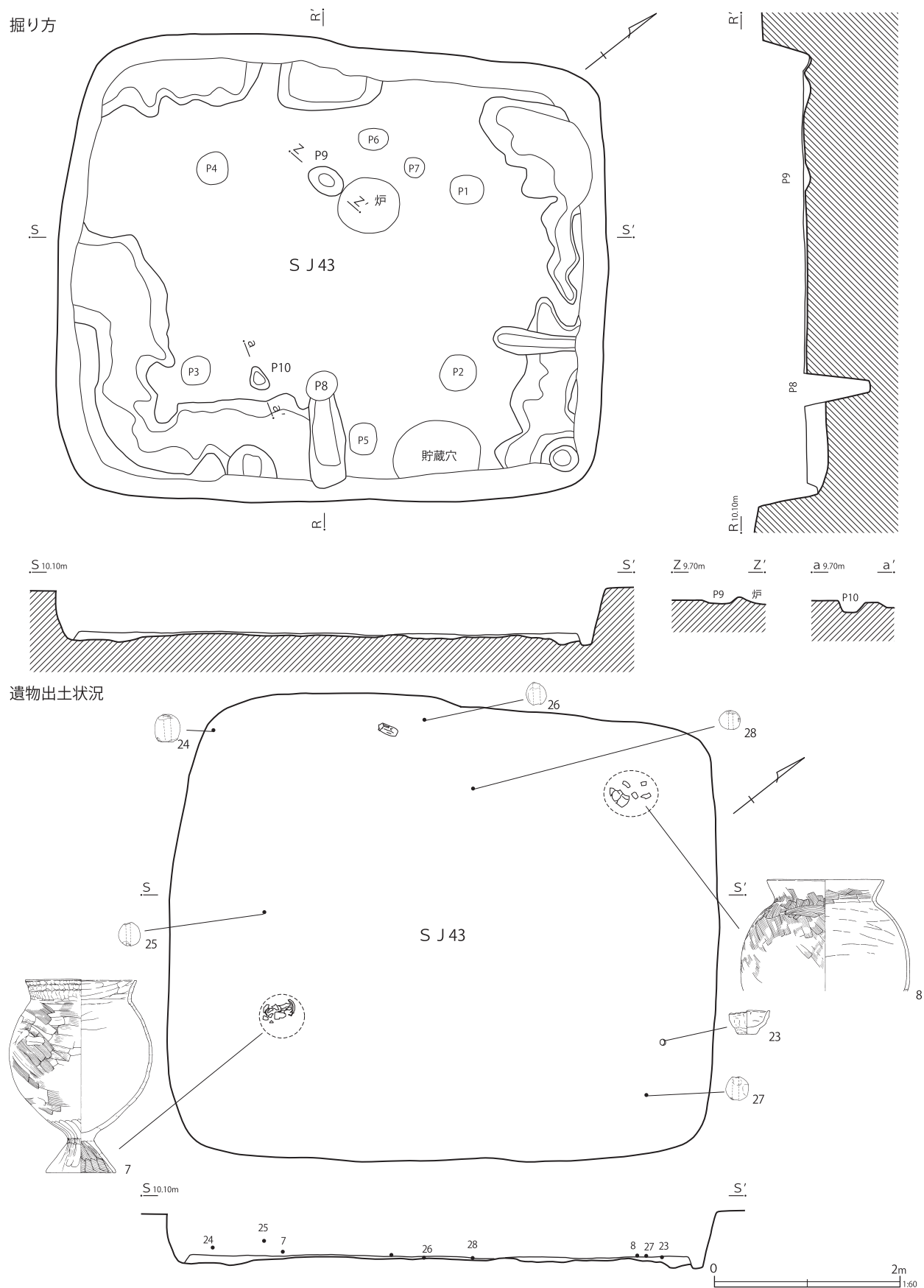
7～20は甕である。7の台付甕は口縁部が直立気味に開き、口縁部に輪積み痕とユビオサエが施される。胴部は倒卵形でハケメ後、ユビナデが雑に施される。脚部も同様の調整が施される。内面は胴部にヘラナデを、脚部内面にハケメが施される。8は胴部上半の破片で、口縁部は直線的に開き、胴部は肩が張る。外面にハケメ、内面にヘラナデが施される。9～14は口縁部の破片である。10・14はS字状口縁甕で、11は小型甕である。12はヘラミガキを、13は輪積み痕が残し、ユビオサエが施される。15は胴部の破片で、倒卵形で外面にハケメ、内面にヘラナデが施される。16～20は脚部である。18・20はホゾ接合である。

21と22は高坏である。21の脚部は円形の三孔透孔、外面にヘラミガキが施される。ホゾ接合である。22は口縁部の破片で、内外面にヘラミガキが施される。

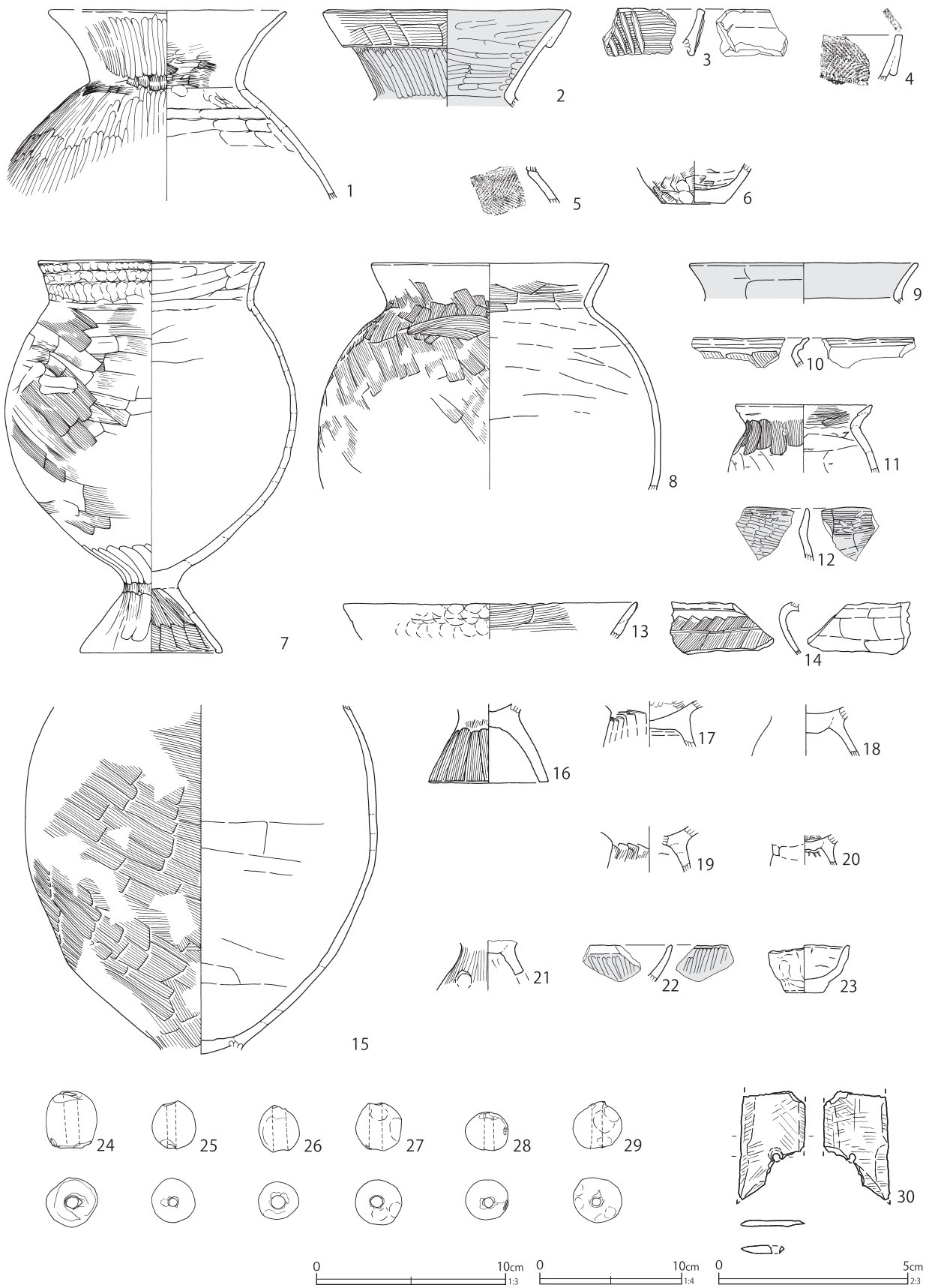
第3次調査



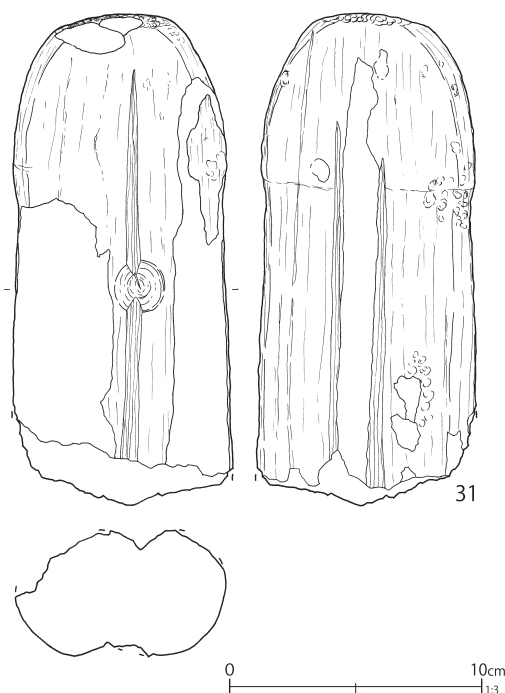
第147図 第43号住居跡(1)



第148図 第43号住居跡(2)



第149図 第43号住居跡出土遺物(1)



第150図 第43号住居跡出土遺物(2)

第18表 第43号住居跡出土遺物観察表(第149・150図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(16.4)	[13.3]	—	E I K	35	普通	にぶい黄橙	B・C SJ42B 単口縁壺	198-8
2	土師器	壺	16.8	[6.8]	—	D H I K L	70	普通	にぶい橙	B・E・炉 内外面赤彩 白色シャモット	199-1
3	土師器	壺	—	[3.2]	—	A E K	5	普通	浅黄橙	D 複合口縁壺	199-2
4	土師器	壺	—	[3.7]	—	E H I K L	5	普通	にぶい黄橙	B 口縁外面単節 LR 縄文を矢羽状に施文 白色シャモット	199-3
5	土師器	壺	—	[2.6]	—	H I	5	普通	にぶい橙	A S字状結節 単節 LR 単節 RL	199-4
6	土師器	壺	—	[2.8]	4.4	E I K L	70	普通	浅黄橙	D 白色シャモット	199-5
7	土師器	台付甕	15.2	27.6	9.2	I K L	60	普通	にぶい黄橙	No.9 C 白色シャモット	199-6
8	土師器	甕	(16.4)	[15.9]	—	C E G K	40	普通	にぶい橙	No.5 内外面煤付着	199-7
9	土師器	甕	(16.0)	[2.8]	—	E H I	10	普通	浅黄橙	B 内外面赤彩 内面風化し調整不明瞭	199-8
10	土師器	甕	—	[2.0]	—	I K	10	普通	にぶい橙	A S字甕	200-1
11	土師器	甕	(9.4)	[4.7]	—	C E I L	20	普通	にぶい褐	C 輪積痕あり 白色シャモット	200-2
12	土師器	甕	(9.6)	[3.7]	—	I L	5	普通	浅黄橙	B 内外面赤彩 白色シャモット	200-3
13	土師器	甕	(20.6)	[2.4]	—	E I K	10	普通	淡黄	B	200-4
14	土師器	甕	—	[3.8]	—	C E K	10	良好	浅黄橙	A S字甕	200-5
15	土師器	台付甕	—	[24.6]	—	E H I K	35	普通	灰白	B	200-6
16	土師器	台付甕	—	[8.4]	(5.5)	C E I K	60	普通	にぶい橙	B	200-7
17	土師器	台付甕	—	[3.2]	—	E H I L	65	普通	にぶい黄橙	B 白色シャモット	200-8
18	土師器	台付甕	—	[3.4]	—	C E G H K	50	普通	浅黄橙	A ホゾ接合	201-1
19	土師器	台付甕	—	[3.2]	—	E I L	35	普通	にぶい橙	B 白色シャモット	201-2
20	土師器	台付甕	—	[2.1]	—	C E H I L	75	普通	にぶい黄	B 白色シャモット ホゾ接合	201-3
21	土師器	高坏	—	[3.5]	—	E H I K L	70	良好	灰褐	C 3孔 ホゾ接合 白色シャモット	201-4
22	土師器	高坏	—	[2.5]	—	C E H I K	5	普通	にぶい橙	E 内外面赤彩	201-5
23	土師器	手捏ね土器	5.4	3.2	2.6	C E I K L	100	普通	にぶい橙	No.6 白色シャモット	201-6

第3次調査

番号	種別	器種	計測値	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
24	土製品	土玉	最大高 3.0 径 2.7 孔径 0.7 重さ 18.8 g 最大高 2.5	C E I	100	普通	にぶい橙	No. 1 工具痕あり	229-1
25	土製品	土玉	径 2.3 孔径 0.5 重さ 12.1 g 最大高 2.5	H I	100	普通	浅黄橙	No. 8	229-1
26	土製品	土玉	径 2.1 孔径 0.7 重さ 8.7 g 最大高 2.5	I	100	普通	明黄褐	No. 2 粘土紐巻き付け痕あり 穿孔後引き抜き	229-1
27	土製品	土玉	径 2.4 孔径 0.6 重さ 12.3 g 最大高 2.0	I	100	普通	にぶい黄橙	No. 7 指頭痕あり	229-1
28	土製品	土玉	径 2.2 孔径 0.5 重さ 8.0 g 最大高 2.4	H I	100	普通	黄橙	No. 4 種子圧痕あり	229-1
29	土製品	土玉	径 2.6 孔径 0.4 重さ 13.5 g	I	100	普通	赤褐	B 指頭圧痕 穿孔後引き抜き	229-1
30	石製品	石製模造品	長さ [2.9] 幅 [1.7] 厚さ 0.2 重さ 1.1 g					剣形か 滑石	230-4
31	石器	砥石	長さ [19.3] 幅 [8.6] 厚さ [5.5] 重さ 1445.6 g					No. 3 石棒を再利用している 最終的に砥石として使用 緑泥片岩	231-1

23 は手捏ね土器である。碗形で底部が高台状に立ち上がる。

24 ～ 29 は土玉である。

30 は石製模造品である。小形で薄い作りだが、切先を表現していることから、剣形と推定される。中央に穿孔が施される。石材は滑石である。

31 は砥石である。縄文時代の石棒を転用しており、折損している。表裏面それぞれの中央に、断面 V 字形の研ぎ痕が直線状に残る。石材は緑泥片岩である。

第 43 号住居跡から非掲載遺物は、古墳時代の土器が 3,451 g である。壺類や甕類の細片が中心である。

第 41・52 号住居跡（第 151 ～ 153 図）

第 41・52 号住居跡は重複して検出された。

他の遺構との重複関係は、第 8 号方形周溝墓に壊される。両住居跡の重複関係は、この周溝墓が重複部分を壊しているため、明らかでない。

まず、第 41 号住居跡について述べる。

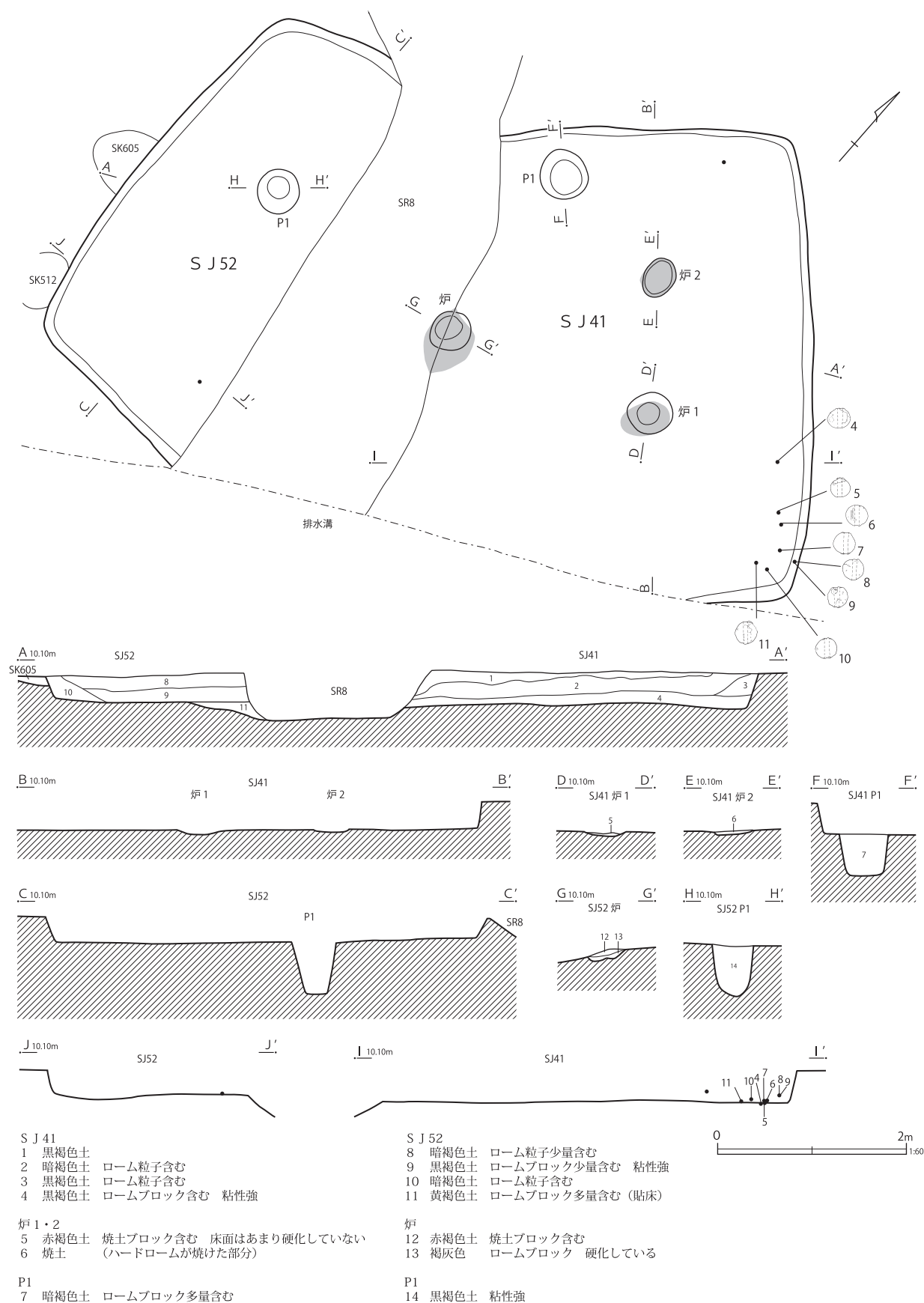
K-26、L-26 グリッドに位置し、南側は調査区域外にかかる。

全体の規模は、長軸 4.98 m、短軸残存長 4.35 m、深さ 0.35 m、主軸方位は N-40° - W である。平面形は方形と推定される。

覆土は、ローム粒子を含む暗褐色土と黒褐色土を中心とする自然堆積である。

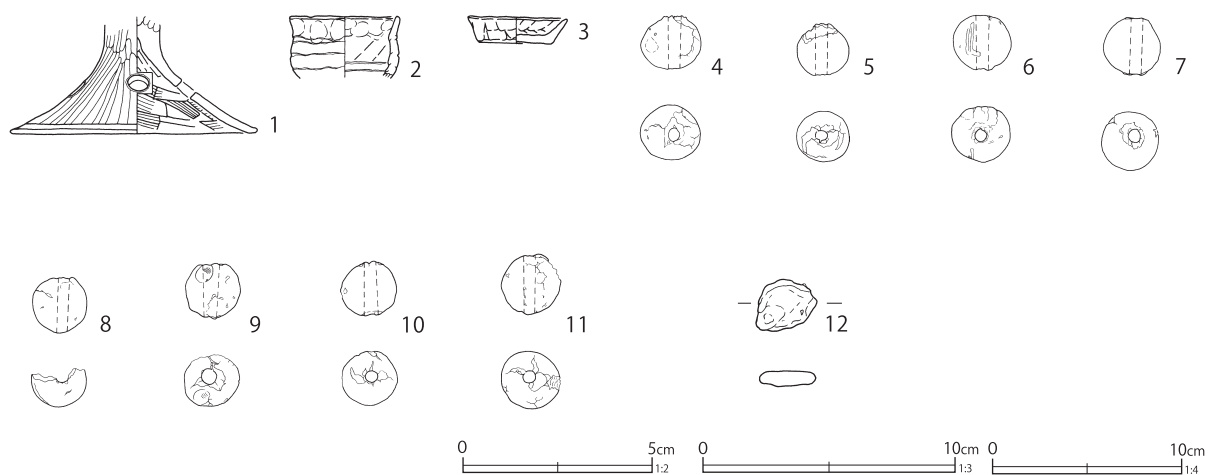
床面からは炉跡 2 基、ピット 1 基が検出された。

2 基の炉跡は、中央からやや東壁寄りに、北西 - 南東軸方向に並ぶ。南東側を炉 1、北西側を炉 2 とした。炉 1 の規模は、長軸 0.32 m、短軸



第151図 第41・52号住居跡(1)

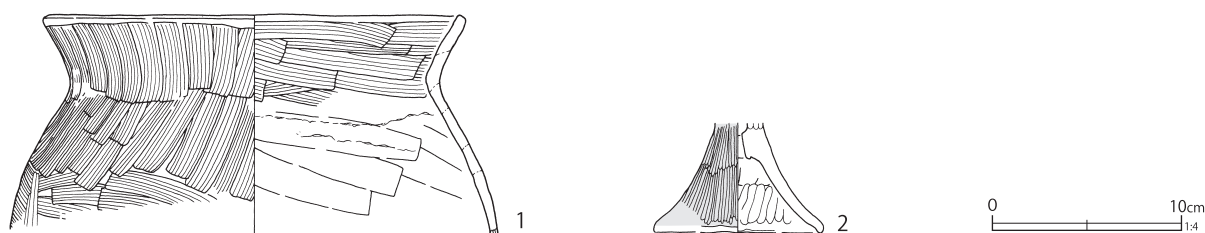
第3次調査



第152図 第41号住居跡出土遺物

第19表 第41号住居跡出土遺物観察表 (第152図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	高坏	—	[6.1]	12.8	A H I K	70	良好	明褐灰	4孔	201-7
2	土師器	ミナチヤ土器	(5.5)	[3.2]	—	C H I K	20	普通	にぶい黄橙	B	201-8
3	土師器	ミナチヤ土器	(5.2)	1.3	3.7	C H I K	85	普通	浅黄橙	A	202-1
4	土製品	土玉	最大高 2.3 径 2.4 ~ 2.6 孔径 0.5 ~ 0.6 重さ 12.2 g			A	100	普通	褐灰	No. 1	229-1
5	土製品	土玉	最大高 2.3 径 2.2 ~ 2.3 孔径 0.5 ~ 0.6 重さ 9.4 g			A I	100	普通	褐灰	No. 2	229-1
6	土製品	土玉	最大高 2.3 径 2.4 孔径 0.4 ~ 0.5 重さ 9.7 g			A I	60	普通	にぶい褐	No. 3	229-1
7	土製品	土玉	最大高 2.4 径 2.4 ~ 2.5 孔径 0.5 重さ 13.1 g			A I	100	普通	褐灰	No. 4	229-1
8	土製品	土玉	最大高 2.4 径 1.6 ~ 2.3 孔径 0.5 重さ 7.2 g			A I	50	普通	にぶい黄橙	No. 5	229-1
9	土製品	土玉	最大高 2.4 径 2.2 ~ 2.3 孔径 0.6 ~ 0.7 重さ 8.8 g			A I	60	普通	にぶい褐	No. 5	229-1
10	土製品	土玉	最大高 2.3 径 2.3 ~ 2.4 孔径 0.5 ~ 0.6 重さ 11.2 g			A I	100	普通	黒褐	No. 6	229-1
11	土製品	土玉	最大高 2.6 径 2.5 孔径 0.4 ~ 0.5 重さ 13.1 g			A C I	100	普通	にぶい橙	No. 7	229-1
12	泥岩	貝巢穴痕泥岩	長さ 1.4 幅 1.5 厚さ 0.4 重さ 0.7 g							A	266-2



第153図 第52号住居跡出土遺物

第20表 第52号住居跡出土遺物観察表（第153図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	(21.5)	[11.7]	—	D E I K	40	普通	にぶい橙	No. 1	202-2
2	土師器	器台	—	[5.8]	(8.8)	C I	30	普通	明赤褐	D L26 外面赤彩	202-3

0.29 m、深さ 0.04 m で、平面形は円形である。覆土には焼土ブロックが堆積していた。底面はあまり焼き締まっていなかった。炉 2 の規模は、長軸 0.28 m、短軸 0.22 m、深さ 0.04 m で、平面形は楕円形である。覆土は確認できなかった。底面の焼土面のみを検出した。

P 1 は住居の北西側に位置する。掘り込みの深さから支柱穴と考えられる。規模は長軸 0.52 m、短軸 0.51 m、深さ 0.44 m である。覆土はロームブロックを多く含む暗褐色土が堆積していた。

壁溝や貼床は検出されなかった。

遺物は南東部に集中して出土した。土器は少なく、土玉が主体である。

掲載遺物のうち、4～7、10・11 は南東部の床面上から出土した。8・9 は南東部の床面の 0.08 m 上位の高さから出土した。

第41号住居跡の出土遺物は第152図に示した。

1 は高坏の脚部である。裾はやや外反する。円形の四孔透孔が施され、外面にヘラミガキ、内面にハケメが施される。

2 と 3 はミニチュア土器である。2 は埴形で輪積み痕を明瞭に残す。3 は皿形である。

4～11 は土玉である。

12 は貝巢穴痕泥岩である。

第41号住居跡から非掲載遺物は、古墳時代の

土器が 690 g 出土した。壺類や甕類、高坏の細片が中心である。

次に第52号住居跡について述べる。

L-26 グリッドに位置し、南東部は調査区域外に含まれる。

他の遺構との重複関係は、第512・605号土壌を壊し、第8号方形周溝墓に壊される。

全体の規模は長軸 4.58 m、短軸残存長 2.10 m、深さ 0.22 m、主軸方位は N-0° である。平面形は方形と推定される。

覆土はローム粒子を含む暗褐色土（第8・10層）やロームブロックを含む黒褐色土（第9層）などの自然堆積である。

床面からは炉跡1基、ピット1基が検出された。

炉跡は中央から東に位置する。規模は長軸 0.47 m、短軸 0.41 m、深さ 0.10 m で、平面形は楕円形である。覆土は焼土ブロックが堆積していた。底面は焼けて硬化していた。

P 1 は、中央からやや北側に位置する。掘り込みの深さから支柱穴と考えられる。規模は長軸 0.46 m、短軸 0.44 m、深さ 0.53 m である。黒褐色土が堆積していた。

壁溝は検出されなかった。

床面下には、貼床（第11層）が部分的に認められた。

遺物は少なく、破片類のみが出土した。

第52号住居跡の掲載遺物は第153図に示した。

1は台付甕か。口縁部は直線的に開き、口唇部に面取りが施される。外面と口縁部内面にハケメ、胴部内面はヘラナデが施されるが、輪積み痕が残る。

2は小型器台の脚部である。器肉は厚く、裾は短い。外面にヘラミガキ、内面にヘラナデが施される。透孔は施されない。

第52号住居跡の非掲載遺物は、古墳時代の土器340gである。壺類や甕類の細片が中心である。

第44号住居跡（第154～157図）

K-23・24グリッドに位置する。

他の遺構との重複関係は、第33号溝跡、第612・632・649号土壌を壊す。

全体の規模は、長軸4.25m、短軸3.82m、深さ0.30m、主軸方位はN-60°-Eである。平面形は、北東から南西方向に長い長方形である。

覆土は、マンガンやローム粒子を含む灰黄褐色土（第2層）や、ローム粒子を含む褐灰色土（第3層）などからなる自然堆積である。

床面から炉跡1基、貯蔵穴1基、壁溝が検出された。ピットは検出されなかった。

炉跡は、床面の中央からやや南西に位置する。規模は長軸0.55m、短軸0.55m、深さ0.12mで、平面形は円形である。覆土は焼土ブロックが堆積し、底面は焼けて硬化していた。

貯蔵穴は床面の南隅に位置する。規模は長軸0.85m、短軸0.50m、深さ0.28mで平面形は楕円形である。覆土は暗褐色土や黒褐色土などの自然堆積である。

壁溝は北西側から東側壁面、および南西壁面沿いに検出された。幅0.12m～0.24m、深さ0.03m～0.07mである。

床面下には貼床と掘り方が全面に認められた。掘り方は凹凸が著しく、中央部が盛り上がり、壁際が比較的平坦である。貼床は、ロームブロック

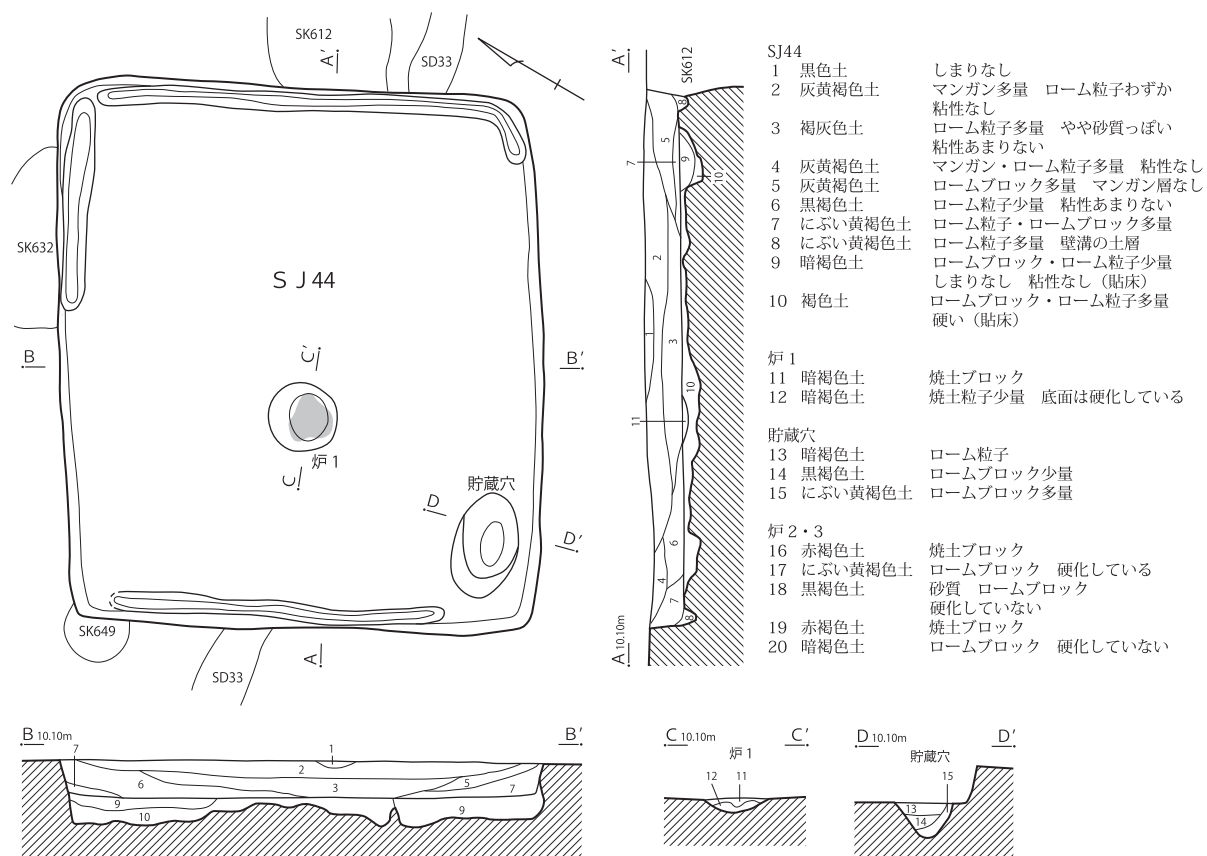
を含む暗褐色土や褐色土からなる。

遺物の多くは、中央から南西側から出土し、特に南隅の貯蔵穴内部と、その周辺に集中していた。これらの出土層位は、覆土中位（第2・3層）と床面上が多かった。

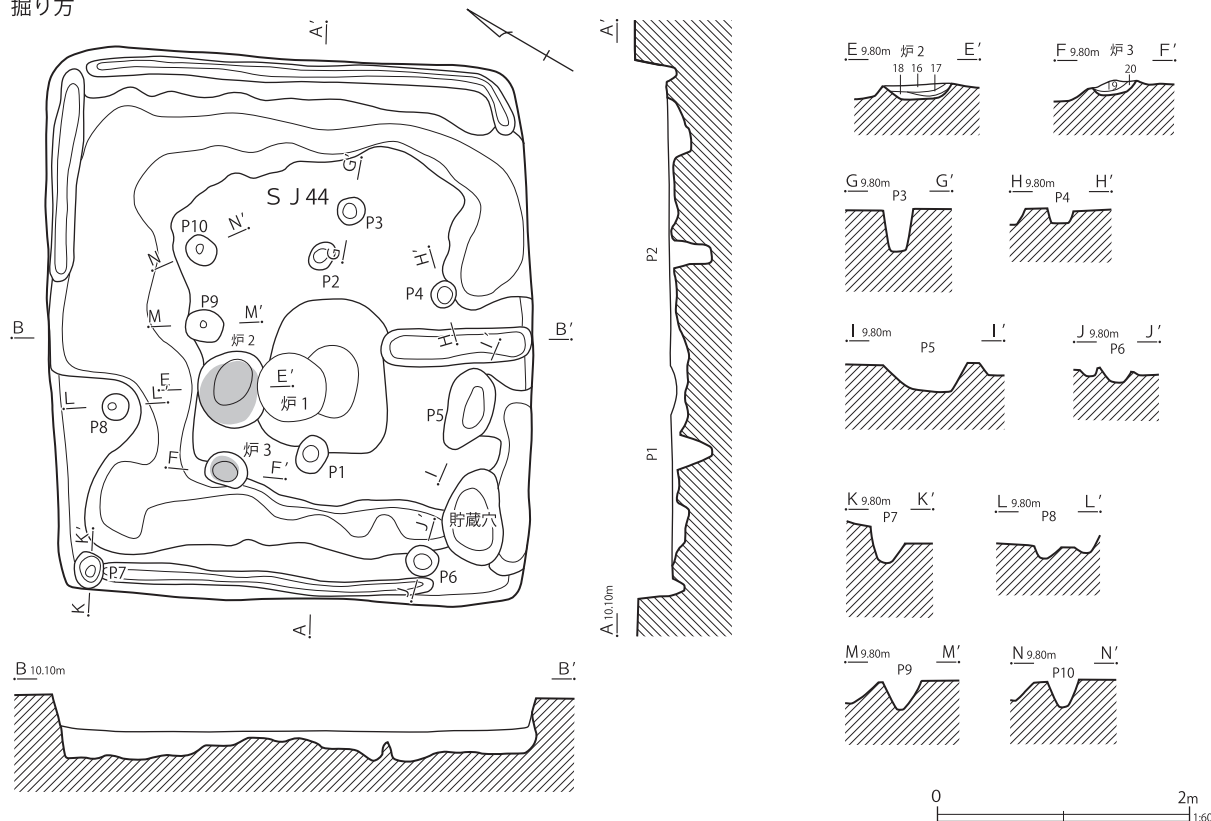
掲載遺物のうち、1は南西部の床面上から出土した。4は北西部の床面上から出土した。5は北西部と南部の2箇所出土した破片が接合した。B-B'第2層相当の高さから出土した。9・20は貯蔵穴内から出土した。10・14・23は、中央のB-B'第3層相当の高さから出土した。13は北西部のB-B'第6層相当の高さから出土した。17・19・25～28は南隅の床面上、貯蔵穴の脇から出土した。18は中央付近のB-B'第3層相当から、2箇所に分かれて出土した。30と31は中央付近、32は南西部のB-B'第2層相当の高さから出土した。33は北東部の床面上から出土した。35は中央よりやや南西のB-B'第3層相当の高さから出土した。36は中央よりやや南西のB-B'第2層相当の高さから出土した。37は中央付近のB-B'第3層相当の高さから出土した。

出土遺物は第156・157図に示した。

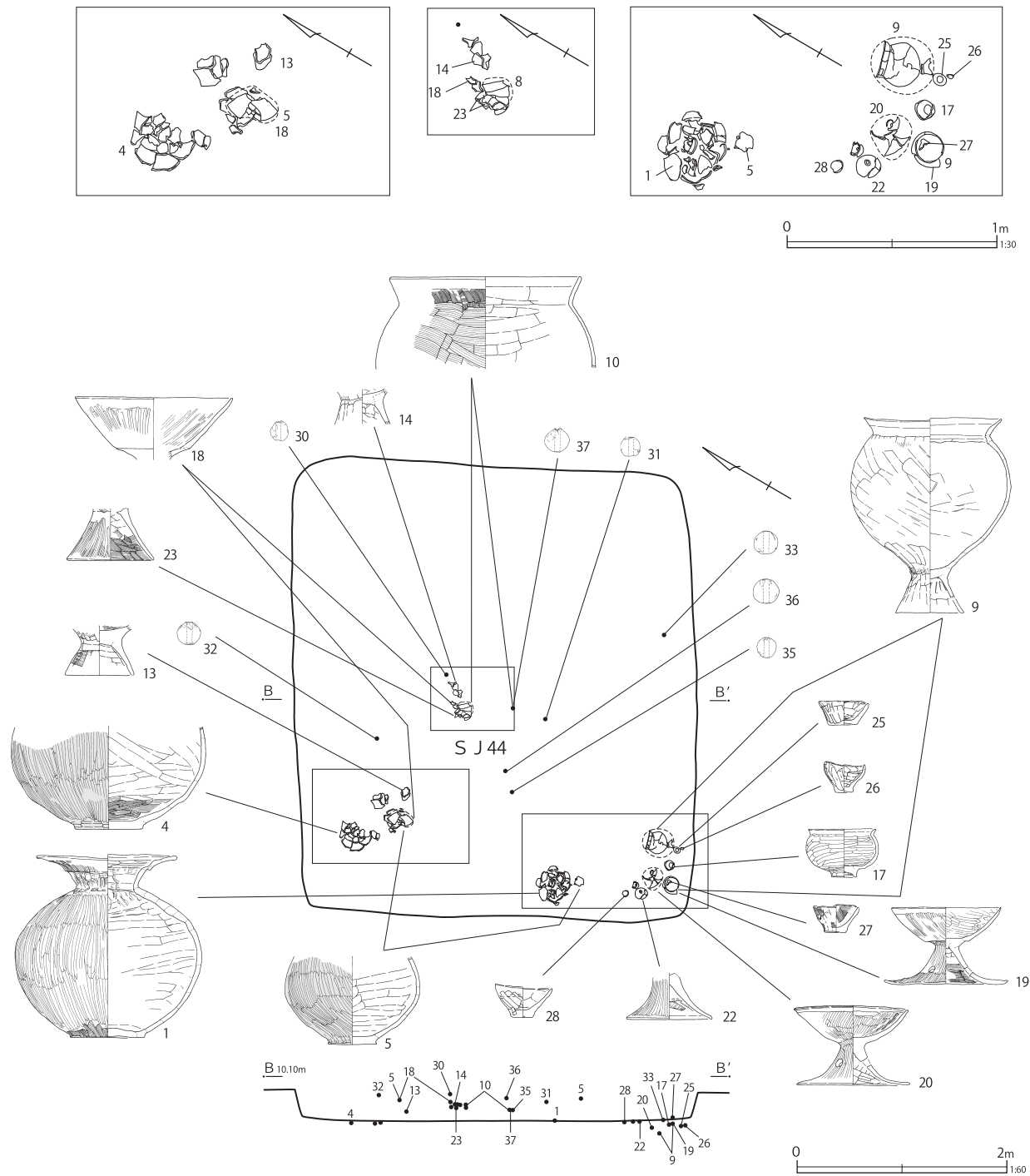
1～8は壺である。1は二重口縁壺である。口縁部から頸部にかけて器高は低いが、大きく外反する。口縁部の受け部は短い。胴部は球形胴で中に最大径が位置する。底部は平底で、底径が大きい。器肉は厚い。外面は口縁部から頸部にかけてハケメ、胴部にヘラミガキを、内面は口縁部から頸部にハケメ、胴部はユビオサエとヘラナデが施される。内面には輪積み痕が残る。2・3は複合口縁壺の口縁部で、2は棒状浮文を貼付する。3はハケメが施される。4は大型壺の胴部下半で、外面にヘラミガキ、内面にヘラナデが施される。5・6は小型壺の胴部下半で、外面にヘラミガキ、内面にヘラナデが施される。7・8は壺の底部か。



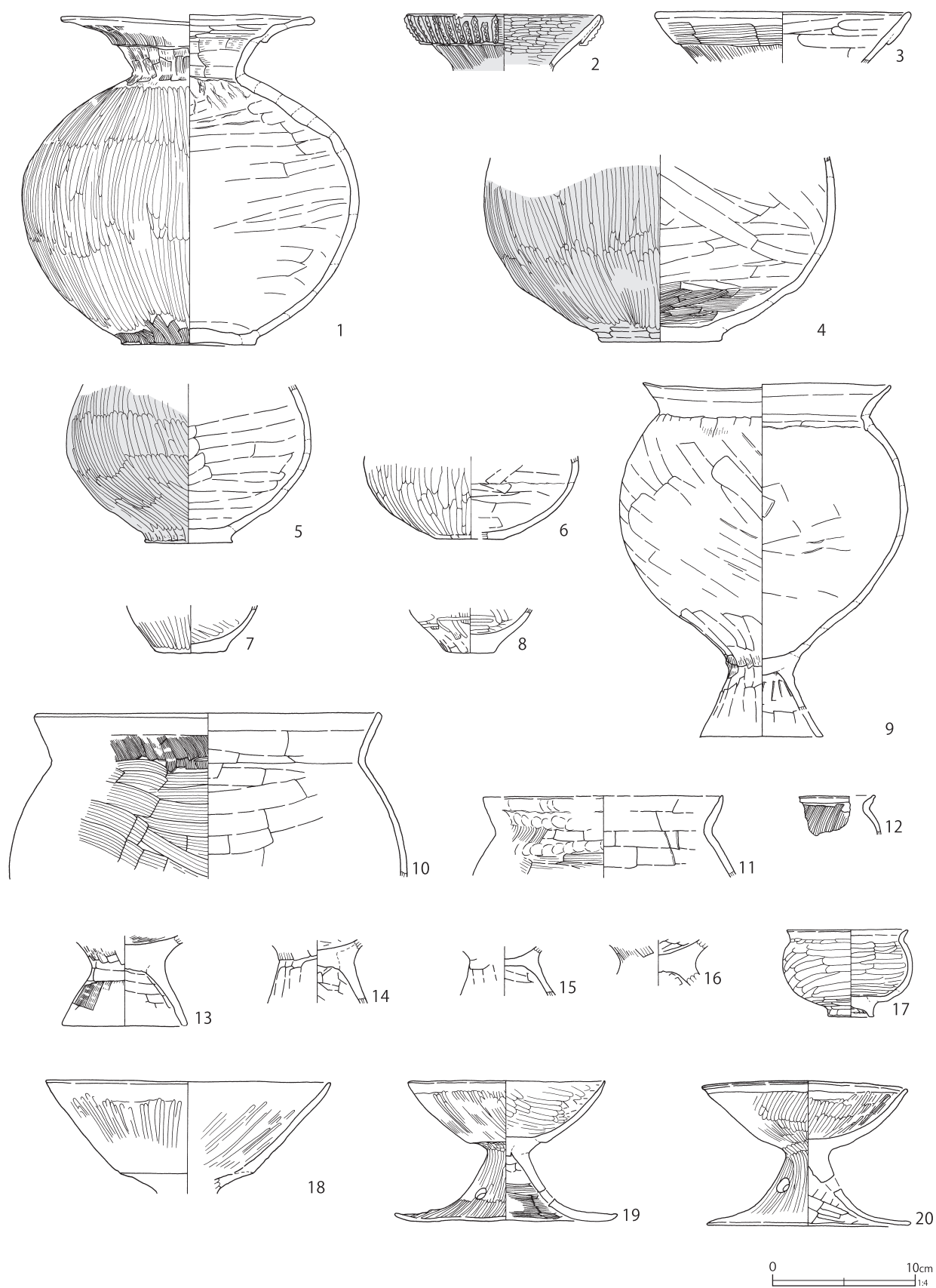
掘り方



第154図 第44号住居跡

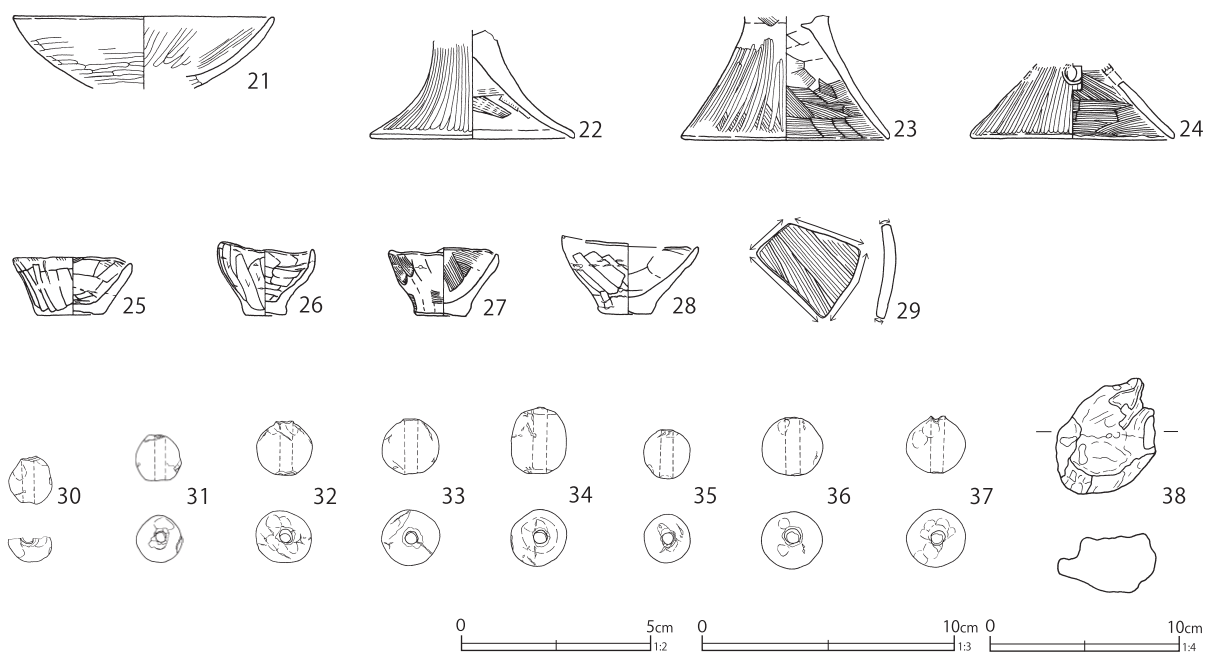


第155図 第44号住居跡遺物出土状況



第156図 第44号住居跡出土遺物(1)

第3次調査



第157図 第44号住居跡出土遺物(2)

第21表 第44住居跡出土遺物観察表(第156・157図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	17.6	23.0	9.3	E I K L	90	普通	にぶい黄橙	No. 21 C・D 二重口縁壺 輪台成形 白色シャモット	202-4
2	土師器	壺	(13.2)	[3.9]	—	C E I K	30	普通	にぶい橙	A・B 棒状浮文と刻み目 内外面赤彩	202-5
3	土師器	壺	(17.6)	[3.5]	—	E I K L	20	普通	にぶい赤褐	A 白色シャモット	202-6
4	土師器	壺	—	[12.9]	8.4	I K L	60	普通	にぶい黄橙	No. 7 外面赤彩 白色シャモット	202-7
5	土師器	壺	—	[11.0]	6.0	E I K L	40	普通	にぶい黄橙	No. 11・12 外面赤彩 白色シャモット	202-8
6	土師器	壺	—	[4.7]	4.8	E H I K L	25	普通	明褐灰	B～D 白色シャモット	203-1
7	土師器	壺	—	[3.3]	4.9	E I L	80	普通	にぶい黄橙	貯穴 白色シャモット	203-2
8	土師器	壺	—	[3.1]	3.4	C E H I K	70	良好	橙	C 内外面黒色化	203-3
9	土師器	台付甕	17.1	24.6	7.7	C E I K L	95	不良	灰黄褐	No. 27・29 全体的に風化し調整不明瞭 白色シャモット	203-4
10	土師器	甕	(24.0)	[11.5]	—	C D E H I K L	15	普通	にぶい黄橙	No. 4・18 白色シャモット	203-5
11	土師器	甕	(16.6)	[5.7]	—	E G H I K	20	普通	にぶい黄橙	D 指頭圧痕	203-6
12	土師器	甕	—	[2.7]	—	C K	5	普通	浅黄橙	B S字甕	203-7
13	土師器	台付甕	—	[6.2]	8.7	E I K	90	普通	にぶい赤褐	No. 10	203-8
14	土師器	台付甕	—	[4.4]	—	C I K L	25	普通	にぶい橙	No. 15 白色シャモット	204-1
15	土師器	台付甕	—	[3.4]	—	H I K L	85	普通	にぶい橙	B 白色シャモット	204-2
16	土師器	台付甕	—	[3.2]	—	I K	60	普通	灰白	C 内面黒色	204-3
17	土師器	鉢	(8.3)	6.0	3.1	C H I K	70	良好	浅黄橙	No. 28 高坏転用鉢 高坏脚部の折損面を 整えて高台として再利用	204-4
18	土師器	高坏	20.0	[7.8]	—	H I K	70	普通	浅黄橙	No. 11・16 A・D	204-5
19	土師器	高坏	13.7	9.7	15.6	E H I L	80	普通	にぶい赤褐	No. 27 3孔 煤付着 白色シャモット	204-6
20	土師器	高坏	14.4	10.0	(14.3)	E K L	70	普通	にぶい黄橙	No. 25 3孔 白色シャモット	204-7
21	土師器	高坏	(13.6)	[3.8]	—	E H I K L	30	普通	にぶい橙	A 器表面摩耗 白色シャモット	204-8
22	土師器	高坏	—	[5.7]	10.7	C E I K L	100	普通	にぶい橙	No. 24 内面黒色 白色シャモット	205-1
23	土師器	高坏	—	[6.5]	(10.7)	C E I K L	45	普通	にぶい褐	No. 19 白色シャモット	205-2
24	土師器	器台	—	[3.9]	(10.4)	E H I K L	40	普通	にぶい橙	A・D 4孔 白色シャモット	205-3
25	土師器	ミチユ土器	6.2	2.9	3.4	E H I K	95	普通	灰白	No. 30 鉢形	205-4

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
26	土師器	ミチヤ土器	4.8	3.9	2.1	C D H I K L	100	良好	にぶい黄橙	No. 31 鉢形 外面黒斑 白色シャモット	205-5
27	土師器	ミチヤ土器	5.6	3.5	2.7	D E H I K L	90	普通	浅黄橙	No. 26 鉢形 白色シャモット	205-6
28	土師器	ミチヤ土器	7.0	4.1	2.5	E I K L	95	普通	にぶい橙	No. 22 鉢形 器面荒れている 白色シャモット	205-7
29	土師器	甕	—	4.9	—	E L	5	普通	にぶい赤褐	D 甕の転用砥具 断面全て砥具として 利用 白色シャモット	205-8
30	土製品	土玉	最大高 2.3 径 2.0 孔径 [0.5] 重さ 4.4 g 最大高 2.0			H I K L	50	普通	にぶい黄橙	No. 5 白色シャモット	229-1
31	土製品	土玉	径 2.1 孔径 0.5 重さ 6.6 g 最大高 2.4			I K	100	普通	灰黄褐	No. 1	229-1
32	土製品	土玉	径 2.2 ～ 2.4 孔径 0.5 ～ 0.7 重さ 11.3 g 最大高 2.5			E H I K	100	普通	にぶい黄橙	No. 6	229-1
33	土製品	土玉	径 2.4 ～ 2.5 孔径 0.5 ～ 0.6 重さ 12.9 g 最大高 2.9			E H I K L	100	普通	にぶい黄橙	No. 32 白色シャモット	229-1
34	土製品	土玉	径 2.4 孔径 0.6 重さ 15.0 g 最大高 2.1			E H I K	100	普通	にぶい黄橙	C	229-1
35	土製品	土玉	径 2.0 ～ 2.1 孔径 0.5 ～ 0.6 重さ 7.6 g 最大高 2.5			H I K	100	普通	灰白	No. 2	229-1
36	土製品	土玉	径 2.4 ～ 2.6 孔径 0.6 重さ 14.8 g 最大高 2.5			H I K L	100	普通	にぶい黄橙	No. 3 白色シャモット	229-2
37	土製品	土玉	径 2.5 孔径 0.5 ～ 0.6 重さ 14.3 g			H I K	100	普通	黒褐	No. 4	229-2
38	泥岩	貝巢穴痕泥岩	長さ 3.1 幅 2.7 厚さ 1.6 重さ 6.7 g								266-2

9～16は台付甕である。9は口縁部の屈曲の度合いが各所で異なり、器形が歪んでいる。輪積み痕を残す。胴部は倒卵形で、脚部は小型である。内外面にヘラナデが施される。10は台付甕の上半部で、口縁部は比較的長く、直立気味に立ち上がる。胴部は倒卵形か。外面にハケメ、内面にヘラナデが施される。11・12は台付甕の口縁部である。12はS字状口縁甕か。13～16は台付甕の脚部である。

17は脚付鉢である。高坏転用鉢で、高坏脚部の折損面を整えて高台として再利用している。口縁部は短く外反し、胴部はやや扁平な球形胴である。内外面に粗いヘラミガキが施される。

18～23は高坏である。18の坏部は箱形で、坏部下端に稜をもつ。器面は不明瞭だが、ヘラミガキが施される。19・20は、器形・調整・胎土・焼成等が共通する小型の高坏である。19は坏部下端が屈曲し、脚部は裾部が大きく外反する。円

形の三孔透孔が施される。外面と坏部内面にヘラミガキ、脚部内面にハケメが施される。20は皿形で坏部下端は屈曲しない。脚部は裾部が外反する。円形の三孔透孔が施される。外面と坏部内面にヘラミガキ、脚部内面にヘラナデが施される。21の坏部は皿形で、器形は20に似る。内外面にヘラミガキが施される。22の脚部は裾部が短く、透孔を施さない。器肉は厚い。外面にヘラミガキが施される。23・24の脚部は直線的で、23は透孔を施さない。

24は小型器台の脚部で、円形の四孔透孔が施される。どちらも外面にヘラミガキ、内面にハケメが施される。

25～28はミニチュア土器である。いずれも埴形である。

29は甕の胴部片を転用した砥具である。割れ口の各面を使用している。

30～37は土玉である。

38は貝巢穴痕泥岩である。

非掲載遺物は古墳時代の土器5, 120 gである。壺類や甕類、高坏、小型器台の細片が中心である。

第45号住居跡（第158・159図）

K-24グリッドに位置する。

他の遺構との重複関係は、第33号溝跡、第607・629号土壌を壊す。

全体の規模は、長軸3.77 m、短軸3.72 m、深さ0.39 m、主軸方位はN-26°-Eである。平面形は隅丸方形である。

覆土は、マンガンやローム粒子を含む褐灰色土（第1・5層）などの自然堆積である。

床面から、炉跡1基とピット1基が検出された。

炉跡は、床面の中央からやや北西に位置する。規模は長軸0.61 m、短軸0.61 m、深さ0.08 mで、平面形は円形である。覆土は焼土ブロックが堆積していた。

P1は東壁際から検出された。規模は長軸0.38 m、短軸0.32 m、深さ0.32 mである。掘

り込みが浅く、支柱穴とは判断できない。

壁溝は検出されなかった。

床面下には、貼床（第6層）が面的に認められた。ローム粒子やロームブロックを含む黄褐色土である。

遺物は北東部に集中して出土した。

掲載遺物のうち、2・3・6・7・12は北東隅の床面上から出土した。そのうち3と12は2箇所に分かれて出土した。8は北壁沿いの床面上から、逆位の状態で出土した。9は中央よりやや北東、床面より約0.12 m上位の高さから出土した。

出土遺物は第159図に示した。

1は壺である。大型壺の胴部で、外面はハケメ後ヘラミガキ、内面にハケメが施される。

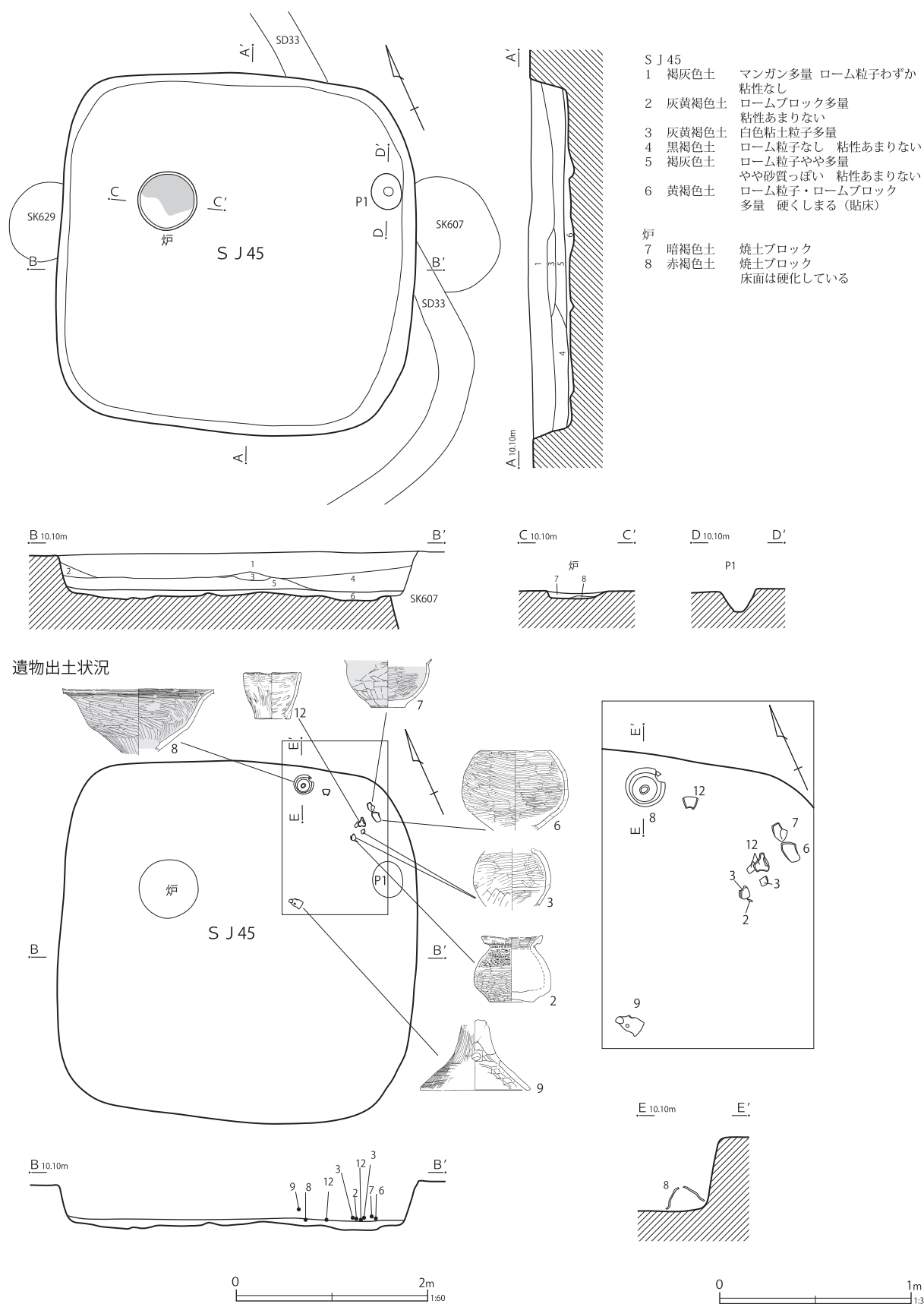
2は小型の複合口縁壺である。口縁部は短く、複合部に刻み、頸部に列点が施される。器肉は厚い。胴部上半は、不明瞭だがS字状結節文が施される。胴部下半と口縁部内面にヘラミガキが施される。底部にヘラミガキが施される。

3は小型壺の胴部である。球形胴で、内外面にヘラミガキが施される。

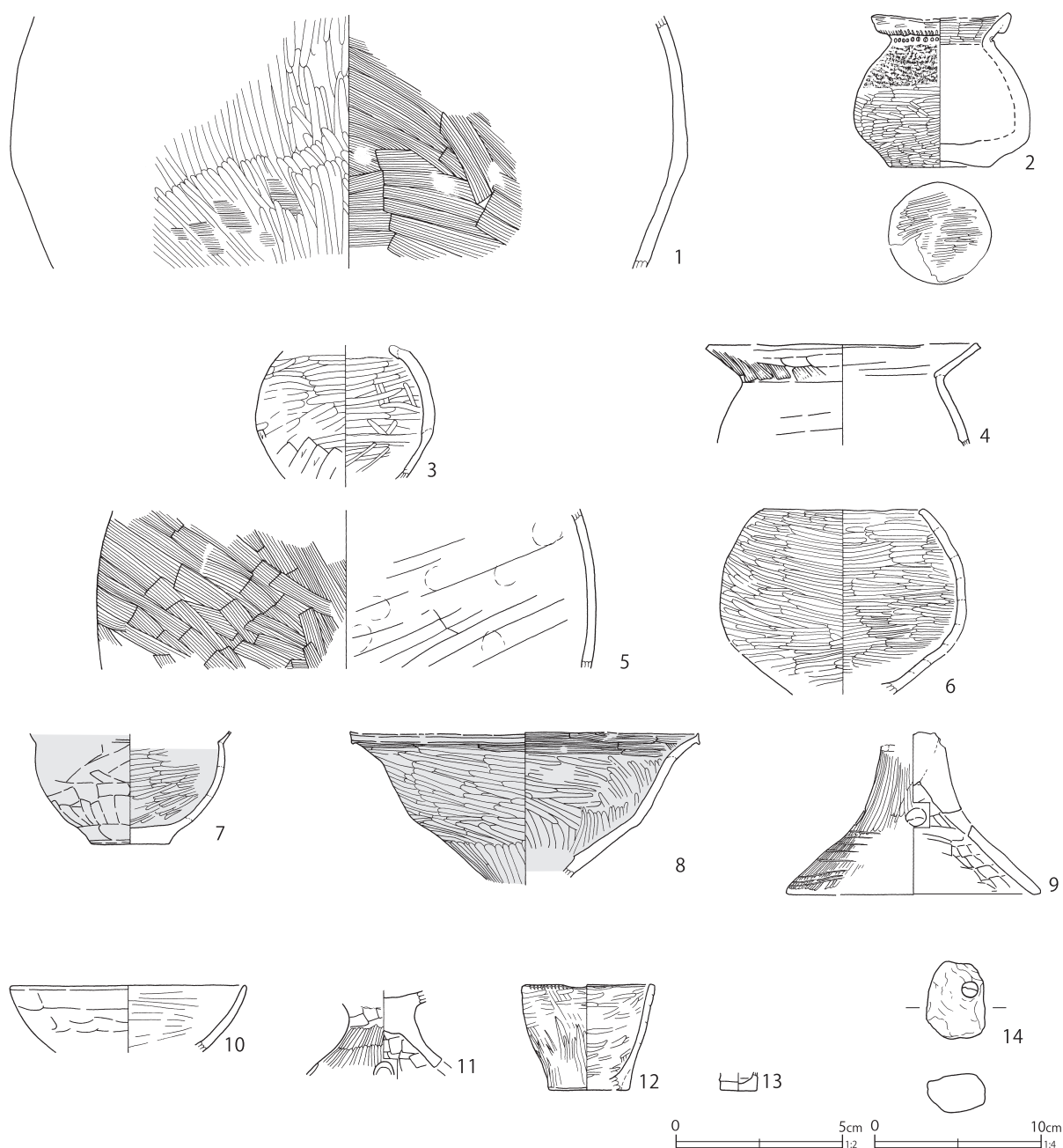
4と5は甕である。4は口縁部から胴部上半の破片で、頸部はくの字に屈曲する。5は甕の胴部の破片で、胴部径から復元すると大型と考えられる。外面にハケメ、内面にヘラナデが施される。

6と7は鉢である。6は球形胴で口縁部は内湾する。内外面にヘラミガキが施される。7は口唇部がわずかに外傾する。胴部は球形で、底部は平底である。外面に粗いヘラナデ、内面にヘラミガキが施される。

8～11は高坏である。8は坏部で、口縁部が外反し、口唇部は面取りをする。胴部は中位で屈曲する。内外面にヘラミガキが施される。器面は黒色化しているが、赤彩が施されていたと推定される。信州系の高坏と考えられる。9は脚部で裾は短く、中位からわずかに外に開く。円形の四孔



第158図 第45号住居跡



第159図 第45号住居跡出土遺物

第22表 第45号住居跡出土遺物観察表（第159図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	—	[16.1]	—	A C E G H I K L	5	普通	灰褐	B 大型壺 チャート	206-1
2	土師器	壺	8.0	9.2	6.0	D E I K	85	普通	にぶい赤褐	No. 4・6 B	206-2
3	土師器	壺	—	[8.0]	—	E H I K L	25	良好	にぶい黄橙	No. 3・5 B 小型壺 白色シャモット	206-3
4	土師器	甕	(16.0)	[6.1]	—	A I	10	普通	にぶい黄橙	B・D 内面黒色 口縁面取り	206-4
5	土師器	甕	—	[9.4]	—	C E I K L	25	普通	にぶい黄橙	B・D 大型甕 白色シャモット	206-5
6	土師器	鉢	(9.1)	[11.1]	—	C E I K L	30	普通	にぶい黄橙	No. 7 白色シャモット	206-6
7	土師器	鉢	—	[6.5]	4.6	C E K L	40	普通	赤褐	No. 8 B 内外面赤彩 白色シャモット	206-7

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
8	土師器	高坏	20.8	[9.2]	—	C E I K L	95	普通	灰褐	No.1 B 信州系 胎土在地 内外面赤彩	206-8
9	土師器	高坏	—	[9.7]	(14.6)	C E I K	30	普通	灰黄褐	No.2 4 孔	207-1
10	土師器	高坏	(14.0)	[3.9]	—	A C E I	40	普通	にぶい褐	C・D 器面風化	207-2
11	土師器	高坏	—	[5.0]	—	C E I K L	80	普通	にぶい黄橙	C 4 孔 チャート	207-3
12	土師器	ミニチュア土器	7.8	6.3	(4.7)	C E H I K	65	普通	灰	No.6・9 鉢 内外面黒色	207-4
13	土師器	ミニチュア土器	—	[1.0]	2.1	I K	90	普通	にぶい黄橙	D	204-5
14	泥岩	貝巢穴痕泥岩	長さ 2.3	幅 1.7	厚さ 1.2	重さ 3.2 g					266-2

透孔が施される。外面にヘラミガキ、内面にヘラナデが施される。ホゾ接合である。10 は高坏の坏部である。11 は高坏の脚部で、円形の四孔透孔が施される。接合部は厚い。外面にヘラミガキが施される。

12 はミニチュア土器か。器肉は薄く、コップ形である。内外面にヘラミガキが施される。

13 はミニチュア土器か。底部片と考えられる。

14 は貝巢穴痕泥岩である。

非掲載遺物は、古墳時代の土器 2, 135 g である。壺類や甕類の細片が中心である。

第 46・51 号住居跡（第 160 ～ 163 図）

第 46・51 号住居跡は重複して検出された。

まず第 46 号住居跡について述べる。

K-27、L-27 グリッドに位置し、南東側は調査区域外である。

他の遺構との重複関係は、第 51 号住居跡を壊す。

規模は、長軸残存長 4.31 m、短軸 5.17 m、深さ 0.45 m、主軸方位は S-52°-E である。平面形は方形と推定される。

覆土はローム粒子を含むにぶい黄褐色土（第 1 層）、ロームブロックを含む黒色土（第 2 層）を中心とする自然堆積である。

床面から炉跡 2 基、貯蔵穴 1 基、ピット 5 基、壁溝、間仕切り溝が検出された。

炉跡は南西側を炉 1、北東側を炉 2 とする。両者とも中央からやや東に位置する。炉 1 は炉 2 に壊されていた。炉 1 の規模は、長軸残存長

0.29 m、短軸 0.43 m、深さ 0.03 m で、残存部の平面形は楕円形である。覆土は焼土ブロックが堆積していたが、底面は硬化していなかった。炉 2 の規模は長軸 0.93 m、短軸 0.79 m、深さ 0.05 m で、平面形は楕円形である。覆土は焼土ブロックが堆積し、底面は焼けて硬化していた。

貯蔵穴は北壁際に位置する。掘り込みの周囲に土手状の盛土がつく。掘り込みの規模は、長軸 0.35 m、短軸 0.26 m、深さ 0.04 m で、非常に浅い。土手状の盛土は、ローム粒子を含む黒褐色土などからなる。

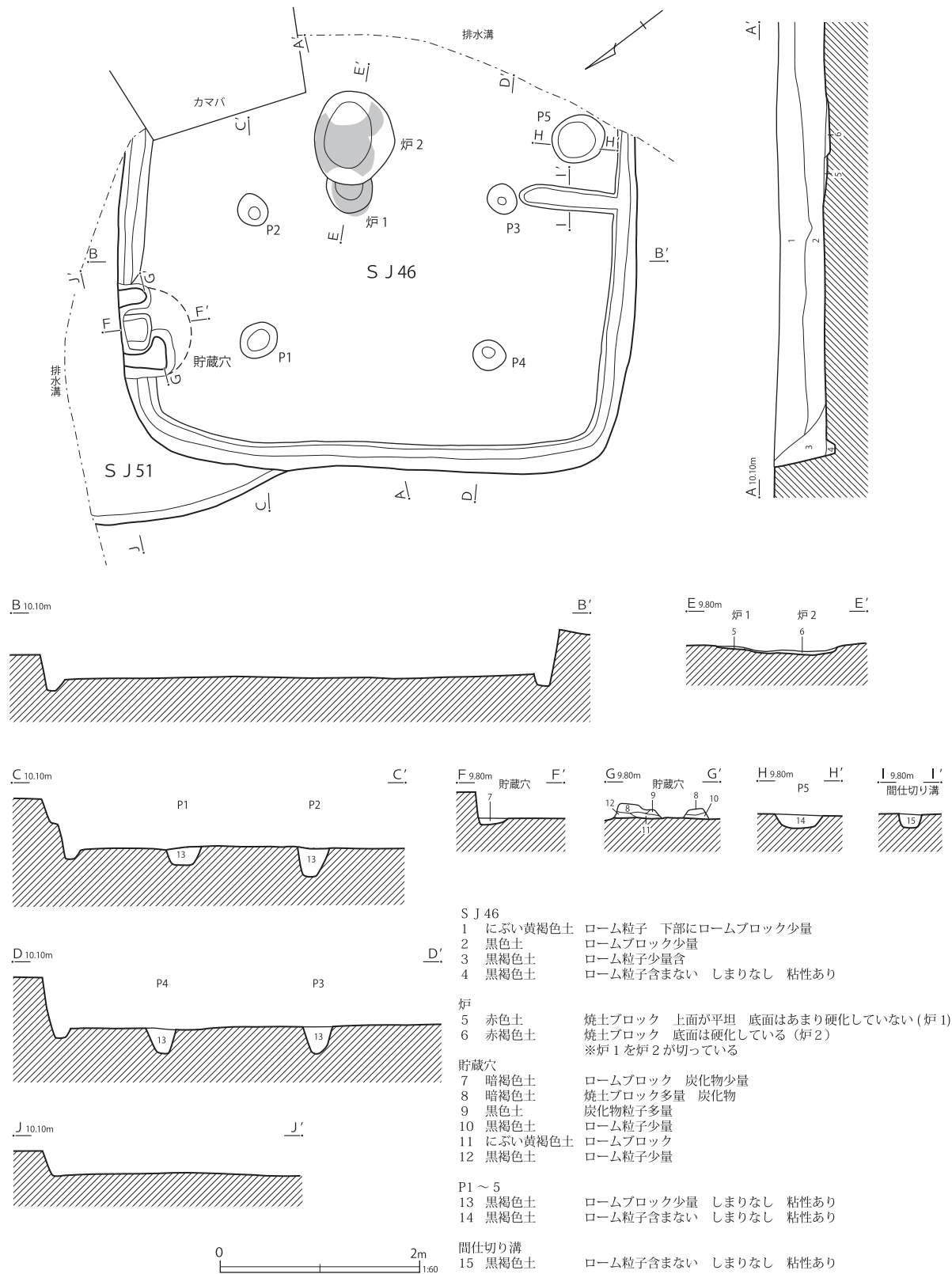
ピットのうち、P1～P4 は、その位置と覆土の様相から支柱穴と考えられる。P5 は南壁際の間仕切り溝に隣接しており、掘り込みも浅いことから、柱穴とは考えがたい。貯蔵穴の可能性もある。それぞれのピットの規模は、P1 が長軸 0.40 m、短軸 0.35 m、深さ 0.17 m、P2 が長軸 0.33 m、短軸 0.29 m、深さ 0.29 m、P3 が長軸 0.31 m、短軸 0.27 m、深さ 0.26 m、P4 が長軸 0.33 m、短軸 0.30 m、深さ 0.25 m、P5 が長軸 0.53 m、短軸 0.46 m、深さ 0.15 m である。

壁溝は、検出した範囲内では全周する。幅 0.17 m～0.31 m、深さ 0.05 m～0.12 m である。

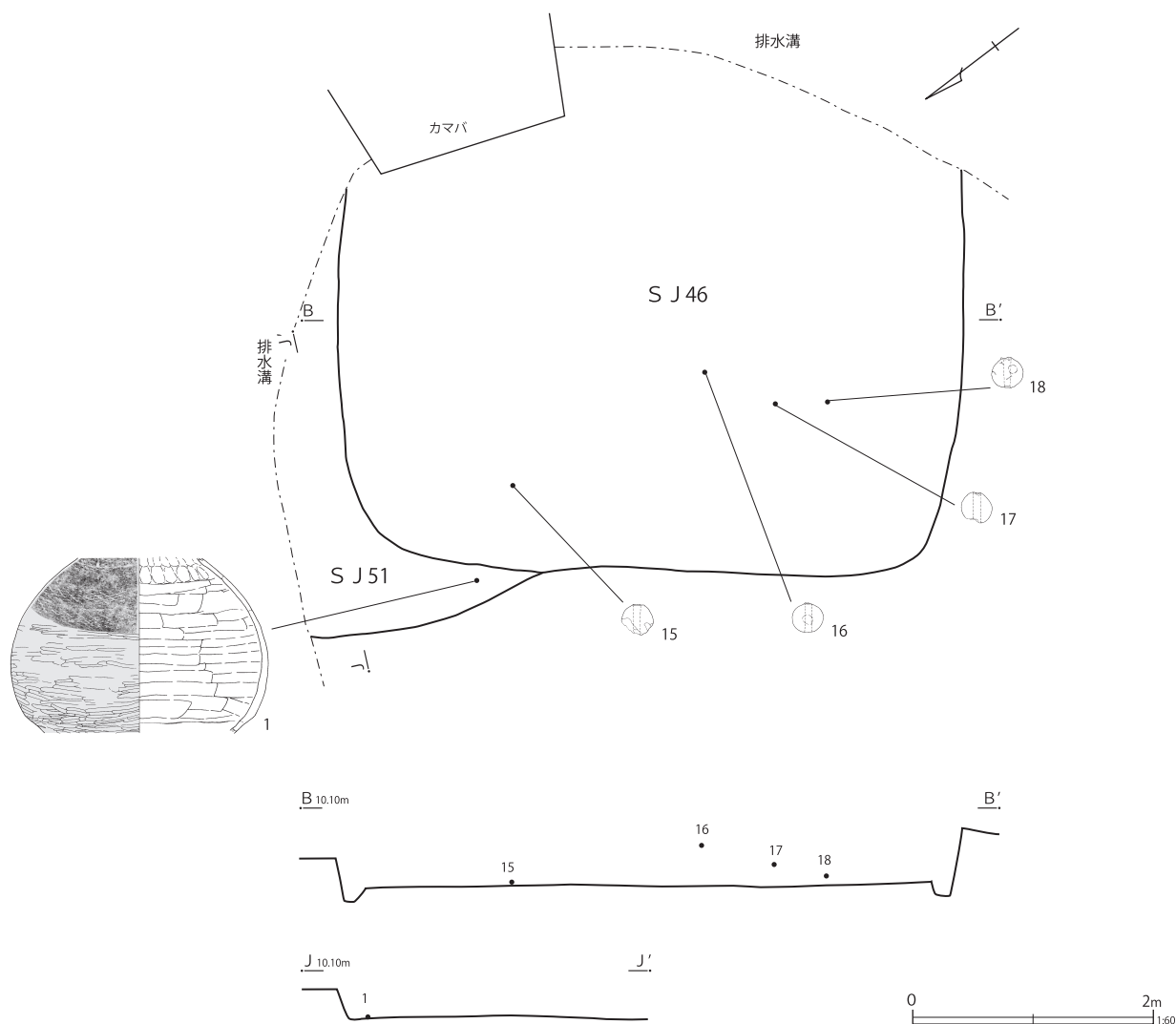
南壁では、壁溝から続く形で間仕切り溝が検出された。この間仕切り溝は P5 の北西側に位置し、直線状に P3 付近まで延びる。規模は長軸 1.00 m、短軸 0.20 m、深さ 0.12 m である。

床面下に貼床や掘り方は認められなかった。

第3次調査



第 160 図 第 46・51 号住居跡



第161図 第46・51号住居跡遺物出土状況

遺物は少なく、散在していた。

掲載遺物のうち、15は北部の床面上から出土した。16～18は中央よりやや西から出土した。16は床面から約0.3 m上位の高さ、17は床面から約0.2 m上位の高さ、18は床面から約0.06 m上位の高さで出土した。

第46号住居跡の出土遺物は第162図に示した。

1は壺である。口唇部外周に薄い粘土板を追加し、複合口縁状に口縁部を作っている。屈曲は弱い。内外面にハケメが施される。

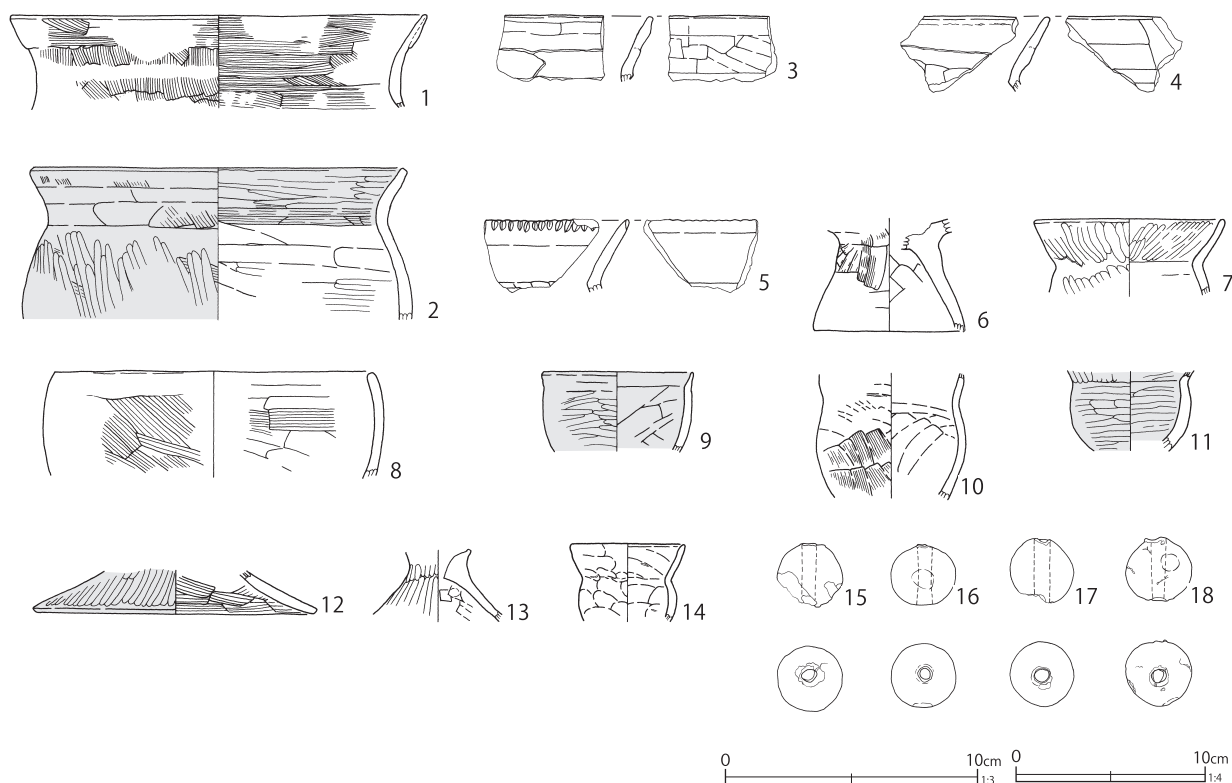
2～6は甕である。2は口縁部から胴部上半の破片で、口唇部は面取りをする。口縁部の屈曲は弱く、胴部も肩が張らない。器肉は厚い。外面と

口縁部内面にヘラミガキが施される。3～5は甕の口縁部である。3と4は口縁部に輪積み痕を残す。5は口唇部に刻みが施される。6は脚部で、ホゾ接合した甕部分が剥落している。器肉が厚い。

7は甗、もしくは小型の甕である。口径が胴部径に対して大きい。

8～11は鉢である。8は口縁部が内湾し、内外面にハケメが施される。9は口唇部が外傾する。外面にヘラミガキ、内面にヘラナデが施される。10は頸部の屈曲が弱く、内外面にヘラナデが施される。11は小型で、口縁部が外反し、胴部は球形胴を呈する。器肉が厚い。内外面にヘラミガキが施される。11は埴の可能性もある。

第3次調査

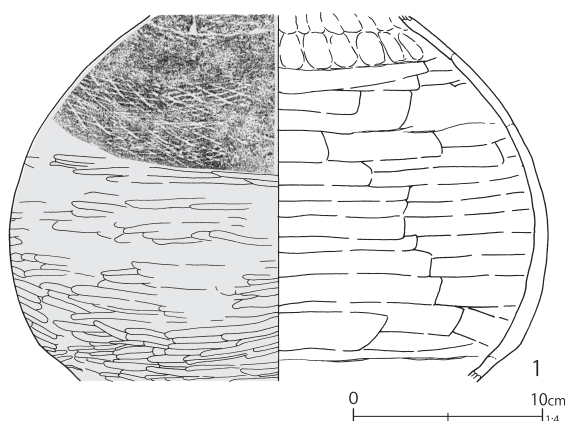


第162図 第46号住居跡出土遺物

第23表 第46号住居跡出土遺物観察表（第162図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(21.7)	[4.9]	—	C E I K	15	普通	にぶい黄橙	A	207-6
2	土師器	甕	(19.6)	[8.0]	—	E H I K L	25	良好	にぶい黄橙	A 内外面赤彩 白色シャモット	207-7
3	土師器	甕	—	[3.5]	—	C E H I K	5	良好	にぶい黄橙	B 外面煤付着	207-8
4	土師器	甕	—	[3.9]	—	D H I K L	5	良好	橙	B 外面煤付着 白色シャモット	208-1
5	土師器	甕	—	[3.8]	—	A E H I K L	5	普通	にぶい橙	B 雲母多 胎土焼成異質 チャート小礫	208-2
6	土師器	台付甕	—	[5.8]	(7.9)	E I	20	普通	にぶい赤褐	A	208-3
7	土師器	甕	(9.8)	[4.0]	—	E H I K	20	普通	浅黄橙	A 小型甕か甔	208-4
8	土師器	鉢	(16.8)	[5.6]	—	E I L	5	普通	灰白	B 白色シャモット	208-5
9	土師器	鉢	(7.8)	[4.2]	—	H I K	10	普通	にぶい黄橙	A 内外面赤彩	208-6
10	土師器	鉢	—	[6.5]	—	E H I K	15	普通	灰褐	A 小型鉢 外面輪積痕あり	208-7
11	土師器	鉢	—	[4.3]	—	C D H I K L	20	普通	にぶい黄橙	B 内外面赤彩 白色シャモット 埴か	208-8
12	土師器	高坏	—	[2.2]	(14.6)	E I L	15	普通	にぶい黄橙	A SJ51 No.1 外面赤彩 白色シャモット	209-1
13	土師器	高坏	—	[3.8]	—	E I K L	25	普通	にぶい橙	白色シャモット	209-2
14	土師器	ミニチュア土器	(6.0)	[4.1]	—	C E H I K L	15	普通	にぶい褐	B 埴形 内外面輪積痕あり 白色シャモット	209-3
15	土製品	土玉	最大高 2.5 径 3.5 ~ 3.6 孔径 0.5 ~ 0.6 重さ 12.7 g			C E I K L	70	普通	灰黄褐	No.1 白色シャモット	229-2
16	土製品	土玉	最大高 2.4 径 2.5 孔径 0.5 ~ 0.6 重さ 15.5 g			C I K L	100	普通	にぶい黄橙	No.2 白色シャモット	229-2

番号	種別	器種	計測値	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
17	土製品	土玉	最大高 2.6 径 2.5 孔径 0.6 重さ 13.7 g	I K	90	普通	にぶい黄褐	No. 3	229-2
18	土製品	土玉	最大高 2.5 径 2.6 孔径 0.4 ~ 0.6 重さ 14.6 g	E H I L	100	普通	明黄褐	No. 4 白色シャモット	229-2



第 163 図 第 51 号住居跡出土遺物

第 24 表 第 51 号住居跡出土遺物観察表 (第 163 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	—	[19.4]	—	C E I K	30	普通	にぶい黄橙	No. 1 外面赤彩	209-4

12 と 13 は高坏である。12 は脚部の裾部分である。外面にヘラミガキ、内面にハケメが施される。13 は坏部との接合部で、ホゾ接合した坏部が剥落している。外面にヘラミガキが施される。

14 はミニチュア土器か。器形は罎で、ユビナデで整形する。

15 ~ 18 は土玉である。

非掲載遺物は古墳時代の土器 2, 203 g である。壺類や甕類の細片が中心である。

次に第 51 号住居跡について述べる。

K-27 グリッドに位置し、東半分は調査区域外である。

他の遺構との重複関係は、第 46 号住居跡に壊

される。

全体の規模は、長軸残存長 2.57 m、短軸残存長 1.80 m、深さ 0.28 m、主軸方位は検出範囲が狭く不明である。

覆土は確認できなかった。

床面から炉跡等は検出されなかった。

遺物は少なく、1 が東壁近くの床面上から出土したのみだった。

第 51 号住居跡の出土遺物は第 163 図に示した。

1 は壺の胴部である。胴部は球形胴で、上半に網目状撚糸文が施され、下半にヘラミガキが施される。内面はユビオサエとヘラナデが施される。外面に赤彩が施される。



第 164 図 第 53・55～57 号住居跡全体図

第 53・55・56・57 号住居跡 (第 164～178 図)

第 53・55・56・57 号住居跡が、互いに重複する。第 53 号住居跡が最も新しく、他の 3 軒を壊し、更に第 8 号方形周溝墓に壊される。

まず、第 53 号住居跡について述べる。

J-25、K-25・26 グリッドに位置する。

他の遺構との重複関係は、本住居跡が第 55～57 号住居跡を壊し、第 8 号方形周溝墓に壊される。

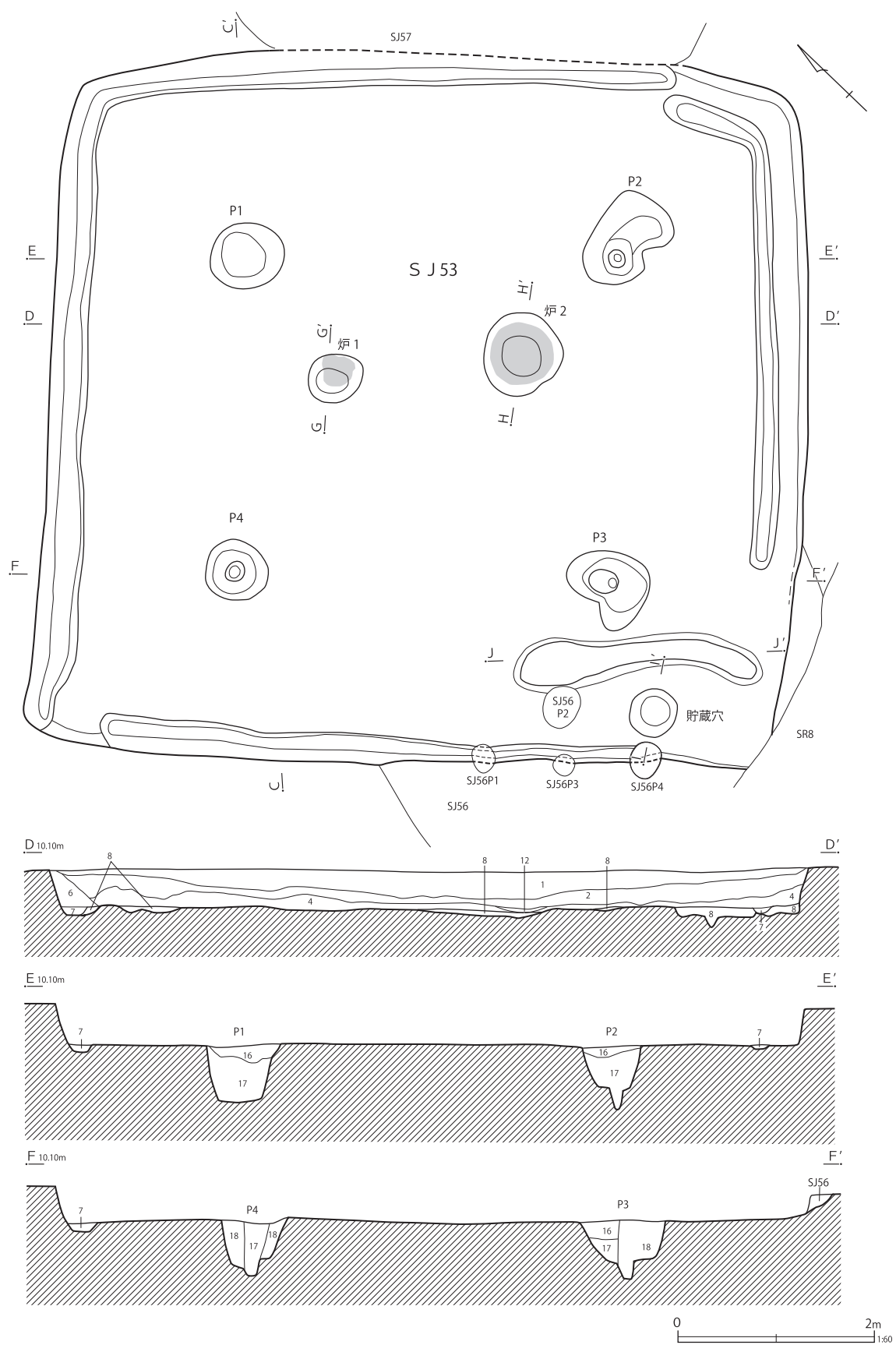
全体の規模は、長軸 7.06 m、短軸 7.61 m、

深さ 0.38 m、主軸方位は N-48°-E である。平面形は方形である。この規模は本遺跡で検出された方形の住居跡の中で最も大きい。

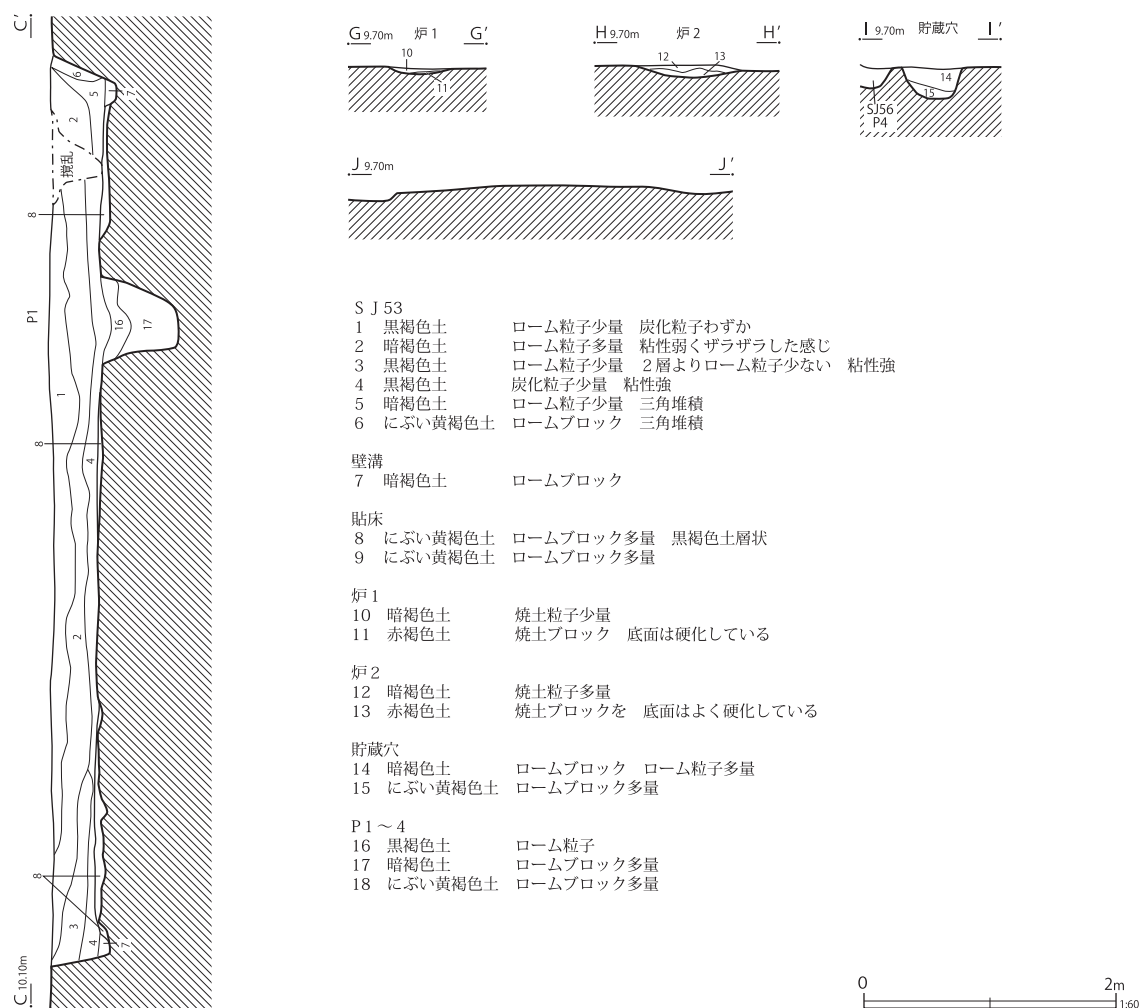
覆土はローム粒子を含む黒褐色土 (第 1・3・4 層) や暗褐色土 (第 2・5 層) を中心とする自然堆積である。

床面から炉跡 2 基、貯蔵穴 1 基、ピット 4 基、壁溝が検出された。

炉跡は住居の中央付近に位置し、西側を炉 1、東側を炉 2 とする。炉 1 の規模は、長軸 0.57 m、



第165図 第53号住居跡(1)



第166図 第53号住居跡 (2)

短軸 0.49 m、深さ 0.03 m で、平面形は楕円形である。覆土は焼土粒子を含む暗褐色土が堆積し、底面は焼けて硬化していた。炉2の規模は、長軸 0.86 m、短軸 0.79 m、深さ 0.10 m で、平面形は楕円形である。覆土は焼土粒子を含む暗褐色土が堆積し、底面は焼けて硬化していた。

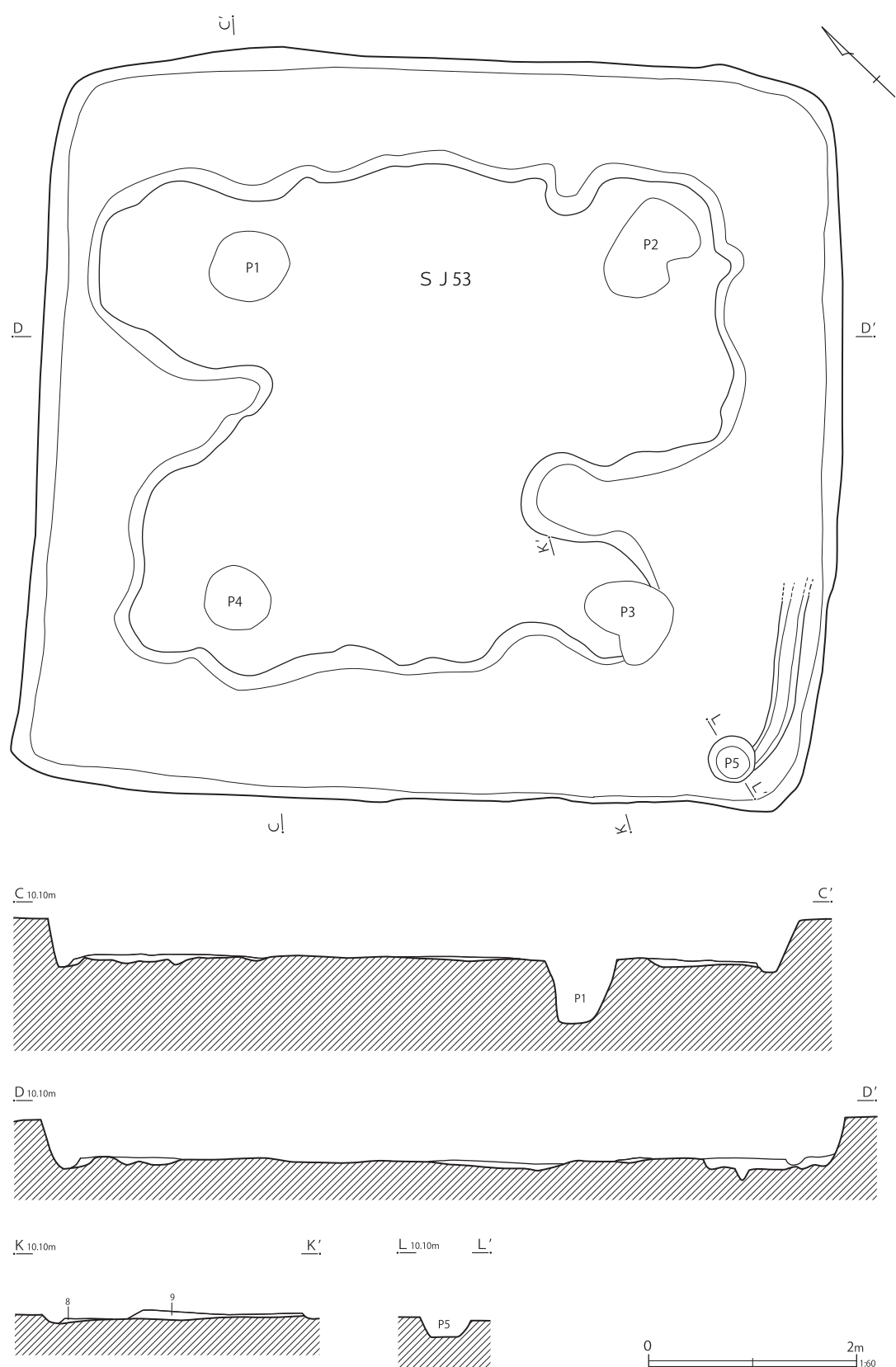
貯蔵穴は南隅に位置する。円形の掘り込みの東側は床面が土手状に盛り上がっている。掘り込みの規模は、長軸 0.50 m、短軸 0.49 m、深さ 0.26 m で、平面形は円形である。覆土はロームブロックを含む暗褐色土などが堆積していた。

4基のピットは、その位置と規模から主柱穴と考えられる。P2~4には柱痕が検出された。それぞれの規模は、P1が長軸 0.80 m、短軸

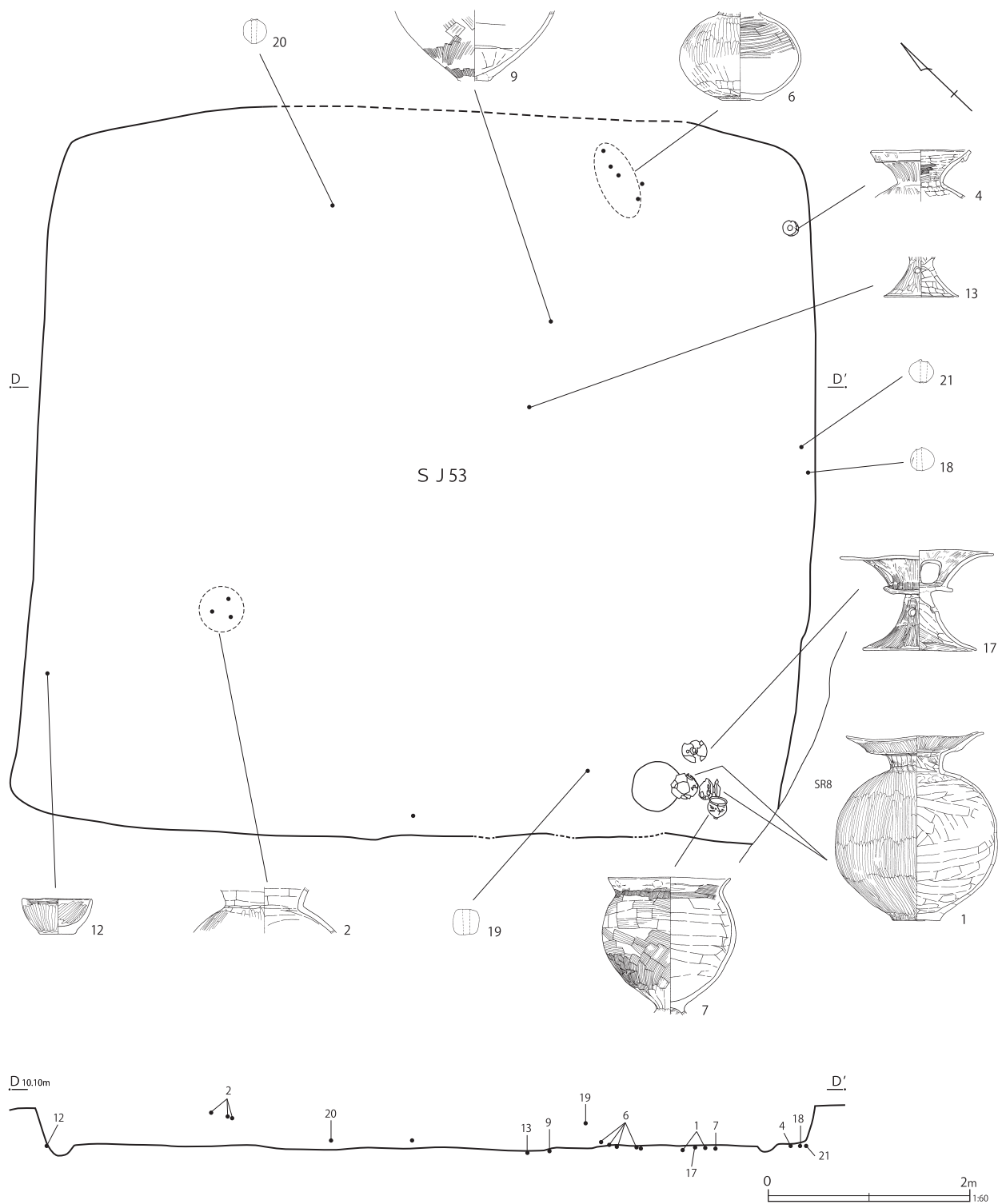
0.70 m、深さ 0.59 m、P2が長軸 1.00 m、短軸 0.52 m、深さ 0.63 m、P3が長軸 0.88 m、短軸 0.55 m、深さ 0.58 m、P4が長軸 0.67 m、短軸 0.63 m、深さ 0.55 m である。覆土は第16層と第17層が自然堆積土、第18層が柱の裏込め土とその崩落土と考えられる。

壁溝は東隅と南隅を除いて全周する。東隅から南東壁にかけては、壁面から 0.20 m ~ 0.30 m ほど離れている。幅 0.18 m ~ 0.45 m、深さ 0.03 m ~ 0.09 m である。

床面下には貼床 (第8・9層) が部分的に認められた。掘り方は中央から P1~P4 付近が、蝶の形のように高く、壁際が深く掘り込まれる。南隅では、溝状の掘り込みとこれに続く P5 が検出



第 167 図 第 53 号住居跡 (3)



第168図 第53号住居跡遺物出土状況

された。P 5 の規模は長軸 0.30 m、短軸 0.30 m、深さ 0.13 m である。

遺物は散在していたが、南隅の貯蔵穴周辺で比較的集中して出土した。

掲載遺物のうち、1・7・17 は南隅の貯蔵穴周辺の床面上から出土した。1 と 7 は横位、17 は逆位で出土した。2 は平面的には P 4 周辺に位置し、D-D' 第 1 層相当の高さから出土した。4 は東隅の床面上から、正位の状態で出土した。6 は P 2 の東側の床面上から出土した。12 は西壁の壁溝上から出土した。13 は炉 2 内から出土した。18 と 21 は南壁の床面上から出土した。19 は貯蔵穴周辺の D-D' 第 1 層相当の高さから出土した。20 は北東壁面近くの D-D' 第 4 層相当の高さから出土した。

第 53 号住居跡の出土遺物は、第 169・170 図に示した。

1～6 は壺である。1 は二重口縁壺である。口縁部が大きく外反し、受け部は短い。頸部は短いが直立する。胴部は球形胴で、中位に最大径が位置する。外面は頸部を除きヘラミガキを、頸部はハケメ後にヘラナデが施される。内面は口縁部にヘラミガキ、頸部はハケメ後にヘラナデ、胴部はヘラナデが施される。2 は頸部から胴部上半の破片である。頸部外面はヘラナデ、内面はミガキが施される。3 は大型壺の底部である。底部に木葉痕が残る。4 は複合口縁壺の口縁部から胴部上半の破片である。複合部は薄く、頸部から大きく外反する。外面にヘラミガキ、内面に雑なヘラミガキが施される。5 は口縁部の破片で、棒状浮文を貼付する。棒状浮文の側面には穿孔が施される。6 は胴部の破片で、扁平な球形胴である。内外面は、ヘラナデ後にヘラミガキが施される。

7～11 は甕である。7 の台付甕は口縁部が短く、輪積み痕を残す。胴部は倒卵形である。外面と口縁部内面にハケメを、内面にヘラナデが施される。8 は甕の胴部の破片で、胴部径から大型の

甕と考えられる。外面にハケメ、内面にヘラナデが施される。9 は胴部下半の破片である。10 と 11 は脚部の破片で、10 は比較的大型である。

12 は鉢である。器高は低い。内外面にヘラミガキが施される。

13 と 14 は高坏である。いずれも脚部の破片である。13 と 14 は脚部が小さく、円形の三孔透孔が施される。いずれも外面にヘラミガキ、内面にヘラナデが施される。

15 と 16 は器台である。15 は器受け部との接合部が長く、透孔の位置も高い。円形の三孔透孔が施される。16 は脚部が細く、上半には横方向のヘラミガキが施される。円形の三孔透孔が施される。

17 は装飾器台である。北陸系の鐳付き器台で、器受け部には花卉型の透孔を三箇所施す。口縁部は大きく外反し、全体的に歪んでいる。器受け部下端が突出し、鐳状になる。この鐳は粘土紐の貼り付けではなく、器受け部の底部に粘土板を接合して作出している。器受け部はその粘土板のやや内側に積み上げることで作られている。鐳の端部は面取りをしている。内外面はハケメ後、ヘラミガキが施される。脚部は裾部にかけて外反するものの、さほど広がらない。円形の三孔透孔が施される。この透孔は、器受け部の透孔と異なる位置に開けられている。外面にヘラミガキ、内面にユビナデ後ハケメが施される。器受け部と脚部の接合部にはヘラナデが施される。

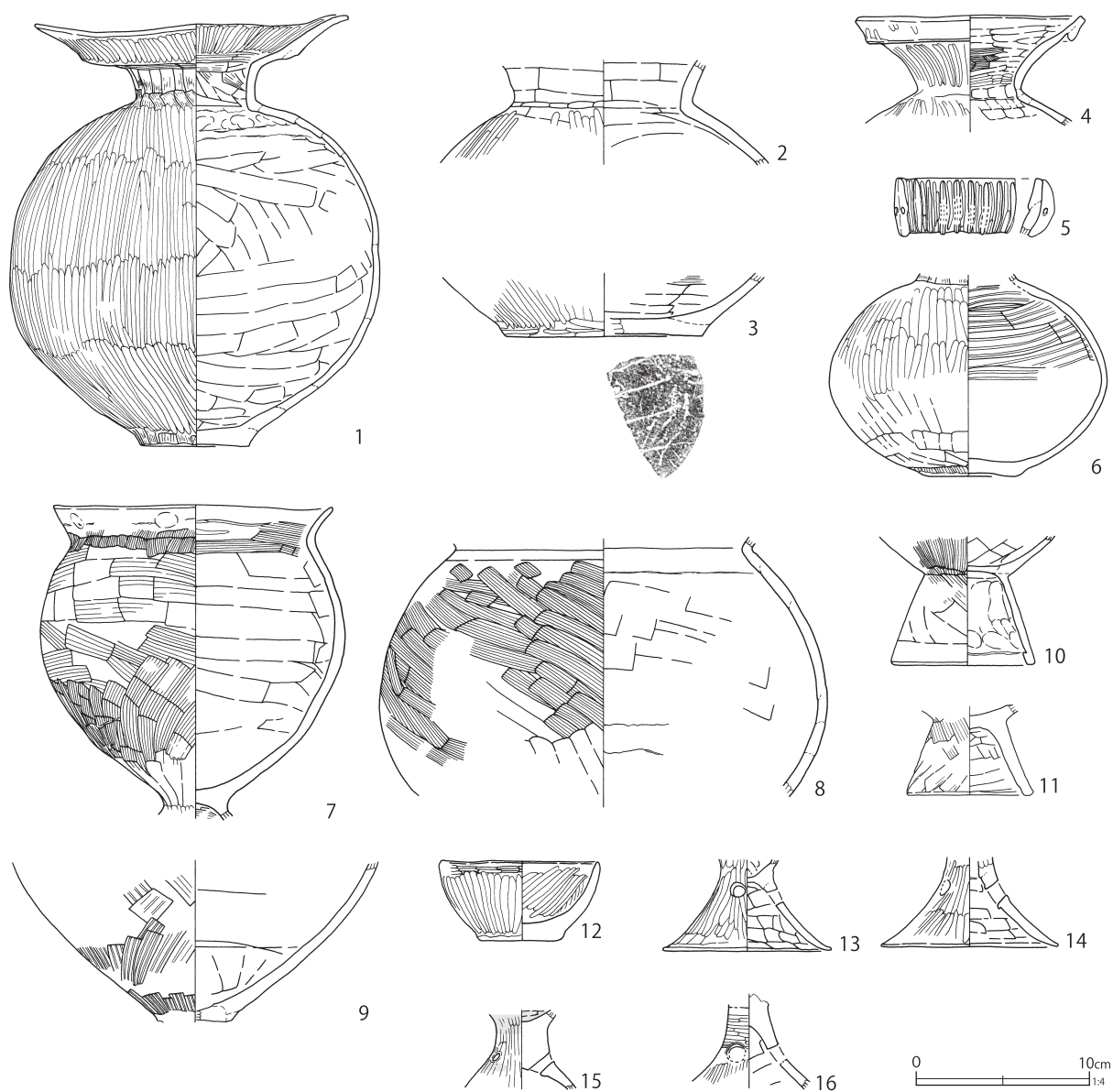
18～22 は土玉である。

非掲載遺物は古墳時代の土器 4,695 g である。壺類や甕類、高坏、小型器台の細片が中心である。壺には単口縁壺や複合口縁壺が認められた。

次に第 55 号住居跡について述べる。

K-24・25 グリッドに位置し、住居範囲と考えられる J-25 グリッドでは検出されなかった。

他の遺構との重複関係は、第 53 号住居跡に壊される。



第169図 第53号住居跡出土遺物（1）

全体の規模は、長軸残存長 2.70 m、短軸残存長 2.70 m、深さ 0.05 m、主軸方位はN-33°-Eである。平面形は方形か。

覆土は薄く、炭化物や焼土を含む暗褐色土（第1層）の自然堆積である。

床面から炉跡1基と壁溝が検出された。

炉跡は中心から離れた西壁付近に位置する。規模は長軸 0.51 m、短軸 0.43 m、深さ 0.05 mで、平面形は楕円形である。覆土は暗褐色土が堆積

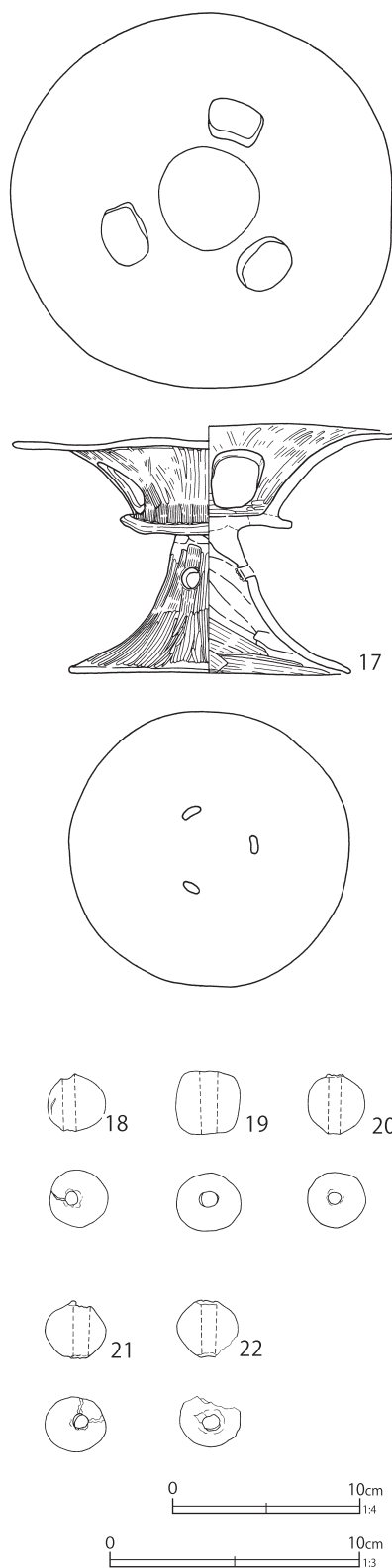
し、底面はあまり硬化していなかった。

壁溝は南西隅を除く西壁と南壁に沿って検出された。幅 0.13 m～0.19 m、深さ 0.04 m～0.06 mである。

床面下に貼床や掘り方は確認されなかった。

掲載遺物は、南西隅付近の床面上に集中して出土した。そのうち1は3箇所、2は2箇所に、4は4箇所に分かれて出土した破片が接合した。

第55号住居跡の出土遺物は第172図に示した。



第170図 第53号住居跡出土遺物(2)

1～3は複合口縁壺の口縁部の破片である。1に対して2と3がやや大型である。1は頸部が直立し、口縁部にかけて外反する。複合部は短いものの、円形朱文と網目状捺糸文を、胴部に単節LRの縄文が施される。頸部と口縁部内面にヘラミガキが施される。2と3は大きさや成形技法、調整等が良く似る。ともに頸部は短い、複合部はやや高い。口縁部はヘラナデ、頸部と内面にヘラミガキが施される。

4は甕の口縁部で、口縁部は短めに開き、輪積み痕を残す。器肉は厚い。口縁部はヨコナデ、胴部と口縁部内面にハケメ、胴部内面にヘラナデが施される。

非掲載遺物は古墳時代の土器 625 g である。壺類や高坏の細片が中心である。壺は二重口縁壺や小型壺が認められた。

第56号住居跡は、K-25グリッドに位置する。

他の遺構との重複関係は、第53号住居跡と第8号方形周溝墓に壊される。

全体の規模は、長軸残存長 1.05 m、短軸 4.67 m、深さ 0.36 m で、主軸方位は N-13°-E である。平面形は隅丸方形である。

覆土はローム粒子を含む暗褐色土(第1・4層)や黒褐色土(第2層)の自然堆積である。

床面から貯蔵穴1基、ピット4基が検出された。

貯蔵穴は南壁付近に位置し、半分は第8号方形周溝墓に壊される。規模は長軸 0.52 m、短軸 0.39 m、深さ 0.28 m で、平面形は楕円形と推定される。覆土は、ローム粒子を含む暗褐色土の自然堆積である。

ピットは大半が第53号住居跡に壊される形で検出された。P2以外は小型で、P1・3・4の配置は直線的である。P2は主柱穴の可能性がある。それぞれの規模は、P1は長軸 0.26 m、短軸 0.22 m、深さ 0.16 m、P2は長軸 0.43 m、短軸 0.38 m、深さ 0.30 m、P3は長軸 0.21 m、短軸 0.21 m、深さ 0.22 m、P4は長軸 0.37 m、

第3次調査

第25表 第53号住居跡出土遺物観察表（第169・170図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	17.9	24.8	6.1	C E H I K L	90	普通	にぶい黄橙	No. 18・19 焼土 赤彩か 白色シャモット	209-5
2	土師器	壺	—	[6.0]	—	E I K	40	普通	にぶい黄褐	No. 1～3 SR8 盛土4区 K-25	209-6
3	土師器	壺	—	[3.7]	(11.4)	E H I K	20	普通	灰黄褐	C 底部木葉痕	209-7
4	土師器	壺	12.8	[6.3]	—	C E I K L	70	普通	にぶい褐	No. 21 複合口縁壺 白色シャモット	210-1
5	土師器	壺	—	[3.3]	—	E I K	5	普通	明褐灰	B 加飾壺 孔があく	210-2
6	土師器	壺	—	[11.6]	5.4	I K	70	普通	にぶい黄褐	No. 5～8 A	210-3
7	土師器	台付甕	16.0	[18.1]	—	D H I K L	95	普通	灰黄褐	No. 17	210-4
8	土師器	甕	—	[14.9]	—	C E H I K	20	普通	にぶい褐	A～C 一括	210-5
9	土師器	台付甕	—	[9.3]	—	E H I K L	70	普通	浅黄橙	No. 14 B・C 器表面風化 白色シャモット	210-6
10	土師器	台付甕	—	[7.4]	8.0	C E G H I K	55	普通	にぶい赤褐	B～D S字甕	210-7
11	土師器	台付甕	—	[5.1]	7.2	C E I L	100	普通	にぶい黄橙	D 白色シャモット	210-8
12	土師器	鉢	(8.9)	4.6	4.7	C E I K L	60	普通	灰黄褐	No. 12 A・D 白色シャモット	211-1
13	土師器	高坏	—	[5.2]	(9.6)	C E H I K L	65	良好	にぶい橙	No. 13 3孔 白色シャモット	211-2
14	土師器	高坏	—	[5.2]	(10.0)	C H I K	25	良好	にぶい黄橙	P3 SR8 8区溝 3孔	211-3
15	土師器	器台	—	[4.6]	—	C E H I K	35	普通	灰白	C 3孔 内外面赤彩	211-4
16	土師器	器台	—	[5.4]	—	E I K	70	普通	にぶい黄橙	A 3孔	211-5
17	土師器	器台	20.1	13.2	15.0	C E I K L	95	普通	にぶい黄褐	No. 20 3孔 北陸系装飾器台	211-6
18	土製品	土玉	最大高2.3 径2.2～2.3 孔径0.5～0.6 重さ9.9 g			A I	100	普通	にぶい黄褐	No. 15	229-2
19	土製品	土玉	最大高2.5 径2.3～2.5 孔径0.6～0.7 重さ14.8 g			A I K L	100	普通	にぶい黄橙	No. 11 白色シャモット	229-2
20	土製品	土玉	最大高2.4 径2.2～2.3 孔径0.5 重さ11.1 g			A I K L	100	普通	明黄褐	No. 4	229-2
21	土製品	土玉	最大高2.4 径2.2～2.4 孔径0.5～0.6 重さ9.9 g			A I L	100	普通	にぶい黄橙	No. 16 白色シャモット	229-2
22	土製品	土玉	最大高2.3 径2.4 孔径0.6～0.7 重さ7.8 g			A I	50	普通	にぶい黄橙	C	229-2

短軸0.30 m、深さ0.18 mである。

床面下には貼床（第3・5層）が部分的に認められた。掘り方は凹凸が少なく、平坦である。

遺物は南西部に集中して出土した。

掲載遺物のうち、1は逆位の状態で、床面から0.10 m上位の高さで出土した。2は正位の状態で、床面上から出土した。3は逆位の状態で、坏部と脚部が分かれて床面上から出土した。

第56号住居跡の出土遺物は第175図に示した。

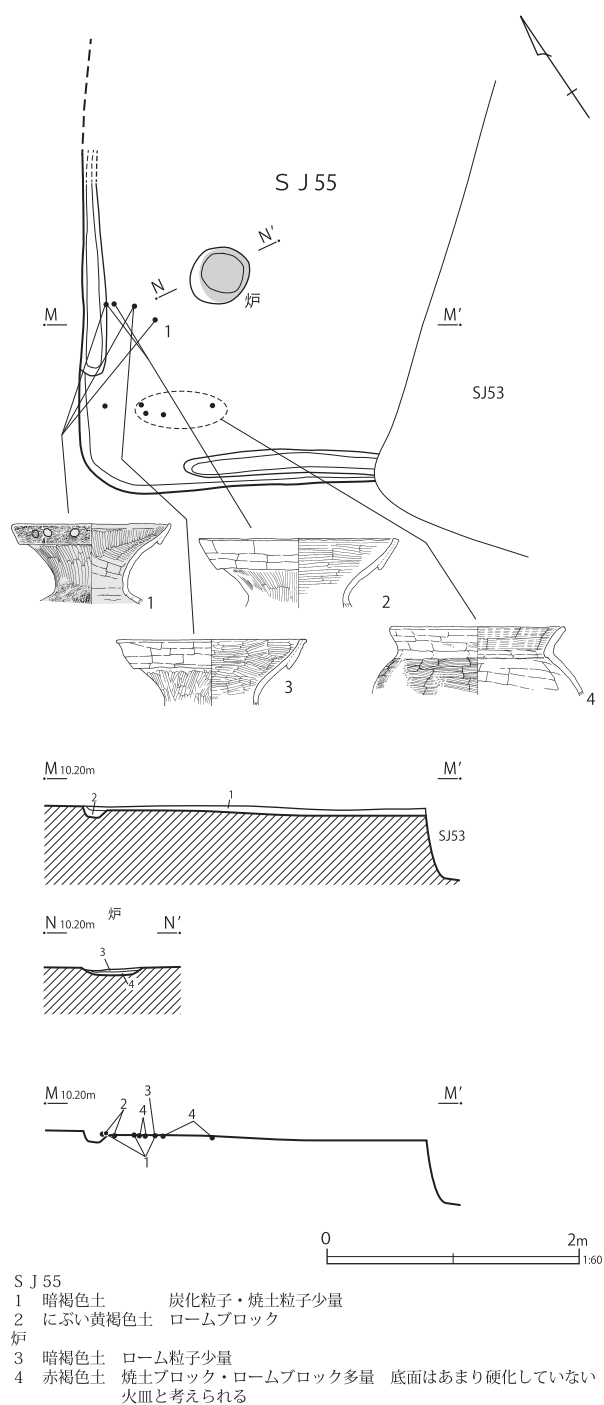
1は台付甕の脚部である。外面はハケメ後、一

部にヘラナデが施される。内面はハケメ主体である。

2は鉢である。器高は低く、皿形である。内外面はユビナデを主体とするが、随所にひび割れが残る。

3は高坏である。坏部は碗形で、口唇部は面取りする。外面にヘラミガキ、内面にヘラナデが施される。脚部は短く、透孔は施さない。外面にヘラミガキとヨコナデ、内面にヘラナデが施される。

非掲載遺物は古墳時代の土器160 gである。



第171図 第55号住居跡

壺類の細片が中心である。

最後に第57号住居跡について述べる。

J-25・26、K-25・26グリッドに位置する。

他の遺構との重複関係は、第596号土壌を壊し、第53号住居跡と第516号土壌に壊される。

全体の規模は、長軸4.90m、短軸4.62m、

深さ0.45mで、主軸方位はN-26°-Wである。平面形は方形である。

覆土は、ロームブロックを含むにぶい黄褐色土（第1・3・4層）と暗褐色土（第9層）などからなる。第1・3・4層は埋め戻し土の可能性がある。それ以外は自然堆積と考えられる。

床面から炉跡1基、ピット8基が検出された。

炉跡は中央からやや北西に位置する。規模は長軸0.50m、短軸0.45m、深さ0.10mで、平面形は円形である。覆土は焼土ブロックが堆積していたが、底面は硬化していなかった。

ピットはP1～P4の4基が、位置と規模から主柱穴と考えられる。覆土は第17・20層が柱の裏込め土と考えられる。柱は抜き取られ、第15・16・18・19層が堆積していた。P5～P8は掘り込みが浅く、P5とP6がP3に、P7とP8がP4に隣接するが、性格は判然としない。それぞれの規模は、P1は長軸0.66m、短軸0.50m、深さ0.47m、P2は長軸0.60m、短軸0.45m、深さ0.52m、P3は長軸0.58m、短軸0.44m、深さ0.50m、P4は長軸0.70m、短軸0.52m、深さ0.69m、P5は長軸0.28m、短軸0.26m、深さ0.10m、P7は長軸0.30m、短軸0.30m、深さ0.10m、P8は長軸0.37m、短軸0.32m、深さ0.60mである。

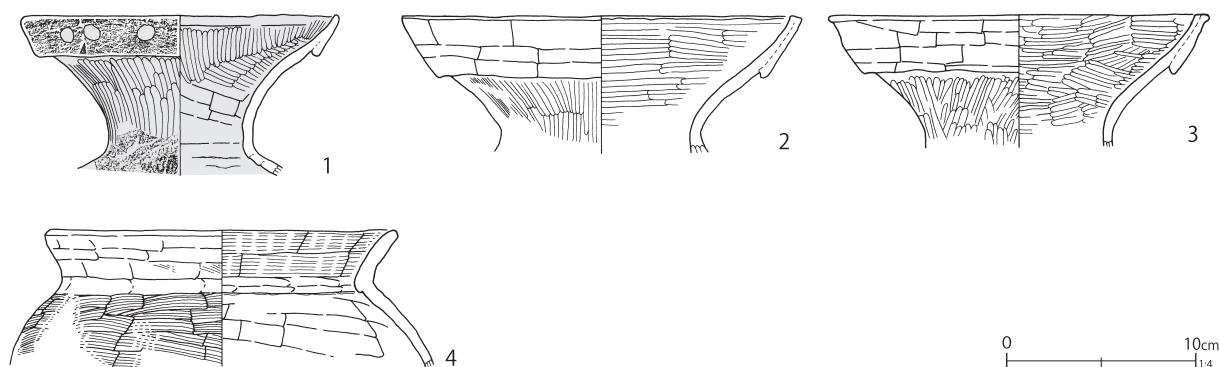
床面下には貼床（第12・13層）が面的に認められた。掘り方は、中央部を高く平坦に掘り、周辺を深く掘り下げている。

遺物は北東隅付近と南東隅付近から集中して出土した。

掲載遺物のうち、2は南東隅の床面から、逆位の状態で出土した。3は南東隅の床面から、破片が4箇所に分かれて出土した。4は北東隅の床面から、逆位の状態で出土した。6は北東隅の床面から、正位の状態で出土した。

第57号住居跡の出土遺物は第178図に示した。

1は単口縁壺の口縁部である。口縁部は比較的



第172図 第55号住居跡出土遺物

第26表 第55号住居跡出土遺物観察表（第172図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(16.5)	[8.4]	—	E I K L	45	普通	にぶい赤褐	No. 6・7・9 複合口縁壺 口縁部に円形朱文 3 箇所 内外面赤彩 白色シヤモット	211-7
2	土師器	壺	(21.0)	[7.2]	—	C E H I K	30	普通	にぶい黄橙	No. 8・9 複合口縁壺	212-1
3	土師器	壺	(19.0)	[6.9]	—	C E G I	30	普通	褐灰	No. 7 複合口縁壺	212-2
4	土師器	甕	(18.3)	[7.1]	—	E G	10	普通	黄橙	No. 2～5 大型甕	212-3

短く、器肉は厚手である。頸部に薄い突帯を貼付する。内外面にヘラミガキが施される。

2～6は台付甕である。2～4は器形の歪みが大きい。2・3の口縁部は直立気味に立ち上がる。胴部は倒卵形で、脚部は大きく八の字形に開く。外面はハケメを主体に、脚部接合部にはヘラナデ、3の胴部下半はヘラミガキが施される。内面は口縁部にハケメ、胴部にヘラナデ、脚部にヘラナデとハケメが施される。4は小型の台付甕で、口縁部は直立気味に立ち上がる。口唇部の歪みが大きく、輪積み痕を残す。胴部は球形胴で、脚部は八の字形に大きく開く。胴部外面の上半はハケメ、下半はヘラナデを、内面は口縁部にハケメ、胴部にヘラナデが施される。胴部下半は内外面に輪積み痕が残る。脚部は内外面にハケメが施される。5は口縁部から胴部上半の破片である。頸部はくの字に屈曲し、胴部は直線的で倒卵形を呈すると思われる。外面はハケメとナデ、内面はヘラナデが施される。6は脚部である。2～4に対

して器高が低く、ナデ主体の調整が施される。

7は土玉である。

非掲載遺物は古墳時代の土器 2,075 g である。壺類や甕類、小型器台の細片が中心である。

第54号住居跡（第179図）

L-25 グリッドに位置する。南東部は調査区域外である。

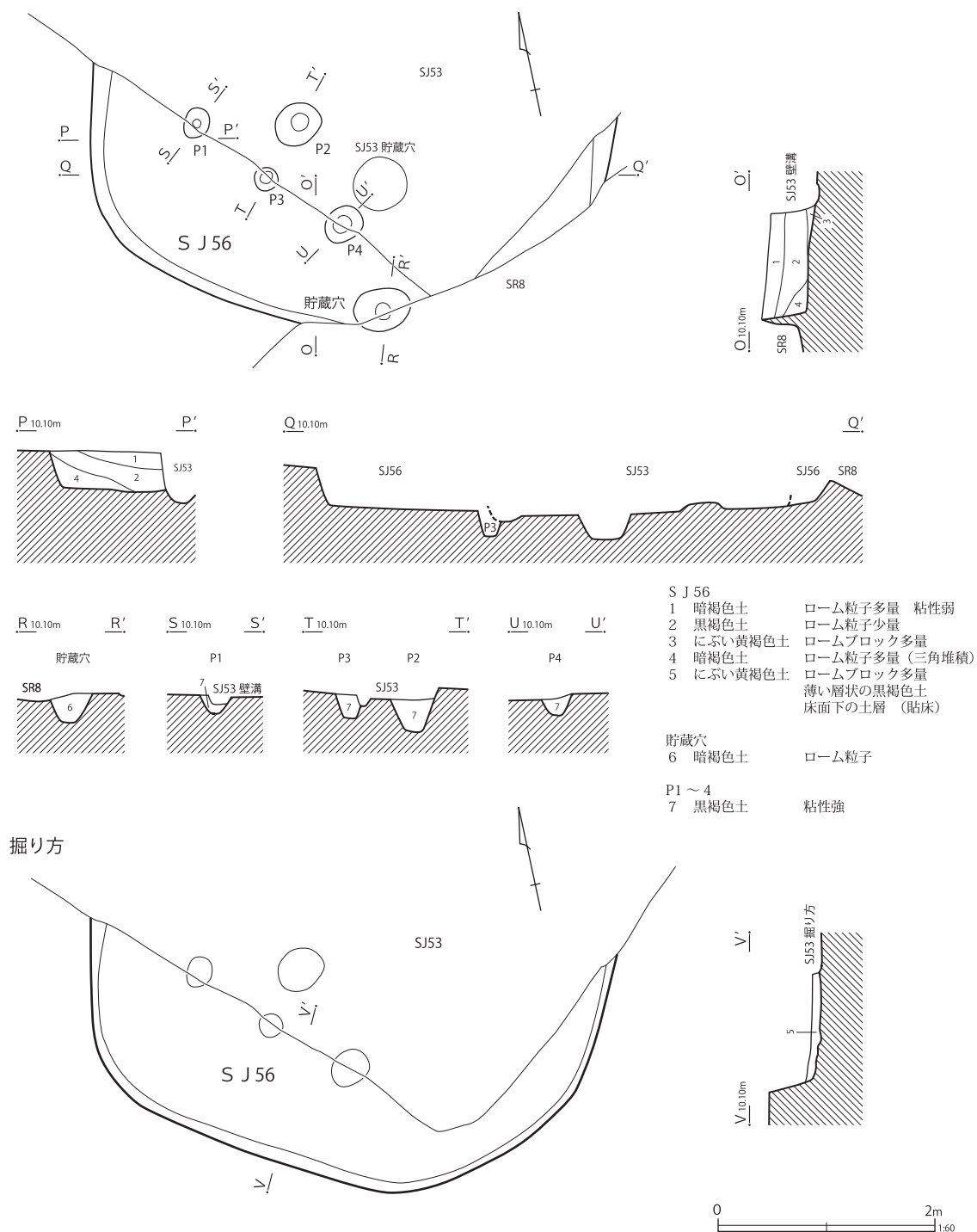
他の遺構との重複関係は、第521号土壇とL-25 グリッドP1を壊し、南から東にかけて第8号方形周溝墓に壊される。

全体の規模は長軸残存長 1.65 m、短軸残存長 2.33 m、深さ 0.20 m で、主軸方位は N-15°-E である。平面形は隅丸方形と考えられる。

覆土は、ローム粒子を含む黒褐色土や黒色土を中心とする自然堆積である。

床面からピット2基、壁溝が検出された。

P1とP2は並んで検出された。配置からP1が主柱穴と考えられる。それぞれの規模は、P1が長軸 0.48 m、短軸 0.41 m、深さ 0.37 m、P



2が長軸0.50 m、短軸0.43 m、深さ0.26 mである。覆土は黒褐色土や暗褐色土が堆積していた。

壁溝は西壁に沿って検出された。幅0.18 m～0.30 m、深さ0.08 m～0.13 mである。

掲載可能な遺物は出土しなかった。

非掲載遺物は古墳時代の土器 280 g である。

壺類や甕類、高坏、小型器台の細片が中心である。

第58号住居跡 (第180・181図)

I - 23・24 グリッドに位置する。

他の遺構との重複関係は、I - 24 グリッド P 1～3を壊し、第4・5号方形周溝墓に壊されている。